平城京左京三条二坊六坪
発掘調査報告

奈良国立文化財研究所

巻首図版

園池SG1504全景（北東から）

平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告

奈良国立文化財研究所

序

平城京は8世紀のはじめ，中国の都城の制にならって造られた古代律令国家の政治・経済・文化の中心として確立した姿を今に伝える重要な遺跡である。70余年にして長岡京に遷都し，その後大部分が田園と化し，市街地と化した平安京とくらべると旧態を存しているところが多い。

平城京については近世末から研究が進められてきたが，近年に至って，従来行われてきた寺院跡の調査の他，朱雀大路をはじめとする条坊，宅地，堀河，市などの遺跡の発掘調査も行われるようになった。最近の急激な人口の増加，開発の進展に伴い発掘調査件数は急増しており，条坊の構造，京内の宅地割り，宅地内の建物配置，変遷などの重要な成果が次第に明らかとなってきている。

この報告は昭和50年に近畿郵政局の依頼にもとづき，奈良郵便局の移転計画地の事前調査に端を発し，昭和52・54・59年に行った左京三条二坊六坪における一連の発掘成果を取りまとめたものである。調査成果として六坪では奈良時代前半には，官衙的な性格を持つ建物配置がみられるが，後半では坪の中心に園池を配し，これと一体の形で建物・塀などを検出し，宮と密接な関係をもつ公的宴遊施設としての機能を果していたことが明らかとなった。特に，従来文献の上だけで検討されていた8世紀の庭園が完全な形で発見され，その立地・意匠・作庭技法などを細部まで知ることができたのは日本庭園史上からも画期的なことであり，上代遺跡としてまことに貴重なものであり，昭和53年10月27日付けで「平城京左京三条二

坊宮跡庭園」として特別史跡に指定された。

六坪の遺跡については郵政当局をはじめ関係者各位の努力により，史跡指定に続き，保存整備・公開という理想的な形で保存対策がとられたが，このほかの大部分の平城京の遺跡は急激な開発に追われ破壊されたり，緊急調査後，開発事業によって破壊されている現状からして京域内遺跡としてはきわめて例の少い遺構保存の例となった。今後の平城京域の計画的な発掘調査と主要な遺跡の保存についての緊急かつ十分な施策の必要性が痛感される。この報告書がそのための契機の一つとなることを念願してやまない。

昭和61年３月

奈良国立文化財研究所長
坪　井　清　足

平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告

目　次

第Ⅰ章　序　　章 …… 1

1　平城京の調査 …… 1

2　報告書の作成 …… 3

第Ⅱ章　調査概要 …… 4

1　調査の経過 …… 4

2　調査地域 …… 5

3　調査の概要 …… 7

4　調査日誌 …… 9

A　第96次予備調査…… 9
B　第96次本調査……10
C　第109次調査 ……12
D　第121次調査 ……12
E　整備に伴なう調査……13

5　写真測量 ……14

第Ⅲ章　遺　　跡 ……16

1　遺跡の概観 ……16

2　遺　　構 ……18

A　A期(奈良時代以前)の遺構…18
B　B期(奈良時代前半)の遺構…19
C　C期(奈良時代中頃)の遺構…23
D　D期(奈良時代後半)の遺構…31
E　E期(奈良時代末～平安時代初頭)の遺構 ……33
F　京廃絶後およびその他の遺構……34

第Ⅳ章　遺　　物 ……36

1　木　　簡 ……36

2　瓦　塼　類 ……43

A　軒　丸　瓦……43
B　軒　平　瓦……49
C　丸瓦・平瓦……54
D　文　字　瓦……60
E　道具瓦・塼……62
F　小　　結……64

3　土　　器 ……69

A　SG1504 出土の土器……69
B　SD1465・1466 出土の土器…70
C　SD1545 出土の土器……71
D　SD1525 出土の土器……72
E　SD1560 出土の土器……74
F　SD1451 出土の土器……74
G　SD1475 出土の土器……74
H　SE1511・1547・1611 出土の土器……75
I　SK1516・1983・1993 出土の土器……75
J　SB1510・1540・1552・1570 出土の土器……76
K　包含層出土の土器……76
L　特殊土器・土製品類……76
M　小　　結……78

4　木製品・繊維製品 ……80

A　木　製　品……80
B　繊維製品……83
C　漆膜の断層観察……83

5　石製品・その他……83

A　石　製　品……83
B　鉄製品・鋳造関係遺物……83

6　植物遺体 ……84

A　大型植物遺体……84
B　花粉分析……85

第Ⅴ章　考　　察 ……86

1　六坪地域の変遷……86

A　B期の遺構……87　　C　D期の遺構……90
B　C期の遺構……88　　D　E期の遺構……90

2　出土木簡についての検討 ……91

3　年輪年代法による出土曲物容器
　　の年代測定 ……93

4　平城京の庭園遺跡 ……94

5　結　　語 ……96

補論　六坪遺跡の環境整備 ……97

別　　表 ……99

英文要旨 …… 107

挿　図

Fig.
1 平城京発掘調査件数・調査面積…… 2
2 平城京発掘調査位置図…… 2
3 平城京左京三条二坊周辺の地形及び発掘調査位置図…… 6
4 6AFI地区 地区割図…… 7
5 第96次予備調査地域の地区割と主要遺構…… 9
6 第96次本調査地域の地区割と主要遺構……10
7 第109次調査地域の地区割と主要遺構……12
8 第121次調査地域の地区割と主要遺構……12
9 整備に伴なう補足調査地域……13
10 クレーン車による写真測量……14
11 ヘリコプターによる写真測量……14
12 調査区標定点配置図……15
13 調査区の地山・地形……16
14 旧河川 SD1560・流路 SD1525 堆積土層図……17
15 流路 SD1525 平面図……21
16 井戸 SE1547 断面図……24
17 園池 SG1504 堆積土層図……25
18 園池 SG1504 景石・礫敷平面図……26
19 木枠 SX1463 平面・断面図……27
20 木枠 SX1503 平面・断面図……27
21 木樋 SX1523 見取図……28
22 木樋 SX1464 見取図……28
23 SX1524 平面・断面図 ……29
24 溢流溝 SD1465・排水溝 SD1466 平面・断面図……30
25 SX1468 平面・断面図 ……30
26 SX1461 平面・断面図 ……31
27 井戸 SE1511 断面図……33
28 軒丸瓦(瓦当紋様標式例⅕)……45
29 6285型式A種 瓦当製作時の粘土継ぎ目……47
30 6285型式A種 笵端痕 ……47
31 6285型式A種 丸瓦凸画のキザミ ……47
32 6284型式C種 瓦当面の粘土継ぎ目 …47
33 軒平瓦(瓦当紋様標式例⅙)……51
34 6721型式C種 平瓦部凸面(左) 同凹面(右)縮尺⅙……52
35 丸瓦……55
36 平瓦の第2次成形技法・調整手法他…57
37 箆書き瓦……61
38 加工した平瓦片⅓……63
39 塼に残る指の圧痕……63
40 軒瓦の出土比率……64
41 6285型式A種 外区・外縁の比較 ……67
42 6285型式A種 内区の比較 ……67
43 6667型式A種 外縁の比較 ……67
44 6667型式A種 顎の比較 ……67
45 植物遺体出土位置図……84
46 B期遺構配置……87
47 C期遺構配置……89
48 D期遺構配置……89
49 E期遺構配置……90
50 標準年輪変動パターンと試料年輪変動パターンとの重複位置……93
51 平城京の庭園遺跡位置図……95
52 六坪遺跡の環境整備図……98

表

Tab.

1 平城京左京三条二坊の発掘成果一覧表…… 5
2 各次調査の期間と面積…… 7
3 写真測量撮影仕様……14
4 写真測量標定点成果表……15
5 遺構出土の軒瓦一覧表……53
6 平瓦集計表……59
7 塼計測表……63
8 平城宮土器の大別……69
9 出土植物遺体一覧表……85
10 平城京庭園遺跡一覧表……95

別　表

1 主要建物一覧表…… 100
2 軒丸瓦分類表…… 101
3 軒平瓦分類表…… 102
4 出土土器一覧表…… 103

図　面

PLAN 1 6AFI-P. Q 調査区全域実測図
2 調査区西北部実測図
3 調査区西南部実測図
4 調査区東北部実測図
5 調査区東南部実測図
6 園池全域実測図

原色図版

巻首図版 園地 SG1504 全景 北東から
COLOR PLATE 1 園池 SG1504 全景 北から
2 園池 SG1504 東岸石組 北西から

図　　版

PL.

1　調査地周辺航空写真　1962年撮影

2　調査地周辺航空写真　1984年撮影

3　6AFI-P・Q区
1　109次調査区全景　南から　2　121次北調査区全景　南から
3　96次本調査区全景　南から　4　121次南調査区全景　南から

4　建物
1　建物 SB1505　西から　2　建物 SB1542　東から
3　建物 SB1573　南から

5　建物・塀
1　建物 SB1570　南から　2　建物 SB1510　北から
3　東西塀 SA1473　東から　4　東西塀 SA1500　東から

6　建物
1　建物 SB1550　南から　2　建物 SB1574　東から
3　建物 SB1540　南から

7　建物
1　建物 SB1552　南から　2　建物 SB1470　北から
3　建物 SB1471・1472　北から

8　流路・井戸
1　旧河川 SD1560・流路 SD1525　西から
2　同上　東から
3　井戸 SE1547　南から

9　柱穴
1　建物 SB1540 西北隅柱根石・礎板　南から
2　建物 SB1540 根石・SB1542 柱掘形・礎板　南から
3　建物 SB1570 柱根　南から

10　木樋
1　導水木樋 SX1523　南から　2　導水木樋 SX1523　北から
3　排水木樋 SX1464　北から　4　排水木樋 SX1464　西から

11　木組
1　木組 SX1463　東から　2　木組 SX1503　南から

12　池細部
1　石組壙 SX1524　東から　2　岩島　西北から
3　岩島　西南から

13　池細部
1　東岸洲浜　西から　2　東岸石組　東から
3　SX1468　東から

14　池細部
1　SX1461　南西から　2　池尻西岸　西から
3　池尻南岸　東から

15　池湛水状況
1　池中央西岸　南西から　2　東岸石組　北東から
3　池南東岸　東南から

16　木簡 1

17　木簡 2

18　木簡 3

29　木簡 4

10　軒丸瓦

21　軒平瓦

22　土器 1

23　土器 2

24　土器 3

25　土器 4

26　木製品 1

27　木製品 2

28　木製品 3

29　金属製品・石製品・繊維製品

30　園池 SG1504 出土の植物遺体

31　流路 SD1525 出土の植物遺体

32　整備

平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告

1986

第Ⅰ章　序　　章

この報告は平城京左京三条二坊六坪における1975年度の第96次調査，1977年度の第109次調査，1979年度の第121次調査の３次にわたる発掘調査と，1982年度～1984年度の整備に伴う調査をとりまとめたものである。第96次調査については1975年度に奈良国立文化財研究所が，第
＊ 109次・121次調査については1979年度に奈良市教育委員会がそれぞれ発掘調査概報を刊行しているが，その後の調査により，導水路の解釈や，園池造成時期などに新しい知見が加わっているので，既刊の概報を一部訂正しつつ報告する。

1　平城京の調査

平城京の調査研究は，幕末の北浦定政にはじまる。定政は実地を踏査し，史料を収集して
＊ 1852（嘉永２）年に「平城宮大内裏跡坪割之図」を作製した。明治以降，関野貞をはじめ多くの研究者によって，平城宮・平城京の研究はさらに発展し，平城宮跡は特別史跡に指定されてその大部分が国有化され，発掘調査と保存整備が継続的に進められている。

平城京に関する発掘調査では，1954年に旧奈良県立高等学校敷地内で掘立柱建物群が検出されたのが最初で，1969年度には，国道24号線バイパス計画の路線変更にともない，東三坊大
＊ 路，左京一条三坊十五・十六坪において調査が行われた。同年に羅城門の遺構も確認された。その後，京の発掘調査件数は次第に増加し，条坊や坪内の宅地利用状況などが次第に判明している。1979年には奈良市教育委員会事務局に文化財室が新設され1981年には文化財課，さらに1984年に文化課となり，奈良国立文化財研究所，奈良県教育委員会とともに京の調査に当り，左京二条二坊十二坪，同五条二坊十四坪，同五条一坊一坪，外京五条五坊七坪をはじめ各所で
＊ 重要な成果をあげている。

平城京右京の南部は大和郡山市に所属するが，同市教育委員会事務局社会教育課も京の調査を実施するようになり，奈良大学・帝塚山大学の協力もあって，調査件数は次第に増加しているが，そのほとんどは開発に伴なう事前調査であり，とくに近年は京内の全域に開発がひろがり，現状では開発の進行に十分の対応ができず，今後に課せられた問題が多い。

＊　京の調査成果は奈良国立文化財研究所の学報・年報・概報，奈良県遺跡調査報告，奈良市埋蔵文化財調査報告書や各個別の概報などで逐次報告されており，条坊関係では朱雀大路・大路・条坊間路・小路の各方位・尺度・幅員・構造などが次第に明らかとなり，東堀川と堀川の機能を持った広い水路や橋も確認されている。

京は寺院や京職，市などの公的施設もかなりの面積を占め，今回報告した左京三条二坊六坪
＊ をはじめ，同五条一坊一坪なども建物配置の状況から何らかの公的施設と考えられるが，大部分は宅地にあてられていた。宮の近くでは１坪あるいはそれ以上の広い占地の宅地が多く，八条，九条や外京の南辺では小規模の宅地割が確認されている。平城京の宅地割は古記録からも坪の16分の１が基準と考えられるが，左京八条三坊九坪ではじめて発掘調査によって確認さ

れ，さらに1985年度の左京九条三坊十坪，右京八条一坊十四坪では16分の１坪をさらに東西に２分した32分の１の宅地割が確認された。東市・西市でも一部の調査が行われている。藤原仲麻呂の田村第推定地に含まれる左京四条二坊十五坪では礎石建物も発見されているが，宅地内の建物はほとんどすべて掘立柱である。大規模の宅地の主屋では桁行９間に達するものもあり，多数の建物を整然と配置する。小規模宅地では桁行３間，梁間２間，各間 2m 程度の小規模な建物２～３棟で構成され，大部分の宅地が各個に井戸を持つ。和同銭鋳造の跡や漆・金属関係工房跡と考えられる遺跡もあり，下層から古墳時代の遺跡が検出されることもある。出土遺物には日常什器を中心とする多数の土器，京特有の瓦をはじめ，墨挺・銭貨などを土器に納めた胞衣壺，地鎮具や人面墨書土器，土馬，人形・刀形，斎串・銅鏡などの祭祀関係の遺物もあって多様性に富んでいる。

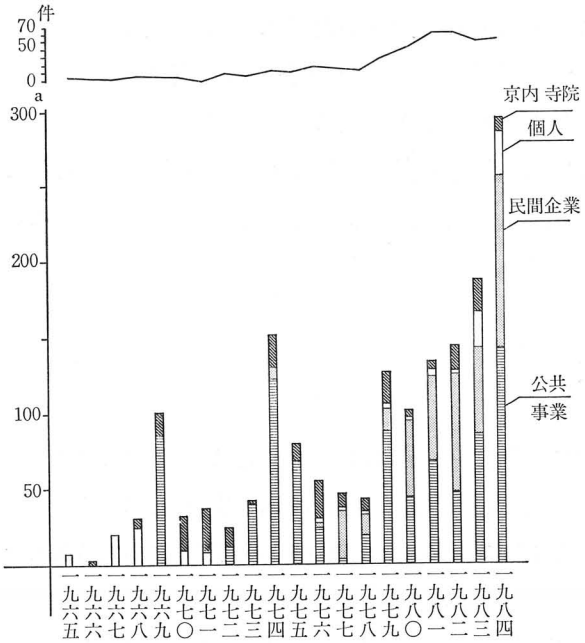


Fig. 1　平城京発掘調査件数・調査面積

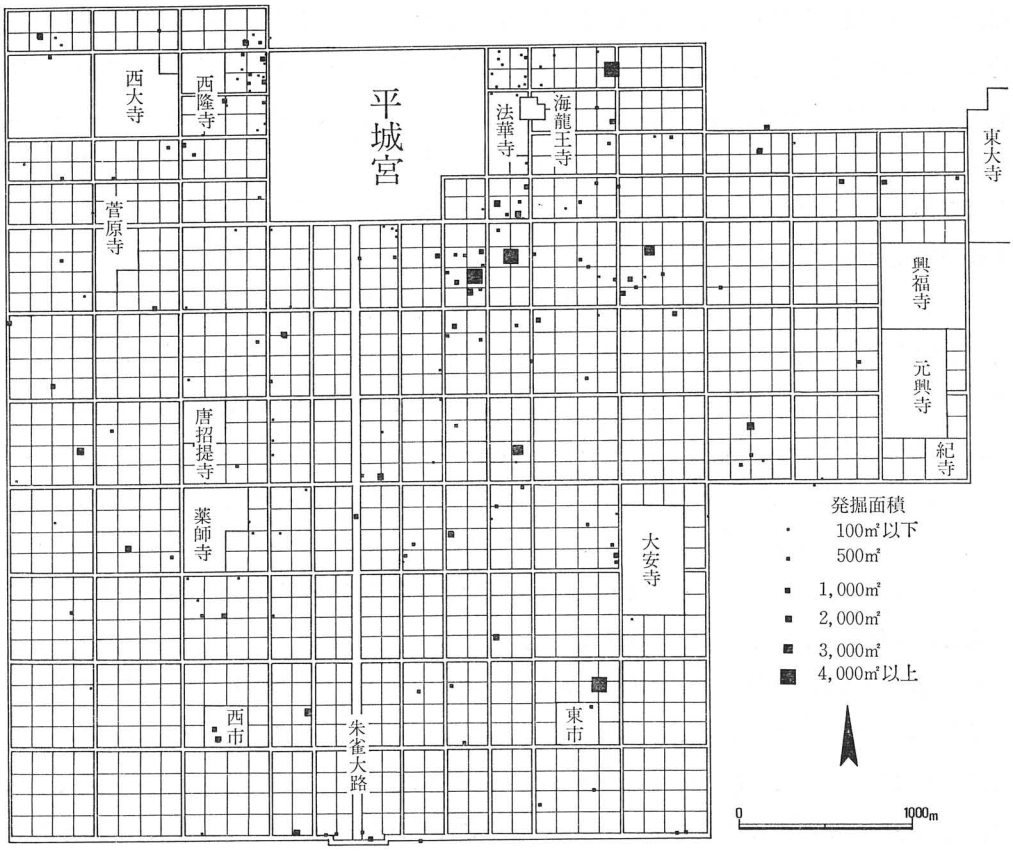


Fig. 2　平城京発掘調査位置図

2 報告書の作成

今回報告する調査は1975年度の第96次調査，1977年度の第109次調査，1980年度の第121次調査，1982年～1984年度の整備に伴なう発掘調査の報告である。以下発掘責任者と発掘担当者，発掘調査関係者を列記する。

次数	発掘年度	所長	部長	発掘調査担当者			
第96次	1975	小川 修三	鈴木 嘉吉	田中 哲雄	牛川 喜幸	狩野 久	森 郁夫
					横田 拓実	宮本長二郎	佐藤 興治
					吉田 恵二	山本 忠尚	岡本 東三
					綾村 宏	須藤 隆	毛利光俊彦
					松本 修自		
第109次	1977	坪井 清足	狩野 久	安田龍太郎	森 郁夫	宮本長二郎	吉田 恵二
					綾村 宏	安田龍太郎	中村 友博
					本中 真		
第121次	1979	坪井 清足	狩野 久	光谷 拓実	鬼頭 清明	山本 忠尚	中村 雅治
			岡田 英男		巽 淳一郎	上原 真人	

1982～1984年度の整備に伴う調査では，田中哲雄，本中　真が，また木樋・木枠の取り上げに際しては奈良市教育委員会　中井　公が参加した。

報告書の作成は1984年度から開始し，遺構関係の整理については遺構調査室・計測修景調査室があたり，遺物については考古第一調査室・考古第二調査室・考古第三調査室・史料調査室が分担し，1984年度以降，執筆分担者を中心として検討会を行い原稿を作成した。執筆分担はつぎのとおりである。

第Ⅰ章	1岡田 英男	2田中 哲雄			
第Ⅱ章	田中 哲雄				
第Ⅲ章	1田中 哲雄	2松本 修自・田中 哲雄			
第Ⅳ章	1綾村 宏	2杉山 洋	3千田 剛道	4・5岩永 省三	6粉川 昭平
第Ⅴ章	1田中 哲雄	2綾村 宏	3光谷 拓実	4田中 哲雄	
第Ⅵ章	田中 哲雄				
英文要旨	松本 修自				

第Ⅳ章―6の植物遺体の鑑定は大阪市立大学教授　粉川昭平氏に，（花粉分析は神戸市立教育研究所　前田保夫氏）第Ⅲ章―2の岩石鑑定は同助手　松岡数充氏（現長崎大学助教授）にそれぞれ依頼し，成果を得たものである。

遺構・遺物の写真撮影は八幡扶桑，佃　幹雄が行ったが，植物遺体は一部粉川昭平氏撮影による。木質遺物の樹種鑑定は光谷拓実が行い，編集は岡田英男の指導のもとに田中哲雄が担当した。

図面浄書はそれぞれ執筆者が分担し，諸富万理子・角谷邦子・中薗まゆみ・辻本香織・細井智津子の助力があった。

第Ⅱ章　調査概要

1　調査の経過

経　緯　1975年度に奈良郵便局庁舎の移転が平城京左京三条二坊六坪にあたる奈良市尼ケ辻ゴドサ甲669―1（現地名は奈良市三条大路一丁目）に計画された。平城京内の大規模開発事業に伴う事前協議の結果，奈良県教育委員会の行政指導のもとに発掘調査が実施されることとなり，近畿郵政局の依頼により発掘調査を奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が担当することとなった。

調査はまず用地内の遺跡の状況を確かめるため，東西・南北２本のトレンチにより 800 m² の予備調査（第96次）を５月30日から７月９日まで行い，園池の一部と園池に伴う塀・旧流路，西方では数棟の掘立柱建物などを検出した。これは極めて重大な遺構・遺跡と考えられたので，さらに園池の全容，坪内の建物配置などを知るために10月13日から12月23日まで 3600 m² の本調査（第96次）を行い，園池の全容が確認されるとともに，園池と併存する建物・塀・溝・井戸なども検出され坪内の様相が明確となった。この第96次の調査成果は『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』として1976年３月に刊行した。

1977年度に奈良国立文化研究所は文化庁の指示に基づき，この遺跡の重要性を考え，第96次調査区の北西に接続する未調査区 1,100 m² を11月21日から12月27日にかけて調査（第109次）して建物跡・溝・井戸・土壙などを検出した。

史跡指定　２次にわたる３回の調査の結果，六坪内の遺跡が古代庭園遺跡として他に類例のない規模を有するだけではなく，保存度が極めて良好であり，かつわが国の庭園の成立・展開を考える上に極めて高い学術的・文化的価値を有するものとして極めて重要であるとして，文化庁では1978年10月27日に移建計画用地全域を特別史跡に指定した。

奈良市はこの土地を国庫補助金を受けて購入し，この遺跡の保存・活用を図る目的で史跡指定地内の北半部に管理・展示施設として奈良市市民文化センター建設を計画し実行する運びとなった。これら一連の工事に際して一部未発掘地が残っていたため，平城宮跡発掘調査部では奈良市教育委員会の依頼をうけて1980年に現状変更に伴う 500 m² の発掘調査（第121次）を１月９日から２月４日まで行った。その結果，掘立柱建物・塀・溝・土壙などを検出した。第121次の調査成果は第109次の概要と合わせて『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』として1980年３月に奈良市教育委員会が刊行した。

整　備　また奈良市は1980年度から国庫補助のもとに特別史跡指定地の整備事業に着手し，平城宮跡発掘調査部・奈良市教育委員会によって整備事業に伴う補足的な調査を1984年度に行っている。整備は1980年度～1985年度まで行われ，池庭遺構の露出，建物・塀の復原，植栽などの工事が行われ，1984年から一般公開されている。

追加指定　庭園遺跡が六坪全体におよぶことが判明しているため，奈良市は六坪内未指定地の土地所有者との折衝の結果，1984年には六坪北東隅の 793 m² の土地の協力が得られ，追加指定が行われている。

2 調 査 地 域

調査地は奈良盆地の北辺に位置する沖積地で，北から延びる浅い谷筋の延長上にあり，現在の標高は 59.9 m 前後で，敷地東に隣接して菰川が南流する。 **地　況**

調査地の周辺は近年，市役所・郵便局などの移転に伴い近鉄新大宮駅が開設され，調査区の北を走る国道368号線（大宮通），調査区の西方を走る国道24号線バイパス沿いを中心に急激に市街化の波が押し寄せている。合わせて開発行為に伴なう発掘調査件数も大幅に増加している現状である。 **周辺の状況**

平城京左京三条二坊の調査数は六坪を含め14件を数える。一坪では平城宮跡第32次調査で二条大路と東一坊大路の交点を検出するとともに坪の北西隅の様相が明らかになった。二坪では坪の中心近くに７間以上の大規模（10尺等間）な掘立柱東西棟を，三坪では宅地内区画施設と考えられる塀や掘立柱建物の主要殿舎の他地鎮の遺構も検出しており，ともに一坪規模の宅地・占地が考えられている。七坪では二坪との間の坪境小路と二坊坊間路の東側溝を検出し，木簡・墨書土器などが出土している。坪内では掘立柱建物群・塀・溝などを検出し，宮と同笵の軒瓦，二彩陶器・緑釉陶器・硯などを出土している。また六坪で検出した旧河川，流路 SD 1560・SD1526 の上流部が確認されており，埋土から出土した土器により８世紀の中頃まで流路として存続していたものとみられる。九坪では奈良時代後半に坪の中心に大規模な掘立柱南北棟が検出され，一坪を占める宅地であることが判明している。十坪では坪の東を画する築地と掘立柱建物３棟と塀２条，井戸１基を，十三坪では南辺部の調査で三条大路の北側溝と坪内の建物をそれぞれ確認している。十五坪では十坪との境の坪境小路，坪内の内柵，主屋と副屋，厨屋と納屋，井戸などが検出され，一坪内の整然とした建物配置がみられる。いずれも坪内の一部の調査ではあるが，１坪または1/2坪を占める大規模な占地がみられることや，宮跡と同笵の瓦を使用していて宮と密接な関係が考えられる遺構が多いことなどから，三条二坊には高位高官の宅地が多いことが判明している。 **周辺の調査**

	年度	調査次数	条坊位置	面　積	文　　献
A	1965	32	一坪	6000㎡	『奈良国立文化財研究所年報1966』1966年
B	1975 1977 1979	96 109 121	六坪 六坪 六坪	4400 1100 500	奈文研『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』1976 奈文研『昭和52年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1978 奈良市教育委員会『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』1980
C	1974	奈良県	十三坪	300	奈良県立橿原考古学研究所『平城京左京三条二坊十三坪』1975
D	1973・4	83・86	十・十五坪	6200	奈文研『平城京左京三条二坊』1975
E	1977	103—1	七坪	900	奈文研『昭和52年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1978
F	1978	112—3	七坪	301	奈文研『昭和53年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1979
G	1979	118—15	二坪	150	奈文研『昭和54年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1980
H	1979	118—23	七坪	160	同上
I	1979	奈良市	九坪	360	奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書（昭和54年度）』1980
J	1982	141—35	七坪	342	奈文研『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1983
K	1983	奈良市	三坪	120	奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書（昭和58年度）』1984
L	1983	151—32	三坪	940	奈文研『平城左京三条二坊三坪発掘調査報告』1984

Tab. 1　平城京左京三条二坊の発掘成果一覧表

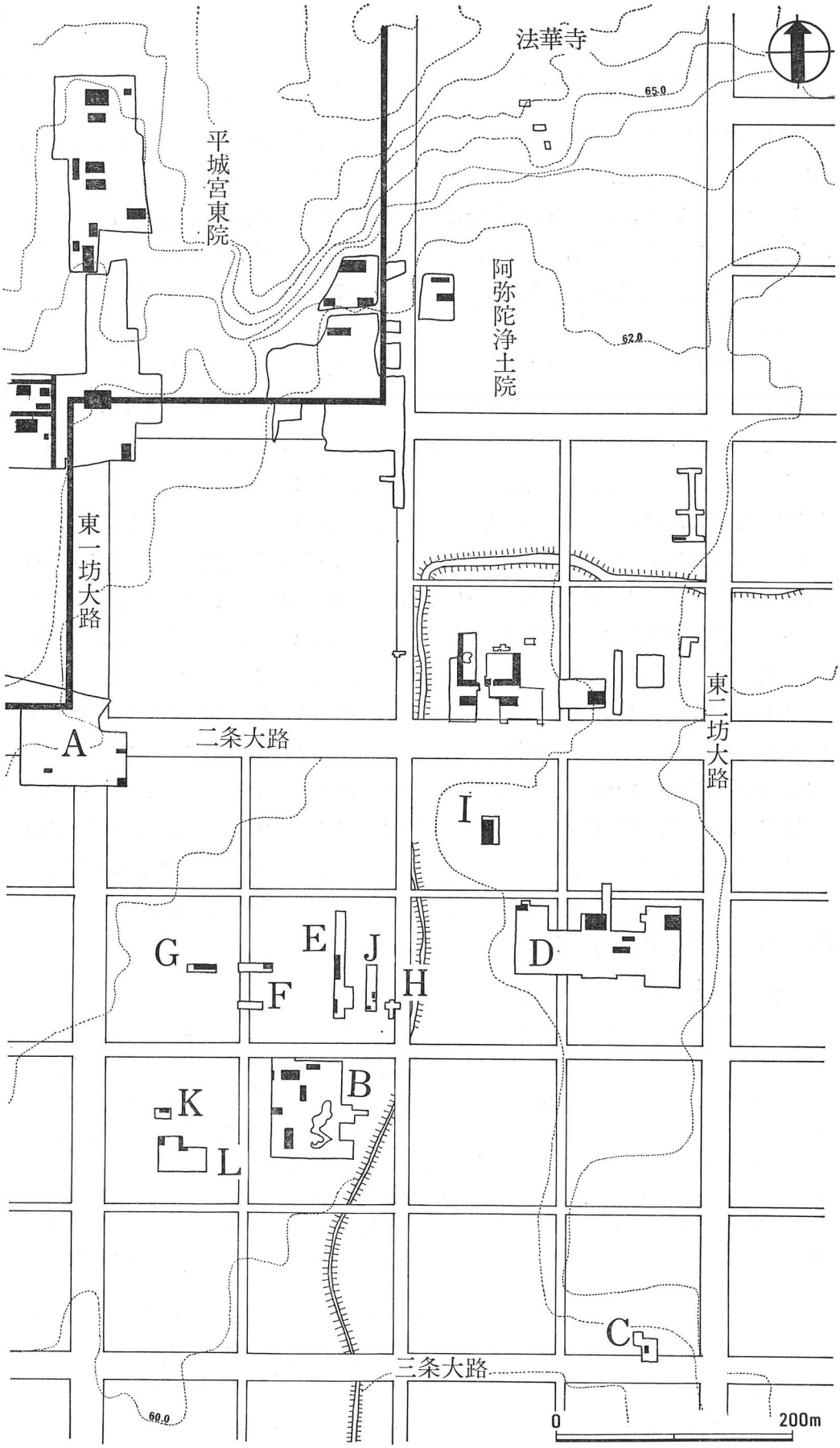


Fig. 3　平城京左京三条二坊周辺の地形及び発掘調査位置図

3 調査の概要

今回報告する地域は平城京左京三条二坊六坪の中心部，北辺部を主とする所で，調査総面積6,600 m²，六坪の約1/3を占めている。1975年の第96次調査から1984年の整備に伴う補足調査までをまとめたもので，調査次数ごとの期間，地区名，面積は Tab. 2 のとおりである。

＊ 六坪は奈良国立文化財研究所が行っている平城京発掘調査の地区割にしたがって，大地区を6AFI 地区，中地区を P. Q 地区と定めた。

96 次 予 備 調 査

予備調査ではまず敷地内の遺跡の状況を知るために，南端に 70 m×5 m の東西トレンチ，東端に 90 m×5 m の南北トレンチを各1本設けた。その結果，東西トレンチ中央東寄りで園池の一部を検出し，また園池を画するとおもわれる塀および旧河川跡，西方では数棟の掘立柱
＊ 建物を検出した。

調査次数	調査区	調査期間	調査面積
96次予備調査	6AFI—P. Q 区	1975. 5. 30～7. 9	800 m²
96次本調査	6AFI—P. Q 区	1975. 10. 6～12. 29	4,200 m²
109次	6AFI—Q 区	1977. 11. 18～12. 23	1,100 m²
121次	6AFI—Q 区	1980. 1. 7～2. 5	500 m²
整 備	6AFI—P 区	1984. 2. 1～2. 8　2. 14～2. 15	

Tab. 2　各次調査の期間と面積

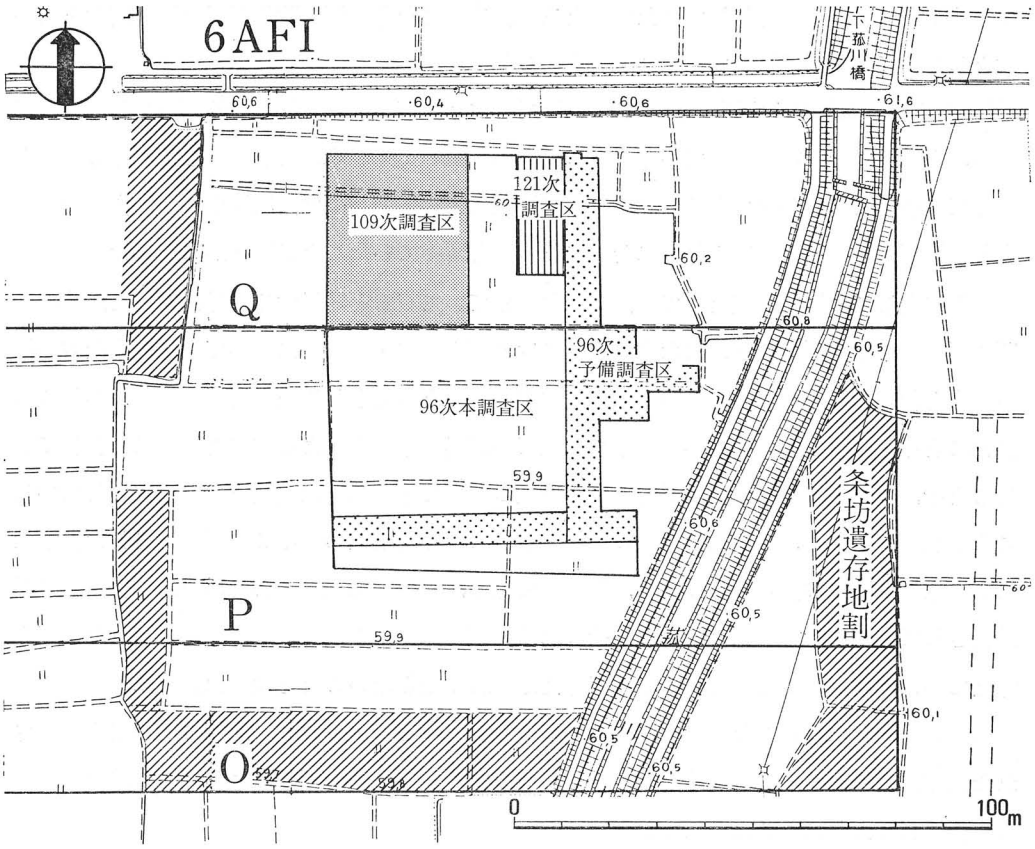


Fig. 4　6AFI地区 地区割図

96次本調査　第96次本調査では予備調査の所見にもとづき，池の全容，坪内の建物配置を明らかにすべく調査を実施した。その結果，坪の中心部を南流していた旧河川路を利用して園池が造成され，この園池を中心に塀，建物が計画的に配置されていることが判明した。園池は全体を石組で固め，蛇行した曲池のような形状をなし，観賞と同時に，雅宴などの行事に供する機能的な庭の要素を持つものと思われる。池への導水は旧河川路を利用した導水路によって一旦水を貯め，木樋によって池へ導入する構造になっている。排水は池底より木樋で抜くものとオーバーフローする二重の構造でいずれも南端の石組排水路へ流れ出る。整地層や遺構の重複配置などにより大きく二時期に区分でき，建物・塀などは坪心から一定の距離をもって計画的に配置されており，坪内敷地利用の基準的手法を示している。また園池西方の建物は南北棟が多く，京内遺跡の建物の大部分が東西棟によって占めらる知見とは反するが，園池後方の東山を眺望する構想と関連するものである。遺物は量的に少ないが発掘区全域から出土し，特に導水路から出土した64点もの多量の木簡と，平城宮使用のものと同型式に属する軒瓦が注目される。この時点では木樋の両脇に 1m の間隔で立つ導水のための関連施設と考えられる 2本の小角柱掘形が導水路の堆積土の上面で検出したことや，木樋掘形が上面からみえなかったことから，導水施設の施工が導水路を一部埋め戻して施工したことによる施工順の差と考えた。従って導水路と園池は併存していたものと考えていた。

109次調査　第109次の調査は第96次調査の西北にあたり遺構は三時期に分かれる。掘立柱建物5棟の他，溝2条，井戸2基，土壙などを検出している。第96次検出の園池とは東西塀で区画され，塀の南側が園池を中心とする公的な宴遊施設であるのに対して，塀の北側は六坪占有者の家政機関で園池の管理・運営が行われていたものとみられる。また各時期の建物配置は塀の南北とも一体として建て替えが行われていることが判明した。

121次調査　第121次調査は第96次本調査の際に進入路に使用していた未調査区で，掘立柱建物2棟，溝3条，土壙3基などを検出している。導水路は旧河川の流路をそのまま利用して，その堆積を切って掘られているわけであるが，導水路が機能している期間には，旧河川の浸蝕作用で形成された崖面，氾濫原は埋められずにそのままの形を留めていたことが明らかになった。

補足調査　整備に際しての補足調査としては，石が欠損していて石張を補足する部分において，池底の断ち断り，護岸の断ち割り，また木樋取りあげの際も導水・排水部において土層観察などの補足調査を行った。その結果池底の下にも導水部の堆積と考えられる土層と同様の状況が認められたことや，導水木樋の布設が導水路埋め立ての茶褐色粘質土による整地と同時に行われていることや，護岸石・景石の施工が導水路廃絶後の整地である茶褐色粘質土の上面でされていることが判明したため，導水路と石組の池は施工差でなく時期差であることが確認された。すなわち導水路は石組の池の前身の流れ，旧流路であり，廃絶後に整地されその上に石組の園池が造営されていたことが明確となった。そのため当初，導水路と同時期の奈良時代当初の施工と考えていた園池造成の時期をやや下げて考えなければならないこととなった。特に旧流路廃絶後の整地と同時に行われた導水木樋部の整地土に包含する瓦・土器や，北側の七坪でも検出された旧流路廃絶後の全体の整地土の茶褐色粘質土に混じる遺物の編年により園池の造成は奈良時代後半と考えられることになった。

4 調 査 日 誌

A 第96次予備調査

6AFI-P・Q 地区

1975年5月30日～7月9日

5・30 ユンボによる表土排除。1日で完了。

6・2～5 トレンチ整備。

6・6 地区杭打ち。遺構検出開始。SD1453と重複して古い斜行溝 SD1456 検出。

6・7 排水作業。

6・9 東西トレンチの包含層（暗褐色土）の排土を行う。SG1504 の南岸検出。

6・10 SD1453・SD1451 を検出。両側溝とも土師・須恵器出土。両側溝間2丈あり，道路側溝とも考えられる。SD1453を挟んでSA1455の南端柱穴検出。東西トレンチ西端では大きな柱穴状の穴を多数検出。

6・11 SB1510 の南側柱検出。SB1472・SB1470 検出。SB1472 西側柱穴の底近くで布片出土する。

6・12 池 SG1504 の掘り下げを行う。池内堆積土は大きく2層に分かれ，上層は赤褐色粘質土で瓦器椀1点出土。下層は暗灰色粘土で瓦・須恵器が少量出土。池底にも石を敷きつめている。南北トレンチでは SA1483・SA1455 検出。

6・13 池の堆積は上層より赤褐色粘土，暗灰色粘土，薄い黒色粘土で底石の間は青灰色粘土，遺物はほとんどない。池南岸の横倒し石の下に掘形状に赤褐色粘質土を，その下に東岸では立石，西岸では石敷の斜面を作り下に立石を配置する。南岸の南に石群あり，下は暗灰色粘土で排水施設と考える。南岸辺で木枠 SX1463 を検出。南北トレンチ北では浅い土壙状の落ち込みを掘りながら進む。

6・14 東岸周辺の赤褐色粘質土面を検出。岸辺で灰黄褐色細砂（地山）に交替。赤褐色粘質土は池掘削時の造作で，同質の埋土を持った東西溝 SD1453・SD1451・SD1456 がある。

6・16 池南岸の拡張区で赤褐色土の落ち込みあり，また SD1451 を検出。南北トレンチ北端では厚さ約 15 cm の遺物包含層（暗灰褐色土）を排土。同層中より須恵・土師片多量に出土。他に二彩小皿1点，軒丸・軒平瓦1点出土。

6・17 ユンボにより南北トレンチ中央を東に拡張，床土まで除去する。南拡張区で南北大溝（旧河川）検出。南北トレンチ北部も大溝（SD1525）が北へ曲がる。

6・18 東拡張区で遺構検出。SA1455 と北で曲がる SA1500 検出。南北トレンチ北部では SD

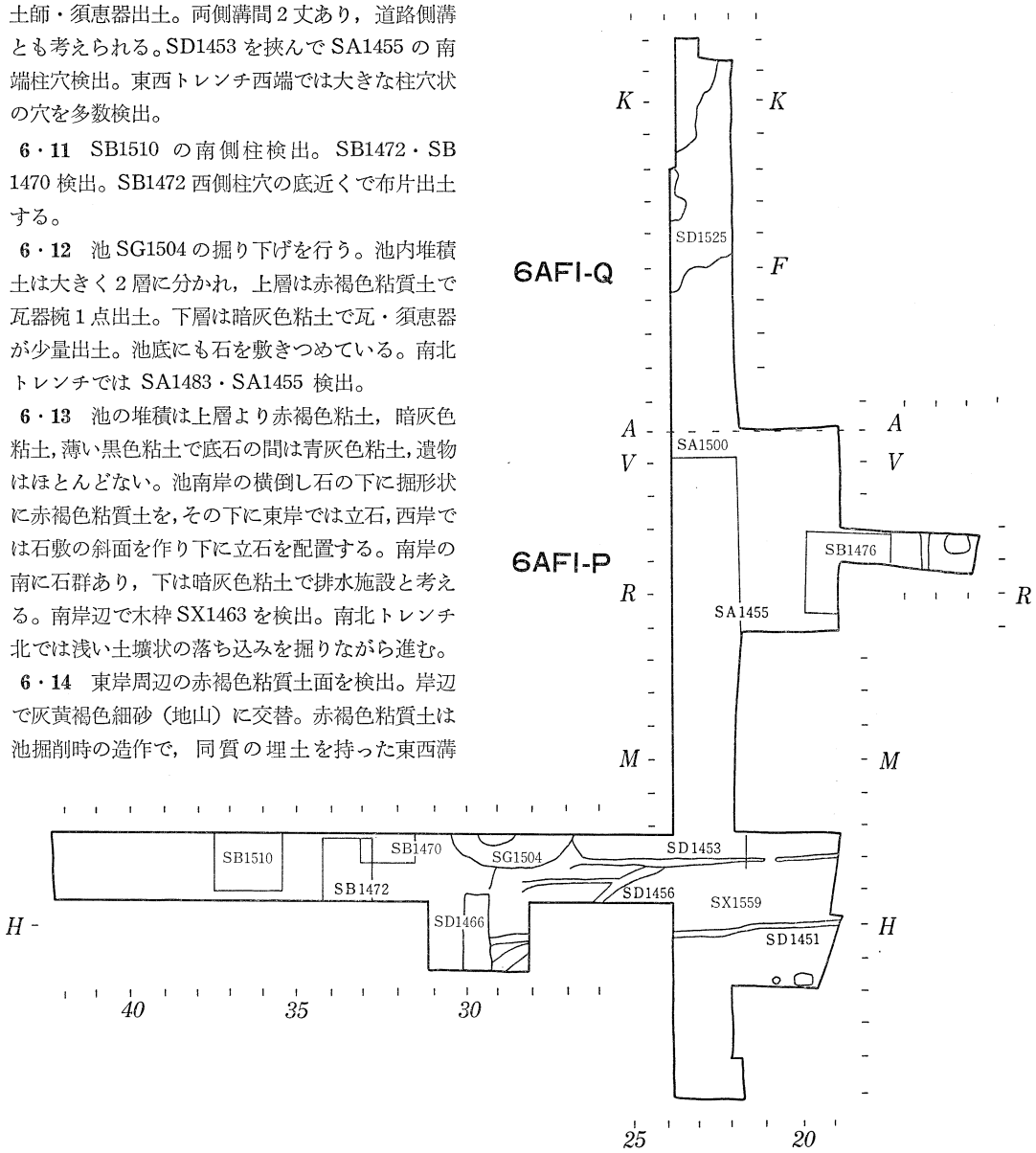


Fig. 5 第96次予備調査地域の地区割と主要遺構

1525 の茶褐色粘質土（厚さ 15 cm）を掘り下げる。遺物多数出土。漆器1点出土。その下の灰色粘土層（厚さ 15 cm）も掘り下げるが遺物は非常に少ない。この下層に黒味がかった粘土層があり，木を多数含んでいる。

6・19 南拡張区で旧河川跡の内側に両側石積みの溝 SD1466 検出。池の排水溝と考えられる。層位は3層あり，上から汚れた緑黒色腐植土，暗灰色粘土，最下層は中層よりやや青味をおびる。遺物は瓦・土器片若干出土する。東拡張区では SA1455 の南4間分検出。重複して SA1483 検出。南北トレンチ北端で条間路南側溝の南肩と考えられる SD1545 検出。池の北端を確認するトレンチ調査を行う。

6・20 南拡張区で池と排水溝 SD1465 の石敷は，溝側に下がって行き，池からオーバーフローする水の排水溝であろう。南北トレンチ北方の大溝はほぼ掘り終り，「麻呂」などの木簡2点以上出土。

6・21 南拡張区 SD1466 の底まで掘る。池から SD1466 の斜面の砂層よりⅢ期の軒瓦出土。東拡張区で SB1476 検出。

6・22 南北トレンチ北端の南肩のでている溝 SD1545 の全幅を確認するため北へ拡張し 1.2 m 幅の溝になる。北部での大溝 SD1525 掘り下げ，木簡2点，編みもの出土。

6・26 排水作業。

6・27 写真撮影準備のため遺構検出面清掃。

6・30 清掃。写真撮影。

7・1 写真撮影。園池部分は併行してクレーンによる写真測量を行う。

7・2 実測準備。実測。池の立面図作成のための写真測量。

7・3 実測。

7・7 排水作業。

7・8 池から南の排水口 SD1466 の間で，土層観察のため幅 30 cm ほど掘り下げると，下に南北にのびる木樋の存在を確認。埋戻し砂入れを始める。

7・9 ブルドーザーによる埋戻し作業。

B 第96次本調査

6AFI-P・Q 地区

1975年10月6日～12月29日

10・6 現場縄張り。

10・8～9 現場小屋建設。

10・14 バックホーによる表土排土開始。耕土，床土（黄色粘質土），灰褐色粘質土（包含層）で包含層上面まで排土を行う。

10・15 バックホーによる表土排土終了。池想定

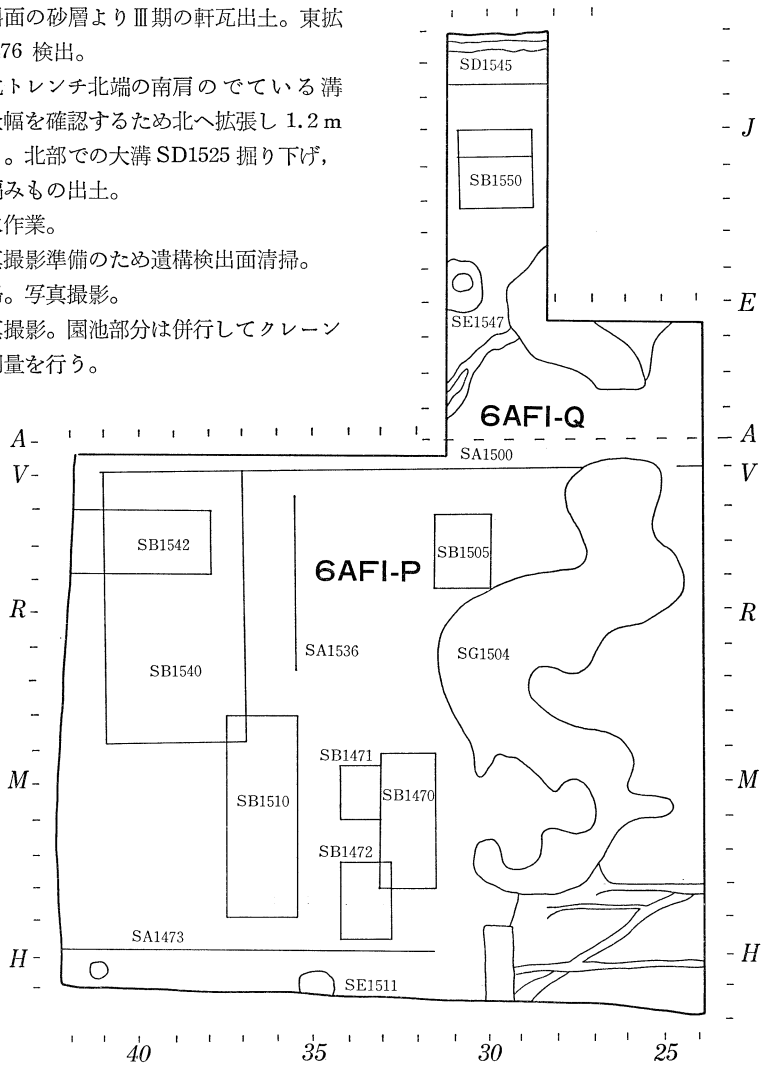


Fig. 6 第96次本調査地域の地区割と主要遺構

部分は手掘りにより表土排土を行う。

10・16～22　表土排土。

10・21～28　中央畦畔より東側で，南から床土を排土する。予備調査トレンチ部分は埋め戻し砂まで検出。池の護岸，バラス敷，景石が一部頭を出す。池のほぼ中央部に東西・南北土層観察用の畦を設定する。

10・28　床土排除が完了したP地区中央畦畔より東側で北より遺構検出開始。予備調査で一部検出したSA1500の延長部を検出。池の護岸汀線の玉石列を切って施工されているが，池の内部には柱穴検出できず，同時存在と考える。

10・29～11・1　P地区中央畦畔西側で東より床土排土を行う。

11・4　P地区で畦畔西側の床土排除と東側の遺構検出を併行して行う。池の両岸の礫敷汀線とSB1505検出。池の形状は旧河川に沿った形で蛇行する。

11・5　池の礫敷汀線と池内に向って傾斜している玉石敷を検出。SB1505の東南隅柱は池護岸の礫敷と重複し，柱掘方は礫敷の下で検出。池より古いか施工差であろう。

11・6　P地区畦畔西側の床土排除完了。

11・7　池の輪郭が明確になる。SB1470検出。予備東西トレンチに至り，南より遺構検出始める。

11・8　南端で土壙SK1516と井戸SE1511検出。すぐ北側に東西塀SA1473検出。

11・10　SB1510の南2間分検出。南北棟SB1472検出するも北妻柱削平のためか検出できず。池は堆積土除去。見切りの立石の界線を検出。池，底石上より灰釉平瓶片を出土。

11・11　調査区西辺では湿地を埋めたてた整地層（黄色粘質土）で穴をいくつか検出するも柱穴としてまとまらない。SB1471検出。池は西岸に出島を東岸に石組の入り込んだ施設SX1461を検出。池底で水が流れる幅は2m位と狭く，流れまたは曲水のような形状をなす。

11・12　西辺で建物根石状の石群検出。池は東岸で舟入り状の施設SX1463を検出。池底からウメ・モモ・マツの球果が多数出土。

11・13　南北棟SB1510が6間でまとまる。南より2間目，3間目に間仕切柱を設ける。
池底に木枠の施設SX1503検出。

11・14　北塀SA1500は7尺等間で西へ延びる。SB1510の東側柱にそろえて南北塀SA1536検出。

11・15　東側はトレンチ北端に到達するが，池は狭まりながら北へ更に延びている。

11・17　池が北へ延びるため北側12mほどバックホーにより上土排除する。Q地区のトレンチ南から遺構検出。トレンチ中央西南から東北にかけて東側は灰褐色砂質土，西側は褐色粘質土の整地層となる。P地区調査区西端ではSB1540の根石跡を検出。

11・18　P地区西北部は暗褐色粘質土の整地で掘り下げると砂層がでる。西北部の根石，抜き取り穴をまとめると2×7間，東西両庇付の礎石建物SB1540になる。池の北拡張部では旧河川の埋土，整地層の暗赤褐色粘質土面で削り北へ進む。

11・19　雨のためP地区の床土排除。池の北拡張部では赤褐色粘質土面を一段掘り下げる。

11・20　池の北拡張部で木樋暗渠SX1523を検出。木樋は旧河川の整地とともに設定されたもので掘方はみえない。また木樋北端部で整地層に砂を含む違いで差がつくが明確でない。

11・21　Q地区の遺構検出。南部・北部とも旧河川床の整地土があり，中央部のみ黄褐色粘質土の地山がみられる。南部の河を掘り下げると上層は灰褐色粘質土，下層は暗灰色粘土である。

11・22　池北拡張部の導水路のSD1525の掘り下げ。下層の黒色粘土より木片多数出土。他に奈良時代初の土器片・曲物など出土。導水の木樋SX1523は先端が開いてないため上部から給水していたものと考えられる。

11・25　Q地区トレンチ北SB1550検出。南で井戸SE1547が旧河川の埋土を切って掘削されている。南端では斜行溝SD1532を検出。北東の旧河川に流れ込む溝で北塀SA1500と重複し，北塀より古い。導水路SD1525より木簡出土。SD1525の屈曲部に木片多量に出土。土層では暗灰色粘土の下の粘質土混り暗灰色砂質土に木片が多く，同層中・上層でハシ状の木片が多く，下層の砂が少し多くなった層で木の加工片が多くなる。

11・26　木樋暗渠SX1523北端取入口両側に柱根を持つ柱穴検出。導水に関連する施設か。SX1523より給水する石組壙は底にも石敷があり，東辺で石敷を仕切る木枠を検出。池内の土層用畦畔除去。

11・27　池尻排水溝清掃。排水用木樋暗渠SX1464検出。井戸SE1547掘り下げる。

11・28　SE1547とSD1525の掘り下げ。導水路SD1525は旧河川SD1560が埋め立てられた後に造成されていることが判明。池北端の石組壙の全容検出。

11・29　井戸掘り完了。側板が井戸中に浮いて出土。遺物若干。SD1525掘削完了。発掘区南東のトレンチで東西溝SD1451の延長部検出。

12・1　P地区西端より遺構検出面清掃。池清掃。

12・2　遺構検出面清掃。

12・3　遺構検出面清掃完了。写真測量用基準点（75点）設置。

12・4　ヘリコプターによる写真測量。写真撮影。

12・5　写真撮影。新聞記者発表。

12・6　現地説明会。

12・8　排水作業。

12・ 9　排水作業。清掃。

12・10　写真撮影。

12・11　写真撮影。SE1511 掘り下げる。

12・12～18　実測。土層図作成。

12・15　池石組立面図作成のための写真測量。

12・19　補足調査で SB1540 の下層に SB1542 検出。木樋・木枠の実測。

12・20　池に水を貯めて写真撮影。

12・22～23　実測完了。

12・24～28　木枠・木樋など木製品に PEG による保存処理。庭石などのエポキシ系樹脂による養生後，埋め戻し作業。

C　第109次調査

6AFI-P・Q 地区

1977年11月18日～12月23日

11・18～21　ユンボによる表土排土。

11・22～24　Q地区西側より床土排土。

11・25　地区杭打ち。床土排土。

11・26～29　床土排土。

11・30　午前中に床土排土完了。午後より厚さ 5 cm の灰褐色土を除去して遺構検出開始。

12・ 1　灰褐色土は北端では 5 cm，南端では約 10 cm の厚さがあり，地山面は南へ下がっていく。SB1552 の西側柱を検出。柱穴は重複がみられ，建て替えの可能性が高い。SB1570 の東側柱と南北棟 SB1573 検出。北側の灰褐色土で石製品出土。

12・ 2　SB1552 東から 3 間目まで柱穴検出。建物内に小柱穴あり，足場穴とも考えられる。東より 2 間目の南側柱穴の柱痕跡から平城Ⅳ～Ⅴ期の須恵器が出土。SB1552 の南から灰褐色土の下層にある茶褐色土の整地がみられる。茶褐色土中に石・瓦・土器を含む。

12・ 3　SB1570 の西延長部検出。SB1570 の南に試掘孔掘り。深さ約 60 cm，灰黒色粘土で，その上に茶褐色土があることを確認。

12・ 5　SB1570 の全容検出。5 × 3 間の南庇付建物となる。SB1570 西側柱以西は地山が高くなり，茶褐色土もなくなる。

12・ 6　西端で SB1571 検出。SB1570 とは通りをそろえ，同規模の建物と考えられる。すぐ南で SB1574 が黄灰色粘土層の上層のチョコレート層で検出。

12・7～8　西から遺構検出面清掃。

12・9～10　写真撮影。

12・12　実測準備。遺方設定。

12・13～21　実測。

12・22　写真測量用基準点設置。

12・23　空中写真測量。砂入れ埋め戻し。

D　第121次調査

6AFI-Q 地区

1980年1月7日～2月5日

1・ 7　発掘区縄張り。ユンボ表土排土。

1・ 8　発掘用機材運搬。現場小屋設営。溝掘り。

1・ 9　南トレンチの床土(黄灰色粘質土)排土。

1・10　Q地区の北側より床土排土して遺構検出。SB1552 の北側柱 1 個検出。

1・11　黄灰色粘質土（地山）で遺構検出。SB1552 の北側柱検出。SB1552 は 2 個の柱穴が重複しており，新しい方を抜取り穴として遺物取り上げる。古い柱穴にも土器小片含む。また建物内に内部施設に関連する小穴検出。発掘区東辺 1 m 幅は遺物を含む灰褐色斑入り粘質土で導水路の可能性がある。

1・12　SB1552 の東側柱を検出し，東西 7 間，南北 2 間の建物であることが判明する。

1・14　導水路の埋土と考えられる灰褐色粘質土の線が東辺から西南にかけて検出。

1・16　南より灰褐色斑入り粘質土とその下の茶褐色粘質土で遺構検出するが，この面では導水路が検出できない。

1・17　茶褐色粘質土を 40 cm ほど掘り下げる。

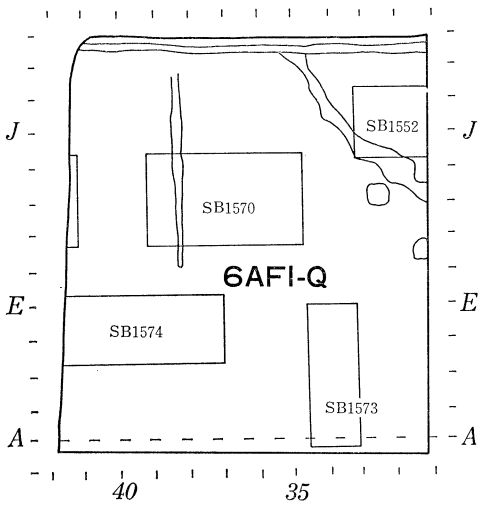


Fig. 7　第109次調査地域の地区割と主要遺構

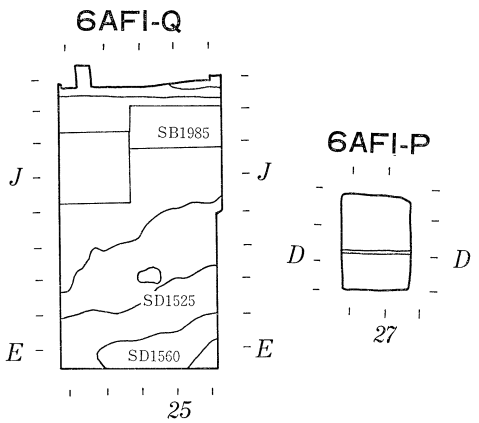


Fig. 8　第121次調査地域の地区割と主要遺構

遺物は小片であるが多量に出土する。

1・18　茶褐色粘質土を掘り下げる。下層に黒褐色粘土，その下に旧河川 SD1560 を掘り込んだ導水路 SD1525 の肩を検出。

1・19　茶褐色粘質土を掘り下げ，暗灰色粘土の面を出す。

1・21　茶褐色粘質土を掘り下げ，旧河川 SD 1560 堆積面で導水路 SD1525 の両肩を検出。SD 1525 の堆積は導水路第1層～3層に分かれる。

1・22　導水路の掘り下げ。木簡1点出土。北辺の SD1545 検出。溝 SD1545 は2段になっており下層は灰褐色粘土，上層は茶褐色粘土で埋められ，2層とも遺物は少ない。茶褐色粘土の上層に炭混り暗灰色砂質土・土器溜を検出。また SD1545 南岸に溝と直交する形で3条の溝状の跡を検出。橋の桁をかけた跡とも考えられる。

1・23　SD1545 の掘り下げ。導水路最下層（黒灰粘土）掘り下げ。木簡6点出土。P地区南トレンチの遺構検出。顕著な遺構はない。

1・24　導水路 SD1525 の掘り下げ。導水路中に打ち込まれた杭2本検出。導水路南岸で和同3年4月の紀年名のある木簡出土。北岸の旧河川堆積土を掘り込んだ土壙 SK1983 検出。瓦片・土器片・土馬片出土。旧河川の堆積層から5世紀後半の土師器出土。写真測量用の基準点設置。

1・25　空中写真測量。写真撮影。

1・26　実測準備。遣方設定。

1・28～30　実測。

1・31　SD1525 の北の一部を拡張。溝肩検出するも南岸の溝状遺構はないことを確認。

2・4　前回の写真測量失敗のため，再度空中写真測量を行う。

2・5　埋め戻し，砂入れ。

E　整備に伴なう調査

6AFI-P 地区

1984年2月1日～2月15日

2・1　池上流部西岸の池底石の欠失している個所にトレンチを設定し，断ち割る。池中央側に落ちていく暗灰色砂質・粘質土の堆積が認められ，粘質土底に木質遺物が多く堆積している。池下流に近い西岸入江部にトレンチ設定する。青灰色粘土の上に 40 cm 厚の黄褐色粘土（いずれも地山）が池中央に向って急速に落ち込み，旧流路の堆積と考えられる暗灰色砂質土・灰黒色粘土がある。また岸辺では黄褐色粘土の上に茶褐色粘土の堆積がみられる。

2・2　池岸に4個所のトレンチを設定。一番北のトレンチ以外はいずれも旧流路の外側で黄褐色粘土の地山を検出。その上に茶褐色粘土の整地がみられ，茶褐色粘土の上に礫敷・景石の抜き取りを検出。

2・3　浄水施設 SX1524，池中の岩島などいずれも下に茶褐色粘土が敷かれていることが判明。すなわち池造成に関しては茶褐色粘土を敷いて立石・敷石を据えつけていることが，また池底は旧流路の埋土の上に直接石をはりつけていることを確認する。

2・8　導水部木樋とりあげ，整備工事に関連しても茶褐色粘土が造成時に際して整地されたものであることが確認される。茶褐色粘土の下層の灰色粘土より平城Ⅲ期の軒瓦，土器出土。

2・14　池下流排水溝 SD1466 の両岸を断ち割り，旧流路の両岸を検出。旧流路は暗灰色粘質土の堆積がみられ，この上に茶褐色粘質土の堆積があり，排水溝護岸石は茶褐色粘質土に据えられている。

2・15　排水木樋 SX1464 の西側にトレンチ設定。西端で黄褐色粘土・青灰色粘土の地山が急に落ち込み，旧流路の堆積の暗灰色粘質土があり，上層に茶褐色粘質土の堆積がみられる。

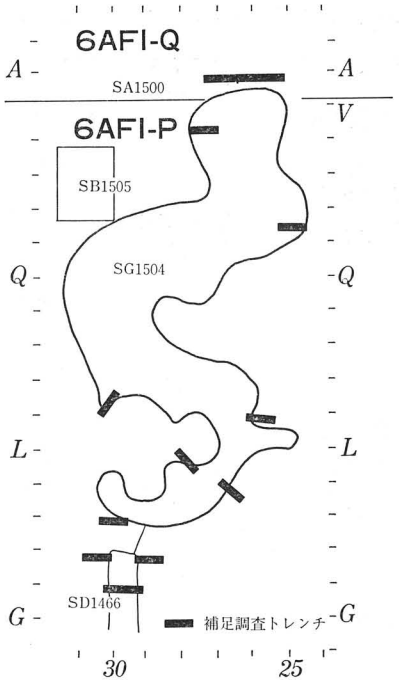


Fig. 9　整備に伴なう補足調査地域

5 写 真 測 量

遺構の実測は主に写真測量によった。写真測量は地形図作成のために古くから用いられている方法で，ある距離を隔てた2点から撮影した重複した2枚の写真（ステレオモデル）を使って，物体を3次元的に計測しようとするものである。遺構の写真測量は，精度の均一性，写真の忠実性，外業の迅速性などの長所を持つことにより1963年に平城宮跡で試みられたのがはじまりで，継続的に行われ，特に今回のような石敷・礫敷などの多い遺構では有効である。測量はあらかじめ地上に位置と標高を正確に計測された標定点を設ける。標定点は一対の写真に縮尺用と横ぶれ用に2点，縦ぶれ用に1点，合計3点あればよく，標定点の密度は所要の図化縮尺により撮影高度とレンズの焦点距離，フイルムの寸法によって決まる。図化は撮影されたフイルムを使い写真図化機によって，標定点をもとに機械の中に被写体と同じ形状のモデルを作り，平面に投影描画し，遺構図を作成する訳である。

特　色

方　法

各調査区の写真測量

第96次予備調査では園池の部分だけクレーン車でステレオカメラを釣り下げて，第96次本調査，第109次，第121次調査ではヘリコプターにカメラを搭載して遺構全体の撮影を行った。成果品としては1/100モザイク写真と園池については1/20の遺構図，その他については1/50の遺構図を得た。また園池石組立面図作成のため，96次予備・本調査では地上写真測量を行い，1/20の立面図の成果を得た。

96次本調査以外は図化以前に遣方測量を先に行っているが，本調査では写真測量だけで図化しているため，写真測量後の補足調査の過程で検出した若干の遺構については図面にあらわれるが写真にはでていない。また96次予備調査ではクレーン撮影をした池の部分以外は垂直写真がない。

(平面図)	カメラ	レンズ	フィルム	露出	絞り	高度	変位修正機
96次予備調査	NAB150	168 mm	イルフォード ガラス乾板	1/250秒	11—16	10—15 m	ツアイス SEG V
96次本調査	ツアイス RMK-A	153	コダック エアロタイプ	1/150秒 1/250秒	8—16	15—30 m	〃
109次調査	〃	153.21	コダック TRI-X	1/400秒	10	30—45 m	〃
121次調査	〃	152.67	〃	1/350秒	8	30 m	〃
(立面図)							
96次予備調査	Wild C-120		GEVAPAN33	1/2—1/8			〃
96次本調査	SMK40		イルフォード ガラス乾板	1/50—1/100			

Tab. 3　写真測量撮影仕様

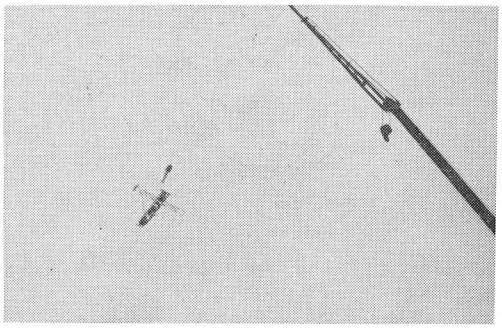


Fig. 10　クレーン車による写真測量

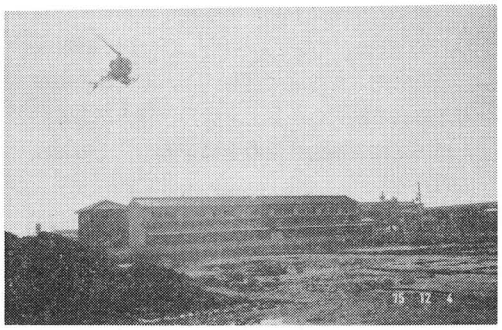


Fig. 11　ヘリコプターによる写真測量

標定No.	X	Y	H	標定No.	X	Y	H
2	−146,318,980	−17,841,049	59,320	46	−146,363,142	−17,869,003	59,852
5	340,254	841,049	59,572	52	363,142	893,423	59,487
8	363,142	841,049	59,502	62	376,266	826,729	59,364
10	376,266	841,049	59,423	71	310,597	860,632	59,787
20	340,254	868,813	59,816	76	294,055	853,281	59,580
23	340,254	891,918	59,517	79	319,318	876,087	59,505
27	332,907	862,639	59,621	81	291,778	876,087	59,680
36	348,860	877,024	59,472	82	319,318	891,173	60,212
45	355,722	893,619	59,512	84	297,153	841,049	59,724

Tab. 4　写真測量標定点成果表

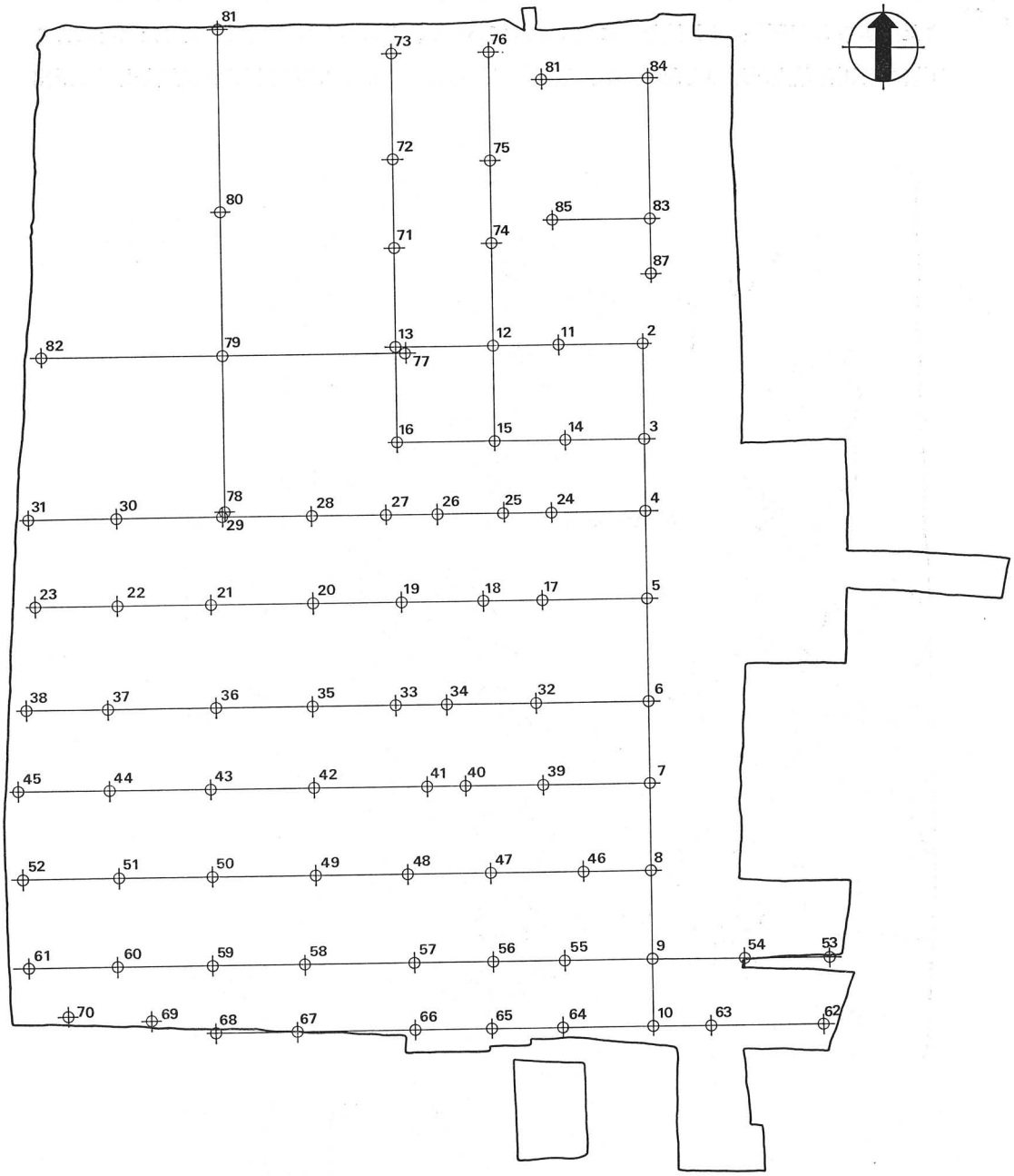


Fig. 12　調査区標定点配置図

第Ⅲ章　遺　　跡

1　遺跡の概観

地　　形　調査区は東に接して流れる菰川とともに北から南へ向う浅い谷筋に位置する。検出遺構面は標高 59.6～59.2 m と南へ低くなるが，ほとんど平坦地で旧流路・園池の部分で谷筋を形成する。奈良時代以前に調査区北東から南へ流れる旧河川 SD1560 がある。同様の旧河川が北から また西から SD1560 に流れ込む形に検出されているが，それ以外は黄褐色粘土またはそれより下層の青灰色粘土が地山となる。旧河川の堆積層の砂礫層から 5 世紀中頃の布留式土師器が出

造営前の遺構

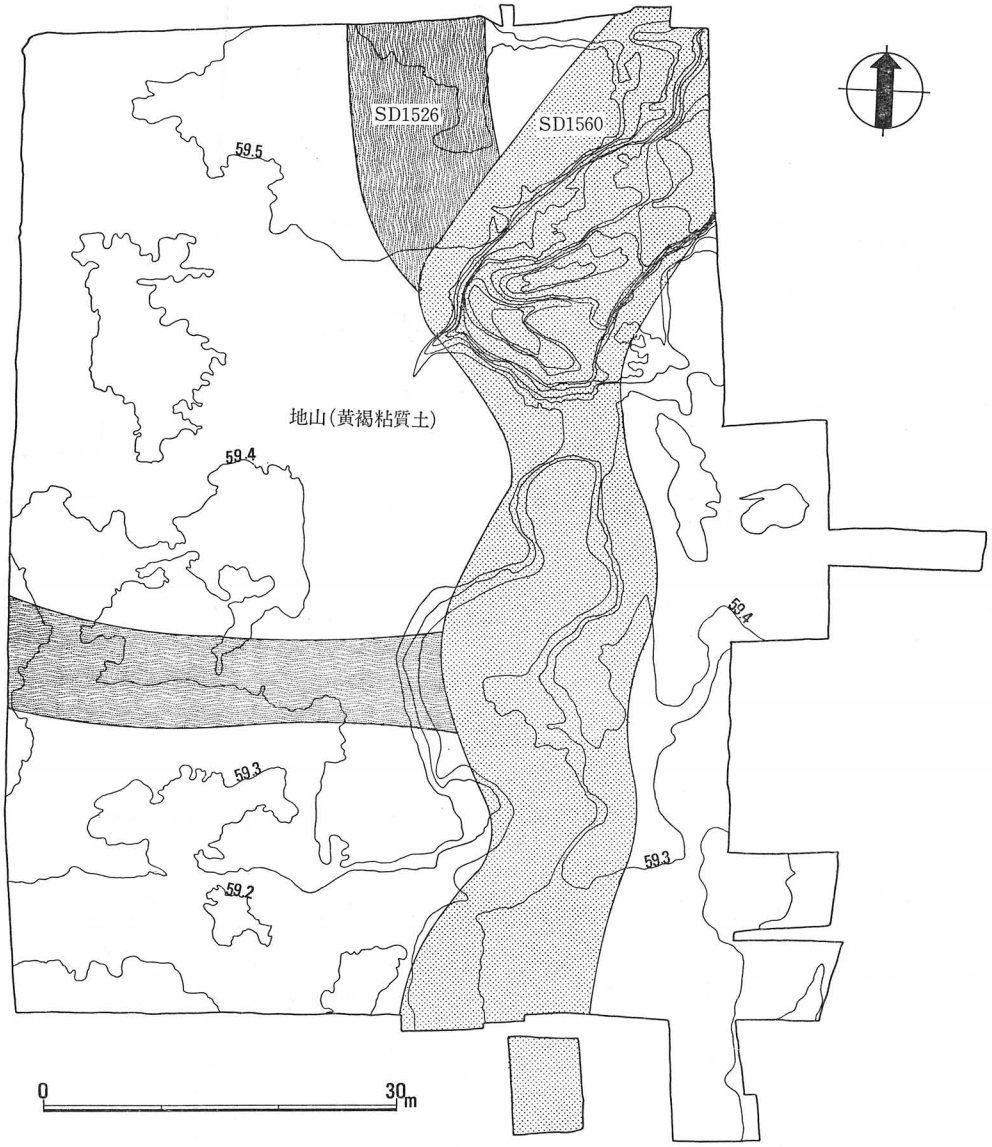


Fig. 13　調査区の地山・地形

土している。旧河川 SD1560 は，平城京造営前に自然堆積により廃絶するが，旧河川の流路をそのまま利用した流路 SD1525 が旧河川の堆積を切って造成される。流路 SD1525 の堆積は3～4層みられ，最下層が黒灰色粘土，その上に暗灰色粘土と砂が互層に堆積し，最上層は暗灰色含砂粘土の堆積がみられる。最下層からは和銅の木簡の他，多数の木屑とともに奈良時代前半の土器が，最上層からは平城Ⅲ期の土器が出土し，流路が奈良時代当初に旧河川路を利用して開削され，自然堆積で天平年間に埋まる状況を示している。なお流路は，旧河川の崖面・氾濫原が埋めたてられずにそのままの形で使われていたため，流路廃絶後も浅い流れとして存続し，黒褐色粘土の薄い堆積がみられる。旧河川路の凹み，流路は北側の七坪においてもみられ，六坪・七坪二町の占地を想定させるものである。またこの流路は廃絶後凹みが茶褐色粘質土により一気に埋め立てられ整地が行われる。石組の園池 SG1504 の造成はこの時期で，流路の埋め立てに際して六坪の中心に園池を造作することを意図し，流路の形状を利用した形で流路埋土（暗灰色粘土）の凹みの上に池の底石を並べ，岸辺は茶褐色粘土で整地・整形して石敷・景石の据えつけを行う。また導水の木樋も同様茶褐色粘土の整地と併行して行われている。黒褐色粘土層より平城Ⅲ期の土器や軒丸瓦6271型式が出土している。また茶褐色粘土の整地層よりⅢ期の軒瓦6282・6721型式やⅢ期の土器が出土しているため，石組の池の造成は還都後天平宝字年間に比定される。また池内の遺物の状況より平安時代初頭まで園池が存続していたことが判明した。流路・園池周辺の整地層は茶褐色粘土の他に，流路の外側で旧河川沿いに河川堆積土の暗褐色砂質土がみられ，茶褐色粘質土の整地は，SB1574・SB1985 などにも部分的にもみられる。整地土，柱通り，柱穴の重複や，柱掘形，抜取り穴から出土の遺物より，六坪の遺構は奈良時代で大きくB～Eの四時期に分けられる。B期すなわち奈良時代前半の流路 SD1525 と併存する遺構としては，建物では SB1505 と官衙的配置をとる SB1570・SB1571・SB1573・SB1542 の5棟と，六坪北側築地の南雨落溝 SD1545 と井戸 SE1610 と，平行して流れる SD1453 と SD1451 の他，SD1525 に流れ込む数本の水路がある。C期の遺構は園池造成当初の時期で，前期の建物の内 SB1505 以外は踏襲され，他に流路 SD1525 の埋め立てと合わせて六坪の中心に造成される園池 SG1504 とそれを画する北塀（SA1500），東塀（SA1455），西塀（SA1536）と西側の建物（SB1510），北側の建物（SB1550），井戸 SE1547 がある。D期の遺構は大幅に改修される時期で，池の西側に礎石建物（SB1540）が建てられ，合わせて北塀も建物に取りつく形で延長され，池沿いの建物（SB1470）と南塀（SA1473）が建つ。北側は建物 SB1574・SB1552 がいずれも7尺を基準尺とする位置に10尺の柱間で造営される。E期の遺構は奈良時代末から平安時代初頭にかけての遺構で，池の西側に小さな建物2棟（SB1471, SB1472）の他，東側には SB1476 とそれを隠す塀 SA1483 が建てられ，北側では SB1985 の建物がある。

奈良時代前期の遺構

園池の造成

時期区分

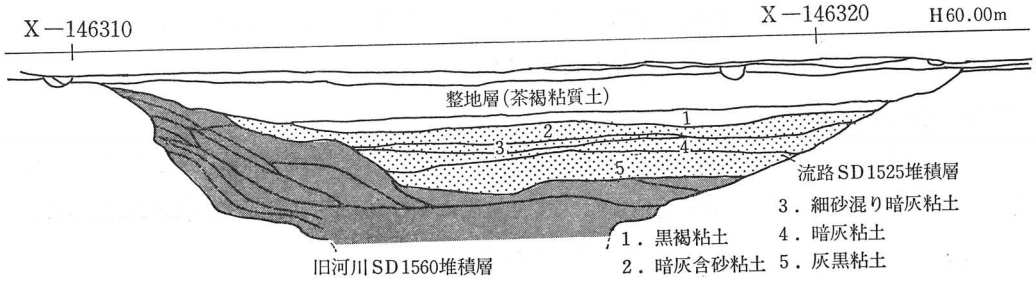


Fig. 14　旧河川 SD1560・流路 SD1525 堆積土層図

2 遺　　構

A　A期（奈良時代以前）の遺構

SD1560 (PLAN 4; PL. 8)

奈良時代以前の菰川の旧河川。奈良時代に入っても 50cm ほどの水深で存続する。SD1525 はこの SD1560 の堆積の中央部を穿って幅狭く造成されるが，SD1560 の両岸は深さ 50cm の状態で存続している。この堆積土上層から平城宮Ⅰ～Ⅱ期の土器が出土しており，SD1525 と同時期に存在していたことを示す。北の七坪の調査でも上流部が検出されている。六坪と同様流路 SD1525 の前身の旧河川として存続していたことが確認されている。園池北方で SD1560 の幅は 10～12 m，深さは主遺構検出面から 50～70 cm である。流路 SD1525 の下層の SD 1560 の堆積土砂礫層からは弥生・古墳時代の土器が出土している。この流路の下層には，さらに古い時期のものと思われる流路 SD1526 などが数条検出されている。

SD1457 (PLAN 6)

道路状遺構 SF1559 の北側溝 SD1453 の西端，南の東西溝。東端は SD1456 と重複してそれより古く，西端は削平を受けて消滅する。幅 30～40 cm，深さ 10～15 cm，検出長さ約 8 m である。奈良時代以前の遺構で，遺物は出土しない。埋土に拳大の礫を含む。

SD1520 (PLAN 4)

園池北の東西塀 SA1500 の東端北で検出された斜行溝。奈良時代以前の遺構で旧河川 SD 1560 に流入する自然流路と考えられる。

SD1532 (PLAN 2)

園池北西の斜行溝。南西は SK1534 の北西に端を発し北東に向って流れ，流路 SD1525 によって切られる所まで約 18.5 m にわたって検出した。幅は 0.8～1.5 m，深さは 10～20 cm で，中央部は深く 40 cm に達する。中途で重複する SA1500，あるいはその南北の東西溝のいずれよりも古く，奈良時代以前の自然流路と考えられる。したがって SD1525 以前の旧河川 SD1560 に流れこんでいたものであろう。出土遺物は少ない。

SD1546 (PLAN 4)

井戸 SE1547 の東，流路 SD1525 との間にある東西溝。SE1547・SD1525 のいずれよりも古い。幅は約 60 cm，深さは約 10 cm である。

SD1561 (PLAN 4)

発掘区北部中央から南流する流路で，SD1560 と重複してそれより古い。最上層の堆積層（砂層）を切って SB1550・SB1552 を造成している。

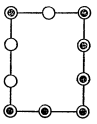
SD1562 (PLAN 2)

発掘区の北端西部で検出した斜行溝。検出長さ約 18 m，幅は 1 m 前後，深さ約 15 cm である。発掘区北端では SD1545 と重複し，また東西に延びて SB1552 と重複してこれらよりも古く，SB1552 の南で土壙状の溜まりを形成して終わる。

B　B期（奈良時代前半）の遺構

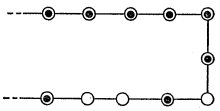
SB1505 (PLAN 4；PL. 4)

園池の北西に接する位置にある桁行3間（6.3m，7尺等間），梁間2間（4.9m，8尺等間）南北棟掘立柱建物。東南隅の柱掘形は，園池周囲のバラス面の下から検出されており，
＊園池造営以前の遺構と知られる。方位は北で方眼より東にやや振れる。柱掘形は一辺 90 cm 前後の略方形を呈し，柱痕跡は径約 25 cm である。



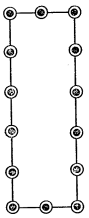
SB1542 (PLAN 2；PL. 4)

SB1540 の北半と大きく重複する東西棟掘立柱建物。桁行4間（4間分 10.6 m，9尺等間）以上，梁間2間（5.4 m，9尺等間）で西部は発掘区
＊の外になる。方位は北で方眼よりやや東に振れる。すでに述べたように SB1540 より古く，また SB1505 の北妻柱筋と北側柱をそろえている。



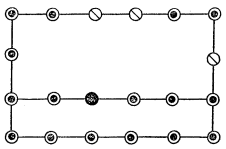
SB1573 (PLAN 2；PL. 4)

東西塀 SA1500 の西端北で検出した桁行5間（12.6 m，8.5尺等間），梁間2間（4.2 m，7尺等間）の南北棟掘立柱建物。重複する遺構がなく伴出遺物もほとんどないの
＊で時期の比定が困難であるが，SB1570 の東妻柱筋と本建物の西柱筋がほぼ一致することから，SB1570・SB1571 と一連に鍵の手の配置を構成する建物と考えられる。



SB1570 (PLAN 2；PL. 5)

発掘区の北西で検出した桁行5間（13.3 m，9尺等間），梁間2間（5.4 m，9尺等間），南片庇付（庇の出 2.7 m，9尺）の東西棟掘立柱建物。方位は北でわずかに西に
＊振れる。身舎の柱掘形は一辺 1.2 m 前後の略方形を呈し，柱痕跡を留めるものが多い。南入側柱筋西から3の掘形には径 32 cm の柱根が遺存する。庇の掘形は身舎よりひとまわり小さく，柱痕跡は径 25 cm 前後である。南入側柱筋西から2の掘形には柱根の残欠と，礎盤が遺存する。



SB1571 (PLAN 2)

＊発掘区の北西隅で検出した南北3間（5.4 m，9尺等間）の柱穴で，その位置から SB 1570 と同規模の東西棟建物の東妻部分と推定される。すなわち約 6 m（20尺）の距離をおいて2棟が正しく横に並ぶ配置となり，その規模から推しても2棟ともこの区域では主要な建物に当るものと考えられる。

SD1451 (PLAN 5)

＊園池東南で検出された東西溝。東は発掘区以東に延び，西は園池の排水溝 SD1466 の下層となって未検出である。検出長さ約 31 m，幅 50 cm 前後，深さ約 20 cm である。SD1453 と平行しており，この間を路面とする道路 SF1559 の南側溝に比定される。埋土から平城宮Ⅰ～Ⅱ期の比較的早い時期の土器が出土しており，年代は園池造営以前に位置付けられる。埋土は赤褐色粘土で園池造営時の整地土と等しく，園池造営に伴なって埋め立てられ廃絶したものと
＊推定される。流路（SD1525）に流れこんでいたものであろう。

1）模式図の記号　●柱根をとどめる掘形　◉柱痕跡をとどめる掘形　⊘抜取痕跡あり　○掘立柱掘形
……推定（すべて方位は上が北，縮尺約600分の1）

SD1453 (PLAN 5)

園池東南の東西溝。SD1451 の北 6〜7 m を隔てて SD1451 と平行し，間に路面を形成する。道路 SF1559 北側溝に比定される。東部で一旦とぎれるが東は発掘区以外に延び，西は園池南端の石組 SX1526 の背後に広がるように終わる。SD1451 と同様に，園池以前の流路 SD1525 に流れこんでいたものと推定される。約 23 m にわたって検出。幅 40〜50 cm，深さ 10〜20 cm である。遺物の出土は少ない。 *

SD1456 (PLAN 6)

園池の南で検出された斜行溝。SD1453・SD1451，すなわち道路 SF1559 より古く，SD1457 よりは新しい。流路 SD1525 造営以前，奈良時代以前にもさかのぼり得る遺構である。幅は 60〜70 cm，深さは約 20 cm であり，埋土には遺物を含まない。SD1453・SD1451 の間約 12 m にわたって検出され，SD1451 以南は浅い痕跡となって残る。 *

SD1459 (PLAN 5)

SD1451 西端南の南北溝。北端は SD1456 が SD1451 と重複する地点からはじまり，南は発掘区の外に延びる。幅約 40 cm，深さ約 15 cm，検出長さ約 2.5 m である。SD1451 より古い。

SD1478 (PLAN 5) *

発掘区東端，SB1476 の南側柱筋に重複する東西溝。SB1476・SD1477 より古い。幅約 20 cm，深さ 5 cm，検出長さ約 3 m である。遺物の出土は少ない。

SD1480 (PLAN 5)

SB1476 の北側柱筋に重複する東西溝。SB1476 より古く，園池造成以前の流路 SD1525 に伴なう一連の東西溝のうちのひとつと考えられる。東端は明瞭でないが，SK1474 以西から SA1483 付近まで約 17.5 m にわたって検出した。幅は 20〜30 cm，深さは 2〜3 cm である。埋土には遺物を含まない。 *

SD1489 (PLAN 5)

発掘区東方 SA1500・SA1455 の合する点の南で，SA1483 と重複する東西溝。幅約 30 cm，深さ 5〜10 cm，検出長さは約 10 m にわたり，西端は園池の東約 4 m の所で削平を受けて消失する。また，出土遺物も少なく，時期は詳らかでないが，流路 SD1525 に伴なう一連の溝のひとつと推定されよう。 *

SD1488 (PLAN 5)

発掘区東端，SA1500 を東へ延長した位置にある東西溝。東端は発掘区の外へ延び，西半で一旦途切れ，西端は SA1500・SA1483 の交点の柱掘形と重複して終わる。幅約 25 cm，深さ 5 cm，検出長さ約 8.5 m である。SA1500・SA1483 より古い。 *

SD1499 (PLAN 5)

園池周囲を区画する塀 SA1500・SA1455 の東北隅外側で検出したやや斜行する東西溝。東は発掘区の外に延び，長さは約 9 m である。西端は消失するが，幅は約 25 cm，深さ約 5 cm である。 *

SD1501 (PLAN 5)

SD1499 の北で検出された東西溝。東は発掘区の外へ延び，長さは発掘区東端から西へ約 8.5 m である。西端で一旦途切れるが，下流は SD1521 に続く可能性が大きい。前項 SD1499 と

共に園池前身の自然流路 SD1525 に流入する一連の溝の一つと推定される。幅は 30〜50 cm, 深さは 5〜15 cm である。

SD1508 (PLAN 4)

SB1505 の北妻柱筋に重複する東西溝。東端は池汀の西約 4 m の位置から始まり，以西 12.7 m にわたって検出した。幅は 20〜30 cm, 深さ 5〜10 cm である。SB1505 の西北隅柱掘形と重複し，それより古い。東流する溝でやはり流路 SD1525 にともなうものと推定される。遺物の出土をみない。

SD1521 (PLAN 5)

SA1500 の北で検出された東西溝。SD1501（あるいは SD1499）の下流と推定され，流路 SD1525 に流れ込む。

SD1525 (PLAN 4 ; PL. 8)

発掘区東半を南北に蛇行しながら貫流する流路で，旧河川 SD1560 の堆積を切って造成され，奈良時代前半に存続していたものである。旧河川 SD1560 が深さ 50 cm ほどになった時点でその中央部を掘り直したもので，旧河川の肩はそのまま生きた状態で存続している。廃絶時には，茶褐色粘質土で旧河川の肩まで一気に整地される。北側の七坪の調査でもこの流路の上流部を検出しており，やはり旧河床を切って造成され，幅・深さとも同規模で整地土も同様の茶褐色粘質土で行われるという同様の知見を得ている。埋土下層に含まれる土器は主として平城宮Ⅰ期・上層はⅢ期に編年されるものであり，後者は流路廃絶，すなわち園池造営の時期の上限を示すものである。幅は 2〜4 m，深さは流路自体では 1 m，旧河川の肩からは 1.5 m をはかる。なお，堆積土下層から，木簡が 102 点出土した。詳しくは木簡の項に述べるが，このうち年紀を持つものが 4 点あり，和銅 3 年が 1 点，同 5 年が 1 点，同 7 年が 2 点である。

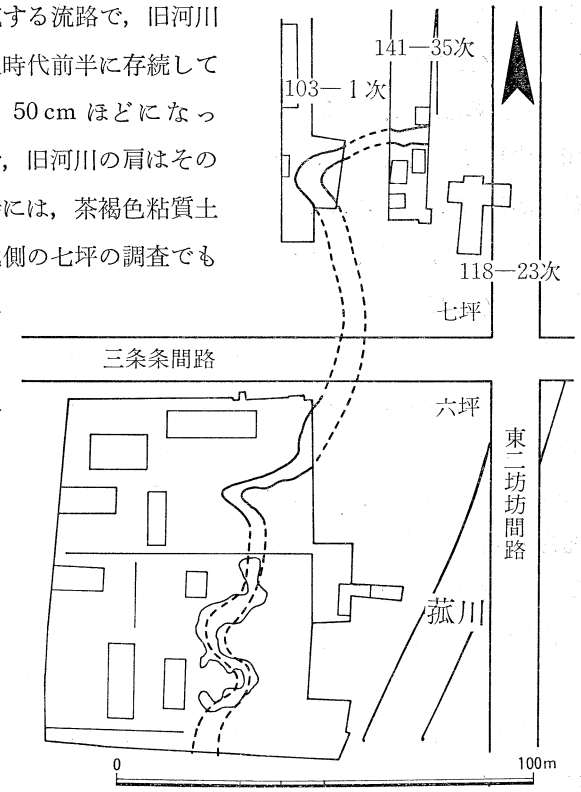


Fig. 15 流路 SD1525 平面図

SD1528 (PLAN 4)

発掘区中央を横断する東西塀 SA1500 の南沿いに検出された東西溝。東端は園池周囲のバラス敷の下となり未検出。西端は斜行溝 SD1532 に達するが，それより新しい。園池造営以前の流路 SD1525 に流入する東西溝のひとつである。約 14 m の長さにわたって検出。幅は 30〜70 cm，深さは約 10 cm 前後で，遺物はほとんど出土していない。

SD1529 (PLAN 4)

SA1500 北方の東西溝。東で幾分南に斜行しており，9 m の長さを検出。幅約 30 cm，深さ 5 cm 前後。東流の溝で，流路 SD1525 に流れ込む。西端で斜行溝 SD1532 と重複するがそれ

より新しい。

SD1530 (PLAN 4)

SD1529 北の東西溝。西部で SD1532 と重複し，それより新しい。検出長さ約 9 m，幅約 30 cm，深さ約 7 cm である。東流する溝で，遺物の出土は少ない。

SD1533 (PLAN 4) *

SB1573 東の東西溝。検出長さ 9.5 m，幅は 30～60 cm，深さは 10～15 cm である。中途で SD1532 と重複しこれより新しく，東端は流路 SD1525 に流入する。埋土より耳付の須恵器が出土した。

SD1544 (PLAN 4)

発掘区東北隅，SB1985 の北側柱に重複する東西溝。流路 SD1525 に東流する。SB1985 の * 柱掘形と重複し，それより古い。検出長さ約 5 m，幅約 40 cm，深さ 5～20 cm で，遺物の出土は少ない。

SD1545 (PLAN 2.4)

発掘区の北端で，その東西にわたって約 50 m の長さを検出した東西溝。幅は 60 cm 前後で一定しており，深さは 15～25 cm，溝底は発掘区内ではほぼ水平であるが，流路 SD1525 の * 位置からみて東流していたものと推定される。六坪の北を画する築地の内側すなわち南の雨落溝に比定され，平城宮Ⅱ～Ⅳ期の長期にわたる土器片が多量に出土した。

SF1559 (PLAN 6)

SD1451・SD1453にはさまれた幅 6 m 前後の東西道路敷。発掘区の東南部で長さ約 30 m にわたって検出され，方位は西でやや南に振れる。時期は側溝と見なされる前記両溝の出土遺 * 物から，奈良時代前半に位置付けられ，園池造営以前に廃絶する。道路心は坪南北心から南に 18.9 m の所に位置する。坪の南北を三等分する地点よりは幾分北にずれ，上記の方位の振れもあって，坪内地割の道路となり得るかは確定し難い。

SK1578 (PLAN 2)

SB1570・SB1571 の中間北に検出された不整形の大土壙。最大幅は南北約 3.5 m 程，東西 * 約 5 m であるが，西部は発掘区の外に延びる。埋土から平城宮Ⅰ期の軒平瓦片6641型式C種，同Ⅱ期の軒平瓦片6671型式K種が出土しており，比較的古い時期の土壙と推定される。

SD1580 (PLAN 2)

発掘区北西隅で検出した南北溝。SB1570 の西から 2 列目の三つの柱掘形と重複する位置にあり，これより古いことを知る。遺物の出土は少なく，年代・性格共に不明であるが，発掘区 * 内では南北溝が珍しく，またその方位もほぼ正しく国土方眼方位に乗り，条坊方位にも近いことから，何らかの地割の溝となる可能性もある。

SX1982 (PLAN 4 ; PL. 8)

流路 SD1525 の溝底に打ち込まれた 2 本の杭。屈曲点の東約 4 m の地点に，約 65 cm の間隔を置いてほぼ南北に打たれている。杭の太さは 12 cm，残存長さ 70 cm である。流路埋立 * てに関わる堰のためのものかとも考えられるが，板の類が残存せず，性格はなお不明である。

SK1983 (PLAN 4)

旧河道 SD1560 中で検出された土壙。長さ径約 2 m の不整形で，深さは約 30 cm である。

埋土中から「侍従」と墨書のある土器片が出土している。

SE1610 (PLAN 2)

SE1547 の北西近くで検出された板組みの井戸。掘形平面は径約 1.5 mの不整円形を呈し，深さは 0.6 m，底面近くに方形を形成する側板の痕跡が見られる。遺物が少なく，年代の判定が困難であるが，SB1570・SB1573 に近接しており，それに伴なう可能性が考えられる。その場合は園池 SG1504 ないし SE1547 に先行することとなる。

C　C期（奈良時代中頃）の遺構

SA1500 (PLAN 2.4；PL.5)

園池の北に接して，発掘区の中央部を東西に画する塀。東は SA1483 の北端から西は SB1540 の東北隅にとりつく部分まで，途中園池北端の石組部分をはさんで 45.4 m の長さにわたる。全体は①池東側 4 間（8.3 m，7 尺等間），②池西側東から 9 間まで（18.7 m，7 尺等間），③SB1540 との接続部分 4 間（10.2 m，8.5尺等間）の三つの部分からなる。①・②と③は柱間寸法が大きく異なり，基準尺度も異なる（後者が大）とみられることから，まず①・②の部分があり，後に SB1540 造営に伴って③を造りその間の空隙を閉じたと推定される。また，①・②の部分の間隙は 8.3 m あり，7 尺等間で 4 間に割りつけ得ることから，①・②部分が一連のものと考えられる。②の東端の柱掘形は池石敷と重複し池石敷より新しい。いずれにせよ，園池に直接関連し，また SA1455・SB1540 とも関連する点で遺構配置及びその時期区分を解く鍵となる重要な遺構と言えよう。①・②部分の柱掘形は南北を長辺に約 1.2 m，短辺 0.8 m を基準とする長方形を呈し，径 30 cm 前後の柱痕跡を留めるものが多い。また，③部分のいずれかの柱間を門としていたことも考えられよう。

SA1536 (PLAN 3)

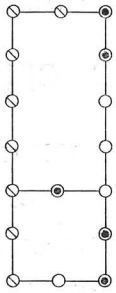
SA1500 と SB1510 の間で検出した南北塀。7 個の掘形が同一柱筋上に乗るが，南 2 個は浅く，しかも柱間寸法が乱れることから土壙とみなし，北 5 個の柱掘形による 4 間分を塀と認めた。4 間分の総長 9.5 m，柱間は 8 尺等間である。上記のいまひとつの根拠は，この柱筋が SA1500 の柱位置に乗らず，また SB1510 の東側柱筋とも微妙に喰い違っていて，両者と一連の施設とは必ずしもなり得ないと考えられるからである。SA1500 との間隔は約 2.2 m と塀の柱間より狭く，また最南の掘形をとると，それと SB1510 との間隔は逆に約 4 m とひろくなって秩序が認められない点も否定的な要素である。この塀の位置は，坪の東西 2 等分線から西へ 70尺（SA1455・SA1483 と対称）の所にあり，東西 3 等分線上にあたる。この点で地割の塀ともなり得る性格を持つが，池周囲を正方形にせまく囲うこと自体が不自然であるし，一方池と正対すると推定している建物 SB1540 の前面をことさら閉ざすことも疑問であるので，SB1542 に関連する塀と考えておきたい。

SA1455 (PLAN 4.5)

発掘区東端で検出した南北塀。園池を含んだ区画の東面部分となる。北は北面の塀 SA1500 の東端にとりつくように（直角に南に折れて）はじまり，南は東西溝 SD1453 を越した所で終る。全長は 37.6 m で中間部分は発掘区の外になり，北半は 7 間分で 15.4 m ある。最北端の SA1500 にとりつく部分の柱間のみは 2.7 m（9 尺）と広く，他は 7 尺を基本としていると考

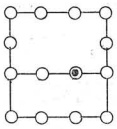
えられるが，多少の出入があって施工精度は北面の塀SA1500より低い。全体の柱間を7尺等間とすると，総柱間数は18と推定されるが，南半はこの前提では1間の寸法が7尺に不足する。また，北半検出部分では他の南北塀 SA1483 と重複するが，それより古い柱掘形は長辺1.0m 前後，短辺 0.8m 前後の東西に長い長方形を基本とし，径 20～30 cmの柱痕跡，あるいは柱抜取穴を留めるものがある。 *

SB1510 (PLAN 3；PL.5)



園池の西方で検出した桁行6間 (17.7 m, 10尺等間)，梁間2間 (5.9 m, 10尺等間) の南北棟掘立柱建物。方位は北でわずかに西に振れる。南から2間目の柱筋の棟通りに間仕切と思われる柱穴がある。比較的大規模な建物で，園池に正対しているので，この建物と園池との間に位置するSB1470との共存は疑問であろう。SB1540とも重複する。柱掘形は長方形で，おおむね東西を長辺として 100～150 cm，短辺 80～100 cm と建物規模に適当である。 *

SB1550 (PLAN 4；PL.6)



発掘区北方，旧河道 SD1560 北西で検出した桁行3間 (6.3 m，7尺等間)，梁間2間 (4.8 m，8尺等間)，南片庇付 (庇の出 2.7 m，9尺) の掘立柱建物。SB1552と重複する。柱穴の重複はないが，身舎東南隅の柱掘形から6667形式 (平城宮Ⅲ期) の軒平瓦が出土しており，より古く位置付け得る。身舎柱掘形は径 50 cm ほどの不整形で，庇の柱掘形はこれよりひとまわり小さい。 *

SE1547 (PLAN4；PL.8)

発掘区北部，流路の屈曲点の西で検出された素掘りの井戸。遺構面では南北 4.5 m，東西 3.5 m の長円形に広がるが，底部の平面は略円形で，径は約 2 m である。埋土は大きく7層に分かれ，上4層は周壁がくずれて土壙状となった後の堆積と考えられる。埋土最下層からは，平城宮第Ⅲ期の軒平瓦6721型C種を含む瓦片・土器片が出土し，最上層からは第Ⅱ期の軒平瓦6664型式F種を含む瓦片，奈良時代から平安時代初頭の土器片が出土し，周囲に落ち込んだ状態で数点の塼が出土した。また，井戸の南側には，縁に接して東西3.5 m，南北 0.8 m の範囲にバラス敷が検出された。井戸周囲をバラスで舗装し縁に塼を並べていたものと推測される。遺物の状況から言って，この井戸は園池とほぼ同時期に機能し，廃絶したと考えられる。園池造営時には，以北の流路はすべて埋め立てられており，園池への水の供給源として近辺では唯一の存在であることからも，園池との密接な関係が推測される。 * * *

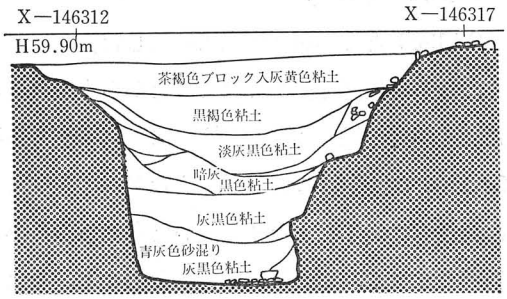


Fig. 16 井戸 SE1547 断面図

SE1611 (PLAN 2)

SE1610 の北西。SB1570 の東で検出された素掘りの井戸。平面は一辺約 2 m の隅丸方形で，深さは約 0.5 m あり，埋土から平城宮Ⅱ～Ⅲ期の土器が出土している。これを廃絶の下限とし，周辺の遺構配置を見るに，東西塀SA1500以北の経営地域に比定された部分に他に井戸が少なく，SB1570・SB1571・SB1573 に伴なうものと推定し得る。 *

SG1504 (PLAN 6)

池は流路 SD1525 廃絶後，SD1525 堆積土上層の暗灰色粘土の上に石張りを行って造成されている。基本的には SD1525 の岸を SG1504 の岸辺に利用しているが，それ以外の部分や，池底の調整，護岸石，州浜石敷の下や周辺の地形造成に茶褐色粘質土で整地が行われている。 造　成

＊ 池は蛇行した形状をなし，導水口から排水口まで延長 55 m，水面幅は中央部広い所で 7 m，導水・排水部の狭い所では 2 m の水面で，水深は溢流溝 SD1465 より標高 59.00 m の水位を想定すると，上流部で 20 cm，中流部から下流部にかけては 30 cm と比較的浅い。 規　横

全面石組で固めており，池底は径 20～50 cm の扁平な石を並べている。底石は上流部ではほぼ平坦に，中流部では中凹み状に，下流部 6 m ほどは木樋排水路に向って一段低く石を一
＊ 列据え，排水路としている。水際は底石に沿って径 20～30 cm の玉石を立てている。水位がこの立石の天端または少し下を満たす位置に据えられている。立石の外側は景石を据えつけない場所では，底石同様の扁平な玉石を緩勾配（8°前後）で並べている。幅は広い所で 2 m（玉石 9 列），狭い所では 30 cm（玉石 1 列），一番外側は水面より 20 cm ほど高い標高 59.2 m 前後を示す。玉石敷の外側は拳大の礫敷で，幅 1～3 m の範囲に緩勾配（10°前後）に敷き並べてい
＊ る。礫敷の外側は水面より 40 cm ほど高い標高 59.4 m の当時の生活面を示す。礫敷の外縁線間はほぼ 10 m の幅となる。池底は石組壙 SX1524 のすぐ南，すなわち池の北端部と排水用木樋入口の天端で 20 cm の比高差となり，延長で除すと 1/280 の勾配となる。上流部では中央部の池底石全体を下げて，下流部では一段石を低くして排水用勾配をとっている。 意　匠　勾　配

池の形状は流路 SD1525 を踏襲した形で蛇行した曲線となり，その上を石敷，礫敷で意匠し
＊ たものである。 形　状

石組は汀線沿いに，すなわち立石沿いに 5 個所，玉石敷の外側線沿いに 5 個所，礫敷の外縁沿いに 4 個所みられる他，池中に 1 石であるが 3 個所ある。汀の部分の石組は石を立てる形が多く，特に最初の西岸の突き出し部や中央東岸の石組は，池に向って気勢を示す形に斜めに据えられている。汀線の外の石組は 2～3 石を組んでいずれも石を伏せる状況で据えつけてい
＊ る。岸辺の石組は地山にまたは茶褐色粘土の整地面に掘り込んで据えられており，池中の石は底石の上に根石などをかませて据えつけられている。 景　石

石組の景石に使用されている石は大部分が両雲母花崗岩質片麻岩で，一部三笠安山岩，チャート，石英斑岩を含む。底石・石敷・礫敷に使用されている岩石は奈良東部の山地，三笠山・春日山で産出する花崗岩，片麻岩，三笠安山岩，塩基性変成岩類の他，春日野礫層，奈良坂礫
＊ 層の新期礫層に分布する石英斑岩，チャート，ホルンフエルスなどである。 石　質

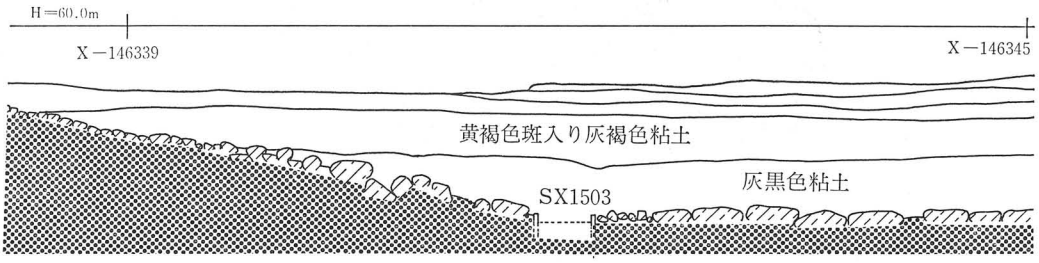


Fig. 17 園池 SG1504 堆積土層図

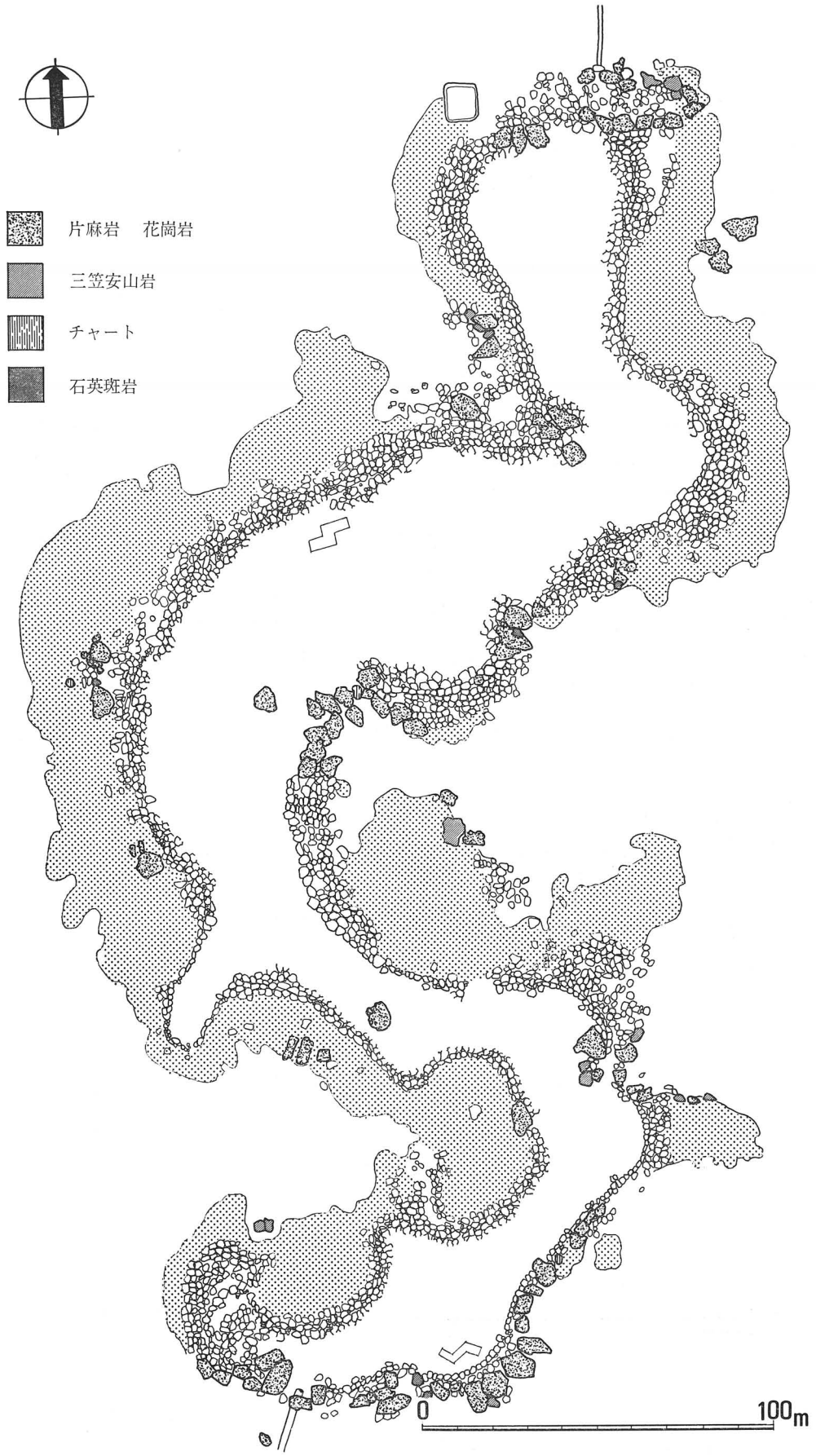


Fig. 18　園池 SG1504 景石・礫敷平面図

SX1463 (PLAN 6 ; PL. 11)

池尻南岸東寄りの汀沿いにある木枠である。SX1503 と異なり平面形が直にならずに斜めになっている。底板は6枚の板を組み合わせているが，形状が斜めになるため不等辺四角形や四角形に切り込みを入れたりした不整形な形状をしている。底板の厚さは 10～25 cm で各板の両端に1～2個の釘穴がある。側板は長片の4枚が 55 cm 前後，短辺が 38 cm 前後2枚と 25 cm 前後が2枚ある。側板の組み合わせは SX1503 と異なり，短辺2枚の両端の枘が出，長辺・短辺の各1枚の両端が欠き込みになっているが，それ以外の側板は片端は枘，片端が欠き込みとなり順に組み合わせる形となっている。釘穴は一部欠損している部分もあるが枘と枘受けの部分に側板相互をとめる形に打つ。側板の厚さは 20 cm 前後で高さは 16 cm ほどである。側板上部中央には穿孔があり，上の側板のとめに使用したものと考えられる。上の側板は薄く残存状況は悪いが，底板の高さは周辺の池底面より 6 cm 低く，水面より 30 cm ほど低いため，二段立ち上がって水面いっぱいの位置である。木枠の材質は杉で木釘はムラサキシキブである。

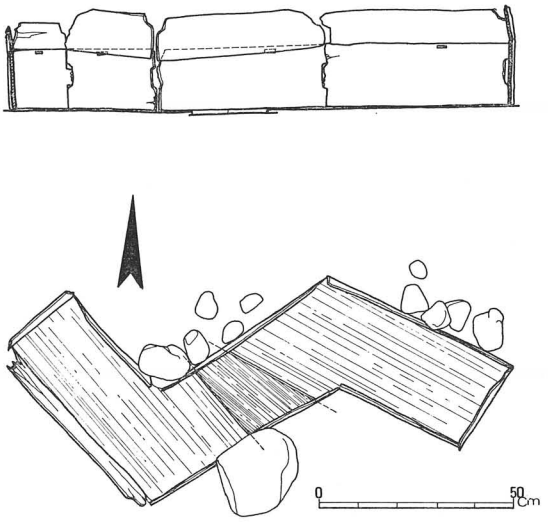


Fig. 19 木枠 SX1463 平面・断面図

SX1503 (PLAN 6 ; PL. 11)

池東岸の最初の屈曲部をすぎた位置で立石の汀線近く，池中にある木枠である。底板を6枚敷き，その上に側板を枘で直に組み合わせたものである。底板は長さ 81 cm，幅 15 cm，前後厚さ 20 cm 前後の板を3枚ずつ組み合わせたもので，重ね合わせる部分（4～7 cm）は板を削り，底板が水平になるように細工している。底板の片端または両端ほぼ中央に短辺の側板をとめる釘穴が，外側の底板には長辺の側板をとめる釘穴が北側で2個所，南側で3個所ある。側板は長辺が 75 cm 前後と 42 cm 前後各2枚に枘を設け，短辺が 34 cm 前後の長さの板4枚に枘受けを作り組み合わせる形になっており，枘(4×5 cm) と枘受けの部分に側板相互のとめ釘穴がある。側板は厚さ 3 cm 前後で，高さは 15 cm 前後であり，側板の上面に長辺の2枚は2個所，その他は中央に1個所，長さ 4 cm，厚さ 1.5 cm，深さ 2.4 cm 前後の枘または栓孔の痕跡があり，上にもう一段側板があったものと考えられる。底

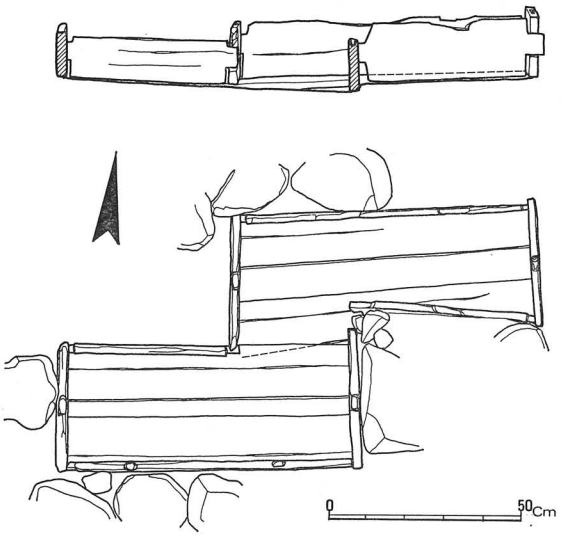


Fig. 20 木枠 SX1503 平面・断面図

板は池底石より 15 cm ほど低く，水面より 35 cm 低いため２段立ち上っても水面より低くなる。木枠の材質は杉で，木釘はムラサキシキブである。

SX1523 (PLAN 6；PL. 10)

池へ導水するための木樋で身部は延長 5. 63 m，幅 20 cm，厚さ 13 cm ほどの一木をくりぬいてつくり，その上に蓋をのせて暗渠としたものである。暗渠の内法は幅 12 cm，深さ 10 cm 前後で，入口の木口端は 7 cm ほどほり残して貫通させない形で，従って水の導入は排水木樋 SX1464 同様に上面すなわち蓋に穴をあけて導水していたものと考えられる。蓋は残存状況が良くないが，幅 16 cm ほど厚さ 10 cm 前後である。木樋の上面木口に３個所ほど枘穴の痕跡がみられるので，おそらく SX1464 同様太枘により組み合わせたものであろう。材種は檜である。木樋の出口は石組壙 SX1524 の中に注ぎ込むが，石組の中へ入る部分は開渠となっている。出口と入口の比高差は木樋の底で 4. 6 cm ほどで勾配は約 1/160 である。木樋先端から内側に 25 cm の位置で木樋中心線より東西対称に 52 cm (2. 5 m 間隔で１本ずつ２本の柱) 離れた位置に，各 15×12 cm の角柱がある。木樋が暗渠であることや，上部から導水するため，木樋蓋導入口より上に管が延び，その上に給水のための桝，または甕があってそれを支えるもののような，何等かの導水に関連する施設の痕跡と考えられるがその詳細は不明である。この木樋のための掘方は検出されないので，流路廃絶後の旧河川の肩を埋め立てた整地工事と同時に布設が行われたと推定できる。

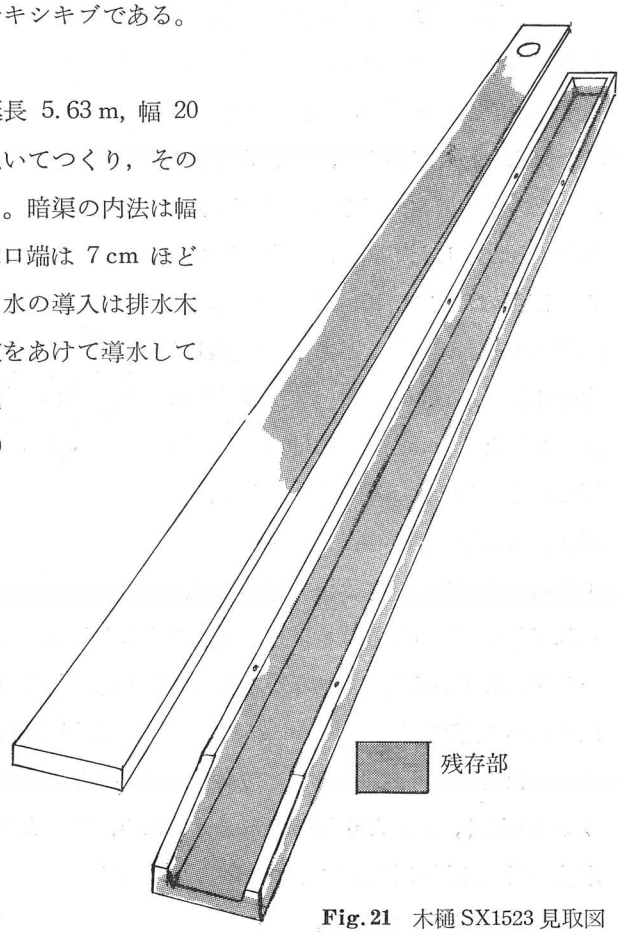


Fig. 21 木樋 SX1523 見取図

SX1464 (PLAN 6；PL. 10)

池尻から SD1466 の排水溝に水を流す木樋で，２本をつないでいる。上流部の木樋は長さ 197 cm，幅 21 cm，厚さ 16 cm の一木をくりぬいたもので，木樋内法は幅 12 cm，深さ 7 cm，導入部の木口は上端から 3 cm の厚さで幅 11 cm にわたって切り込みがあり，埋

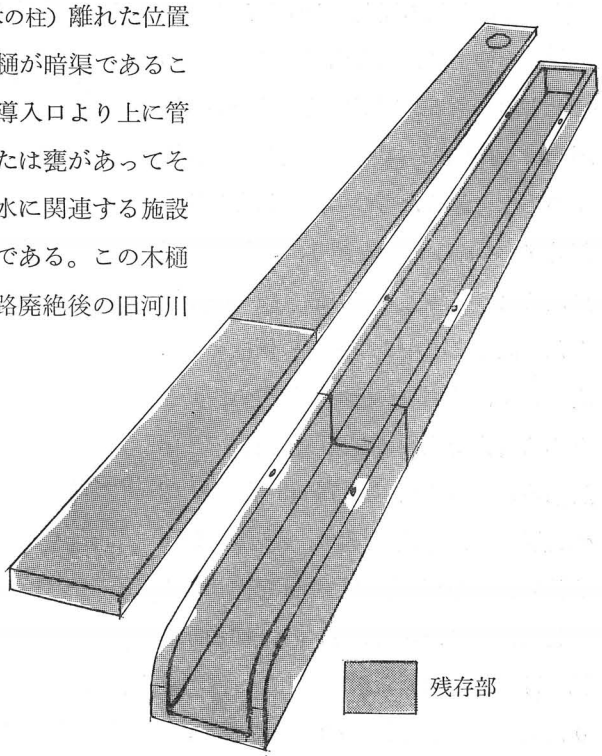


Fig. 22 木樋 SX1464 見取図

木がされている。木口から 52 cm の位置と 153 cm の位置の両側の天端に，長さ 4.5 cm，幅 2 cm，深さ 4 cm の蓋板と合わせる枘穴を掘っている。また排水側の木口は直に仕上げず，木口から 8 cm の範囲で円弧を描くよう上面を落としている。蓋は長さ 188 cm，幅 20 cm，厚さ 6 cm で，導入木口から 20 cm の位置に，排水のための長径 14 cm，短径 12 cm の楕円形の穴が開いている。蓋にも同位置に枘穴が開いており，木樋と太枘で組合わせる形で，蓋は先端より 8 cm の位置すなわち側板が弧を描きはじめる所までかかることになる。下流部の木樋は長さ 73 cm，幅 19 cm，厚さ 14 cm の一木をくりぬいたもので，木樋の内法は，幅 10 cm，深さ 10 cm，導入側の木口は直に上流部の木樋とつながるが，下流部は上流木樋同様，長さ 5 cm の範囲で弧を描くように上面を落としている。木口から 27.5 cm の位置に側板両側に上流部と同寸法の枘穴がある。蓋は長さ 74 cm，幅 18 cm，厚さ 6 cm で木樋と合う太枘穴があり，太枘（6.5 cm×4.5 cm×1.5 cm）が残存している。蓋板の先端は導入部の末端の弧の部分にかかる形に斜めに削られており，末端は弧の部分を含んで 7 cm の範囲に蓋板がかからず開渠となり排水溝 SD1466 に流れ込む。上流部の木樋と下流部の木樋は規模が異なるため，つなぎ部分の木樋の底と蓋の天端で 2 cm の段差ができる。排水木樋全体の勾配は 1/150 ほどである。木樋の材質は檜で蓋は杉が使われている。

SX1524 (PLAN 6；PL.12)

池の北端部にある石組壙で，導水木樋 SX1523 により導かれた水が流入する所である。東西 5 m，南北 1.5 m の長楕円状を呈し，周辺を一部欠損している個所もあるが，径 50 cm 前後の花崗岩，片麻岩，三笠安山岩などの景石を立てている。立石は北，東，西は土留めの機能をも果たしているが，南側にも立石が回り，水を滞水させる機能をもつものと考えられる。立石の内側は残存状況は良くないが，径 20 cm 前後の玉石が平坦に敷かれており，水を一旦滞水させ，南側の立石の間から上水を池へ導水する浄水的な機能を持っていたと考えられる。貯水の深さは導水木樋の流入口の高さや立石の高さを考えると 10 cm 前後の浅いものである。

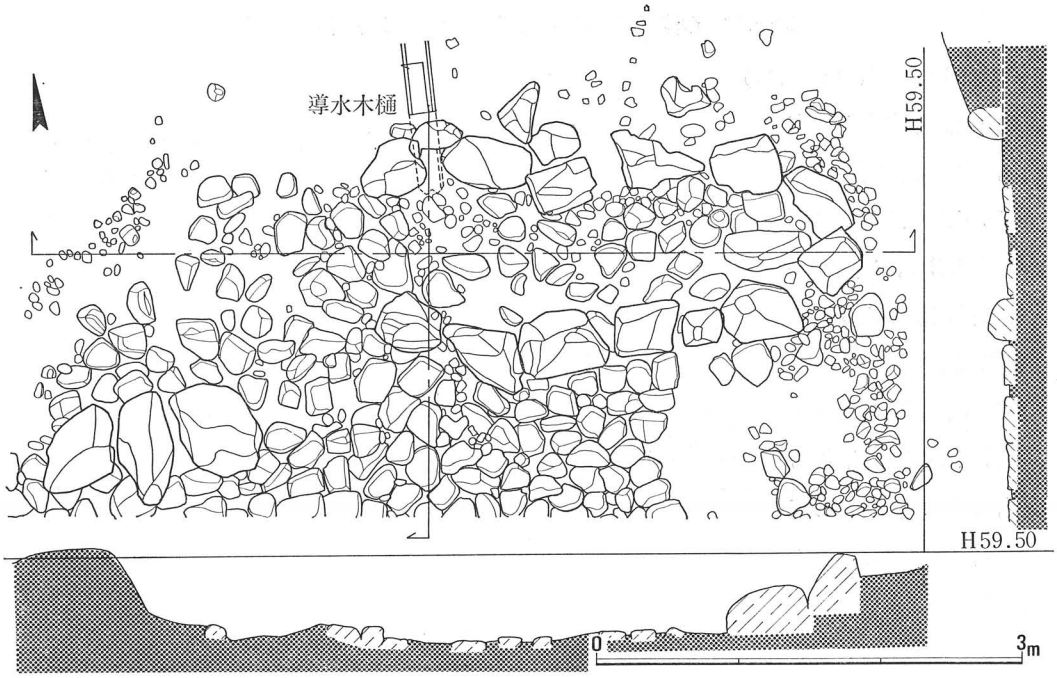


Fig. 23 SX1524 平面・断面図

SD1465 (PLAN 6)

池尻から排水溝 SD1466 に連なる溝で，残存状況が悪く明確でないが，残存する石敷の状況により SD1466 に向って段状に石敷を設け，石敷中央部が一段凹んで溢流する水が排水路 SD1466 に流入していたものと考えられる。

SD1466 (PLAN 6 ; PL. 5) *

溢流溝 SD1465 と排水木樋 SX1464 が流れ込む排水路で，東西幅 2.5 m，南北は 8 m 以上，発掘区域外に延びる。両側に 20～30 cm の玉石一列を並べて土留とし，溝底は中凹み状となり，深さ 50 cm ほどである。底は石張りなどはなく粘土のままで，現在検出している範囲の勾配は約 1/80 である。北側は幅 5 m ほどの石張りを施し，木樋出口は土留のために 2～3 段石積をしている。 *

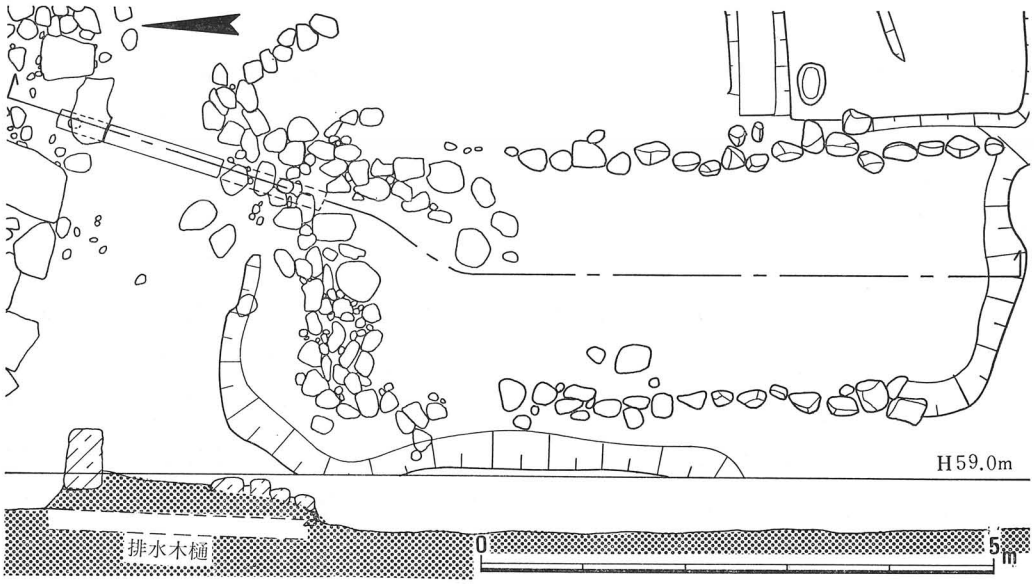


Fig. 24 溢流溝 SD1465・排水溝 SD1466 平面・断面図

SX1468 (PLAN 6 ; PL. 13)

園池西岸中央より南で，水際の立石が岸に向って入り込む所にある幅 1.2 m，奥行 3.5 m の長円状の入り込みである。径 20 cm の立石が縁石として一部抜けている所もあるが，四周に留石としてあり，岸に向って段々高く緩勾配 (2°38′) に沿って据えられている。内部は石敷が欠損したのか，もともと石敷がなかったのか定かでない。池水の水位より奥

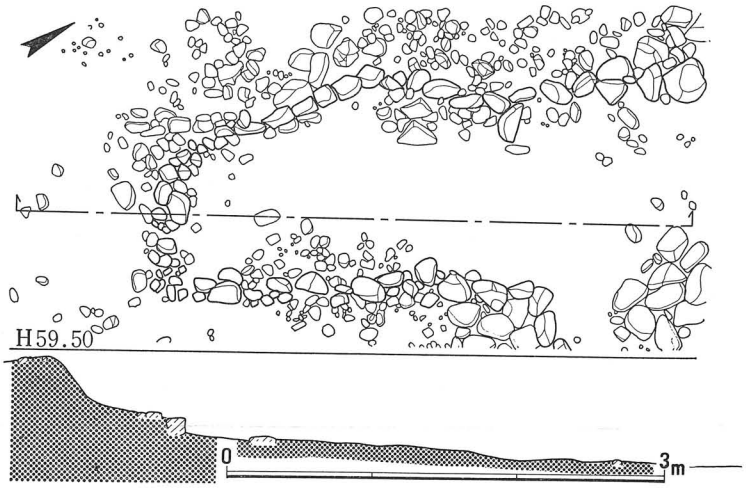


Fig. 25 SX1468 平面・断面図

行 2.5 m まで水が満ちることになり，舟入り状の施設とも考えられるが，水深 10 cm 程度と浅いため実用にはならない。

SX1461 (PLAN 6 ; PL. 14)

園池東岸南寄りにある水際の立石より東の岸辺で，幅 2 m，奥行 3 m の長楕円状の張り出しである。立石に接して幅 60 cm ほどは 20 cm 内外の扁平な玉石が緩勾配（8°45′）に3列並びその外側に同様の勾配で礫が敷かれている。礫敷の北側には幅 30 cm ほどの石が4個縁石状に並ぶ。礫敷の留めのために全周に据えられていた可能性もある。機能的なものより意匠的な要素が強い。

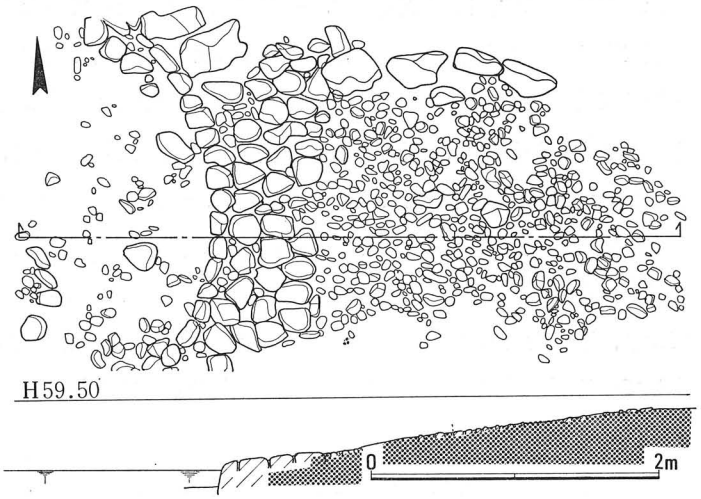


Fig. 26 SX1461 平面・断面図

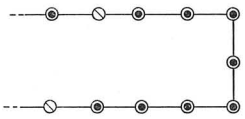
D　D期（奈良時代後半）の遺構

SA1473 (PLAN 3 ; PL. 5)

発掘区南辺で検出した東西塀。東は園池の排水路 SD1466 の西，SB1470 の東側柱筋を南に延長した位置から始まり，西は発掘区の外へ続く。10間分，29. 8 m を検出した。柱間は10尺等間である。東から10番目の柱抜取り穴から，軒平瓦6663型式が出土している。SB1540・SB1470と同時期の造営と推定され，SA1500・SA1455 と一連となり，園池を含んだ南北約 42 m（140尺）の区画を形成する。柱掘形は一辺 70～90 cm の略方形を呈し，径 30 cm 前後の柱痕跡あるいは柱抜取り穴を伴う。

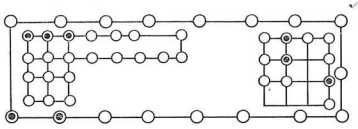
SB1574 (PLAN 2 ; PL. 6)

SB1570・SB1571 の南で検出した桁行5間以上（4間分 12. 0 m，10尺等間），梁間2間（6. 0 m，10尺等間）の東西棟掘立柱建物。方位はほぼ方眼に合う。柱掘形は一辺 1. 0～1. 2 m の略方形で，柱痕跡の径は 30～40 cm と大きく，これも一時期の中心的な殿舎となり得る遺構である。礎石建物 SB1540 の東側柱筋と，東妻柱妻を一致させており，同時期と推定される。桁行の規模を確定し得ないのが難であるが，SB1540を主殿（寝殿）とし，園池の位置する東を正面とすると，本遺構は寝殿に対して北の対屋たり得る位置にはあるが，そのように比定するにはなお問題も多い。



SB1552 (PLAN 2. 4 ; PL. 7)

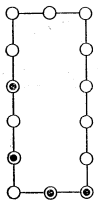
発掘区北端で検出した桁行7間（21. 0 m，10尺等間），梁間2間（6. 0 m，10尺等間）の東西棟掘立柱建物。建物内部は東に東西3間（4. 4 m），南北3間（4. 4 m）総柱。西には東西2



間(2.7 m)，南北3間(4.4 m) 総柱の北方東側に東西5間(7.4 m)，南北1間(1.5 m) の細長いつの状の張出しのつく遺構である。桁行の中央間の棟通り東側には長径 60 cm ほどの平坦な石を据え，西側にはそれを抜き取ったと思われる穴があって，東西各3間と中央間が区画されていた可能性を示す。内部の遺構は，一部が床張りとなっていたと思われるが，あるいは棚状の施設である可能性もある。いずれにせよこのように長大で左右対称に近い平面は，内部施設とあわせて特殊な性格の建物と推定される。中央間を吹き抜けの馬道と仮定すれば双倉に類するものかとも思われるが，西方から張り出す内部施設があるので，なお性格は確定し難い（ここでは倉に類する施設と推定しておく)。柱掘形は一辺 70～80 cm の方形を基本とするが，多くは抜取り穴と重複していて原型を明確に留めない。内部施設の柱掘形は径 40 cm 前後の略円形を呈し，柱痕跡は径約 15 cm である。本体の柱抜取り穴から平城宮Ⅳ期以降の土器が出土しており，下限をそのころに置き得る。また，内部施設の柱掘形からは奈良時代後半の土器が出土しているが，特に建物本体との時期差をもつものではない。

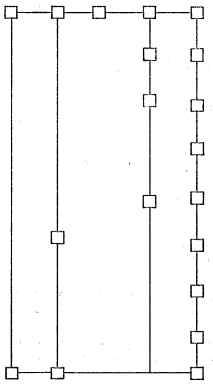
SB1470 (PLAN 6；PL.7)

園池南半の西岸近くで検出した桁行5間 (12.0 m，8尺等間)，梁間2間 (4.8 m，8尺等間) の南北棟掘立柱建物。方位は北で方眼よりわずかに西へ振れる。北妻柱筋は，北西の礎石建物 SB1540 の復原南妻柱筋とほぼ合致し，また東側柱筋は南の東西塀 SA1473 の東端と一致することから，三者は同一の計画になったと推定される。すなわち SB1470 は主殿 SB1540 に対して，約40尺をへだてて南の汀近くに建てられた園池鑑賞，ないしは園池に関連した行事（宴遊など）のための建物と考えられる。園池はこの建物の正面で屈曲して汀が半島状に突き出す形となり，その上面のバラス敷は幅約 1 m の道路状となってこの建物の中央間付近にまで及ぶ。また，半島状の汀の北根元付近には舟入状の施設 SX1468 が位置しており，この建物の園池との密接な関連を示す。西方の SB1471 とは柱穴の重複があってより古いことを知り，SB1472 とも重複し，やはりより古いと推定される。柱掘形は一片 70～100 cm のほぼ方形を呈し，柱痕跡は径 15～20 cm ほどである。



SB1540 (PLAN 3；PL.6)

園池の西方，発掘区の西端で検出された桁行8間，梁間2間，東西両庇付，南北棟礎石建物。桁行総長 24.0 m(10尺等間)，梁間総長 12.0 m (10尺等間) の長大な規模を持つ。あるいは低い基壇上に建っていた可能性もあるが基壇痕跡は残らない。削平されて遺存状況が悪く，かろうじて十数個所で礎石の根石ないしはその据付け穴，あるいは抜取り穴を検出し，柱位置を推定した。ある時期の園池を中心とした区画の主殿に比定される。園池北を東西に区画する塀 SA1500 と北妻柱筋をそろえ，塀が建物にとりつく形となっており，建物自体が園池周囲を区画する役割りをも果している。したがって東の南北塀 SA1536 との共存は疑問である。一方北方の建物 SB1574 の東妻柱筋と，本建物の東側柱筋は一致しており，柱間寸法が同一であることからも同じ時期の可能性が高い。また SB1542 と重複しており，それより新しいことが知られる。



SK1516 (PLAN 3)

発掘区西南隅で検出した土壙。SA1473 の南に位置し，平面は径 1.5 m のほぼ円形を呈し，深さは 0.8 m。瓦片が多数出土した。奈良時代に属する廃棄壙と目されるが，時期区分は不明である。

＊ **SE1511** (PLAN 3)

発掘区南端，中央やや西で検出した素掘りの井戸。南部は発掘区の外になる。平面はゆがんだ円形を呈し遺構面での東西方向の径は約 2.6 m，底ではややすぼまり約 2 m である。深さは約 1.7 m で，埋土は6層に分かれ，最下層から，面戸瓦片，土器片などが出土している。奈良時代に属し，この地区の性格上SA1473造営後のものと推測される。

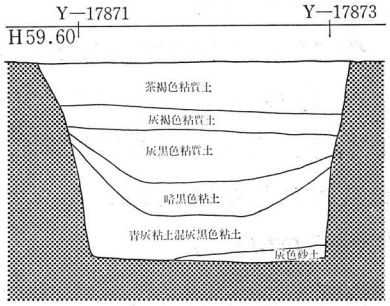


Fig. 27 井戸 SE1511 断面図

SD1479 (PLAN 5)

SD1477 の西に並行する南北溝。SB1476 の西南隅の柱掘形と重複しており，より古いことを知る。検出長約 1.5 m，，幅約 30 cm，深さ約 5 cm で南は発掘区の外に延びる。時期は園池と同時の可能性があるが，性格は不明である。

SD1486・SD1487 (PLAN 5)

発掘区東端，SB1476 の北方で検出したL字形の溝。西半は東西溝 SD1486，東半は南北溝 SD1487 で，北端は発掘区の外に延びる。SD1501・SD1499 と重複し，それらより新しい。SB1476 の北約 5 m の地点でほぼ直角に西に折れて SA1483 付近にまで及ぶ。南北部分約 4.5 m，東西部分約 7 m を検出し，幅 20～30 cm，深さ 5～10 cm である。埋土には顕著な遺物を含まない。性格は不明であるが，発掘区外園池東方の何らかの地割りに関連するものと推定される。

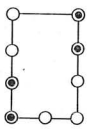
E　E期（奈良代時末～平安時代初頭）の遺構

＊ **SA1483** (PLAN 5)

SA1455 に重複する南北塀。4 間分（8.4 m）を検出したがさらに南へ延びる可能性がある。柱間は 7 尺等間と推定されるが，北から 2 間目はややせまく，ばらつきがある。4 間で終るとすれば，SB1476 に伴なう目隠し塀に比定し得るが，なお断定し得ない。柱掘形は径 40 cm ほどの不整形で柱痕跡も径 10～15 cm と小さい。SA1455 の柱掘形とわずかに重複がみられ，より新しいことを知る。

SB1471 (PLAN 3；PL. 7)

SB1470 の西に接する位置にある。桁行 3 間（4.8m，16/3 尺等間），梁間 2 間（3.6 m，6 尺等間）の南北棟掘立柱建物。SB1470 より新しく，位置からも園池終末期の建物と推定される。方位は北で方眼よりわずかに西に振れる。柱掘形は一辺約 40 cm の略方形と小さく，柱痕跡は径約 20 cm である。

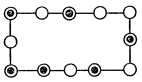


SB1472 (PLAN 3；PL. 7)

SB1470 の西南に接する位置にある桁行 3 間（6.7 m，7.5尺等間），梁間 2 間（4.4

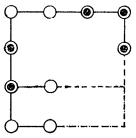
m, 7.5尺等間）の南北棟掘立柱建物。SB1470 と重複し，また SA1473 とも約 1 m の間隔しかなく，共存の可能性は低い。柱掘形から平安時代の遺物が出土しており，SB1471 同様，園池終末期の建築と推定される。SB1471 とは西側柱筋をほぼそろえるが，共存関係は不明である。柱掘形は一辺 50～70 cm の略方形，柱痕跡は径約 20 cm である。

SB1985 (PLAN 4) *



発掘区の東北隅で検出された桁行 4 間（7.8 m, 6.5尺等間），梁間 2 間（3.6 m, 6 尺等間）の東西棟掘立柱建物。方位は北でやや東に振れる。SB1552 より新しく，築地南落溝である SD1545 にも近接しすぎるきらいがあり，平安時代に属する遺構と推定された。

SB1476 (PLAN 5) *



園池の東方を画する塀 SA1483 よりさらに東に位置する。桁行 3 間（7.3 m, 8 尺等間），梁間 2 間（4.8 m, 8 尺等間），南片庇付（庇の出 2.4 m, 8 尺）の東西棟掘立柱建物。方位は北北東にやや振れており，東南部分は発掘区の外になる。約20尺をへだてて西に眼隠し状の南北塀 SA1483 を伴なうと推定されるが，SA1483 は SA1455 と重複しておりかつ新しく，また，本建物の柱痕跡から平城宮 *
Ⅲ～Ⅴの時期の土器が出土していることから，SA1455 以降ないしはさらに園池終末期に位置付けられる。柱掘形は一辺 40～60 cm の略方形，柱痕跡は径 15～20 cm である。

SD1475 (PLAN 5)

発掘区東端，SB1476 の東 3.5 m で検出した南北溝。幅約 3 m の東西拡張区の南北にわたって検出され，南北とも発掘区外へ延びる。幅約 60～80 cm，深さ約 10 cm。埋土には遺物を *
含まない。SD1480 よりも新しく，SB1476 に関連する可能性を持つ。

F　京廃絶後およびその他の遺構

SD1452 (PLAN 5)

発掘区東南隅，東端で検出された南北溝。SD1453 に流れこむ溝と推定される。遺物は出土しない。検出長さ約 1.5 m，幅約 30 cm，深さ 5 cm である。 *

SD1454 (PLAN 5)

SD1453 に連なる南北溝の一部。約 1.1 m の長さを検出したに留まる。幅約 30 cm，深さ 5 cm である。その位置から SA1455 に関連するものかとも考えられるが定かでない。

SX1460 (PLAN 6)

発掘区南端，園池排水溝 SD1466 の東岸で検出した柱掘形。南北約 60 cm，東西約 40 cm の *
長円形を呈し，径 25 cm の柱痕跡及び柱根の一部を留める。発掘区内では独立しており，関連する柱穴類が求められず，性格は不明である。

SK1474 (PLAN 5)

発掘区東の拡張区の東端で検出した土壙。東西を長径とし 2.0 m，短径 1.4 m の長円形を呈する。遺物は少なく，時期・性格ともに不明である。 *

SK1481 (PLAN 5)

発掘区東部張出し部分，SB1476 北西で検出された土壙。平面は東西 2.0 m，南北 1.8 m の

不整形で，深さ約 45 cm，すりばち状にくぼむ。遺物少なく，時期・性格共に不明である。

SK1506 (PLAN 6)

SB1505 に重複する土壙群。SB1505 の内部から西側柱筋にかけて 9 個の土壙が集中して検出され，そのうちいくつかは，相互に重複するが，いずれも建物の柱掘形より新しく，建物と直接関係のない後世のものである。

SX1513 (PLAN 3)

発掘区西南隅，SB1510 の西方に散在する土壙群。形は不整形で一定しない。いずれも近世以降のものである。

SK1534 (PLAN 6)

SA1500 の南，SB1505 と SA1536 の中間で検出された土壙。西部が土層観察用の畔の下となって平面の全形は明らかでないが，おおむね一辺 1.8 m の略方形である。深さは約 15 cm である。遺物の出土は少ない。SD1532 の西南端で重複し，それより新しい。

SD1555 (PLAN 4)

発掘区中央北端，SB1552 の西方の柱筋に重複する南北溝。部分的に削平を受けており浅く，幅 25～40 cm，長さ約 6.5 m にわたって検出した。SB1552 より古い時期の溝であるが，遺物の出土はなく性格は不明である。

SD1477 (PLAN 5)

SB1476 の西南で検出された南北溝。埋土に遺物を含まず，時期及び性格は推定し難いが，園池造営以前の一連の東西溝よりも新しい。幅は約 30 cm，長さ 2 m にわたって検出し，深さは約 5 m で南は発掘区の外に延びる。

SD1531 (PLAN 4)

SB1573 東の東西溝。西端は SD1532 と重複し，より新しい。検出長さ約 3 m，幅約 40 cm，深さ約 20 cm である。遺物の出土は少ない。

SD1548 (PLAN 4)

発掘区中央北方，旧流路 SD1525 の屈曲点と SE1547 の間に位置する東西溝。幅 1.0～1.2 m，深さ 20～30 cm で，西方はさらに延びて，井戸 SE1547 の西の溝に連なるものと推定される。

SA1554 (PLAN 4)

発掘区北端に近く，SB1552 の内に収まるように重複する東西塀。SB1552 とは無関係の遺構と推定される。

SX1558 (PLAN 4)

発掘区北端，SB1552 の東半北方で東西に検出した 2 個の柱掘形。掘形はいずれも径 50 cm ほどの不整円形を呈し，内に径約 15 cm の柱痕跡を留める。柱間は 4.3 m，築地南側溝比定の SD1545 との距離は約 1.2 m である。柱痕跡を持つ掘形でありながら他にここれと対になるものが見出されないことや，その位置から，坪の北西に開く門となる可能性があり得よう。宮内外ではこれに類する遺構の発見例がある。ただし前後の控柱の柱掘形は発見されないので，棟門か屋根のない冠木門が想定されよう。また，門に連なる築地あるいは塀に類する遺構は見出されていない。

第Ⅳ章　遺　　物

1　木　　簡

宮跡庭園遺跡の発掘調査で出土した木簡の総点数は102点である。その内訳は，1975年の調査（第96次調査）において，予備調査で14点，本調査で50点出土し，また1980年の調査（第121次調査）では38点出土している。木簡の出土遺構は，いずれの調査とも同一遺構の水路からで＊
あるが，その遺構を1975年調査の概報『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』（1976．3刊）および1980年調査の概報『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』（1980．3刊）では，発掘区外東方を南流する菰川より園池SG1504への導水路にあたる流路SD1525であると理解していた。ところが，それ以後の園池整備関連調査（1984．2）により，この流路SD1525は園池への導水路ではなく，園池SG1504が奈良時代後期に造営されるときには，すでに廃絶され埋＊
め立てられていたことが判明した。すなわち園池SG1504は，流路SD1525の堆積土上層の暗灰色粘土上面に石張りを施し，池周辺は茶褐色粘質土による整地を行なって造成されていることが確認された。平城京造営以前には，この地区には河川SD1560が南流していたが，そのSD1560がほぼ埋った状態になっていたのを，奈良時代に入ってSD1560の堆積土を切って，流路SD1525が設けられたごとくで，木簡はすべてその流路SD1525の堆積土下層から出土し＊
ている。出土地点は，流路SD1525の上流から，1975年予備調査，1980年調査，1975年本調査となるが，1975年本調査部分が位置的にいえば，園池造成のとき園池に導水するために設けられた木樋への注水部分の直ぐ北にあたり，その位置で流路SD1525は蛇行していたようで，多量の加工木片や自然木片が堆積し，木簡も比較的まとまって出土している。出土層位は堆積土下層で，おおむね砂を混じえる暗灰色粘質土層であるが，底近くの灰黒色粘土からも出土している。＊

以下，出土木簡の主要なものについて述べる。なお各木簡の釈文の右端にある数字は，木簡の寸法（縦×横幅×厚さ　単位mmで，括弧を付してあるのは木簡が欠損していることを示す），および木簡の型式番号である[1]。なお，木簡番号に＊を付してあるものは第121次調査出土，それ以外は第96次調査出土木簡である。

出土木簡のうち削屑は5点と比較的少ない。年紀のある木簡は習書も含めて4点で，和銅3＊
年（15），5年（13），7年（21・27）と和銅年間に限られ，また荷札などにみられる地名表記等の点からいっても，木簡はおおむね和銅頃のものと考えられる。

文書木簡では，米の進上・支給などにかかわるもの（1・2・3・9・10）が比較的多く，断片ではあるが万葉仮名を使用しているものもある（5・7）。また，貢進物荷札では，若狭（調塩，

1）木簡の形態分類は15型式に分けられる。主なものとして6011型式：長方形の材，6019型式：一端が方頭で，他端は欠損にて原形不明のもの，6031型式：長方形の材の両端の左右に切り込みを入れたもの，6032型式：長方形の材の一端の左右に切り込みを入れたもの，6033型式：長方形の材の一端の左右に切り込みを入れ，他端を尖らせたもの，6039型式：長方形の材の一端に切り込みがあるが，他端は欠損により原形不明のもの，6065型式：用途未詳の木製品に墨書のあるもの，6081型式：欠損により原形不明のもの，6091型式：削屑，などがある。詳しくは『平城宮木簡四　解説』を参照されたい。

13）や遠江（14）・阿波（16）のものがみられるほか，里名・人名のみのものが多い。なかでも注目されるのは，北宮と記載のある俵の荷札（11・12）で，北宮への用物の荷札であろうが，充先を北宮に限定している点でとくに注目される。北宮との関係で，習書ではあるが長屋王願経（和銅経）に関連するかと思われる木簡（25）や，また「封」の文字のある木簡（23）
＊もその用法に関心がもたれる。木簡記載の用語に「御坏物」とみえ，北宮や「竹野王子」と記す木簡（２）があり，官職名を記すものでは，断片ではあるが中務省がみられ（24），また墨書土器に「侍従」「宮」があるなど，この遺跡と天皇家とのつながりを感じさせる。

SD1525 出土木簡

木簡　1（PL. 16）　・御坏物直米二升充奉
＊　　・受古女　九月三日[椋垣忌寸]　　（160）×20×3　6019型式

上端は折損，その他は原形を残す。材の中央，下端近くに小孔を穿つ。「御坏物」は坏に盛った食物を尊んでいう場合の語句で，『播磨国風土記』賀古郡条に「又，江の魚を捕りて，御坏物と為しき」とあり，天皇の御坏に盛られた食物の意味である。御坏物の代米二升を充当したことを示す文書木簡である。椋垣忌寸については『続日本紀』和銅２年（709）正月に「正
＊六位下椋垣忌寸子人」，また和銅６年４月に「従五位下倉垣忌寸子首」などがみえるが，椋垣忌寸子人は，慶雲４年（707）２月には「主税寮助従六位上椋垣直子人賜連姓」とあることにより，慶雲４年から和銅２年の間に連姓から忌寸姓になったことがしられ，この木簡もその賜姓以後となる。なお，『新撰姓氏録』にはその逸文（右京諸蕃坂上大宿禰条逸文）に「蔵垣忌寸」とみえる（佐伯有清『新撰姓氏録の研究　本文篇』p. 360）。ヒノキ・板目材。

＊木簡　2＊（PL. 16）　・竹野王子大許進米三升[受稲積]
　　・　　六日百嶋　　183×23×9　6011型式

四辺は整形面を残し，原形を保つ。下端近くに小孔を穿つ。竹野王子の許へ米三升を進上することに関する文書木簡。「稲積」は米を受取る人物か。裏面の日付と人名「百嶋」は，米を進上した日とその担当者であろう。大許の「大」は尊敬の意を示す。竹野王子は，明日香村高
＊淵の龍福寺蔵の石造層塔の銘文にみえる「従二位竹野王」と同一の人物であろうか（『寧楽遺文　下』p. 971）。銘文は損傷が著しく，ほとんど判読しがたいが，銘文末尾の年紀部分により（『明日香村史上巻』p. 615, 621）石塔は，天平勝宝３年（751）４月に竹野王により建立されたとされる。なお，竹野王は聖武天皇の時代に非参議であったことが，『公卿補任』『一代要記』にみえる。すなわち『公卿補任』では，天智天皇10年（671）に生まれ，天平16年（744）従三
＊位非参議，天平21年正三位になり，天平宝字２年（758）に「至于今年補任不詳　薨歟」とあり，また『一代要記』でも竹野王は従三位とみえる。そこで官位の点からみて，石塔銘文の竹野王は天平勝宝３年正月に従二位に叙された竹野女王とみる見解もある（『明日香村史　上巻』p. 157）。ヒノキ・柾目材。

木簡　3（PL. 16）　・符□□□　片岡部[充カ]□三月□□□□　□□
＊　　・弐斛陸斗伍升□□　□[受カ]長□□□古万呂　　160×（19）×3　6081型式

左辺は割られているが，その他は原形をとどむ。「符」形式の文書木簡。某官司から，所轄

官司又は官人へ食料（米か）の支給を命じたもの。「古万呂」は担当者名。類似の用例として，平城宮木簡2775号（『平城宮木簡二』）があげられる。ヒノキ・斜柾目材。

木簡　4（PL.16）　・山田□　□□□目□　□　□

・右件□　□　□　□月十五□使　（236）×21×5　6019型式

下端は折れ，その他は原形を残す。表裏とも材の腐蝕が著しい。文書木簡。ヒノキ・板目材。　*

木簡　5*（PL.16）　御帳□辛櫃入奈加良進出　（124）×29×3　6081型式

上下端は折損，左右辺は整形面を残す。「奈加良」は万葉仮名。辛櫃に入れられた御帳を進納した文書木簡。ヒノキ・板目材。

木簡　6（PL.16）　海上婇□□□　（78）×（18）×2　6081型式

上端は円弧に削り，右辺は削りにて調整。左辺は割れ，下端は折れにて欠損。上総あるいは下総の海上郡出身の采女に関する木簡。采女は，郡単位で，郡少領以上の姉妹や女で形容端正なものが貢進され，後宮の水司（６人），膳司（60人）などに配属された（後宮職員令）ほか，縫司や縫殿寮に配属されたものもあった。奈良時代においては采女の称呼法は国名は省略することはあっても，郡名だけは省略せず采女に付すのが原則であったとされる（磯貝正義『郡司及び采女制度の研究。p.186）。ヒノキ・柾目材。　*

木簡　7*（PL.16）　・売斐

・止為故長　（52）×24×2　6019型式

上端・左右辺は原形を残すが，下端は折損。文書木簡の冒頭にあたるか。「止」は万葉仮名。ヒノキ・斜柾目材。

木簡　8*（PL.16）　□後又意富□□〔奉カ〕□　（197）×24×5　6081型式　*

左右辺は整形面を残すが，上下端は折れにて欠損。文書木簡。ヒノキ・柾目材。

木簡　9*（PL.19）　・従二升□□□升□□□三升□□四升半

・右一斗五升　四月廿三日　□末呂　261×44×4　6011型式

四辺に整形面を残す。下辺に小孔を穿つ。米の支給に関する文書木簡。「右一斗五升」は米の総計を示し，また末尾に支給日および支給担当者を記すか。ヒノキ・板目材。　*

木簡 10*（PL.18）　・四月十四日紀□□〔若カ〕進米二升

・　□　185×18×4　6011型式

完型。米二升進上に関する文書木簡。ヒノキ・柾目材。

木簡 11（PL.17）　・鴨郡□

・北宮俵□　（86）×19×4　6039型式　*

下端は折損，上端・左右辺は原形を保つ。上部は圭頭状。某国鴨郡から北宮へ用物の俵を貢進したときの荷札。俵とあることからみて穀物か。鴨郡（賀茂郡）は参河・伊豆・美濃・佐渡・播磨・安芸の諸国にみえる。ヒノキ・板目材。

北宮は，和銅５年（712）の長屋王願経（滋賀・太平寺等に分蔵）の奥書に，

「藤原宮御寓　天皇以慶雲四年六月十五日登遐三光慘然四海遏密長屋殿下地極天倫情深福報
乃為　天皇敬写大般若経六百巻用尽酸割之誠焉
和銅五年歳次壬子十一月十五日庚辰竟
用紙一十七張　　北宮　　」

＊ とみえる。この長屋王願経（和銅経）は，当時従三位式部卿であった長屋王が，室吉備内親王の兄にあたる文武天皇の崩御を悼んで，その追善のために発願したもので，ここにみえる北宮は吉備内親王の宮といわれ（岸俊男「〝嶋〟雑考」），そこで大般若経600巻の書写が行なわれたものであろう。慶雲末年から書写が開始されていれば，この北宮は藤原京所在となり，また和銅5年直前に書写されたものとすれば平城京所在となる。

＊ なお，神亀3年（726）の山背国愛宕郡出雲郷雲下里計帳（大日本古文書　編年1—p.364）に北宮帳内として，同里から出仕したもののいることがしられ，平城宮の時代にも北宮が存在していたことが確認できる。

木簡 12＊（PL. 17）　・阿須波里□□
・北宮御物俵□□　　（87）×23×4　6039型式

＊ 左右辺・上端は整形面を残す。下端は折損。11と同じく，北宮への貢進物につけられた荷札。阿須波里は，『和名鈔』では越前国足羽郡，越後国沼垂郡にみえる。

11・12はともに鴨郡や阿須波里から北宮への貢進物の荷札であるが，いわゆる調庸の荷札とは記載書式が異なり，国名の記載を欠くことや，充先を北宮に限定し，「御物」との表記を使っている点など注目される。スギ・板目材。

＊ 木簡 13（PL. 17）　・若□国小丹生郡野里中臣部乎万呂御調塩三斗
・和銅五年十月　　172×21×5　6031型式

上端切り込み部分の右端を欠くほかは完形。墨痕は非常に薄い。若狭国からの調塩の貢進物荷札。遠敷郡野郷野里からの調三斗（品名記載はないが，同じく塩か）の荷札が，平城宮木簡347号（『平城宮木簡一』）にもある。和銅6年（713）5月の「畿内七道諸国の郡郷名には好き字を著けよ」との制の直前にあたり，「小丹生郡」の表記は今のところ唯一の例である。スギ・柾目材。

＊

木簡 14＊（PL. 17）　・遠江国石田郡□□　□□万呂
・五斗　　122×17×5　6033型式

完形。遠江国石田（磐田）郡からの貢進物荷札。五斗とあることからみて白米の付札と考えられるが（『平城宮木簡一　解説』p.59），遠江国は延喜民部式の年料舂米輸貢国のなかにはみえない。ヒノキ・板目材。

＊

木簡 15＊（PL. 17）　・和銅三年四月十日阿刀
・部志祁太女舂米　　109×20×3　6032型式

左右辺・上端は整形面を残す。下端は刃物により表面から切断されているが，完型とすべきか。舂米につけられた付札。書き出しに年紀をかく例は，藤原宮出土木簡にみられ，時代的に

＊

は大宝３年（703）以前に限られており，和銅に降る例はこれが初めてである。阿刀部は摂津・伊勢・美濃等の諸国にみえる。スギ・板目材。

木簡 16（PL. 17）　阿波国長郡坂野里百済部伎弥麻呂　（188）×16×４　6039型式

左右辺は整形面を残す。上端に切り込みがあり，一部に原形をとどむ。下端は欠損。貢進物付札，裏面に墨書なし。『和名鈔』には阿波国那賀郡坂野郷がみえる。郡里制下の木簡であり，その上地名表記に長郡とあることからみて，和銅６年（713）以前の木簡といえる。ヒノキ・板目材。 *

百済部については，平安時代の史料においてではあるが，『日本後紀』弘仁２年（811）４月に「阿波国人百済部広浜等一百人賜姓百済公」とみえ，阿波国における百済部の存在がしられる。ヒノキ・板目材。 *

木簡 17（PL. 17）　田寸里日下部否身五斗　164×23×４　6033型式

上端右の切り込み部分を欠くほかは，整形面を保つ。裏面には文字はない。里名・人名・五斗とあるのみ。14と同じく白米の荷札か。田寸里については未詳。「寸」を異体字とすれば，田村里の可能性もあろうか。とすれば，平城京域に京造営以前に所在した里の可能性もあるか。スギ・板目材。 *

木簡 18（PL. 17）　各田（額）部里□古部建　176×18×３　6033型式

上端切り込み部分欠損，その他は原形を保つ。裏面に墨痕なし。里名と人名のみの貢進物付札。『和名鈔』では額田部郷は，上総国周准郡，上野国甘楽郡，額部郷は備中国哲多郡，長門国豊浦郡などにみえる。「□古部」は墨痕からみると「跡古部」か。ヒノキ・板目材。

木簡 19*（PL. 17）　田官里俵　142×19×２　6032型式 *

上端・左右辺は整形面を残す。下端は切断されている。俵とあることからみて，穀物の貢進物付札か。「田官里」は『和名鈔』等にはみえない。ヒノキ・板目材。

木簡 20（PL. 17）　・□（烈カ）里庸□部（射）□手
・□　□　143×（９）×５　6039型式

上端は圭頭につくる。下端・左辺は整形面を残すが，右半部は割截されて欠損。貢進物付札で，里の下の文字は人名と考えられる。ヒノキ・板目材。 *

木簡 21（PL. 18）　・□□□□□□□　（120）×21×５　6039型式
・□銅七年十月

上半は欠損。下端に切り込みの痕跡がある。左右辺には整形面を残す。和銅の年紀のある木簡の一つで，切り込みがあり貢進物付札か。スギ・斜柾目材。 *

木簡 22（PL. 18）　大伴牟射二匹　（176）×18×３　6081型式

左右辺は整形面を保つが，上下端は折れにて欠損。二匹とあることからみて絁（禄物あるいは布施物）の支給に関する木簡か。ヒノキ・板目材。

木簡 23（PL. 19）　封　封　（257）×（23）×３　6031型式

上端・左辺は削りによる調整面を残す。右辺は割られ，下端は二次的な削りによる整形がされている。裏面には墨痕はない。

材の上端近くと中央部やや下に切り込みがあり，その部分に「封」の文字をかく。切り込みの部分で紐等にて何かにくくりつけ，紐の上から「封」の文字をかいたもので，紐跡の部分に
＊ は墨痕は残っていない。なお「封」の文字のある木簡は，宮跡庭園遺跡近くの平城京左京二条二坊の発掘調査で二条大路北側溝からも出土しており（『木簡研究７』p.15・図版４，1985,11刊），ともに文書もしくは荷に付けて封としたものと考えられる。ところで平城宮跡出土の木簡でも「封」の文字のあるもの（平城宮木簡2726号，『平城宮木簡二』所収）もみられるが，この場合は文書木簡の余白部分に書き加えられたもので，「以上」「以下余白」の意を表わしたとされ
＊ （弥永貞三「古代史料論木簡」，『新・岩波講座日本歴史25』所収），本木簡とは意味が異なるものである。なお，中国では文書木簡を送付する場合に，もう一枚同じ大きさの木簡を上に重ねて（この木簡を「検」という）紐でしばりつけ文書の内容を他見されないようにする場合があることがしられるが，その場合に検には充所を上書きし，紐の部分に封の部分に封とは墨書しないようである（大庭脩『木簡』p.27）。ヒノキ・板目材。

＊ 木簡 24（PL.18）　中務省少録□□□　　(138)×(10)×3　6081型式

上端は整形面を残す他，左右辺は割れ，下端は折れにて欠損。少録の下は欠損にて読み切れない。ヒノキ・板目材。

木簡 25（PL.19）　・五百卌二
　　一校授
＊　　・　二百七十　卌
　　旦　　(173)×(50)×15　6081型式

剝離した部厚い木屑状の木片に墨書されている。習書木簡。「五百卌二」等の数字は写経風の文字でかかれており，大般若経の巻次を示すか。とすれば大般若経である長屋王願経（和銅経）との関係も考えられようが，長屋王願経は巻次により種々の書風を示すため，本木簡の
＊ 筆跡との関連は確定はできない。ヒノキ・板目材。

木簡 26（PL.19）　・椋部智麻呂　高椅善麻呂　越　越
　　・身身身　□□　人人人人人人人□　　214×25×6　6011型式

上下端とも刃物にて切断され，左右辺は割截されている。習書木簡。人名については不詳。ヒノキ・柾目材。

＊ 木簡 27（PL.18）　・和銅七年七□□□和□銅七□
　　〔和カ〕〔和カ〕
　　・　和銅□□□月□□□　□　□　　(192)×(17)×4　6081型式
　　〔四カ〕〔廿カ〕

上端・左辺は調整面を残すが，右辺は割り，下端は折りにて欠損。「和銅七年」の年紀をしるす習書木簡。ヒノキ・板目材。

木簡 28（PL.18）　・「□　□　日□七□七□　□」
　　(別筆)
＊　　首徳万呂

・□　　□□□　□　　(120) × (14) × 2　6081型式

上端・左右辺は欠損，下端のみ整形面を残す。「徳万呂」の上に重ね書きをする。ヒノキ・板目材。

木簡 29 (PL. 18)　〔小 治〕□□□　小治□　〔万 呂〕□□□　小治□　小治□　(161) × (62) × 6　6065型式　*

二次的に四辺を調整してある。「小治□」の習書か。重ね書きも多くみられる。裏には墨痕なし。スギ・板目材。

木簡 30 (PL. 18)　□□　□□□　□四升　(144) × (10) × 3　6081型式

四周欠損。「四升」とあることからみて，米の帳簿に関する木簡か。ヒノキ・板目材。　*

木簡 31 (PL. 19)　・此之□此此此白白□□自白

・□□□□□　229×18× 2　6011型式

上下端・左辺は原形を保つ。右辺も下半は割れているが，上部は整形面を残す。習書木簡。ヒノキ・板目材。

木簡 32 (PL. 19)　・職識我我我我　*

・也也□□而而而　〔也 而〕　(148) ×31× 3　6019型式

左右辺は整形面を残す。上端も僅かに整形面を残すが，下端は折損。習書木簡。ヒノキ・板目材。

木簡 33 (PL. 18)　〔伊カ〕□□香足　(128) × (7) × 5　6081型式

上端は整形面を残す。下端・左右辺は欠損。ヒノキ・板目材。　*

木簡 34 (PL. 18)　・張尒

・□□　(40) × (13) × 2　6081型式

上端・左辺は調整面を残す。下端・右辺は欠損。ヒノキ・板目材。

木簡 35* (PL. 18)　・□□□□□

・　□濱　113× (13) × 9　6081型式　*

左右辺は整形，上下端は切断されている。ヒノキ・柾目材。

木簡 36 (PL. 19)　・□生□圍常　□　□□ヲ　□

・　□　(166) × (22) × 4　6081型式

左辺は割れ，上下端は折れにて欠損。右辺のみ整形面を残す。ヒノキ・板目材。

木簡 37 (PL.18)　麻呂　6091型式　*

削屑。ヒノキ・斜柾目材。

2 瓦　塼　類

3次にわたる調査によって出土した瓦塼類は，軒瓦が合計163点，文字瓦19点，塼69点，面戸瓦11点，熨斗瓦1点，丸瓦・平瓦が整理箱273箱分である。軒瓦の内訳は軒丸瓦14型式14種52点，軒平瓦9型式18種81点，型式種別不明軒丸瓦18点，同軒平瓦12点である。これらの概要
＊ については，すでに調査次数ごとに概報で報告している。今回はこれらをまとめて軒瓦，丸瓦・平瓦，文字瓦，道具瓦，塼の順に述べるが，軒瓦については，型式や数値に先の概報と変更の生じたものがある。

出土した軒瓦163点を1aあたりに換算すると約2.9点となる。平城宮内の出土量[1]（内裏北外郭 17.7点，朱雀門周辺 5.7点，内裏内郭 5.1点，推定宮内省大膳職 5.0点，推定馬寮 3.0点）と比べる
＊ と少ない。しかし平城京内では，左京二条二坊十二坪[2] 14.3点，左京二条二坊十三坪[3] 10.6点，左京三条一坊十四坪[4] 3.0点，左京一条三坪十五・十六坪[5] 2.7点，左京三条二坊十・十五坪[6] 1.2点，左京五条二坊十四坪[7] 1.3点，左京三条四坊七坪[8] 0.8点と，数値に大きな開きがあるとともに，瓦塼数の出土量が極めて少量もしくはまったく出土しない地域もある。調査地の性格や坪内での位置の違いによってこうした差が生じるものと思われる。

＊　軒瓦の記述に当っては，本調査出土遺物だけでなく，宮・京における他の調査で出土した残りの良い資料をも考参にし（Fig.28,33），各型式・種別の特徴を記すにとどめた。詳しくは，『平城宮調査報告Ⅰ～Ⅻ』，『基準資料　瓦編1～9』を参照されたい。ただし，瓦当裏面の調整手法，丸瓦・平瓦の接合法などの製作手法は，本調査出土遺物において観察された結果を記し，破損などによって観察不可能な場合は記述を省略した。また，焼成や胎土の記述は観察に
＊ よって得た相対的な基準により，焼成は優・良・可の3段階に分ける。焼成優とは，灰黒色～灰色を呈し，須恵器に似た堅緻な質のもの。焼成良とは，灰白色～灰色を呈し，いわゆる瓦質に近いもの。焼成可とは，灰白色～黄灰色を呈し，軟質のもので，磨滅によって瓦当紋様や成形・調整手法の弁別が困難な例が多い。胎土については，砂粒をほとんど含まない精良なものと，砂粒を含むものとに大きくわけ，砂粒を含むものについては，砂粒の大きさを記述した。
＊ 軒瓦の弁数・珠紋数・鋸歯紋数や細部の計測値は巻末の別表にまとめた。

A　軒　丸　瓦

Ⅰ　単弁蓮華紋軒瓦

6133型式　間弁がなく，弁と弁が接するとともに，外区外縁に鋸歯文がないのが特徴である。A～D，Ⅰ～Pの12種に細分され，C種が出土。C種はA種に似て弁端が尖がりぎみとなる
＊ が，A種が12弁，蓮子1＋5，珠紋13に対して，C種は13弁，蓮子1＋6，珠紋18となる。

1）『平城宮調査報告Ⅻ』1985，p.69。
2）奈良市教育委員会『平城京左京二条二坊十二坪　奈良市水道局庁舎建設地発掘調査概要報告』1984，pp.22～27。
3）『平城京左京二条二坊十三坪の発掘調査』1984，p.26。
4）『年報　1968』1967，p.39。
5）『平城宮調査報告Ⅵ』1974，pp.33～37。
6）『平城京三条二坊』1975，pp.19～24。
7）奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告　昭和54年度』1980，pp.14～19。
8）『平城京左京三条四坊七坪　発掘調査概報』1980，p.17。

笵全体に厚さ 1.5～2.0 cm ほどに粘土を詰め，その後丸瓦を接合する。丸瓦は瓦当部よりやや小ぶりで，接合部外面に多量の粘土を補う。接合部内面の粘土は比較的少なく，接合線は円弧を描く。丸瓦接合後瓦当裏面を強くナデ，中央部を窪ませている。胎土精良。焼成良。外面は灰黒色，断面は灰白色。C種１点，種別不明４点が出土。

6134型式　中房がわずかに窪む。内区に間弁を伴ない，外区外縁が線鋸歯紋となるのが特徴である。A～D種の４種に細分され，B種が出土した。B種は９弁で，間弁が中房にとどかず楔形となる部分がある。弁区はわずかに盛り上がる。弁は断面三角形の太い輪郭線で区画し，子葉や間弁は高く突出する。 *

瓦当裏面は強くナデているようである。胎土精良。焼成良。外面・断面とも灰白色～灰褐色。B種２点が出土。内１点には，赤褐色に変色した部分がある。 *

6138型式　弁端が丸みを帯び，楔形の間弁を配するのを特徴とする。A～C，E～K[1]の10種に細分され，B種が出土。B種はA種に似るが珠紋が大ぶりで，弁の大きさが不揃いである。A種が素紋があるのに対し，外区外縁は線鋸歯紋となる。

6133型式と同様に，瓦当径よりやや小ぶりの丸瓦をあてる。接合粘土を多量に用いるため，接合線は低い円弧を描く。瓦当裏面は強くナデる。胎土精良。焼成良。外側灰黒色，断面灰色。１点出土。外区外縁の２個所に赤褐色に変色している部分がある。 *

Ⅱ　複弁蓮華紋軒丸瓦

複弁蓮華紋軒丸瓦は，弁と間弁との関係によって，間弁が独立するA系統，間弁が界線状に弁をめぐるB系統，間弁のないC系統にわかれる[2]。以下に述べる6225・6235・6272・6274・6279・6348型式がA系統，6282・6284・6285・6314型式がB系統，6316型式がC系統に属する。 *

6125型式　中房が大きく，外区外縁が凸鋸歯紋，同内縁が圏線となるのを特徴とする。A～E[3]，Lの６種に細分され，E種が出土した。E種は瓦当が平板で内区の地の盛りあがりが少ない。弁端が丸みをおびる。今回出土したものには，子葉と輪郭線との間に明瞭な笵キズが認められる。胎土にやや砂粒がまじる。焼成可。外面・断面ともに黄灰色。１点出土。 *

6235型式　いわゆる東大寺式軒丸瓦である。中房はわずかに窪む。弁は照り起りが強く，間弁はT字状で先端が弁に接する。外区内縁に大ぶりな珠紋をめぐらし，外区外縁は素紋の傾斜縁である。A～Nの13種に細分される。今回出土したものは瓦当の磨滅が著しく，種別を識別しにくいが，B種である可能性が高い。B種はA種に似るが，やや小形である。A種同様外区内縁と外縁の境に段がつく。胎土精良。焼成良。外面灰黒色，断面黄灰色。１点出土。 *

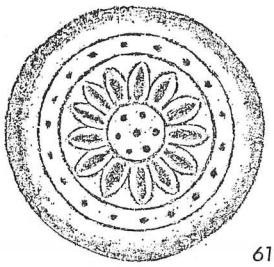
6272型式　中房に1＋4＋8の蓮子を配し，外区外縁は内縁より一段高くし，面違鋸歯紋をめぐらすのを特徴とする。A・B２種に細分され，A種が出土した。A種は中房が大きく突出している。子葉・間弁が太く，外区内縁の珠紋も大きい。胎土精良。焼成良。外面・断面ともに暗黄灰色。１点出土。

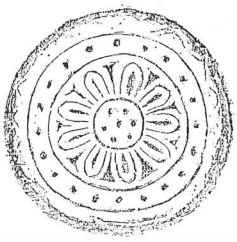
6274型式　中房は大形で突出する。弁は盛り上がり先端部で強く反るのが特徴である。A・B２種に細分され，A種が出土した。A種は弁の照り起りが強く，外区外縁の線鋸歯文下端に凸 *

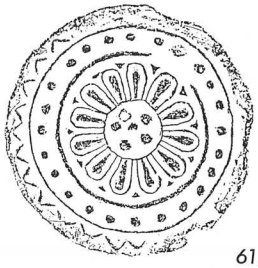
1）奈良市教育委員会『平城京出土軒瓦型式一覧Ⅰ』1985，p.1。

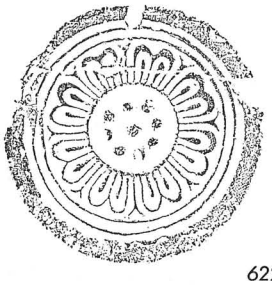
2）『平城宮調査報告Ⅺ』1981，p.117。『平城宮調査報告Ⅻ』1985，p.73。

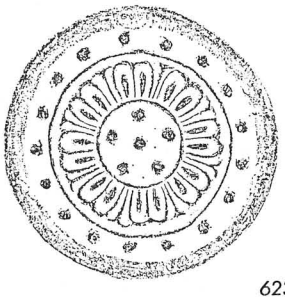
3）『平城宮出土軒瓦型式一覧補遺篇』1984，p.9。『平城宮調査報告Ⅻ』1985，p.72。

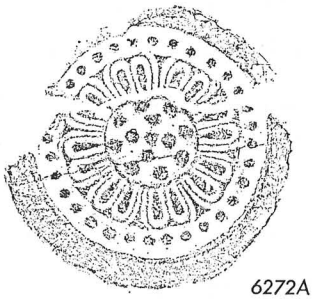

6133C

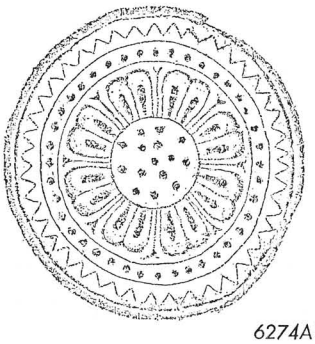

6134B

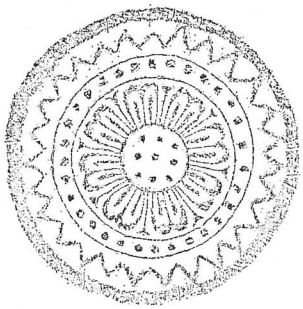

6138B

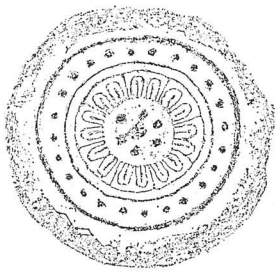

6225E

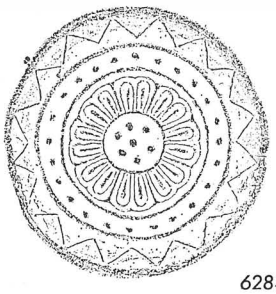

6235B

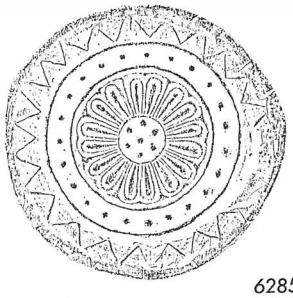

6272A

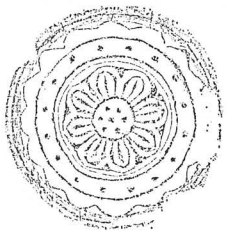

6274Ab

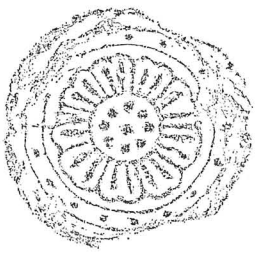

6279A


6282B b


6284C


6285A


6314A


6316K

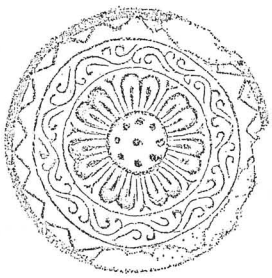

6348Aa

Fig. 28 軒丸瓦（瓦当紋様標式例1/6）

線がめぐる。A種は笵の彫りなおしによってＡａ～Ａｃの３者があり，Ａｂ種が出土。Ａｂ種はＡａ種にあった蓮子をめぐる円環が痕跡程度に消滅し，蓮子を小さく彫りなおす。

粘土接合痕の観察から，笵への粘土の詰め込みの様子がわかる。まず笵の外区外縁部に粘土を詰めたのち，外区内縁から内側の部分に約 1.5 cm の厚さに粘土を詰める。次に丸瓦をあて，丸瓦部凸面に接合粘土を置くとともに，瓦当裏面全体に約 1.7 cm の厚さに粘土を詰め平滑にする。その後接合部内面を円弧状に一回ナデたあと，瓦当裏面全体を斜めにナデる。丸瓦接合位置は高く，接合粘土も少ないため，接合線は高い円弧を描く。胎土精良。焼成優。外面・断面ともに暗灰色。SG1504 の敷石抜き取り穴から出土した破片と近くの包含層から出土した破片が接合した。１点出土。 *

6279型式　6274型式とともに藤原宮式の軒丸瓦である。6275型式に似るが，中房が小さく，蓮子が一重にめぐる。Ａ～Ｃの３種に細分され，Ａ種が出土した。Ａ種はＢ種に比べ弁端の反転が弱く，蓮子の配置が特徴的である。中心蓮子のまわりを方形にかこむように８個の蓮子が配置される。外区外縁は高く，線鋸歯紋は太く粗い。外区外縁上面にわずかに段がめぐる。 *

笵へ粘土を詰める順番は，外区外縁部分が最初である。瓦当裏面は横方向にナデて平滑にする。胎土精良。焼成良であるが，藤原宮式のなかで比較すると軟質のものが多い。表面灰黒色，断面灰色。４点出土。このうちの２点には二度押しによると思われる瓦当紋様のズレが認められ，細部の特徴も一致するところから同一個体である可能性が強い。 *

6282型式　以下に述べる6282型式，6284型式，6285型式は間弁Ｂ系統で外区内縁が珠紋，外区外縁が線鋸歯文となる。6282型式はＡ種を除いて中心蓮子が他の蓮子より大きく，外区内縁と外縁とを区画する界線が太いのが特徴である。Ａ・Ｂ・Ｄ～Ｌの９種に細分され，Ｂ種が出土。Ｂ種は弁がそれぞれ独立し短小である。Ｂ種は笵の彫り直しによって，さらにＢａ・Ｂｂ種に細分され，Ｂｂ種が出土した。Ｂｂ種は中房と弁区との間の圏線がなくなる。弁を一部彫り直しているため，弁と弁が接する部分がある。また中心蓮子とまわりの蓮子とが笵キズによって連結したものが見られる。今回出土した6282型式Ｂｂ種は瓦当面の残りの悪いものが多く，出土品すべてについての笵キズの観察は不可能であった。残りの良い２点について見ると，中房の中心蓮子と周囲の蓮子との間３個所で笵キズが認められるとともに，間弁と子葉が中房に接する部分が一体となった状態の笵キズが２個所に認められる。 *

丸瓦の接合位置は低く，接合部の内外面に厚い接合粘土を用いる。そのため接合線は低い台形を呈する。接合部外面は縦にヘラケズリを行なう。接合部内面は瓦当裏面から 5～8 cm の幅で横方向のヘラケズリが行なわれる。そのため，ヘラ先端によるものと思われる浅い溝が接合線に添ってめぐる。接合粘土の末端部近くは，指頭によって強くナデている。 *

胎土は精良なものが多いが，一部に砂粒を含むものがある。焼成良。外面は黒色と灰白色のものがあるが，いずれも断面は灰白色～灰色。Ｂｂ種６点，Ｂ種で細別不明のもの２点，種別不明のもの２点が出土。

6284型式　中房が小ぶりで中心蓮子が他の蓮子と同じ大きさである点で6282型式と区別される。Ａ，Ｃ～Ｇ，Ｌの７に細分され，Ｃ種が出土した。Ｃ種は弁が平板で，中房は弁区よりわずかに突出するが，盛りあがらない。 *

今回出土したものは，丸瓦部が瓦当上半部の外区とともにはがれた状態で，丸瓦の接合方法

がわかる。また瓦当面に粘土の継ぎ目が観察でき (Fig. 32)，笵への粘土の詰め込み過程が判明する。まず外区外縁に粘土を詰め，外区内縁から弁区までの部分をおよそ複弁1単位を目安に粘土を順次詰めていく。本例は9回にわけて詰めている。最後に中房部分に粘土を詰める。丸瓦を置くとともに，内面に接合粘土を詰める。丸瓦広端部にはキザミやケズリなどの加工は施
＊ さない。この後瓦当裏面に厚さ 2.5 cm 前後に粘土を詰め，瓦当を厚くするとともに接合部内面の支えとする。6282型式と比べると丸瓦の接合位置が高く，接合用粘土が少ないいため，接合線は円弧を描く。胎土は細かい砂粒を含むものの比較的良。焼成良。外面灰黒色。断面灰色。1点出土。

6285型式　6284型式と似るが，6284型式より弁が長く，中房が小さい点で区別される。A・Bの
＊ 2種に細分され，A種が出土した。A種は弁区の盛り上がりが強く，中房がわずかに突出する。

瓦当製作の順は，まず笵の外区外縁部分に粘土を詰め，次にそれ以外の部分に厚さ 1 cm 前後に粘土を詰める。その場合大まかではあるが外区内縁と弁区以内との部分に分けて粘土が詰められている。こうして笵に一様に粘土が詰められた後，丸瓦を立て内外面に粘土を補填する。丸瓦の広端部凸面には斜めに大まかなキザミを入れる (Fig. 31)。先端部にはケズリなどは

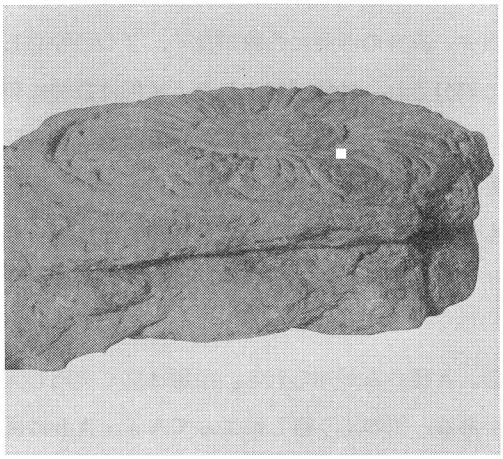


Fig. 29　6285型式A種　瓦当製作時の粘土継ぎ目

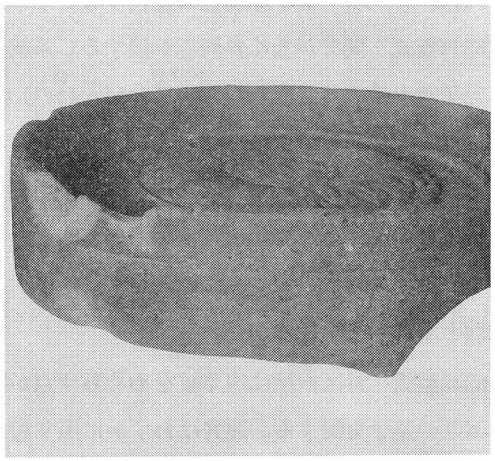


Fig. 30　6285型式A種　笵端痕

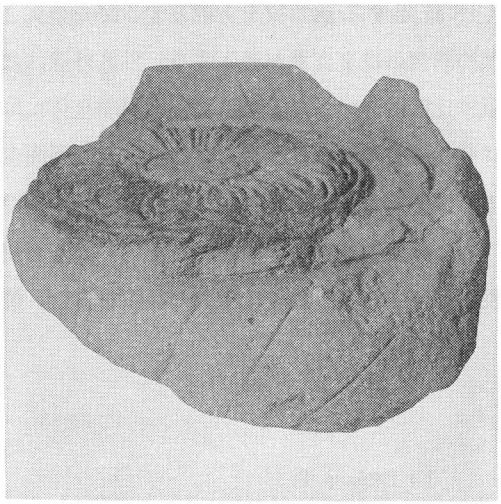


Fig. 31　6285型式A種　丸瓦凸面のキザミ

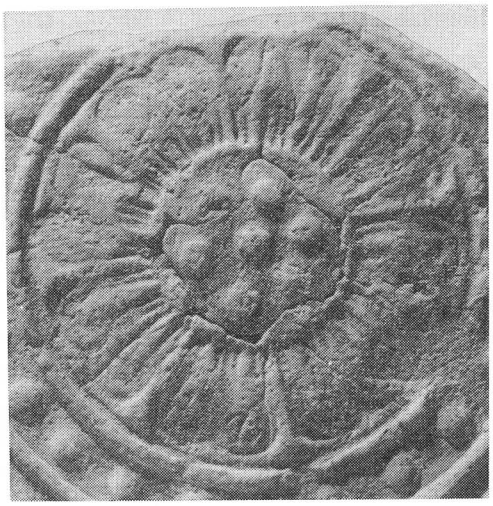


Fig. 32　6284型式C種　瓦当面の粘土継ぎ目

行なわれず，瓦当裏面にも溝を切るなどの加工は施していない。丸瓦接合後，瓦当裏面全体に約 2cm の厚さに粘土を詰める。さらに接合線に添って少量の内面接合粘土をあてナデている。丸瓦の接合位置は比較的高いが，外面接合粘土は多い。また内面接合粘土は少ないが，瓦当裏面をえぐるように削っているため接合線ははっきりしない。接合部外面は縦にヘラケズリを行なう。瓦当側面も縦方向にヘラケズリをするものが多い。瓦当側面の外縁上面から 1.6 cm の位置にわずかな段が観察され，笵端痕と考えることができる。今回の資料にはヘラケズリによって笵端痕の残るものが少ないが，歌姫西瓦窯出土の6285型式A種には，この部分に明瞭な段のつくものがある (Fig.30)。瓦当裏面は縦に強くヘラケズリを行ない窪ませている。胎土は細かな砂粒を多く含み，数 mm 大の砂粒も少量まじる。焼成優，灰色〜暗灰色を呈するものが多いが，灰褐色を呈し焼成可に分類されるものも破片で6点認められる。A種が16点出土した。外区外縁だけの破片が6点あり，焼成などから見てA種であろう。

6314型式　複弁4弁の小形軒丸瓦。A〜Eの4種に細分され，A種が出土した。A種は6314型式中最大で，弁は盛りあがりが強く，弁端がやや尖がる。内区・外区を画する界線と弁との間に細い圏線をめぐらす。外縁上面に凸線をめぐらす。胎土精良。焼成良。外面灰褐色。断面灰白色。弁区の一部が赤褐色に変色する。1点出土。

6316型式　間弁がなく弁同志が接するC系統の複弁。複弁の中央に凸線がなく，2つの独立した子葉を輪郭線が囲む。A〜K[1]，M，O[2]の13種に細分され，K種が出土した。K種はD種に類似し9弁であるが，D種に比べ中房がやや窪み，弁形が整一でない。弁区から外区外縁にかけて笵キズが多く，また外区内縁の珠紋が両側の界線に接するものが多い。丸瓦の接合位置は比較的高いが，多量の接合粘土が用いられるとともに，接合部内面をナデるため接合線ははっきりしない。表面の磨滅のため調整手法は不明。胎土には少量の砂粒を含む。焼成良。外面・断面とも灰白色。1点出土。

6348型式　外区内縁に唐草紋をめぐらす点が特徴。A種のみが知られる。中房は高く突出し大ぶりの蓮子を配する。蓮弁はわずかに照り起りがある。笵の彫り直しによってAa・Abに細分され[3]，Aa種が出土した。Aa種は中房が突出するが，Ab種では笵を彫り直し，弁が中房から弁端に向って傾斜する。弁端はAb種に比べやや反り上がる。唐草紋は反時計回りで，18単位ある。唐草紋の基本的な構成は，右から左へ展開する唐草紋を主紋とする6643型式と同一である。茎は高くうねりながら連続する。茎の両側には2支葉が派生する。外区外縁は低い傾斜縁で粗い線鋸歯紋がめぐる。丸瓦接合位置は比較的高い。丸瓦接合後瓦当裏面全体に厚さ 1.0cm ほどに粘土を詰める。接合部内面には特に接合粘土を置くことはなく，瓦当裏面全体に詰めた粘土を内面のささえとする。瓦当裏面には粘土を詰めたときの指頭圧痕と，接合線に添った円弧状のナデ痕が観察される。接合部外面には比較的多量の接合粘土を置く。瓦当側面の外縁上面から 0.9cm の位置に，わずかな段が観察される。胎土は少量の砂粒を含む。焼成良。外面灰黒色，断面灰白色。1点出土。

---

1) 『平城宮出土軒瓦型式一覧　補遺篇』1984，p.27。『平城宮調査報告XII』1985，p.78。
2) 奈良市教育委員会『平城京出土軒瓦型式一覧 I』1985，p.4。
3) 『平城京左京四条二坊十五坪発掘報告』1985，p.30。

B 軒　平　瓦

I　偏行唐草紋軒平瓦

6641型式　内区の主紋は左から右に流れる唐草紋で，上外区に珠紋，下外区・脇区に線鋸歯紋を巡らせるのが特徴である。A，C，E～K，L，N，Oの12種に細分され，C種が出土した。

＊ C種は茎の基点が反転せず，遊離した２支葉を置く。８回反転し，茎末端は反転して納めるが支葉は配さない。支葉には，２個とも茎から遊離するａ類，１葉が遊離し末端が茎と平行するｂ類，２葉とも遊離し末端が茎と平行するｃ類の３類がある[1]。脇区の線鋸歯紋は下外区の線鋸歯紋とは連続しない。段顎。

平瓦部凹面の瓦当寄りを，約 3cm の幅で横方向にヘラケズリする。胎土精良。焼成良。外

＊ 面灰黒色。断面灰色～灰黄色。３点出土。

II　均整唐草紋軒瓦

6663型式　6663型式・6664型式・6667型式型式は，花頭形を下から上へ巻き込む唐草で囲んだ中心飾をもつ。6663型式は唐草が３回反転し，内外区のさかいに２重圏線をめぐらせるのが特徴である。A～F，H～Nの13種に細分され，F・J種が出土。F種は唐草紋が外区との界線

＊ から立ち上がり，第３単位主葉と第１支葉の先端が脇区界線に接しないで巻き込む。J種はF種と同じく唐草紋が外区との界線から立ち上がるが，紋様がやや太い。中心飾の花頭は偏平で中心葉が横長となる。今回出土したものは，F・J種ともにすべて曲線顎である。

胎土に 数mm 大の砂粒を少量含み，焼成良で，外面・断面とも灰白色～黄灰色を呈するものと，胎土に細かな砂粒を多く含み，焼成優で，外面灰黒色，断面灰色を呈するものの２種が

＊ ある。後者はF種の１点だけで，あとはすべて前者に属する。後者は硬質な焼成のため表面が良好に残る。平瓦部凹面は瓦当面より 4cm の幅で横方向にヘラケズリし，平瓦部凸面は顎から平瓦部にむかって縦に強くヘラケズリを行なう。F種７点，J種１点が出土。

6664型式　唐草は３回反転する。6663型式と異なり，外区と脇区を珠紋とするのが特徴である。A～D，E～Pの15種に細分され，C・D・F種が出土。C種は中心飾の花頭基部が細

＊ く，上端で開き界線に接しない。主葉や支葉の巻き込みが強い。珠紋が比較的大きい。D種とF種では，中心飾の花頭基部が開かず平行線で表現される。D種では花頭がやや左へ傾き，F種ではやや右へ傾く。D種もF種も唐花紋が他の6664型式より太い。外区の珠紋はD種に比べF種の方が粗である。F種にはかろうじて外縁が残り直立縁である。段顎。胎土精良。焼成向。外面灰黒色，断面灰白色。C種１点，D種１点，F種２点が出土した。

＊ **6667型式**　唐草は４回反転で，外区，脇区ともに珠紋をめぐらすのが特徴である。A・Bの２種に細分され，A種が出土した。中心飾の花頭基部は細く上端で開く。唐草は大ぶりで，唐草基部が界線につかない。瓦当面には笵の木目痕と思われる横方向の細隆線が浮き出るものがある。外縁は３段に立ち上がる直立縁である。『基準資料Ⅶ』では，曲線顎のものと外縁上面に縄目のあるものが紹介されているが，今回出土したものはすべて段顎で縄目は見られない。

＊ 顎面と平瓦部凸面の瓦当寄りは横ナデで調整する。平瓦凸面のナデは瓦当近くに限られるため，顎のごく近くまで縦方向の縄叩き目が残る。縄目は 3cm 当たり11本のもの（後述するａ３

1）『飛鳥・藤原宮調査報告Ⅱ』1978，p.39。『平城宮調査報告Ⅻ』1985，p.79。

種）が多い。平瓦部凹面は瓦当寄に幅約 2cm の横方向のナデを行なうが，それ以外の部分は縦方向のナデによって布目を消している。

焼成や胎土から３類に区分できる。

１類．焼成優。須恵質の堅緻な焼成を示すもの。胎土にやや砂粒が含まれる。外面暗灰色，断面灰色。 *

２類．焼成良。胎土は精良であるが若干砂粒を含む。外面灰黒色，断面灰白色のものと，外面・断面ともに灰白色のものがある。

３類．焼成可。胎土に 数 mm 大の砂粒を少量含む。外面灰黒色，断面黄灰色のものと，外面・断面とも黄褐色，断面灰色のものがある。

３類は１類・２類に比べ笵キズの進んだものが多く，平瓦部凹面の側縁に幅の広い面取りを施すとともに，外縁をケズリ，平坦にする。１類・２類・３類それぞれ13個体ずつ，計39個体が出土した。ただし１類は堅緻な焼成のため完形や大形の破片が多い。 *

6671型式　細長い菱形の中心飾を有し，これを唐草が上から下へ巻き込むのが特徴である。唐草は３回反転する。外区が内区より一段高く，下外区は線鋸歯紋である。上外区・両脇区の珠紋は杏仁形に近いものが多い。A～E，I～Kの８種に細分され，K種が出土した。K種はD種に似ており，唐草が主葉と２支葉からなり，内区両端の遊離した小支葉がない。D種と異なり唐草紋が細い。今回出土したものの瓦当部は外区までで，外縁がない。段顎と直線顎が知られるが，出土したのは段顎である。胎土精良。焼成良。外面・断面とも灰白色。１点出土。 *

6675型式　「小」字形の中心飾が特徴で，これを唐草が下から上へ巻き込む。唐草紋は連続し４回反転する。第２支葉は第１単位を除き小さい。上外区に珠紋，下外区と脇区には線鋸歯紋を巡らす。A種のみ。段顎。胎土精良。焼成良。外面灰黒色。断面暗灰黄色。１点出土。 *

6691型式　三葉形の中心で飾を有し，これを唐草が下から上へ巻き込むのが特徴である。唐草は４回反転し界線に接しない。外区，脇区は小ぶりな珠紋である。A～Dの４種に細分され，A種が出土。A種は中心飾が大ぶりで，基部が二叉になる。唐草紋はすべて第１・第２支葉を伴なう。瓦当面には笵の木目の痕跡が残る。また唐草紋や外区珠紋に笵キズが見られる。曲線顎。 *

平瓦部凸面には，瓦当寄りの幅約 3cm に横方向の縄叩き目，それ以下に縦方向の縄叩き目が残る。縄叩きの後横方向にナデを加え，横方向の縄叩き目を一部ナデ消している。縄目は縦・横いずれも，3cm あたり11本である（後述する平瓦のａ３種）。横方向の縄叩き目は平瓦の成形にかかわるものではなく，平瓦凸面に瓦当形成のために置いた粘土を叩きしめるためのものであろう。平瓦部凹面は，瓦当から 4～6cm の幅で横方向にヘラケズリを行ない，両側面も縦方向にヘラケズリを行う。 *

胎土には 5mm 大の砂粒を少量含む。焼成優。外面・断面とも灰色。１点出土。

6721型式　「小」字状の中心飾を有し，これを下から上へ巻き込む唐草で囲むのが特徴である。唐草紋は５回反転する。外区に小ぶりな珠紋を配する。H・J種は脇区に珠紋を置くが，他は素紋とする。A，C～Kの10種に細分され，A種とC種が出土した。A種とC種は中心飾の形状，珠紋数，主葉の巻き込みの強弱などの点で区別される。A種は中心飾の両支葉がほぼ水平となるが，C種は逆「ハ」字状を呈する。主葉の巻き込みはA種のほうがやや大きい。下 *

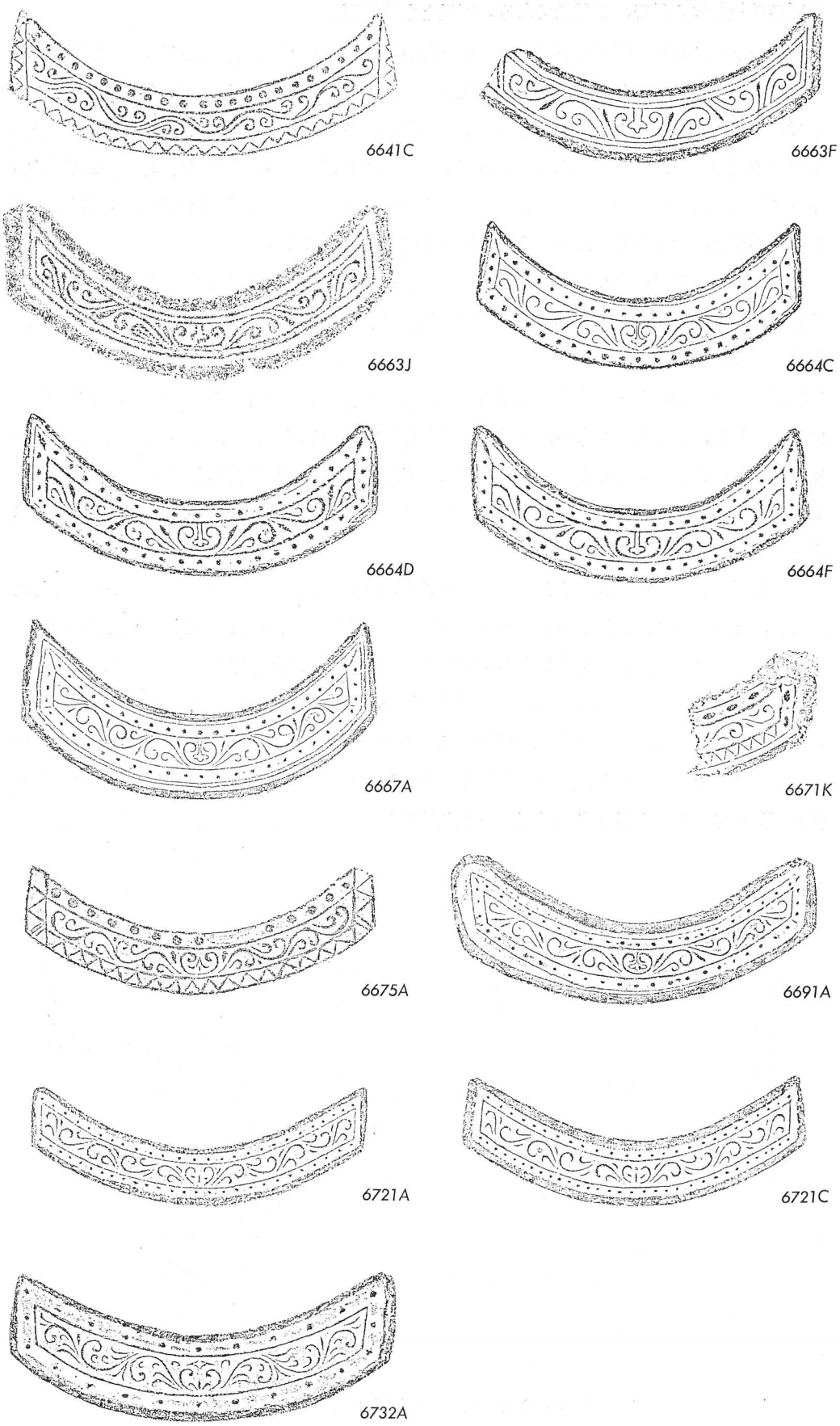


Fig. 33 軒平瓦（瓦当紋様標式例1/6）

外区の珠紋数はA種27，C種32である。両種とも曲線顎。

C種のうちに瓦当が完存し平瓦部の残りの良いものがある（fig.34）。平瓦部凸面は斜め方向（左上がり，右下がり：瓦当を上，狭端を下にした場合）の縄叩き目が残る。縄目は3cmあたり8本である（後述する平瓦のa2種）。瓦当寄りでは縦方向のナデによって，縄叩き目を消す。平瓦部凹面の瓦当寄りは，瓦当から7cmの幅で横方向にナデを行い，それ以外の部分には細かい布目（後述する平瓦のs種）が一面に残る。外縁上面から0.3cm下がった瓦当部凹面側にわずかに段がつき，笵端痕と考えられる。笵端痕は凹面側だけに残る。 *

胎土にはA・C種いずれも1～2mm大の砂粒を多く含む。焼成良で外面灰黒色，断面灰白色を呈するものと，焼成可で外面・断面暗灰色を呈するのものがある。A種7点，C種6点，種別不明4点が出土。 *

6732型式　いわゆる東大寺式軒平瓦である。対葉花紋を中心飾に有するのが特徴である。唐草は3回反転し，支葉の数が多い。外区・脇区とも細い珠紋を配す。A，C～Q，V，Wの18種に細分され，A種が出土した。A種はC種に似ており，中心飾の対葉の先端が互いに接触せず分離している。瓦当全体がC種に比べやや大形で，主葉の巻き込みが強く，第1単位第2支葉が半環状を呈する。曲線顎。 *

顎面と平瓦部凹面の瓦当近くを横方向にナデる。ナデの及ぶ範囲は瓦当面より7cmまでに限られ，それ以下には縦位の叩き目が明瞭に残る。縄叩き目は3cm当たり11本である（後述する平瓦のa3種）。平瓦部凹面は瓦当から約5cmの幅で横ナデを行い，以下には細い布目（後述する平瓦のa種）が残る。平瓦部凹面側側縁はヘラケズリによる幅広い面取りを施す。

胎土精良。焼成良で表面灰黒色，断面灰白色を呈するものと，胎土に5mmの砂粒を少量含み，焼成可で表面暗灰色，断面灰褐色を呈するものがある。前者は今回出土した6133型式C種と類似している。A種3点。種別不明4点が出土。 *

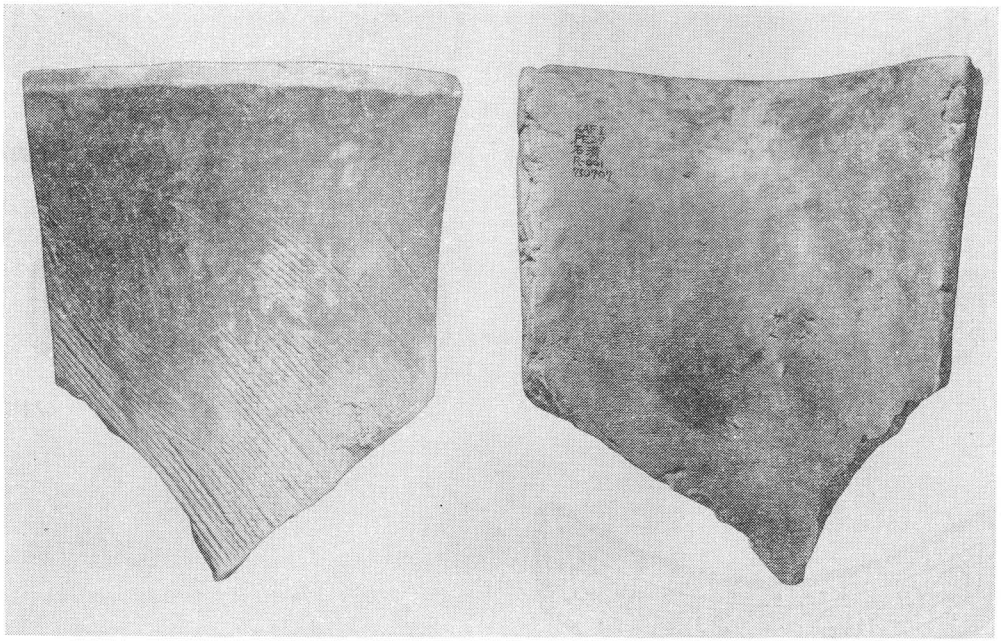


Fig. 34　6721型式C種　平瓦部凸面（左）同凹面（右）　縮尺1/5

Tab. 5 遺構出土の軒瓦一覧表

遺　　構	出土地点・層位	出土軒瓦・時期	遺構の時期
SB1542	東南隅柱，柱掘形	6282Bb Ⅲ	B
SD1525	埋土上層	6285A Ⅱ	
	埋土上層	6282Bb Ⅲ	
	埋土上層	6667 Ⅱ	
	埋土上層	6667A Ⅱ	
	埋土上層	6667A Ⅱ	
	埋土上層	6667A Ⅱ	
	埋土上層	6667A Ⅱ	
	埋土上層	6667A Ⅱ	
	埋土上層	6721 Ⅲ	
	埋土中層	6285 Ⅱ	
	導水路堆積土上層	6667 Ⅱ	
SD1545	埋土	6667A Ⅱ	
	埋土	6282 Ⅲ	
SK1578		6641C Ⅰ	
		6671K Ⅱ	
SB1550	身舎東南隅，柱抜取り穴	6667A Ⅱ	C
SE1547	埋土上層（茶褐斑入り灰黄色粘質土）	6664F Ⅱ	
	混青灰色砂灰黒色粘土	6667A Ⅱ	
	埋土上層（茶褐斑入り灰黄色粘質土）	6282 Ⅲ	
	灰黒色粘土	6663F Ⅲ	
	底バラス直上	6721C Ⅲ	
	青灰色砂	6721C Ⅲ	
SG1504	池中留石抜取り	6274Ab Ⅰ	
	茶褐色土（池上層埋土）	6285A Ⅱ	
	灰黒色粘土（底石直上）	6285 Ⅱ	
	淵バラス敷直上	6664F Ⅱ	
	岸礫間	6667 Ⅱ	
	埋土下バラス面	6667 Ⅱ	
	暗灰色土（池中）	6667 Ⅱ	
	底石上　灰黒色粘土	6667 Ⅱ	
	池埋土　黒色粘土	6667 Ⅱ	
	黒灰色粘土	6133C Ⅲ	
	灰黒色粘土	6282B Ⅲ	
		6663F Ⅲ	
	池底　石の間	6732A Ⅲ	
	灰黒色粘土	6732A Ⅲ	
SD1466	暗灰色粘土	6285A Ⅱ	
	埋土砂	6285A Ⅱ	
		6133A Ⅲ	
		6721C Ⅲ	
		6721C Ⅲ	
	暗灰色粘土	6732A Ⅲ	
		6732A Ⅲ	
SA1473	東から9番目，柱抜取り穴	6667 Ⅱ	D
SB1540	身舎西側柱北から4番目，根石下	6663F Ⅲ	
SB1574	南側柱東から5番目，抜取り	6138A Ⅳ	

C 丸 瓦・平 瓦

出土した丸瓦・平瓦273箱（整理箱）のうち，床土からの出土品を除いた250箱分について，パーソナル・コンピューターを用いて解析した。今回は PC-9801 をホストコンピューターとし，整理室で PC-8201 に入力したデータを，PC-9801 に転送し保存した。データの検索・解析には PC-9801 を用いた。対象としたのは，丸瓦1682点，平瓦4148点，計5830点である。

従来の平城宮や藤原宮の調査報告では，おもに完形の丸瓦・平瓦を扱い，多くの成果をあげてきた。しかし今回の調査地では，完形品もしくは完形近くまで復原できる平瓦は皆無で，わずかに完形の丸瓦１点があるのみである。また平城京内の遺跡であるため，平城宮で出土した丸瓦・平瓦のデータをそのまま敷衍することはできない。こうした状況は，限られた面積を調査した場合，よほど良好な遺存状態の一括資料が出土しないかぎり，普遍的に見られるであろう。藤原宮では，宮を画する内濠 SD1400 出土品を中心とし，計測可能な丸瓦63個体・平瓦102個体についての分析を行っている[1]。平城宮では，丸瓦を第１次成形技法の違いで大きく３類に分け，それぞれを４種に細分している。平瓦についても，同じく第１次成形技法の違いで２類に大別し，それぞれを３種に細分している[2]。破片となった丸瓦・平瓦についても，様々な方法による先学の取り組みがある[3]。

今回は多量な破片をそれぞれの特徴によって分類し，検索することをおもな目的としてパーソナル・コンピューターを使用した。ただこのデータをもとに，数量的な様々な解析が可能である。それについては項をあらためて考えてみたい。

データの収集に当っては，特定の破片の持つ特徴を最大限に取り入れるため，分類の指標となる部位に限定することなく，できるかぎり多くの部分の特徴をデータとして収集することに務めた。最初に丸瓦・平瓦を区別するための記号を入力する。以下丸瓦・平瓦おのおのについて，整理箱番号，グリッド記号，層位・遺構，厚さ・重さ・外面の色，隅の有無，側縁・端縁の長さと調整，凸面の第２次成形・調整・糸切り痕の有無・重複叩きの有無，凹面の布目の粗密・糸切り痕・模骨痕・布綴じ合わせ痕・布端痕の有無・調整，備考の33項目に及ぶ情報を１個の破片から引き出している。焼成については，軒瓦で用いた３段階の相対的指標で表示し備考として入力した。以上の情報は破片１点につき84バイトを要する。

上記のようにして収集した各項目のデータは個々バラバラなものであり，そのままでは丸瓦・平瓦の分類には役立たない。そこで各項目の相関関係をコンピューターで検索する。頻度の高いもの及び大形の破片や，歌姫西瓦窯の出土丸瓦・平瓦の観察結果をもとにして，主体となる数型式を抽出することを目的とした。破片となった資料をあつかうため，最も普遍的な観察項目を指標とせざるを得ない。そこで第２次成形技法を中心とする結果となった。以下の記述では，第１次成形技法をうかがうことのできる責料についてまず述べ，そのあとで第２次成形技法や調整などについて述べることとする。

1）『飛鳥・藤原宮調査報告Ⅱ』1978，pp. 41～51。

2）『平城宮調査報告Ⅻ』1985，pp. 87，88。

3）西川廉次「出土した瓦片の計測による一試行」（『春日大社奈良朝築地遺構発掘調査報告』1977）pp. 2～13。上原真人「平・丸瓦」（『恭仁宮跡発掘調査報告　瓦編』1984）pp. 46～77。京都大学考古学研究室『丹波周山窯址』1982，pp. 70～92。

1　丸　　瓦

一般的に丸瓦は凸面の成形痕をナデ消しており，分類の指標とし得る観察項目が少ない。ここではまず完形品の法量を述べ，そのあと各部位の特徴と思われる事項について触れることとする。

＊　完形品（Fig.35）は QL36区，赤褐色土の出土で，全長 36.3 cm，胴部長 32.3 cm，玉縁長 4.0 cm，広端幅 14.1 cm，玉縁幅 9.8 cm。厚さは，玉縁 1.0 cm，広端 1.6 cm，胴部中央 1.8 cm を計る。

今回出土したものはすべて玉縁式丸瓦で，行基式丸瓦はない。第１次成形技法は，大きく粘土板巻き付け技法と粘土紐巻き上げ技法にわけられる。凹面に糸切りの痕跡を残す破片が14点あり，粘土板巻き付け技法の存在は知られるが，明らかに粘土紐巻き上げ技法で成形した例は見られなかった。

胴部凸面は，明らかなものではすべて，縦方向の縄叩き目を横方向にナデ消している。縄叩き目以外の叩き目を残すものはない。凸面調整は横方向のナデで，縦方向のナデや，ハケ目などの調整は見られなかった。ナデ調整には，叩き目を完全に消すものと，丸瓦狭端付近に叩き目を残すものとがある。

胴部凹面は磨滅などで観察不能なものを除くと，すべてに布目が残る。データ収集にあたっては多量の資料を短期間に処理しなければならず，布目は，1 cm² あたり経８本×緯７本程度の粗いａ種と，経10本×緯８本程度の細かいｂ種との２グループに分類した。ａ種284点，ｂ種524点である。また布綴じ痕をとどめる破片が34点ある。凹面に縦方向の断面半円形の溝の残る破片が20点ある。溝内にも布目をとどめている。

成形にあたっては，胴部と玉縁部を一体でつくり，丸瓦の狭端のみに粘土を貼付し成形している。藤原宮出土の丸瓦と比べると玉縁部が短かい。玉縁端近くの凸面に横方向の突帯を１条もつものが１点のみ確認されている。また玉縁の両隈を斜めは削るものがある。

粘土円筒は，内面に深さ 1 cm 前後の分割截線を入れた後分割する。側面は，分割破面を残すもの，側面全体を一様にケズリ分割破面をなくすもの，側面をケズった後に，さらに凹面側側縁にケズリを行い，面取りを施すものの３種がある。

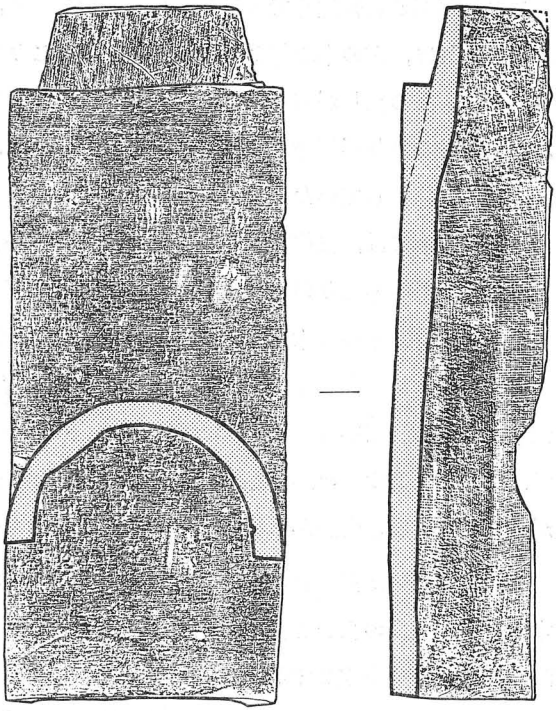


Fig. 35　丸瓦（１：４）

1）丸瓦・平瓦の記述にあたっては，佐原真「平瓦桶巻作り」(『考古学雑誌』第58巻２号，1972)『基準資料Ⅰ　瓦編１解説』1974，『飛鳥・藤原宮調査報告Ⅱ』1978を参照した。

2 平　　瓦

第１次成形技法には，桶巻作りと一枚作りがある。しかし今回は破片を対象としており，すべての資料についてその判別をつけることは困難である。さらに側縁のある破片であっても，側面や凹面側の側縁にケズリによる調整を施しているため，分割破面や布端痕が残らず，観察の不可能な場合がある。ここでは各成形技法の特徴を示す破片について記述するにとどめる。 *

桶巻作りを示すものとしては，側面の分割破面，凹面の模骨痕，布の綴じ合わせ痕，粘土板の合わせ目などをあげることができる。今回出土した平瓦片のなかには側面に分割破面を残すものが10点，凹面に模骨痕を残すものが29点，布の綴じ合わせ痕をもつものが16点ある。ただし布の綴じ合わせ痕をもつもののうちの１点は，綴じ合わせの左右で，糸目の傾斜が食い違っており，桶巻き作りによるものと考えられるが，他の模骨痕と布の綴じ合わせ痕については，一枚作りでも発生する可能性があり，桶巻き作りの絶対的な指標とはなし得ない。また粘土板の合わせ目は，今回の出土品中には確認できなかった。 *

次に一枚作りについては，桶巻き作りに見られるような，確実な証拠に乏しいが，凹面の布端痕などをあげることができる。凹面に布端痕をとどめる破片は67点ある。厳密には側縁に平行する布端痕が一枚作りの証左と言え52点ある。この他一枚作りを示すものとしては，各１点ずつであるが，側面に糸切り痕跡を残すものと，布目の残るものとをあげることができる。前者は，粘土板を切り取る前の粘土塊側面を糸切りによって平坦にしたものであろう。後者は左下隅の破片で，側面に長さ 5.5 cm にわたって凹面と連続する布目が見られる。ただし本例は分割界面が，ケズリ調整のあとも一部残ったものと考えることもできる。 *

この他凹面の側縁近くで布目が乱れる破片があり，消極的ながら一枚作りの証拠とされる[1]。布目の乱れは，布の中心部より布端側により起こりやすい。桶巻き作りでは，布端部分は綴じ合わされ，布の乱れが起りにくいとともに，必ずしも出来あがった平瓦の側縁近くには位置しない。布目の乱れが側縁近くに起こるということは，布が平瓦一枚分の大きさに近く，布端が側縁近くに位置していたためと考えることができる。 *

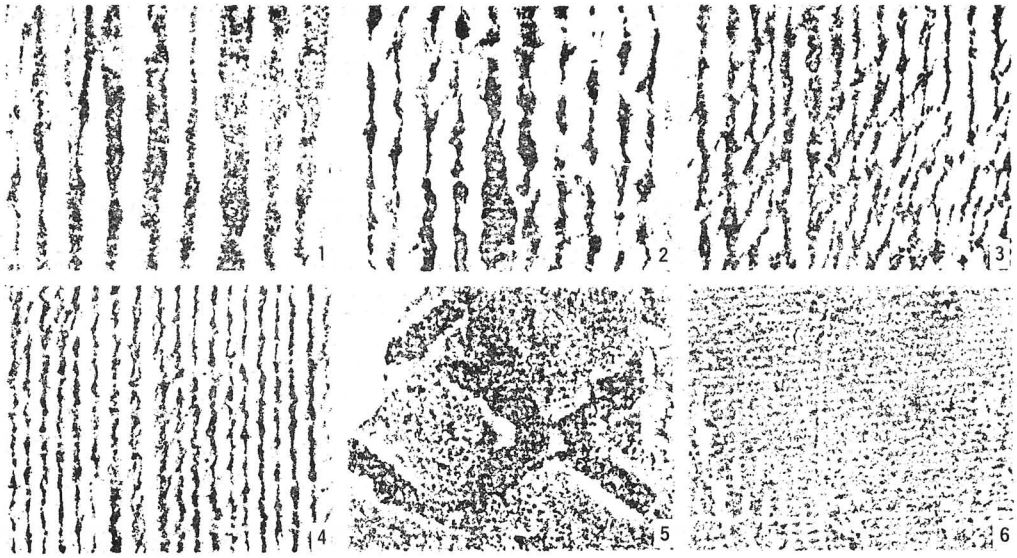
第２次成形には，縦位縄叩き目ａ種と，斜格子叩き目ｂ種があり，ｂ種は２点のみである。ａ種は単位長さあたりの縄目本数を基準に４種に細分される。3 cm 当りの縄目の本数が６～７本のａ１種，８～10本のａ２種，11～12本のａ３種，14～15本のａ４種である。 *

第２次成形終了後調整の工程にはいる。調整は凸面，凹面，側面，端面に，それぞれ異なった手法で行われている。凸面の調整は横方向のナデ調整が最も多く528点に認められる。次いで，指頭によるオサエが272点に認められる。ただしこのオサエは，側縁近くに位置するものが多く，瓦を成形台上から移動するときに付いたものかもしれない。 *

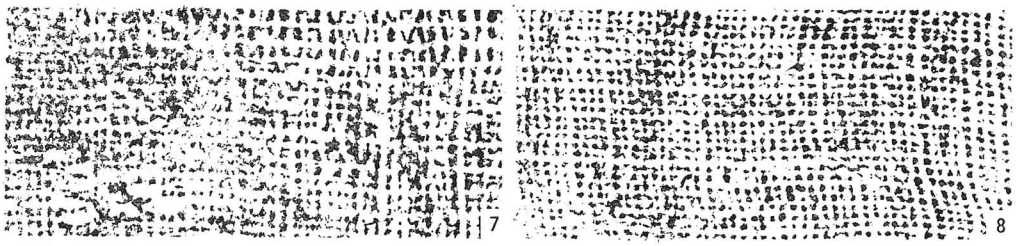
凹面は大部分が無調整のままで，布の圧痕（布目）が残るものが多い。布目は丸瓦同様経８本×緯７本程度の粗いａ種と，経10本×緯８本程度の細かいｂ種との２グループに分類した。凹面にナデ調整を施こすものが968点ある。部分的に縦位のナデ調整を加えるものと，凹面全面にナデ調整を行い，布目を完全に消し去るものがある。 *

側面は分割破面をそのまま残すａ種と，全面をケズリによって平滑にするものがある。ａ種

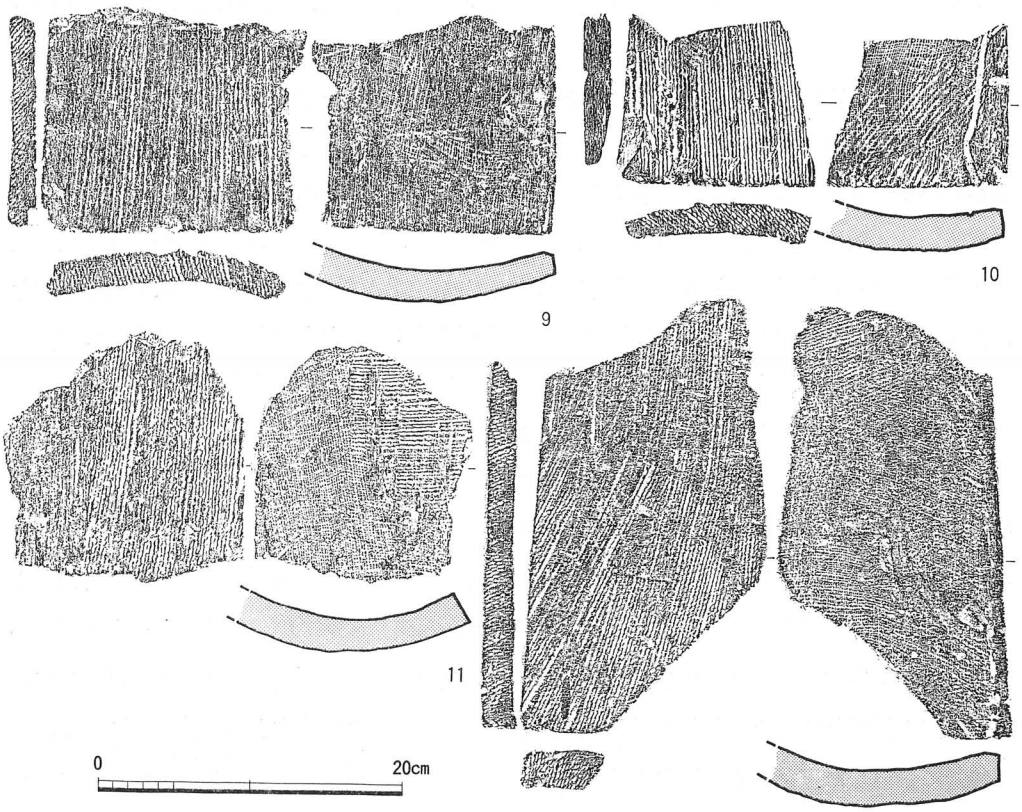
1) 五十川伸矢「古代瓦生産の復原」（『考古学メモワール』1980）p.68 および註16。



a．凸面の第２次成形技法（1：a1種,2：a2種,3：a3種,4：a4種,5：b種,6，凸ナデ瓦　1：1）



b．凹面の布目（7：a種,8：b種　1：1）



c．凹面の縄目（11），側面・端面の縄目（9.10.12）　1：5

Fig. 36　平瓦の第２次成形技法・調整手法他

は10点だけで大部分は後者に属する。後者は側面と凸面・凹面のなす角度が直角近くになるｂ種と，側面と凸面のなす角度が鈍角，凹面のなす角度が鋭角となるｃ種，両側縁に幅広い面取りを行い，側面を断面三角形に突出させるｄ種にわかれる。側面全面にわたるケズリのあと，側縁に面取りを行うものも多い。

端面も側面同様に，全面をケズリによって平滑にしたあと，凹面側端縁に面取りを行う。 *

凸面の叩き目が，圧せられてつぶれているものや，凹面の布目を完全にナデ消し平滑にしたものがあり，凸面以外の調整には，凹形調整台が使用されたと考えられるものがある。

焼成は，軒瓦の記述に用いた優・良・可の３段階の相対的指標で表わした。

次に特殊な技法を示すものに，側面や端面や凹面に残る縄目をあげることができる。これらはいずれも凸面に残された叩き目と同様な密度であるが，叩きの方向は様々である。端面の叩き目は平瓦の弯曲と無関係に，ほぼ平行に施されており，第１次成形を行う以前の，例えば，粘土板を切り取る以前の粘土塊を叩きしめた痕跡と考えることはできない。また側面や端面の叩きは，調整のためのケズリによって一部が消されているのがあり，凹面の叩き目は篦書きによって切られているものがある。このためいずれも第２次成形が終って，次の調整作業が始まるまでの間に施されたものと推定できる。側面・端面の叩き目は補足的な叩きしめと考えることができる。凹面の縄目は，凹形成形台上での叩きしめを想定できるほど丁寧なものではなく，方向もまちまちである。さらに端縁に平行に残される場合も多い。 * *

３　ま　と　め

これまで述べた各部位の成形･調整の各種技法を，第２次成形を中心にまとめたものがTab.６である。 *

本表から第２次成形の縄叩き目ａ３種とａ４種が今回出土した平瓦の主体をなすことがうかがえる。この２種の瓦を比較すると，ａ３種に側面調整ｃ種が多く，凸面のナデ調整が多いことがわかる。ａ３種における凸面のナデ調整の多さは，以下に述べる凸ナデ瓦との関係で注目される。ａ４種では側面調整ｂ種が多く，凹面に縄目をもつものの多い点を指摘できる。またａ４種のみに篦書きが見られる。篦書き瓦については次項で詳述するが，歌姫西瓦窯の篦書き瓦もａ４種縄叩き目である点に注目したい。側面・端面に縄目をもつものは，ａ３種で合計８（0.7%）点，ａ４種で10点（2.0%）となり，ａ４種に多いということができる。 *

以上は第２次成形をもとにしたが，叩きによる第２次成形を行ったあと，凸面全面にナデを行い叩き目を消してしまう瓦（以下凸ナデ瓦と略する）が412点ある。凸ナデ瓦のなかには，縄叩き目の痕跡をわずかにとどめるものが103点あり，縄叩きによる第２次成形のあとナデ調整を行ったものと考えられる。凸ナデ瓦の特徴は，側面調整がｃ種，凹面の布目がｂ種となるものが多い。特に縄叩き目ａ４種をもつ瓦と比べると，布綴じ痕跡・模骨痕跡をもつものが多い反面，側面・端面や凹面に縄目が残るものが少ないなどの違いを指摘できる。これに対して，凸ナデ瓦と縄叩き目ａ３種をもつ瓦とは，凸面の縄叩き目をナデ消すという特徴を除けば，他の特徴に類似した点を多く見出すことができる。あるいは縄叩きを目ａ３種もつ平瓦の一部に，凸面の縄叩き目を完全にナデ消すものがあり，それが凸ナデ瓦として抽出できたのかもしれない。 * *

今回資料とした丸瓦・平瓦は，包含層出土のものが大部分を占め，保存状態が悪いとともに，小破片になったものが多い。そのため調整などの観察が不可能なものが多く，なかには磨滅によって叩き目すら観察不能なものも少なくなかった。また数量的な処理によって，個体数を算出しようと試みたが，おもに上記の理由のため，各種の方法ごとに，数値に大きなバラツ
＊ キが生じ，Tab. 6 などの集計に生かすことができなかった。平城宮・京で出土する奈良時代の瓦のなかには，焼成の比較的軟質なものも多く，今回のように観察の困難な場合がある。今後，遺構出土の保存の良い一括遺物を扱かうことによって，より精緻な分類・考察が可能となるであろう。その場合，今回用いたような，携帯の可能なハンドヘルドコンピューターを用いた処理システムが，大きな威力を発揮するであろう。事前に完形遺物の観察によって，入力す
＊ る情報を限定できれば，さらに合理的な資料収集と解析が期待できるであろう。

Tab. 6 平瓦集計表

凸面第2次成形 ＼ 調整その他		a 1種	a 2種	a 3種	a 4種	b種	凸ナデ瓦
		41	156	1080	488	2	412
凸面	オサエ	8	14	104	68	0	0
	糸切り痕	1	1	2	3	0	1
凹面	布目 a種	6	23	215	186	1	52
	布目 b種	21	56	388	172	0	177
	ナデ調整	9	49	282	95	1	193
	布綴じ痕	0	1	9	0	0	5
	模骨痕	0	0	16	3	0	8
	縄目	0	2	5	22	0	3
	篦書き	0	0	0	「キ」14 「十」1 「大」1	0	0
	糸切り痕	3	4	57	58	0	5
側面	a種	0	1	3	1	0	1
	b種	5	30	159	119	1	47
	c種	7	35	233	72	0	127
	d種	1	4	26	10	0	12
	縄目	0	1	4	5	0	1
端面縄目		0	0	2	3	0	0
側端両面縄目		0	0	2	2	0	1

D 文　字　瓦

丸瓦・平瓦に篦で文字または記号を施した破片が19点出土している。内訳は，「キ」14点，「十」３点，「大」１点，「夫」１点である。これらと同じ種類の篦書きが6285型式Ａ種・6667型式Ａ種の焼成窯である歌姫西瓦窯から出土している。瓦の供給関係を知る上で重要と思われるので，姫歌西瓦窯出土品[1]と対比しながら述べる。

「キ」　平瓦の凹面広端寄りに，広端を上，狭端を下にして記す。１点だけは狭端寄りに記す。字画は太く横画が先で縦画があとである。凸面には縦方向の縄叩き目ａ４種（Ｃ　丸瓦・平瓦の項参照。以下同）が残り，端面近くの凸面に手指によると思われるオサエが見られる。凹面には粗いａ種布目が良く残るが，側面・端面近くで布目の乱れるものが多い。側面の調整はｂ種である。胎土には数mm大の砂粒を少量含む。外面・断面とも灰色で焼成優のもの，外面灰褐色か灰白色・断面灰白色で焼成良のもの，外面灰褐色・断面黒色で焼成可の３種がある。凹面に縄目の見られるものが３点ある。歌姫西瓦窯で出土した「キ」は１種類で，今回出土したものと同一字形である。側面・端面の調整が類似するとともに，凹面に縄目のある破片が１点ある。焼成にも優良可の３種がある。

「十」　第１画・第２画とも３cm前後と小形のＡ類２点と，第１画７cm，第２画6.3cm以上と大形のＢ類に分けられる。Ａ類は字画が細く，丸瓦の凹面に記される。内１点は玉縁の凹面である。凸面は縦方向の縄叩き目をナデ消す。凹面の布目はｂ種である。胎土精良。焼成良。外面・断面とも灰白色。Ｂ類は「キ」に似た太い字画で，平瓦凹面に記される。縦方向の凸面は縄叩き目ａ４種が残る。凹面の布目はａ種である。凹凸両面に糸切り痕が残る。胎土精良。焼成優。外面・断面とも灰色。歌姫西瓦窯出土品にも同じような２種類があり，Ａ類１点だけは丸瓦凹面に記され，あとは平瓦の凹面に記される。凸面には縦方向のａ４種縄叩き目が残る。

「大」　字画は細く，平瓦凹面の隅に記される。凸面は縦方向の縄叩き目ａ４種が残る。凹面の布目はｂ種で，側縁近くで乱れた部分がある。側面の調整はｂ種で，横方向（側縁に平行する）の縄目が残る。端面には，凹面から連続する布目が残る。胎土は比較的精良。焼成良。灰白色。歌姫西瓦窯では「大」が最も多く，数種に細分される。なかの１種と今回出土したものの字形が類似する。側面の調整はｂ種で，凹面の布目はｂ種である。

「夫」　平瓦凸面に記される。字画は太く深い。凸面は縦方向のａ３種縄叩き目が残る。凹面は全面がナデによって平滑に仕上げられる。胎土は砂粒を含む。焼成可。外面・断面とも灰褐色。歌姫西瓦窯でも「夫」は１点出土しているが，字画が細く小形である。また凸画が縦方向のａ４種縄叩きで，凹面に記入されている等の違いがある。

歌姫西瓦窯では４号窯を中心として，「大」38点，「七」13点，「夫」12点，「十」10点，「キ」８点，「㐅」２点，「夫」１点の篦書き瓦が出土している。これらと今回出土した篦書き瓦を比べると，「夫」を除き字形がまったく同じであるとともに，字画の太さ・筆順・記入位置などの細部にわたる特徴が一致する。また篦書き瓦の側面や端面の調整，側面や凹面の縄目の存在などの細部にわたる特徴も一致している。したがって今回出土した「夫」を除く３

1）奈良県教育委員会『奈良山』1973，p.9。

種の箆書き瓦は，歌姫西瓦窯から供給されたものと推定することができる。[1)]

次に今回の出土品と歌姫西瓦窯での箆書きの種別数量を比べると，今回は「キ」が圧倒的に多く，歌姫西瓦窯で主体をなす「大」が１点しか見られない点に顕著な特徴を見い出すことができる。また「キ」は14点のうち10点がＱ地区で出土するとともに，SB1474 の柱穴や SE
＊ 1547 の埋土など，遺構から出土したものが多い。

Fig. 37 箆書き瓦（１：１）

1) ただし，箆書きが属人的なものと仮定すれば，工人の移動によって，まったく別の瓦窯から，同一の特徴をもつ箆書き瓦が供給される可能性がある。

E 道 具 瓦・塼

道具瓦では，面戸瓦11点，熨斗瓦１点，塼は小片を含めて50点が出土した。この他平瓦の一部を加工し，凹面側を幅広く面取りした破片が出土した（Fig. 38)。小片のため，全体の形状・用途は不明である。

1 面 戸 瓦

いずれも丸瓦を生乾きの段階で加工して面戸瓦とする。形態はいわゆる蟹面戸である。凸面の縦方向の縄叩き目を横方向にナデ消す。凹面には細かいｂ種（平瓦の凹面布目ｂ種と同じ）の布目が良く残る。布綴じの痕跡を残すものがある。丸瓦を加工した部分の凹面側側縁には幅広い面取りが施され薄く仕上げられている。

全形のうかがえる資料が２点ある。大きさは長さ 18.8 cm，幅 14.8 cm，と，長さ 21.7 cm，幅 14.7 cm である。いずれも胎土精良。焼成優。外面灰色～暗灰色。断面灰色。出土遺構の明らかなものは，SE1547 から２点，SE1511 から１点，SD1525 から１点である。

2 熨 斗 瓦

１点出土。平瓦を生乾きの段階で半截して作った，いわゆる半熨斗である。凸面は全面にわたってナデ調整を行っており，広端部近くにわずかに縦方向の叩き目が残る。凹面は不調整のため全面に糸切り痕と布目痕（ｂ種）が明瞭に残る。側面はヘラケズリによって仕上げ，凹面側の側縁には幅広い面取りを施す。広端部幅 11.0 cm，長さ 14.8 cm 以上，厚さ 2.1 cm。胎土精良。焼成優。外面・段面とも灰色。SD1545 から出土。

3 塼

すべて長方塼である。大きさに応じて４種にわけることができる（Tab. 7)。

A類は縦 27.4～28.2 cm，横 19.3～19.7 cm，厚さ 6.5～7.3 cm。表面（型に粘土を詰めたときの上面）と裏面（型に粘土を詰めたときの下面）はナデ調整を行うが，側面は不調整。胎土に砂粒を多く含む。焼成可で，B類に比べて表面の磨滅したものが多い。

B類は縦 22.6～23.2 cm，横 14.0～16.5 cm，厚さ 6.6～7.4 cm。表面は粗くナデる。裏面はほとんど無調整のままである。４側面のうち，１面～２面は無調整で凹凸のある面が残るが他はナデ調整を施す。胎土精良で砂粒を含まない。焼成良。全体に灰白色を呈するが側面だけ灰白色を呈するものがある。

C類は厚さが 8.3 cm あるもので，胎土精良。長辺・短辺の大きさは不明。外面灰黒色。断面灰白色。焼成良。

D類は厚さが 5.0 cm あるもので，胎土に黒色の砂粒を含む。長辺・短辺の大きさは不明。外面断面ともに灰色。

いずれも型に粘土を詰め込んで成形している。割れ口やひび割れの観察によると，まず型全体の半分まで粘土を詰め込んだ後，あとの半分に粘土を詰め込む２段階の工程がうかがえる。粘土詰め込みのときの指や手掌の圧痕が明瞭に残るものもある（Fig. 39)。また破面に糸切り痕跡を残すものが１点あるが，板状粘土をあわせた成形痕跡は見出せない。

完形品と規格の推定できる大きな破片をあわせて，A類８点，B類８点，C類・D類は小破片でC類１点，D類２点である。この他の小破片はあわせて32点ある。

これら４種の塼は，宮内でみられる塼と規格の点で異なっている。宮内では建物の基壇外装などに多量の塼が用いられている。例えば，第一次大極殿地域の塼積擁壁SX6600[1]では長さ30 cm 前後，幅 15～16 cm，厚さ 7～8 cm の長方塼が用いられる。また宮内西方の官衙地域では４種の塼が出土しているが，いずれも今回出土した塼とは大きさが異なっている[2]。大きさで類似する資料では，左京四条二坊一坪の調査で検出した八角形横板組井戸SE2600[3]から出土した塼をあげることができる。ここの塼は３種に分類され，大形の１点は宮内の長方塼と同一規格であるが，最も量の多い中形塼は今回のA類と，小形塼は今回のB類と同じ規格と考えられる。平城京内では，平城宮と同じ規格の塼が用いられている場合もあるが（左京三条二坊十・十五坪など），今回のように別規路の塼が使用される場合もある。例えば左京五条二坊十四坪では[4]A類の塼が掘立柱の礎盤として使用されている。

Tab.7 塼 計 測 表

種別	出土遺構	大きさ cm			色	重さ kg
		長辺	短辺	厚さ		
A	SE1547	(16.5)	19.7	6.5	灰色	2.47
	SE1547	(22.4)	(19.2)	6.3	灰褐色	2.87
	SE1547	27.9	(9.3)	6.4	灰色	2.21
	SE1547	27.6	(18.2)	7.0	灰白色	4.79
	SB1552	27.9	(18.2)	6.7	灰白色	4.68
	SB1552	28.2	(17.1)	6.6	灰白色	4.67
	PP34 暗灰粘土	28.0	(16.9)	7.2	灰褐色	4.93
	PO36 暗褐土	27.4	19.3	7.3	灰色	5.75
B	SE1547	(12.2)	16.0	(5.2)	灰白色	1.02
	SE1547	22.6	14.5	7.4	灰白色	4.15
	SE1547	(20.6)	(13.5)	7.1	灰色	2.82
	SE1547	(12.3)	(14.6)	(5.6)	灰色	0.87
	SB1552	22.3	(14.8)	6.6	灰白色	3.30
	SG1504	(18.2)	16.5	6.9	灰白色	2.56
	PR38 褐灰粘土	22.8	14.0	7.2	灰色	3.74
	PP34 暗灰粘土	23.2	(13.7)	7.3	灰白色	2.84
C	SB1571	(10.6)	(10.3)	8.3	灰黒色	1.30
D	Q地区 灰褐土	(7.3)	—	5.0	灰色	0.49

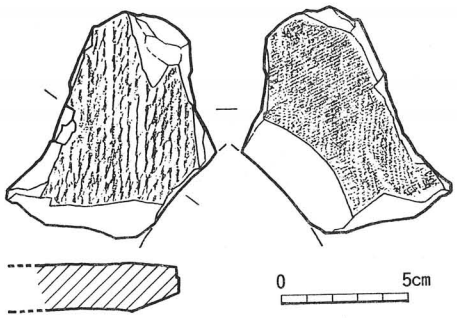


Fig.38 加工した平瓦片（１：３）

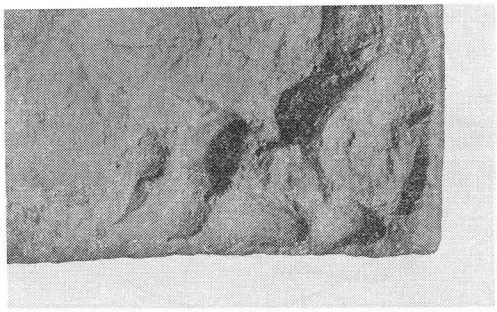


Fig.39 塼に残る指の圧痕

1）『平城宮調査報告Ⅺ』1981，p.127。
2）『平城宮調査報告Ⅻ』1985，p.87。
3）『平城京左京四条二坊一坪　発掘調査報告』1984，p.23。
4）奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書　昭和54年度』1980，p.18。

F 小　　結

1　軒瓦の組み合わせ

今回出土した軒瓦の構成は Fig. 40のようである。出土頻度から見て，6285型式A種と6667型式A種，6282型式Ｂｂ種と6721型式Ａ・Ｃ種の組み合わせが推定される。前者の6285型式A種と6667型式A種は，歌姫西瓦窯でもこの組み合わせで出土している。6282型式Ｂｂ種と6721型式Ａ・Ｃ種の組み合わせは平城宮大膳職地域で出土の多いものである。大膳職地域では6133型式と6732型式の組み合わせも明らかにされており，今回出土点数は少ないが，6133型式C種と6732型式A種の組み合わせが推定できる。この他の軒瓦には他地域での調査結果から組み合わせの推定される例もあるが（6348型式A種—6675型式A種，6304型式C種—6664型式C種），出土点数が少なく認定するに至らなかった。

2　軒瓦の時期

平城宮出土の軒瓦は５時期に区分し編年されている[1)]。今回は従来の編年をかえる遺物の出土はなかったので，平城宮軒瓦編年にしたがって記述する。また遺構から出土した軒瓦は，遺構の時期区分ごとに Tab. 5 にまとめた。

(1)　平城宮軒瓦編年第Ⅰ期（和銅元年～養老５年）　6274型式A種，6284型式C種，6279型式A種，6641型式C種，6664型式C種，6675型式A種がこの時期に属する。6272型式A種も紋様構成から見てⅠ期に位置付けられる。いずれも出土量は少ない。出土地点にも顕著な傾向は認めがたいが，調査区北端の二条条間路に接する地域で，6279型式A種２点，6641型式C種２点，6664型式C種１点が出土している。

(2)　平城宮軒瓦編年第Ⅱ期（養老５年～天平17年）　6348型式Ａａ種，6285型式A種，6314型式B種，6664型式F種，6667型式A種，6671型式K種，6691型式A種がこの時期に属する。今回の調査では6285型式A種と6667型式A種の組み合わせが中心であり，この時期の瓦が最も多い。6285型式A種と6667型式A種の組み合わせは，紋様などから見てⅡ期のなかでも古く位置

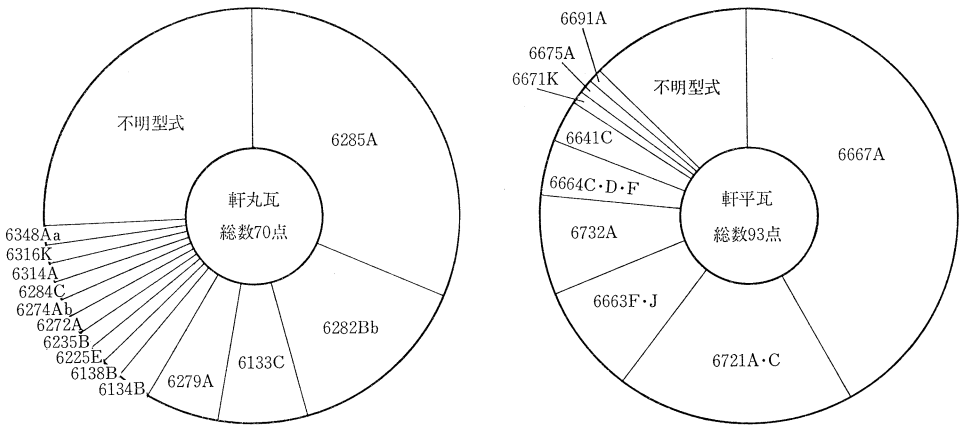


Fig. 40　軒瓦の出土比率

1）『基準資料Ⅱ　瓦編２解説』1975。

付けられるものである。また6664型式F種は平城宮内の土壙SK2101で神亀5年(728)，天平元年(729)の木簡と共伴し[1]，Ⅱ期の初期に位置付けられている。6348型式Aa種はⅡ期に位置付けられているが，内区紋様が6279型式に酷似している。また平城京左京四条二坊一坪の調査では6348型式Aa種と6675型式A種が組み合うことが明らかにされており[2]，この組み合わせが
＊ Ⅰ期に遡る可能性がある。6691型式A種は『平城宮報告Ⅺ』[3]でⅡ期に変更された瓦である。ただし製作時期はⅡ期に遡るが，平城宮で使用されるのはⅢ期の時期になるものと考えられている。今回の調査でもⅢ期になって平城宮と同笵の瓦の使用が顕著になる点から見て，6691型式A種の使用はⅢ期に下がる可能性がある。

Ⅱ期の瓦は6667型式A種がSD1525の上層から6点出土しているが，あとはまとまった出土
＊ は見られない。6348型式Aa種，6314型式B種，6671型式K種は調査区北端で出土している。

(3) 平城宮軒瓦編年第Ⅲ期(天平17年～天平勝宝年間)　6282型式Bb種，6133型式A種，6225型式E種，6235型式B種，6316型式K種，6663型式F・J種，6721型式A・C種，6732型式A種がこの時期に属する。Ⅲ期には6282型式Bb種と6721型式A・C種の組み合わせが主体を占める。6282型式Ha種・6721型式D種が平城宮内裏北外郭地域の土壙SK820から，天平
＊ 19年(747)の銘のある木簡を伴なって出土しており[4]，天平末年を中心とした年代が与えられる。6282型式はA種をのぞくといずれも良く類似した紋様構成であり，H種と同様な年代が与えられる。平城宮大膳職地域では6282型式と6721型式，6133型式A～C種と6732型式A～D種の組み合わせが多く出土しており，今回の調査区でもそれと同笵の瓦を用いて造営・整備が行なわれたと考えられる。6225型式A・C種と6663型式C種の組み合わせは，『平城宮報告Ⅺ』[5]
＊ でⅢ期に位置付けられている。今回出土した6225型式E種や6663型式F・J種は紋様構成に大きな違いがあり，やや後出のものであろう。Ⅲ期の瓦は，SD1525, SE1547, SG1504, SD1466および，SB1540付近の包含層(暗褐色土)からの出土が多い。

(4) 平城宮軒瓦編年第Ⅳ期(天平宝字元年～神護景雲年間)　6138型式B種だけである。この瓦は法華寺阿弥陀浄土院所用の瓦とされている。SB1574の柱抜取り穴から1点出土した。平城
＊ 宮軒瓦編年第Ⅴ期(宝亀年～延暦3年)の軒瓦は出土していない。

3　瓦窯との供給関係

今回出土した6285型式A種と6667型式A種の組み合わせは，従来から歌姫西瓦窯で生産され供給されたものと考えられてきた。この点について再検討する。

歌姫西瓦窯は，平城宮北方の奈良山丘陵にあり，平城ニュータウン建設にさきだって，奈良
＊ 国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部によって1972年7月31日から9月28日まで調査が行なわれた。その結果瓦窯6基が発見され，6285型式A種97点，6667型式A種33点をはじめ6313型式C種12点，6314型式E種7点，6402型式A種2点，6685型式B種1点が出土した[6]。

8285型式A種　歌姫西瓦窯の製品(瓦窯出土軒瓦と略す)は，今回出土したもの(今回出土軒瓦と略す)に比べ，全体に笵の磨耗が著しく進んでいる(Fig. 42)。具体的には，今回出土軒瓦には

1)『平城宮調査報告Ⅶ』1975，pp. 71。
2)『平城京左京四条二坊一坪　発掘調査報告』1984，p. 23。
3)『平城宮調査報告Ⅺ』1981，p. 243。
4) 1)に同じ。
5)『平城宮調査報告Ⅺ』1981，pp. 242, 243。
6) 奈良県教育委員会『奈良山』1973，pp. 20, 21。

見られない笵の木目痕が，瓦窯出土軒瓦には横方向の細い隆起線となって観察される。瓦窯出土軒瓦は笵の磨耗によって紋様が不鮮明になり，子葉基部が一体となったり，間弁の突出が著しく低いものなどが見られる。製作手法の点でも違いが見られる。今回出土軒瓦では，外区外縁の先端は，軽くナデを行うのみであるが，瓦窯出土軒瓦ではヘラケズリを加え平坦面をつくっている (Fig.41)。また丸瓦の接合に当っては，今回出土軒瓦では丸瓦凸面の先端部にキザミをいれるが，瓦窯出土軒瓦にはこのキザミがない。瓦窯出土軒瓦には今回出土軒瓦に見られるような，須恵質の堅緻な焼成を示すものがなく，灰褐色の軟質の焼成で，胎土に大粒の砂粒を含む。

6667型式A種　今回出土軒瓦のうち観察可能なものはすべて平瓦部凸面にａ３種縄叩き目をもつのに対し，瓦窯出土軒瓦は大部分がａ４種の縄叩き目で，ａ２種縄叩き目も見られる。今回出土軒瓦は外縁が３段に立ち上がり高くなるのに対し，瓦窯出土軒瓦では低く幅広くなっている (Fig.43)。また瓦窯出土軒瓦には外縁部分に縄目をもつものが多いが，今回出土軒瓦には縄目をもつものがない。瓦窯出土軒瓦は平瓦部凹面側側縁にヘラケズリによる幅広い面取りを施す。今回出土軒瓦は平瓦部凹面の瓦当寄りを縦方向にナデるのに対し，瓦窯出土軒瓦は横方向に幅広くヘラケズリを行なう。また今回出土軒瓦は顎の長さが 7～7.5 cm に対して，瓦窯出土軒瓦は5～6 cm ほどとみじかく，顎面の瓦当に向っての傾斜が，前者では急であるのに対し，後者では緩かである (Fig.44)。6285型式A種と同様，瓦窯出土軒瓦には今回出土軒瓦に見られるような須恵質の堅緻な焼成を示すものがほとんどなく，灰褐色～灰白色の軟質の焼成である。

歌姫西瓦窯の北方には，谷一つを隔てて音如ケ谷瓦窯があり，４基の平窯が検出されている。ここでも6285型式A種９点，6667型式A種３点が出土している[1]。歌姫西瓦窯出土品と類似するものもあるが，歌姫西瓦窯出土品ほど笵キズが進行しておらず，6285型式A種では丸瓦凸面に接合のためのキザミを入れているなど，今回出土軒瓦に近いものもある。音如ケ谷瓦窯自体は，平城宮軒瓦編年Ⅳ期の瓦を焼成しており，6285型式A種，6667型式A種は周辺の他の瓦窯からの粉れ込みであろう。

以上のように今回出土軒瓦は，歌姫西瓦窯で焼成された軒瓦と同笵であるが，笵の磨耗度や製作手法などの細部に明らかな違いがある。むしろ音如ケ谷瓦窯出土の粉れ込みと考えられるもののほうが，今回出土瓦により近い。今回出土軒瓦は歌姫西瓦窯から供給されたものではなく，周辺に存在する未知の瓦窯から供給されたものと推定できる。

観点をかえれば，今回出土の平瓦の中には箆書きや細部の製作手法の一致などによって，歌姫西瓦窯からの供給が推定できるものもある。ただし61ページの註１で述べたように，未知の瓦窯で，歌姫西瓦窯とまったく同じ特徴と箆書きをもった平瓦が生産されていたとしたら，以上のような結論にはならない。しかし今のところ，今回出土軒瓦と歌姫西瓦窯とおなじ特徴をもつ平瓦とが，いっしょに焼成された可能性は少ないと考えている。なぜならば，もし今回出土軒瓦と歌姫西瓦窯と同じ特徴をもつ平瓦が，未知の瓦窯で同時に焼成されていたとしたら，軒平瓦にも縄叩き目ａ４種をもつものが現われると考えねばならない。その事実が観察されない現状では，当初推定したように，軒瓦は未知の瓦窯から供給され，平瓦の一部は歌姫西瓦窯から供給されたと考えるのが妥当である。

---

1)　京都府教育委員会『奈良山Ⅲ』1979，p.24。

今回出土軒瓦　　瓦窯出土軒瓦

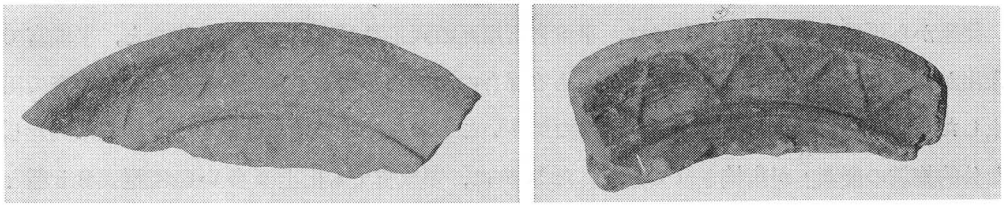


Fig. 41　6285型式A種　　外区外縁の比較

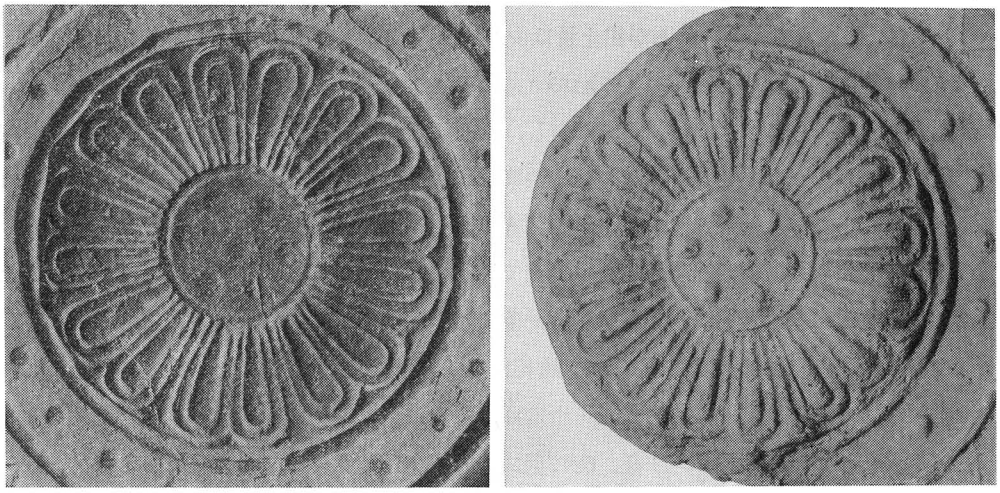


Fig. 42　6285型式A種　　内区の比較

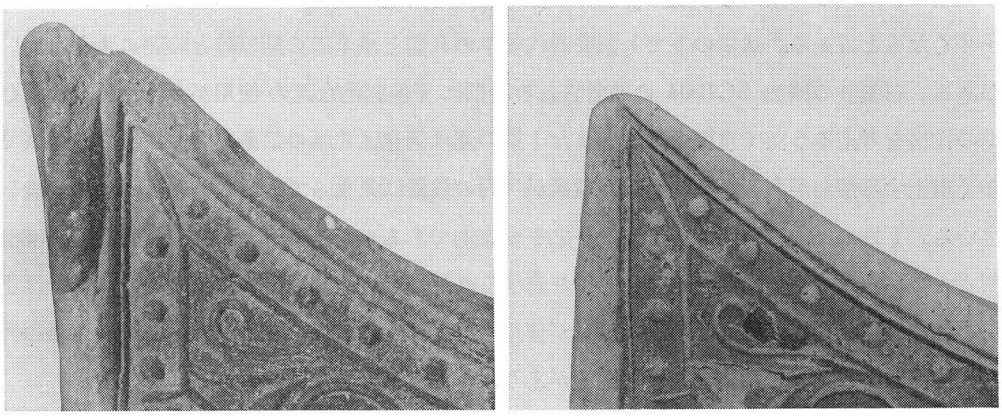


Fig. 43　6667型式A種　　外縁の比較

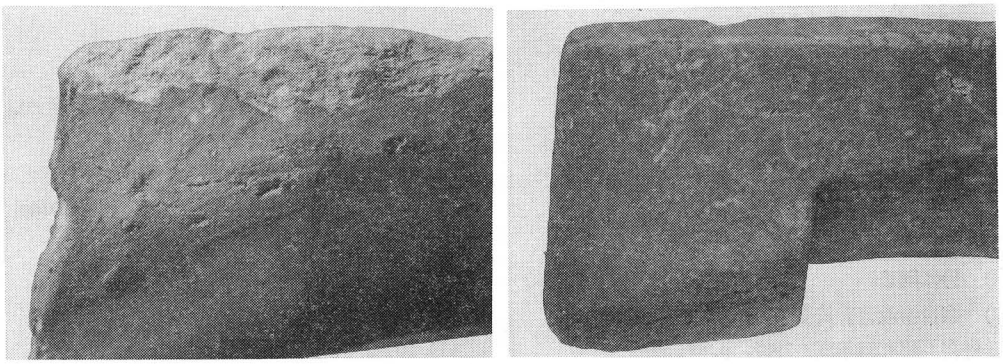


Fig. 44　6667型式A種　　顎の比較

5　瓦から見た調査地の性格

従来から平城京内出土の軒瓦には，平城宮所用瓦の同笵品が主体を占める場合と，平城宮で未出かあまり出土しない軒瓦が主体を占める場合の２様相が指摘されている[1]。今回の調査で出土した瓦については，平城宮と同笵のものが多いことから，この地の性格も「平城宮に関連した公的施設の要素」[2]が指摘されてきた。たしかに，平城宮でも出土の多い6282型式Ｂｂ種と6721型式Ａ・Ｃ種，6133型式Ａ種と6732型式Ａ種の２種の組み合わせは，軒瓦出土量の30％弱を占め，Ⅲ期の瓦の中心を占める。しかしⅡ期の中心となる6285型式Ａ種・6667型式Ａ種の組み合わせは，平城宮でも見られるが出土量は少ない。平城宮跡第163次調査（1985年１月～３月）までの平城宮内出土軒瓦32326点（軒丸15503点，軒平16823点）のうち，6285型式Ａ種は33点，6667型式Ａ種は16点にすぎない。これに対し，今回は6285型式Ａ種が22点，6667型式Ａ種が39点出土している。一方，この組み合わせは法華寺周辺で集中して出土している。主なものでは，1972年に行なわれた阿弥陀浄土院跡の調査[3]で，6285型式Ａ種が12点，6667型式Ａ種19点，1977年に行なわれた法華寺経楼推定地の調査[4]で6285型式Ａ種が31点，6667型式Ａ種が35点出土した。この他6285型式Ａ種は，平城京左京一条三坊十五・十六坪[5]，左京三条二坊十・十五坪[6]，左京六条二坊三坪[7]，左京四条二坊一坪[8]，唐招提寺[9]，東大寺[10]などでも出土している。また6667型式Ａ種は，平城京左京一条三坊十五・十六坪[11]，左京三条二坊十・十五坪[12]，東大寺[13]などで出土している。この他6663型式Ｆ・Ｊ種，6272型式Ａ種，6316型式Ｋ種，6348型式Ａａ種などは，今回の出土量は少ないが，平城京内で点々と出土の知られるものである。

以上の結果からⅠ期からⅡ期の時期には，平城京的な瓦が多く，Ⅲ期になると平城宮的な瓦が多くなると言える。遺構の上でも奈良時代前半のＢ期と後半のＣ期以降との間に大きな違いがある。石張りの園池 SG1504 の造営される時期に平城宮的な瓦の使用が多くなる点は，Ｃ期の性格を考えるうえで重要である。またⅠ期の瓦は調査区北端の二条条間路に接する地域で多く出土する傾向がある。条坊関係の遺構が坪内の整備に先立って造営された可能性を示唆している。Ⅱ期の瓦の性格については，一応平城京的である点を指摘したが6285型式Ａ種，6667型式Ａ種が法華寺周辺に出土が多い点は注意する必要がある。法華寺経楼推定地の調査では下層の掘立柱建物の根固めとして上記の瓦が使用されている。6285型式Ａ種，6667型式Ａ種の性格は法華寺下層遺構の性格と密接な関連があり，今後に残された課題である。

1）『平城京左京三条二坊』1985，p.24。
2）『平城京左京二条二坊六坪　発掘調査概報』1976，p.14。
3）『年報　1973』1974，pp.27～29。
4）『年報　1977』1978，pp.32，33。
5）『平城宮報告Ⅵ』1974，p.34。
6）1)に同じ。
7）奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書　昭和54年度』1982，p.49。
8）『平城京左京四条二坊一坪　発掘調査報告』1984，p.19。
9）『奈良六大寺大観　第12巻　唐招提寺 一』1969，pp.43，44。
10）岡本東三「東大寺式軒瓦について―造東大寺司を背景として―」（『古代研究』9，1976），p.23。
11）5)に同じ。
12）1)に同じ。
13）10)に同じ。

3 土　　器

発掘区の全域から土器が出土した。整理箱にして98杯分ある。そのうち半数は遺物包含層から出土したものである。遺構にともなったものとしては溝出土土器が最も多く，井戸がそれに次ぐ。この他土壙や柱穴からもごく少量の土器が出土している。

＊　出土した土器は総体としてみると，土師器4割弱，須恵器6割と土師器・須恵器が大部分を占め，他にごく少量の黒色土器，施釉陶器，瓦器があり，墨書土器，刻線文土器，漆付着土器などの特殊な用途に用いたもの，陶硯，土馬，埴輪などの土製品がある。

土器は，井戸・溝出土の一部のものを除き概して保存状況は悪く，かつ小片となったものが多い。時期的には奈良時代前半から平安時代前半が中心になる。

＊　以下，土器の記述は，池，溝，流路，井戸，土壙，建物，包含層の順に述べる。施釉陶器などの特殊な遺物については種類別にまとめた。

器種名，時期区分，調整手法などの記述については，既刊の『平城宮発掘調査報告』Ⅶ～Ⅻに原則的にしたがい，それぞれの内容の詳細に関しては特に説明を要するもの以外は触れない。土器についてはこれまで食器類を中心にして，胎土・色調・手法・形態などによる群別がおこ
＊ なわれ，土師器をⅠ・Ⅱ群，須恵器をⅠ～Ⅳ群にわけている。今回の報告でもこれに従う[1]。

土師器はⅠ群・Ⅱ群ともに出土しており，その他にⅠ・Ⅱ群以外のものもある。

須恵器については今回の発掘区ではⅠ群土器が多数を占めている。Ⅱ群土器がそれに次ぐ。Ⅲ・Ⅳ群土器は全くみられず，またⅠ～Ⅳ群のいずれにも属さない土器が少量ある。

土器の年代観については，平城宮出土の土器を別表（Tab. 8）のように区分している。本遺跡
＊ からは従来の成果を検討できる資料は得ていないので，本報告ではこれに従う。実測図は原則として縮尺1/4とし，一部に1/2も採用する。実測図に付した番号は写真図版にも共通する。1～99が土師器，100番代が須恵器，200番代が施釉陶器，300番代が土製品とする。実測図・写真に掲げた土器の法量・群別等については巻末に出土土器一覧表（別表4）として付載した。

A　SG1504出土の土器（PL. 22）

＊　池SG1504から少量の土器が出土した。SG1504の堆積土は灰黒色粘土で，池底石の間は灰色粘土である。池埋土は黄褐色斑入り灰褐色粘質土である。各層から少量の土器が出土した。平城宮土器Ⅴが主体を占める。

i　土　師　器

杯A・杯B・皿A・椀A・盤・甕がある。

＊　杯A（2）は口縁部がゆるく内彎ぎみに開くもの。内面と口縁部外面をヨコナデし，底部は不調整のままとする。f手法による製品に近似するが，内面のヨコナデには左まわりのあがりがみられる[2]。口縁端部外面は細い沈線状をなす。外面に粘土紐の継ぎ目を残す。

大別名称	略年代
平城宮土器Ⅰ	710A. D.
平城宮土器Ⅱ	725
平城宮土器Ⅲ	750
平城宮土器Ⅳ	765
平城宮土器Ⅴ	780
平城宮土器Ⅵ	800
平城宮土器Ⅶ	825

Tab. 8 平城宮土器の大別

1）胎土の観察は肉眼によった。

2）f手法については『平城宮報告Ⅳ』p. 25

皿A（4）はほぼ完形のもの。口縁端部を内側に少さく丸く肥厚させる。口縁部内外面のヨコナデは右まわり。c_0 手法。暗文はない。皿AⅠに属する。

椀A（3）法量から椀AⅡに属する。口縁端部は内側に小さく肥厚する。内面のヨコナデは右あがり。外面は c_3 手法で，ヘラミガキは口縁部外面では4方向に分け，底部では一方向におこなう。このほか椀Aには底部外面に線刻をもつものがある（3・後述）。 *

盤（5）高台をそなえた盤。把手の有無は不明。a_1 手法。口縁部外面のヘラミガキは太く間隔は粗い。口縁部外面はヨコナデする。内面にはヨコナデ前のハケメをかすかにとどめる。

ii 須 恵 器

杯A・杯B・杯B蓋・杯F・皿B・皿B蓋・鉢A・鉢D・壺A・甕・甑・平瓶・水瓶がある。 *

杯B　杯BⅡ・杯BⅢ・杯BⅣ（103）・杯BⅤ（101）がある。底部はすべてヘラキリ[1]。

杯B蓋　杯BⅢ蓋（104）・杯BⅣ蓋（102）がある。

皿B（107）底部は丸底ぎみで下方へ大きく突出する。口縁部外面は灰がかぶる。

皿B蓋（106）頂部外面はヘラキリの後ロクロケズリで仕上げる。

水瓶（108）倒卵形の体部に，外方に直線的にひらく高い高台がつく。体部内面はロクロ目が著しい。浄瓶の可能性もある。 *

B　SD1465・1466 出土の土器（PL. 22）

池溢流溝 SD1465・石敷排水溝 SD1466 から少量の土器が出土した。堆積土は暗灰色粘土と灰青色砂質土がある。時期的には平城宮土器Ⅴに属すものが主体を占める。

i 土 師 器 *

杯A・杯B・皿A・皿B蓋・椀A・椀C・高杯・甕がある。

杯A（6）は内面に暗文をもたず，c_3 手法。杯AⅠに属する。杯Aには他に内面に2段の放射暗文をもつ小片がある。

皿Aは，暗文をもたない。c_2 手法。

高杯（7）は杯部の破片で2段の放射暗文とその間にループ暗文を配するもの。 *

甕（9）は体部外面ハケメ，内面は縦方向のヘラケズリ。体部下半内面にこげつきがあり，外面に煤が付着する。（8）は口縁部内面にハケメを残す。体部内面はナデ。

ii 須 恵 器

杯B・杯B蓋・皿C・平瓶・甕A・壺Aがある。

杯B（115）は法量から杯BⅠにあたる。 *

杯B蓋　杯BⅠ蓋（109）・杯BⅢ蓋（110～113）に属するものがある。（110・111）は頂部外面をロクロケズリする。（110）は内面を硯に転用している。（109）は頂部外面に一条の沈線がある。意識的なものか。（114）は端部が強く屈曲するもので，環状つまみに復原した。

（8）・（111）は SD1465 出土。（5～7）・（109・110・112～115）は SD1466 出土。

1）本遺跡出土の須恵器杯・皿類の底部切り離しはヘラキリに限られる。以下原則として切り離し技法の記述を略す。

C　SD1545 出土の土器（PL. 22）

築地南側溝 SD1545 出土の土器は土師器が圧倒的に多く，約８割を占め，これに若干の須恵器が伴い，土馬も出土している。土師器は大部分が細片となっており，保存も悪く崩壊寸前で，器種の帰属も明らかでないものが大半を占め，製作技法の観察に耐えうるものは少ない。

＊ 時期的には平城宮土器Ⅱ～Ⅴに属する。土器は SD1545 の東よりの部分に多い。とくに東より上層の一部にかけては土器溜りの様相を呈し，投棄された状況で多量の土器が集中して出土している。

SD1545 の東よりでは堆積層は３層に分けられる。中層（茶褐色粘質土）と下層（褐灰色粘土）には遺物が少なく，上層（炭混り暗灰褐色砂質土）からのものが大部分を占める。土馬（後述）

＊ の大半も上層から出土したものである。ここでは上層出土土器について述べる。

i　土　師　器

杯A・杯B・杯C・皿A・皿B・椀・鉢A・杯B蓋・高杯・ミニチュアカマドがある。

杯Aには１段の放射暗文をもつものがあり，暗文を全くもたぬものもある。(10) は内面に１段の放射暗文が観察される。外面は保存悪く，手法は観察できない。

＊　杯B (14) 内面にラセン暗文・放射暗文があり，口縁部外面をヘラミガキする a_1 手法。法量から杯BⅡとする。

杯Cは放射暗文をもつものと暗文をもたぬものの両者がある。口縁端部は，内傾する面をもつものと，単に丸くおさめたものとがある。(11) は後者の例で，b_1 手法。内面に暗文はない。

＊　皿Aには１段の放射暗文を確認できるものがある。

椀Cは口縁部の破片で，保存が悪く，内面のヨコナデがみられる他は手法の細部は観察できない。

鉢A (12) 口縁部内外面はヨコナデ，外面はヘラケズリのあとヘラミガキする。内面に暗文はない。

＊　高杯 (13) は脚柱部をヘラケズリによって断面８角に面とりする短かめの脚部。脚部内面にはシボリメを残し，下半は横方向にヘラケズリする。内面上端には棒状具の圧痕がある。

ii　須　恵　器

杯A・杯B・杯B蓋・杯C・杯E・高杯・壺A・壺E・甕A・甕B・甕D・鉢Aがある。他に獣脚 (120 後述) がある。

＊　杯A (117) 火ダスキ痕がある。

杯B (116) は器高が大きく，杯BⅠ－１に属するもの。ほぼ完形。底部外面ロクロケズリ。

杯Cには屈曲する口縁端部の形状が比較的土師器杯Aのそれに近いものと端部内面に沈線１条をもつのみで口縁部の屈曲をともなわない形態の両者がある。

壺A (118) はほぼ完形の四耳壺で，最大径が中位より上にあるほぼ球形の体部に，短く直立

＊ する口縁部をつけ，外にふんばった高台がつく。肩部に環状の耳４個を縦につける。口縁部内外面と体部内面はロクロナデ，体部外面は肩部が縦位の，以下が斜位の平行叩き目を残し，体部下端はロクロケズリする。肩部外面と底部内面に自然釉がつく。

甕（119）は，口径42.0cmの大形の甕である。他に甕には端部が丸く，内側に肥厚する「く」の字状口縁をもち，体部外面に横位の細かい平行叩き目をもつものがある。

D　SD1525出土の土器（PL.23・24）

流路SD1525から多量の土器が出土した。土師器・須恵器にごく少量の黒色土器が伴なう。SD1525の基本的な土層は，堆積土として上から第1層：暗灰色含砂粘土・茶褐色斑入り灰褐色粘質土，第2層：暗灰色粘土・黒灰色粘土，第3層：灰黒色粘土となり，堆積土の上に埋土（茶褐色粘質土）がある。堆積土の土器は平城宮土器Ⅰ～Ⅱに属するものが主体を占め，一部平城宮土器Ⅲを含む。埋土の土器は平城宮土器Ⅲに属する。 *

① 堆積土出土の土器

i　土　師　器 *

杯A・杯B・杯B蓋・杯C・皿A・皿B・皿B蓋・椀A・椀C・高杯・盤・鍋・甕A・甕B・甕C・鉢Bがある。

杯A（15）は1段の放射暗文と連弧暗文をもつ。a_1手法。

杯X（17～19）はいずれも暗文をもたない。（17・18）はa_0手法。（19）はb_0手法。（17）の底部外面に木ノ葉圧痕を残す。なお（19）については79頁注4）参照。 *

皿A（27）はラセン暗文と1段の放射暗文をもち，（25）はさらに連弧暗文を加える。両者とも放射暗文は正放射暗文であって，暗文の上端が口縁部上端に達せず，下半で終っている。（26）はb_3手法。（27）はa_0手法である。

杯B蓋（21）は杯BⅢ蓋で内面にラセン暗文をもつ。頂部外面は縁部を残して，ヘラケズリし，4方向に分けて密なヘラミガキをほどこす。 *

椀A（16）は椀AⅠに属する。c_3手法。底部外面に「佐」の墨書がある。

椀C（24）は口縁端部は内傾する凹面をなす。a_0手法。外面に粘土紐の継ぎ目を残す。

鉢B（31）内面及び口縁部外面をヨコナデし，底部外面ヘラケズリ，外面全体に粗いヘラミガキを加える。

高杯（28）は杯部の破片で，内面にラセン暗文，1段の放射暗文，連弧暗文がある。杯部外面はヘラケズリし，脚部上端にヘラケズリによる面取りを残す。（30）は長脚の脚部で，脚柱部はヘラケズリによって13角に面取りする。脚柱部内面には棒状具の圧痕を残し，裾部内面は横にヘラケズリする。（29）は脚柱部を粘土紐巻き上げでつくる。ヘラミガキしない。 *

甕　甕A（34）は球形体部で外面にハケメ，口縁部内面にヨコナデ前の横または斜のハケメを残す。（35）はやや縦長の体部で口縁端部の巻きこみがない。体部内外面とも上半がハケメ，下半はヘラケズリする。（36）は体部外面にハケメ，内面はナデ，体部外面に黒斑がある。小形の甕B（25）は一対の三角形の板状把手をもつ。甕C（33）は口縁部が外反し，長胴で，ぶ厚い丸底をなす。体部内外面ともにハケメをつける。底部外面に煤が付着する。甕Aには，他に河内産と思われる小片がある。 *

鍋B（32）は体部上半部に一対の三角形板状の把手をつける。体部外面全面に粗いハケメをつける。体部下半から底部にかけての外面には煤が付着している。 *

ii　須　恵　器

杯A・杯B・杯B蓋・杯C・壺B・壺C・皿A・皿B・皿B蓋・皿C・皿D・高杯・鉢D・甕A・甕Dなどがある。

杯A (128) は法量から杯AⅢにあたる。底部はヘラキリのまま。(129) は杯AⅤに属す。

*　杯Bは杯BⅡ (124・125)，杯BⅣ (123)，杯BⅤ (136・137)，がある。

杯B蓋　杯BⅢ蓋 (121)，杯BⅣ蓋 (131) がある。(131) は完形。

杯X (127) 外面底部をロクロケズリし，内外面を帯状にヘラミガキする。ヘラミガキは幅広く，間隔は広い。

皿A (126) は底部外面ロクロケズリ。口縁部外面に帯状にヘラミガキを加える。

*　皿B (142) 皿BⅠである。いずれも底部外面ロクロケズリで仕上げる。

皿C (138) は底部外面をロクロケズリによって仕上げる。

皿D (141) は口縁部内外面をヘラミガキし，平滑にする。底部外面をロクロケズリする。

壺B (144) は肩部に縦方向の板状把手をつける[1]。体部下半ロクロケズリ。

高杯 (143) は，杯部下面を部分的にロクロケズリする。

*　甕 (146) 直口の口縁部をもつ甕で，器内外両面が灰黒色，内部は灰色の瓦質ともいうべき焼成の甘いもの。同様の特徴をもつものがもう1個体ある。

iii　黒　色　土　器

杯と思われる黒色土器A類が1点ある。小片で図示できない。

②　埋土出土の土器

*　i　土　師　器

杯A・杯B・杯B蓋・皿A・皿C・高杯・椀・盤・鉢・鍋・甕がある。

皿C (22) は a_0 手法。

椀X (23) は口縁端部が丸く薄くおわるもの。底部をヘラケズリする。口縁部に煤が付着。

杯B蓋 (20) は上面が平坦なつまみをもつ。頂部外面は4方向のヘラミガキがある。法量から杯BⅡ蓋とする。ほぼ完形。

*

ii　須　恵　器

杯A・杯B・杯B蓋・皿A・皿B・皿B蓋・皿C・高杯・甕・壺L・鉢A・平瓶がある。

杯Aは平底の杯AⅡと杯AⅣ，丸底ぎみの杯AⅢがある。いずれも底部外面はヘラキリ不調整。

*　杯Bは，杯BⅣ (135) がある。

杯B蓋は杯BⅡ蓋 (122)・杯BⅣ蓋 (133・134)・杯Ⅴ蓋 (130・132) がある。

皿A (139) は口縁端部内面に一条の沈線をもち，底部外面をロクロケズリする。

皿B (142) は底部外面をロクロケズリする。

壺L (140) 小型の壺で，別作りの口頸部を接合する。底部はヘラキリのまま[2]。

---

1)　残存状況からみて把手は等間隔に割りつけた4個にはならず，3個以下の可能性強い。写真では双耳壺に復原した。

2)　本例は，包含層の遺物が混入したものである可能性が高く，遺構の時期等を判断する資料としては除外する。

鉢A（147）は底部を欠く破片。体部最大径部分以下をロクロケズリする。

平瓶（148）は口頸部を欠く。高台・提梁をもたない。上面に自然釉がかかる。

E　SD1560 出土の土器（PL. 24）

河川 SD1560 からは少量の土器が出土した。奈良時代の土器は SD1525 と並存していた部分で出土し，時期的には平城宮土器Ⅰ～Ⅱの範囲におさまる。それより下の層（砂礫層）には弥生・古墳時代の土器を若干含む。なお，SD1560 は底まで掘り切った部分がなく，最下層については不明である。SD1560 中央部には後に SD1525 が穿たれるが，共に存続し，SD1525 と共に，奈良時代中頃に茶褐色斑入り灰褐色粘質土・茶褐色土によって埋められる。 *

① 奈良時代の土器

土　師　器 *

杯A・杯B・皿A・高杯・甕A・甕C・鍋・盤がある。

細片のみで図示できるものがない。

須　恵　器

杯A・杯B・杯B蓋・杯C・皿A・皿B・高杯・壺A・壺A蓋・壺B・壺E・甕Bがある。小片のため図示できるものが少ない。 *

杯B蓋には内面を硯に転用したものがある。なお須恵器杯底部に墨書をもつ破片（152）がある。

壺A蓋は頂部中央部を欠く。破片で上面に灰をかぶる。

② 弥生・古墳時代の土器

弥生式土器には甕（畿内第Ⅴ様式）・高杯がある。小片で図示できない。 *

土師器小型丸底壺C[1]（37）は下層の砂礫層から出土したもの。球形体部に直線的に開く口縁部をもつ土器である。完形品。体部最大径は中位より上にあり，口縁部内外面はヨコナデ，体部外面は細かいハケメをつけ，体部内面上半はナデ，下半をヘラケズリする。胎土に細砂粒，雲母を多量に含み，クサリ礫を少量混える。焼成は軟質。外面全体に煤が付着する。

他に土師器器台および須恵器高杯がある。 *

F　SD1451 出土の土器

道路 SF1559 の南側溝 SD1451 からは平城宮土器ⅠまたはⅡの土器，および平城宮土器Ⅲに属する土器が出土した。

土師器には杯A・甕，須恵器には杯A・盤A・甕Aがある。いずれも細片で図示できない。

G　SD1475 出土の土器 *

調査区東中央の SB1476 の東にある南北溝 SD1475 からは平城宮土器Ⅱに属する須恵器杯BⅡ蓋が出土している。頂部外面ヘラキリのままで，内面はロクロナデ。Ⅰ群土器。

1）器種名は『平城宮報告X』による。

H　SE1511・1547・1611 出土の土器（PL·24）

① SE1511 出土の土器

井戸 SE1511 の底から土師器高杯（42）1点が出土した。脚部は外面を11角にヘラケズリで面とりし，裾部をヘラミガキする。脚部内面は上端にシボリ目を残し，以下は横にヘラケズ
＊ リする。平城宮土器Ⅳに属する。

② SE1547 出土の土器

井戸 SE1547 から少量の土器が出土した。井戸埋土である灰黒粘土からは土師器杯A・杯C・椀A，須恵器杯A・杯B・杯B蓋・皿B・壺K・鉢D・甕，黒色土器が出土した。杯A（38）は暗文をもたず，c_1 手法。杯A（39）はラセン暗文と粗い1段放射暗文をつける。法量
＊ から杯AⅢとする。a_0 手法。口縁端部5個所に煤が付着し，灯火器として用いられたことがわかる。実測図では煤付着部分を網で示した。（40）は杯CⅡに属する。a_0 手法。内面に放射暗文がある。杯B（43）は細い断面三角形の高台がつく。口縁部外面をヘラケズリする。底部内面にヨコナデ前のハケメを残す。

井戸底バラス層直上からは土師器皿A・皿C・甕，須恵器杯B・杯B蓋・高杯・甕が出土し
＊ た。小片で図示できない。

井戸底バラス層からは土師器杯A・皿A・皿C・椀A，須恵器杯BⅤ（156）・杯B蓋・壺A蓋・甕が出土した。土師器皿C（41）は a_0 手法。内面にヨコナデ前のハケメを残す。この個体と直接接合する破片が井戸底バラス層直上から出土している。

③ SE1611 出土の土器

＊ 井戸 SE1611 からは少量の土器が出土した。須恵器杯BⅢ蓋（157）・皿A・皿B・皿B蓋・鉢A・甕・がある。

皿BⅠ（158）は，底部外面をロクロケズリする。

以上の土器には平城宮土器Ⅱを含む。

I　SK1516・1983・1993 出土の土器（PL.24・25）

＊ ① SK1516 出土の土器

埋土（褐灰色粘土）から須恵器盤A・杯B蓋各1点が出土した。盤A（159）は底部内面中央よりに同心円当て具痕を残し，口縁部外面下半はロクロナデのあと粗いヘラミガキを加える。底部外面は周縁から口縁部下端にかけてロクロケズリする。杯B蓋（154）は頂部外面をロクロケズリする。完形品。他に環状つまみをもつ杯B蓋があり，頂部内面を硯に転用している。

＊ ② SK1983 出土の土器

SD1560 の旧河床に掘られた土壙 SK1983 出土の須恵器杯B蓋（155）で，頂部外面に「侍従」の墨書がある。

③ SB1552 北側の小穴 SK1993 から須恵器壺Aが出土している。

J　SB1510・1540・1552・1570 出土の土器（PL. 24）

① SB1510 出土の土器

掘立柱建物 SB1510 の柱抜取り穴から土師器杯A（44）が出土した。内面にラセン暗文・放射暗文・連弧暗文を施す。平城宮土器Ⅱに属する。

② SB1540 出土の土器　*

SB1540 の根石下から土師器椀A（45）が出土している。c_3 手法。法量から椀AⅡとする。

③ SB1552 出土の土器

掘立柱建物 SB1552 柱掘形から須恵器杯B（162）・杯B蓋・皿B，柱抜取り穴から陶硯（301・後述）が出土した。（163）は杯BⅠ蓋で，頂部外面はヘラキリのあと軽くロクロケズリを加える。（164）は皿BⅠで底部外面はロクロケズリ，爪状圧痕を残す。（162）には墨痕がある。　*

④ SB1570 出土の土器

掘立柱建物 SB1570 柱痕跡から須恵器杯BⅢ蓋（161）が出土した。

K　包含層出土の土器（PL. 24）

遺跡全体を覆う包含層からは多量の土器が出土した。土師器・須恵器を主体とし，ごく少量の施釉陶器・瓦器を混える。ここでは土師器・須恵器の一部を図示する。詳細は別表4参照。　*

L　特殊土器・土製品類（PL. 25）

① 施釉陶器

二彩陶器，緑釉陶器，灰釉陶器が少量出土した。二彩陶器は奈良時代，他は平安時代に属する。

二彩陶器は2点出土した。（201）は小型火舎。胎土は白色で，器面内外両面に緑白の二彩を施釉している。軟陶。（202）は高台を残す底部の破片で小壺かとおもわれる。同じく緑白の二彩陶である。軟陶。いずれも包含層から出土した。実測図では緑釉部分を網で示した。　*

緑釉陶器　椀（203・205）がある。いずれも軟陶で，包含層から出土した。

灰釉陶器（204）はいわゆる蛇ノ目高台をもつ。椀あるいは瓶類の高台と考えられる。（206）はミニチュアの壺である[1]。（204）は包含層出土，（206）は床土出土。　*

② 墨書土器・墨描土器

SD1525，SD1560，SK1983 および包含層から墨書土器6点・墨描土器3点が出土した。

墨書・墨描内容と器種・部位・出土遺構は次の通り。

1. 「侍従」（155）須恵器蓋頂部外面。文字は肉太。SK1983 出土。
2. 「佐」（16）土師器椀A底部外面。SD1525 堆積土出土。平城宮土器Ⅲに属す。　*
3. 「物〔物カ〕□」（168）須恵器杯B底部外面。内面は朱墨硯として用いる。包含層出土。
4. 「宮」（152）須恵器杯底部外面。SD1560 埋土出土。

1）206は，肩に稜をもち，胎土が暗青灰色であることや釉の状況などから，いわゆる原始灰釉に属する余地を残している。

5. 「高」(124) 須恵器杯B底部外面。SD1525 堆積土出土。

6. 「□」(135) 須恵器杯B底部外面。旁の可能性もある。下辺にも墨痕がある。SD1525 堆積土出土。

7. 記号 (149) 須恵器 (器種不明) 外面。矢印様の記号。SD1525 埋土出土。

* 8. 記号 (150) 須恵器杯B底部外面。円を2個接して描いたもの。SD1525 埋土出土。

9. 記号 (151) 須恵器杯B底部外面。1個の円に接し，もう1個の円の一部がみえる。SD1525 埋土出土。

③ 刻線文土器 (PL.22—3)

土師器椀A(3)の底部に，焼成後に針状のもので4線を交叉させて刻んだもの。SG1504 出土。

* ④ 陶 硯

圏足円面硯が1点あり，他に，他の器種を硯に転用したものがある。(301) は圏足円面硯で，陸部と裾広がりの圏台を一体に作り，圏足には篦で十字形の透し孔をあける。透し孔は8個所に復原できる。陸部の磨滅が著しく，墨痕をとどめる。SB1552 柱抜取り穴出土。

転用硯は須恵器杯B蓋の内面を硯として利用したものが大半を占める (10点。包含層除く)。

* この他須恵器杯B身を利用したものが1点ある。転用硯の中には朱墨用が1点ある (168)。

⑤ 土 馬

土馬の大半は SD1545 から出土し，他は SD1525・SB1476 から出土した。まず SD1545 の土馬は完形のものは1点もなく，すべて破片である。図示した2例 (302・303) を除く各部位の内訳を破片数で示すと，頭2，首1，首-胴3，胴9，足51，尾7となる。個体識別が容易

* でないが，総個体数は30を越すと思われる。土馬の型式にはたてがみを表現するもの (303) と表現しないもの (302) の2種があり各2例確認できる。鞍の表現は胴部上面の隆起線2本で示すものが1例ある他は，単に上面をくぼめるだけのものである。尾の形態は，垂れ下がるものが5例，先端で上向きに屈曲するものが2例ある。SD1525 埋土からは胴の小片1点，SB1476 柱痕跡からは頭から首にかけての破片 (たてがみのない型式) 1点が出土した。

* ⑥ 獣脚・注口

獣脚 (120)，脚部を8角に面とりし，脚先端には縦に6条の切り込みをいれて5指を表わしたもの。底面は平らで，須恵質の焼成。SD1545 出土。壺類あるいは火舎などにつくものであろう。注口 (171) は円棒を芯にして成形し，外面は幅の狭いヘラケズリで調整する。開口部が細くなり，先を斜めに切り取っている。壺類の注口と思われる。須恵質の焼成。発掘区中央西

* よりの整地土 (青灰色粘土) 出土。

⑦ 漆付着土器

3点出土した。器種・漆付着部位・出土遺構は以下のとおり。

1. 土師器椀または鉢の内面。SD1525 埋土出土。

2. 土師器杯または皿の内面。包含層 (QD30 暗褐土) 出土。

* 3. 須恵器皿E (160) 内面。包含層出土。実測図では漆膜付着範囲を網で示す。

⑧ 埴 輪

埴輪は SD1525 の堆積土第3層 (灰褐色粘質土)，および埋土である茶褐色粘土から出土した円筒埴輪小片で，図示できない。

M 小　　結

土器からみた遺構の年代及び性格について述べ，むすびとする。年代順に見ていくと，先ず，弥生・古墳時代土器はSD1560から出土しているが，この時期の遺構は明らかでない[1]。次いで奈良時代は，SG1504の造成を境にその前後の2時期に分かれる。SG1504造成前の土器が出土する遺構にはSD1560及びSD1525の他SD1545，SD1475，SE1611などがある。このうち量的にややまとまって出土しているのはSD1525である。SD1525の土器は既に述べたように出土層位も単一ではなく，平城宮土器Ⅱを主体とするものの，一部平城宮土器Ⅰ及び平城宮土器Ⅲを含む[2]。したがって厳密な意味での一括資料ではない。そうした年代の幅を考慮した上で，SD1525の土器を総体としてみた時，器種構成の点で，SD1525の土器は，供膳形態，貯蔵形態，煮沸形態のすべてをそろえている。SD1525の土器には，これまで類例の乏しい器種がある。まず土師器杯X（17・18）としたものについては器形の点で口縁端部の巻きこみがみられず，また暗文・ヘラミガキあるいはヘラケズリといった技法面でも，この時期に一般的な杯A類と全く異なる。次に，内傾する匙面をなす口縁端部の特徴を強調すれば，形態的には，杯C類に類似するようにもみえる。しかし，径高指数[3]は44であって，同時期の一般的な杯C類のそれが22前後であるのに対して，深い形態であることが特徴であり，直ちに杯C類の系譜に属するものとはいえないことを示している。器種名については今後の資料の増加に待ちたい[4]。ついで土師器甕類においては従来から知られる大和・河内産とみられるもののほかにそのいずれにも属さない甕A（35）・甕C（33）がある。これらは形態・手法上から伊賀・伊勢の土器との共通点が多い[5]。須恵器では杯X（127）・ⅢA（126）のようにヘラミガキを加えた丁寧なつくりのものがあり，Ⅱ群土器に属する。とくに（127）は従来類例の乏しい器形である。

築地雨落溝に比定されているSD1545は，東よりの部分から土器が多く出土し，しかも堆積土の最上層に，集中的に投棄された状況で出土した。多くは年代的に平城宮土器ⅡからⅢにかけてのもので，伴出した多量の土馬は既に報告されている平城京SD485[7]と同一の型式に限られる。SD1545の層位状況，そしてSD1545が東流する溝であることを考え合わせれば，SD1545の流れる溝としての機能は，平城宮土器ⅡあるいはⅢの時期に失われていたと考えざるを得ない。但し，溝としての凹みはその後も部分的に残っていたことは，SD1545の他の部分から平城宮土器ⅣないしⅤに属するとみられる土器が出土していることから明らかである。

奈良時代中ごろにはSD1525が埋められ，SG1504が造成される。この時期及びこの時期に後続する土器を出土する遺構には，ほかにSB1570柱痕跡（平城宮土器ⅢまたはⅣ），SE1511（平城宮土器Ⅳ）などがある。この時期にはまとまった量を出土する遺構はなく，SG1504およびSD1565，SD1466が主たるものである。SG1504の土器では，（1）・（4）のような平城宮土器Ⅴに属する土器が完形または完形に近い形で出土する傾向があり，同時にこれが池の廃絶時期を示すものでもある[8]。SD1465，SD1466からは，土師器甕など煮沸形態も出土していることをみれば，これらの土器は池自体の使用状況を直接的に反映するものではなく，SG1504の周辺にあった建物などにおける食器の状況を示すものであろう。

最後に遺跡全体として，出土土器の種類に関して気付いた点を述べたい。いずれも遺物包含層または水田床土出土で，特定の遺構との結びつきは明らかでなく，またごく少数とはいえ二

彩陶器が含まれていることは遺跡の性格を考える上で重要であろう。文房具関係の遺物には陶硯が1点あるのみで，他はすべて須恵器の他の器種を利用した転用硯である。転用硯の中には朱墨に用いたものが1例ある。包含層にも転用硯がめだつ。定型硯が少なく硯の大部分が転用硯で占められている点も本遺跡の特徴の一つにあげられよう。土器の使用方法を直接示す資料も若干ある。須恵器皿Eに漆の付着したものがあり，漆容器（パレット）としての使用を示す。このほか灯火器に用いられた土器がいくつかあるが，その器種は土師器杯AⅠ・杯AⅡ・椀AⅡ，須恵器杯Bなどまちまちで，口径が小さいか，器高の低い器種を用いるという傾向はあるものの特定の器種に限定されていない状況がうかがえる。

今回の調査では既に述べたように供膳形態や煮沸形態の土器の多様性や複数の産地の存在などいくつかの注目すべき知見が得られたが，土器のみからでは本調査区の性格を積極的に示すには至っていない。近年，平城京内の調査が進み，平城宮との比較にたって平城京の土器の特色を抽出する試み[1]がなされつつあり，本調査では貴重な資料を加えたといえよう。

〈78頁の注〉

1) 近接地で古墳時代土器の出土した遺構には 6AFI-H 区の SD881 がある。『平城京左京三条二坊』奈文研，1975。

2) 各段階に属する土器として，平城宮土器Ⅰ—128，同Ⅱ—15・26，同Ⅲ—16 などを典型例にあげることができる。

3) 径高指数＝器高／口径×100

4) 17・18の類例は同じ坊の七坪に属する SD1525 の北延長部からも出土している。『昭和52年度平城概報』p.24。なお19に関しては，器形を異にするが，手法，胎土・焼成・色調を共通にする鉢が 6AAC-V 区の SD3035 下層（『奈文研年報1965』p.36，『平城宮木簡二』p.18）から出土している。

5) 例えば，三重県地蔵僧遺跡（『地蔵僧遺跡発掘調査報告』亀山市教委，1978，PL.28—426・435）など。なお，33の類例が法隆寺 SK3561（『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』法隆寺，1985，PL.90—233，PL.91—241）にある。

6) ヘラミガキを加える須恵器はⅡ群土器に例が多い。

7) 『平城宮報告Ⅵ』p.53，PL.64

8) 井戸の場合は SE1547 の埋土から43のように9世紀中頃を前後する時期の土器が出土しており井戸の最終的な埋没年代を示す。これによって本遺跡の主要部分の存続年代の下限の一端を平安時代前期におくことができよう。

〈79頁の注〉

1) 『平城京左京四條四坊九坪発掘調査報告』奈文研，1983，p.25～26．なお，本遺跡では平城宮土器Ⅴの段階の土師器にf手法が存在する（PL.22—2）。平城宮内のこの段階の資料，例えば SK870・2113（『平城宮報告Ⅶ』p.90～95），SE6166（『平城宮報告Ⅻ』p.101）にはf手法はみられず，SE311-B すなわち平城宮土器Ⅶに出現している。一方，平城京域では 6AFI-H 区 SE877（『平城京左京三条二坊』p.25，fig.15—3）のように平城宮土器Ⅴ段階にこの手法による製品がみられる。この点も宮の土器と対比した場合，京の土器の特色の一つにあげられよう。

4　木製品・繊維製品

A　木　　製　　品（PL. 26～28）

木製品は約460点出土した。このうちSX1464・SD1466・SE1511・SD1560出土の5点以外はSD1525からの出土である。種類は祭祀具・紡織具・服飾具・遊戯具・農具・工具・食事具・容器・雑具・部材などがあるが，大多数が用途不明の板状品・棒状品である。 *

祭　祀　具　斎串・人形・馬形がある。

a　斎串（1・2）　細長い薄板の上端を圭頭状に，下端を剣先状に作り，左右両側辺から切込みを入れる串状品。1は上端近くの側辺の左右2個所に切り込みを入れる。現存長さ 26.7 cm，幅 2.0 cm，厚さ 0.2 cm，ヒノキ柾目材。SD1466出土。2は側辺を割り裂くように上端木口から切り込みを入れるが，欠損のため切り込み回数が1回か複数回かは不明である。長さ 15.7 cm，現存幅 1.4 cm，厚さ 0.2 cm，ヒノキ柾目材。 *

b　人形　短冊状の板から作る扁平な正面人形（6）と，棒状の材で立体的に表現する立体人形（4・5）がある。6は頭部を圭頭状に削り，頸部をV字形に切り欠くが，切り欠きは二辺の長さが等しく撫で肩となる。腕は下方からの切り込みであらわし，下端の木口から切り込みを入れて折りとり足を表現する。顔には墨で目鼻口を表現する。現存長さ 14.8 cm，幅2.0 cm 厚さ 0.25 cm，ヒノキ柾目材。5は断面蒲鉾形の割材に切り欠きをめぐらし頸と腰をあらわす。右肩から左脇腹にかけて平行する2本の刻線を入れ上衣の前合わせを表現し，左肩から右脇腹にかけて5～7本の刻線を入れる。顔の表現は腐蝕のため不明。現存高さ 15.7 cm，径 1.9×1.4 cm，ヒノキ。4は心持丸木の棒を加工した人形で頸部以下を欠失する。細かい削りで尖り気味の頭部を作る。顔の表現はない。現存高さ 4.2 cm，径 2.6×1.9 cm，広葉樹（散孔材）。 *

c　馬形（3）　薄板の上辺を切り欠いて背を，下辺を半円形に切り込んで頸を表現する。頭部を山形に作り出し額と鼻筋を区別する。胴部下半を欠失し鞍の有無は不明。現存長さ 12.6 cm，幅 3.4 cm，厚さ 0.5 cm，ヒノキ板目材。SE1511出土。

紡　織　具　糸巻きの横木が2点ある（8・9）。ともに枠木4本からなる糸巻の横木。板の中央を幅広く残し，両端を両側から削り細め，枠木に差し込む枝部とする。中央部には相欠き仕口を作り，そのかみ合わせ部分の中央に軸棒を通す円孔を穿つ。円孔は8が鼠歯錐，9が刃物の先であける。8：現存長さ 9.7 cm，幅 1.85 cm，厚さ 0.4 cm，ヒノキ柾目材。9：現存長さ 8.8 cm，幅 1.8 cm，厚さ 0.7 cm，ヒノキ板目材。 *

服　飾　具　櫛と留針がある。

a　櫛（10）　いわゆる挽歯の横櫛で，板の一側縁から細い歯を挽きだし，表面を平滑に研ぎあげる。全形は長方形で，肩部は欠失しているが，丸味を帯びた形に復原できる。歯の挽きだし位置を決める切り通し線は，背の上縁に平行して曲線を描く。歯は両面から交互に鋸で挽き，先端を両面から刻って尖らす。歯の数は 3 cm あたり20本で粗い。背の断面形は圭頭状を呈す。現存幅 5.0 cm，高さ 4.8 cm，厚さ 1.15 cm，モッコク。 *

b　留針（16）　細長い棒状の具。身が扁平で一端が尖る。身の断面形は，上半部が長方形， *

下半部が凸レンズ形である。現存長さ 17.5 cm，幅 1.35 cm，厚さ 0.6 cm，ヒノキ柾目材。

遊　戯　具 (11)　断片であるが，等脚台形の下底に三角形の切り欠きを入れた琴柱に復原できる。上底と両斜辺がやや内湾する。下底の両端を結ぶ線が内湾した弧を描くのは，槽の上面が反りをもっていたことと対応するのであろうか。現存幅 4.2 cm，高さ 3.65 cm，厚さ
＊ 1.0 cm，ヒノキ板目材。

農　　具　木錘と横槌がある。

a　木錘　材の中央を細くして紐を結ぶもの（7）と，材の一個所に孔をあけて紐を通すものとがある。7は割材を断面多角形に粗く削り，材の中央に四方から切欠きをいれる。蓆編みなどに用いる「槌の子」であろう。長さ 8.4 cm，径 1.7～3.5 cm，ヒノキ。他の1点は，丸太
＊ 材の両端を切断し，その約3分の1を割りとり，材のほぼ中程の丸木面から割面にかけて不整形の孔を貫通させたもの。現存長さ 19.1 cm，幅 7.1 cm，厚さ 3.8 cm，アカガシ亜属。

b　横槌 (29)　円柱形の身と棒状の柄とからなる。割材を用い，身から次第に削り細めて柄を作り，柄尻を太く削り残す。身径 9.1 cm，柄径 2.5 cm，アカガシ亜属。

工　　具　篦・木針・刀子鞘・楔がある。

＊　a　篦 (12・28)　12は薄板の下半を両側から削り細め，先縁に片刃状の刃をつける。刃をつけた面は先縁近くにのみ削りを施し，大部分は割面を残す。裏面は全体に削る。長 14.6 cm，幅 2.7 cm，厚さ 0.3 cm，スギ板目材。SX1464 出土。28は細長い割材の一端を両面から削り薄め，先縁を半円形に作る。他端は片面から斜めに削り落す。身の断面形は下半部が長方形，上半部が等脚台形。長さ 17.2 cm，幅 1.7 cm，厚さ 0.8 cm，ヒノキ板目材。

＊　b　木針 (17)　細長い薄板の一端を圭頭状に削り，それから 3 cm 以下を断面扁杏仁形に丁寧に削り細めて端を尖らせたもの。圭頭部近くに針耳を穿つ。針耳は両面から刃物によって穿孔している。長さ 17.05 cm，幅 1.3 cm，厚さ 0.4 cm，ヒノキ柾目材。

c　刀子柄 (24)　割材を削ってつくる。柄元部分を欠損するが，茎孔がわずかに残る。柄頭寄りの3分の1程を木表側から斜めにそぎ落とし，対応する木裏側と一側面とを浅く切り欠
＊ いて，柄頭を突起状にする。柄の断面は扁六角形で，茎孔の断面は長方形。現存長 11.4 cm，径 1.25×1.0 cm，茎孔径 0.8×0.3 cm，ヒノキ柾目材。23は柄元部分を欠損し茎孔は残っていないが24に似る。割材を偏七角形に削り，柄頭近くを周囲から切欠いて浅い溝をめぐらす。現存長さ 13.6 cm，径 2.3×1.5 cm，ヒノキ柾目材。

d　刀子鞘 (18)　二枚合わせの鞘に想定できる。外面は縦方向に丁寧に削る。内面は粗い
＊ 刳りぬきにとどまり，細かい調整を行わない。二枚合わせた復原断面形は，脊側が厚く刃側が薄い扁五角形となる。現存長さ 10.7 cm，幅 2.5 cm，厚さ 0.7 cm，ヒノキ板目材。

e　楔 (25～27)　25は割材を丸棒状に加工し，下半を両側から削って刃とする。刃は先端を欠損する。頭頂部は平らに削る。現存長さ 8.7 cm，径 1.1×1.0 cm，スギ。26は撥形の板の片面を削り薄めて刃とする。先縁は弧状を呈する。両側面は下半のみ削り，上半は割り面を
＊ 残す。頭頂部は刃物で切り目を入れ折り取ったまま加工していない。現存長さ 7.2c m，幅 3.8 cm，厚さ 1.2 cm，トチノキ板目材。27は割り面をとどめる長方形の板の両面下半を削り薄めて刃とする。両側面は削る。先端・頭頂部はともに切り目を入れ折り取ったままである。現存長さ 10.1 cm，幅 3.7 cm，厚さ 0.8 cm，ヒノキ板目材。

食　事　具(13～15)　匙形木器が3点ある。ともに細長い板の一端を身とし，頸部から次第に幅を狭めて柄を作る。13・14は身幅が広く，身の側縁から頸部への折曲点が稜角をなし撥形の頸部をつくる。13は柄が太く短かく，身の両面とも甲高で，先縁は弧状を呈す。14は柄が細く，身の両面とも平坦で裏表の区別がない。15は身幅が狭く，身と柄の境は不明瞭。先縁は半円形を呈し，両面から削り薄める。13：現存長さ 12.8 cm，幅 3.2 cm，厚さ 0.6 cm，ヒノキ板目材。14：現存長さ 8.5 cm，幅 2.3 cm，厚さ 0.2 cm，ヒノキ板目材。15：現存長さ 9.7 cm，幅 1.4 cm，厚さ 0.4 cm，ヒノキ板目材。 *

容　　器　漆器蓋・漆器鉢・円形曲物・蓋板などがある。

a　漆器蓋 (32)　平坦な頂部と屈曲する縁部とからなる蓋。全体に厚手のつくりで，縁端部内面に返りをつけ，頂部中央に扁平な宝珠つまみがつく。木心の上に布着せし全体に黒漆をかける。木地は腐蝕するが，漆膜がよく保存され，痕跡からみて横木取りの挽物であることが判る。径 16.5 cm，復原高 2.5 cm，樹種不明。 *

b　漆器鉢　体部が扁球状を呈し，器壁は厚さ 0.7 cm。壺形になる可能性もある。木心の上に布着せはしていない。木地はほとんど腐蝕するが，漆膜の断片が多数あり，痕跡からみて縦木取りの挽物であることが判る。法量復原不能。広葉樹で樹種不明。 *

c　円形曲物　底板5点，蓋板1点，側板1点がある。底板 (36～40) はいずれも周縁を鋭利な刃物で垂直に断ち落とし，側面に側板固定用の木釘穴がある。40は内面のみ平滑に削り外面には割り面を残す。36：直径 9.0 cm，厚さ 0.55 cm，ヒノキ柾目材。37：復原径 15.2 cm，厚さ 0.55～0.6 cm，ヒノキ柾目材。38：直径 14.3 cm，厚さ 0.3～0.6 cm，ヒノキ柾目材。39：直径16.0 cm，厚さ 0.5～0.75 cm，ヒノキ柾目材。40：直径 16.8 cm，厚さ 0.5 cm，ヒノキ柾目材。蓋板 (35) は周縁・両面とも削って仕上げる。周縁面は内傾する。下面に側板位置を決めるためのコンパスによる針書きがある。針描きは縁部の内側 0.5 cm の位置にある。針描きの円弧をはさんで2孔一対のとじ穴があり，側板をとじた樺皮が残存する。直径 18.3 cm，厚さ0.5 cm，ヒノキ柾目材。側板は小片で外面は平滑に削り，内面は腐蝕するが，垂直方向と斜方向の刻み目（けびき）がある。側板幅やとじ部分の仕口は不明。ヒノキ板目材。 *

d　蓋板 (33・34)　円板状で裏表とも平滑に削り，周縁を鋭利な刃物で内傾気味に断ち落とす。33：復原直径 18.5 cm，厚さ 0.5 cm，ヒノキ板目材。34：復原直径 19.5 cm，厚さ 0.5 cm，スギ板目材。

雑　　具　自在鉤 (30)　二段になった小枝の一方を短くし，先端を尖らせ鉤形とする。他は樹皮を取り除く程度に削る。鉤部の上面が摩滅する。長さ 26.8 cm，径 1.7 cm。マツ属。 *

部　　材　把手 (31) がある。厚みのある板材の上部中央を半円形に刳りぬき，その上縁を横位の棒状に削り出して鋤の把手のようにかたどる。下半分を両側から切り欠き出枘状とし，中央に長方形の枘孔を貫通させる。別材に枘を埋め，栓で固定したのであろう。現存長さ 17.0 cm，幅 11.1 cm，厚さ 2.8 cm，アカガシ亜属板目材。

用途不明品　薄板の側縁にV字形の切り欠きを数個所いれるものが3点 (20～22)，厚い小さな方形板の上下面と側面との境を面取りしたものが1点 (19) ある。 *

B 繊 維 製 品 (PL. 29)

SB1472 の北東隅の柱抜取り痕跡から，黒漆を塗った平織の麻布が出土した。遺存するのは方約 35 cm であるが，糸は 1 cm あたり 7 本と 9 本を数える。

C 漆膜の断層観察 (PL. 29)

漆器蓋および漆器鉢の漆膜について，断面資料の顕微鏡観察を行った。資料は漆膜の微少な細片を採取し，アルコールで脱水し，キシレンで置換した後，10%のアクリル樹脂で保存処理を行った上で不飽和ポリエステル樹脂に封入したものである。試料の作成・写真撮影は，沢田正昭・肥塚隆保による。顕微鏡写真によると，両者ともに木地の上に厚く下地漆を施してから，茶色系統の漆を薄く 2～4 回に分けて塗り重ねている。下地漆の表面はかなりの凹凸があるが，それより上の各層の境はきれいな整合性を示し，現在の技法でいう研ぎを行っている可能性がある。漆層の厚さは，漆器蓋では上から順に 40 μ，10～20 μ，下地漆 50～120μ，漆器鉢では上から順に 10 μ，10 μ，10 μ，20 μ，下地漆 140 μ である。

5 石製品・その他

A 石 製 品 (PL. 29)

1は用途不明品。滑石製で長方形の一短辺の両角を落とした将棋駒形をなす。四周の稜を面取りし，全面を平滑に研磨するが，裏面には部分的に粗面を残す。上端中央に小孔を穿つ。孔の上縁には紐で懸垂した痕跡がある。全長 19.7 cm，幅 14.7 cm，厚さ 3.5 cm，小孔径 0.6 cm，重量 2296 g，灰褐色土出土。これに類似するものとして中世のいわゆる温石(ぬくめいし)がある。温石とは滑石製の厚い長方形板の上方に小孔を穿つもので，火で熱して湯湯婆(ゆたんぽ)のように用いたとされる。2は裁頭円錘形の紡錘車。滑石製で側面がわずかに内湾し，中央上方よりに円孔を穿つ。側面との境を面取りし，全面を平滑に研磨する。上面径 2.2 cm，下面径 4.5 cm，厚さ 1.7 cm，重量 41.1 g，SD1560 出土。

B 鉄製品・鋳造関係遺物 (PL. 29)

3～5は鉄釘。ともに断面長方形の脚の上端を叩きのばし折り曲げて釘頭とする。3：現存長さ 4.0 cm，灰褐色粘質土出土。4：現存長さ 5.2 cm，小土壙出土。5：現存長さ 3.8 cm，SG1504 出土。7は鉄鎹。材と材を継ぎとめるためのカスガイで隅丸のコ字形を呈する。断面方形の鉄製角棒の両端を折り曲げたもの。両足端を欠損する。横幅 7.45 cm，現存縦幅 3.2 cm，SE1547 出土。6は鉄鐺子。海老錠の部品で厚さ 0.1 cm の板をコの字形に折り曲げ，別の長方形板を鍛接し四角筒形の胴部を作る。小口は片方のみ遺存し，長方形板を折り曲げて作っている。鍵を差し込む孔の形状は縁辺部を欠損するため不明である。現存長さ 6.3 cm，径 1.6×1.5 cm。茶褐色土出土。8は鞴羽口。炉側先端部の小片で先端がやや細くなる。先端部は火熱のため熔融し，筒部は灰黒色に変色する。現存長さ 5 cm，復原外径 4 cm，同内径 1.7 cm，茶褐色粘質土出土。

6 植物遺体

A 大形植物遺体 (PL. 30, 31)

流路SD1525や園池SG1504で植物の種子・核(内果皮)，球果，果実などが出土した。

流路SD1525出土の植物遺体

流路SD1525の植物遺体は流路が大きく東へ曲る部分の西岸で，木簡・木質遺物の出土した暗灰色粘土の土層より出土した。

QC27

オニグルミ（核半分）

Juglans sieboldiana MAX.

モモ(大小2個)

Prnnus persica BATSCH.

ツバキ（果実1個）

Camellia japonica L.

QB26

ケヤキ（大形の葉1枚）

Zelkova serrata MAK.

QE26

8本の茎の小片を同質の茎1本で束ねたもの。断面をみると大形の髄が大部分をしめ，外皮に直接して多数の管束が同一周上に一列にならぶ双子葉の草本ではないかと思われる。

池SG1504出土の植物遺体

池SG1504の植物遺体は池の中心部の岸辺近くで，池の堆積土最下層の黒色粘土中で底石近くに出土した。特に水面巾が一番狭くなる東岸池底で多量のマツの球果を出土した。

PM29

クロマツ（球果3個）

Pinus thunbergii PARL.

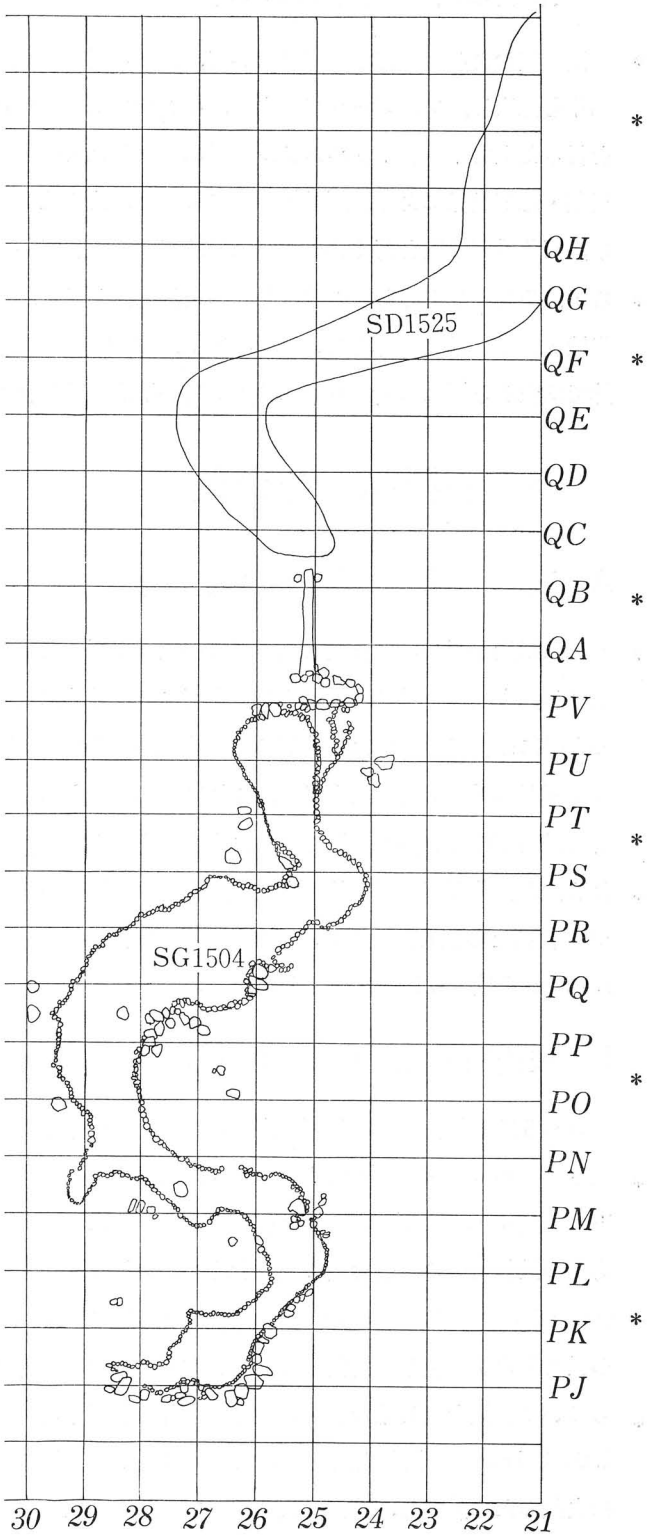


Fig. 45 植物遺体出土位置図

PP28

モモ（核の小片３個）

PO28

クロマツ（球果58個。うち26個は果片を失ない軸だけになっている。リス，ムササビなどに食害されたもの
＊ とみえる。）

モモ（小さな核半分のもの２個）

ウメ（１個）*Prunus mume* S. et Z.

センダン（核２個・核の破片５個・種子３個）*Melia azedarach* L.

この他「黄土人形」様の褐鉄鉱塊が４個出土した。

＊ その他池内出土の資料

ヒルムシロ（外果皮つきの果実１個）*Potamogeton distinctus* BENN，ヘラオモダカ（種子１個）*Alisma canaliculatum* A. BR. et BOUCHE，ウメ（核の破片１個），ウツギ（蒴果）*Deutzia crenata* S. et Z.，フジ属（冬芽破片１個）*Wistaria* sp.，ブドウ属（種子断片１個）*Vitis* sp.，ゴキヅル（種子半分３個）*Actinostemma lobatum* MAX.，この他ヒメジソ（*Mosia* sp.）の類の
＊ ようにみえる小種子１個などがある。

以上をみると，食用となるものは，クルミ・モモ・ウメ・ブドウなどで，薬用としてはセンダン・ウメがある。池沼の植物としては，ヘラオモダカ・ヒルムシロがあるが，スゲの類や，ホタルイの類はみえない。ゴキズルは水辺をこのむウリ科の雑草である。モモは北の流路 SD 1525で出土したもののうち１個をのぞき，亜球形で，現在の品種とは異なる。出土した球果の
＊ 状態などから考えて，庭園内にクロマツが植えてあったと考えられなくもない。

B 花 粉 分 析

池中最下層の黒色粘土において花粉分析を行ったところ，花粉胞子化石が多量に含まれていた。特に *Pinus*（マツ属），*Cryptomeria*（スギ属）が多く，また水生の *Persicaria*（タデ属），*Gramineae*（イネ科），*Picea*（トウヒ属），*Tsuga*（ツガ属），*Quercus*（コナラ亜属），*Fagus*（ブナ
＊ 属）など約40種類におよぶ。また池の上層の埋土の灰褐色粘質土ではマメ科のアズキ，ゴマ科のゴマ，タデ科のソバ，アブラナ科の一種など当時の栽培植物の花粉化石がみられた。

Tab. 10 出土植物遺体一覧表

種　　類	出土部位	数量	習　性	万葉植物名
クロマツ（*Pinus thunbergii* PARL.）	球　果	61	常緑針葉高木	松，待，麻都
モモ（*Prunus persica* BATSCH.）	核（内果皮）	5	落葉広葉低木	桃
ウメ（*Prunus mume* S. et Z.）	核（内果皮）	5	落葉広葉低木	宇米，有米，梅
センダン（*Melia azedarach* L.）	核（内果皮）	7	落葉広葉高木	相布，阿布知
センダン（*Melia azedarach* L.）	種　子	3	落葉広葉高木	安布知
ヒルムシロ（*Potamogeton distinctus* BENN.）	果　実	1	多年草（水生植物）	多波美豆良
ヘラオモダカ（*Alisna canaliculatum* A.BR.et BOUCHE.）	種　子	1	多年草（水生植物）	
ウツギ（*Deutzia crenate* S. et Z.）	果　実	9	落葉低木	宇能波奈
ゴキヅル（*Actinostemma* lobatum MAX）	種　子	3	一年生つる草（水辺植物）	

第V章　考　　察

1　六坪地域の変遷

平城京の条坊計画は，四周を大路で囲まれた坊の中を東西・南北各四等分して十六坪に区画しているが，各大路心は距離を大宝大尺（高麗尺）1,500尺（同小尺，天平尺では1,800尺）で統一して計画したため，坪の大きさはそれぞれの坪を囲む大路・小路，条・坊間路の幅員によって広狭ができる。すなわち大路（8～12丈）に面する坪は大路幅が広い分狭くなり，小路（2丈）で囲まれる区画は逆に敷地を広く占めることになる。坊の四周を囲む大路，中心を通る条間路・坊間路以外の小路の幅をそれぞれ同一とすると，一坊内でもっとも広い面積を占めるのが中心部の六・七・十・十一の各坪で，次に広い宅地は二・三・八・九・十四・十六坪，一番狭い宅地は大路に坪2方向を画する坊の四隅の一・四・十三・十六坪となり，それぞれの順位の中で坪は同規模の面積を占めることになる。また坪の形状は東西・南北方向がそれぞれ同幅員の道路で囲まれる四隅の坪や中心部の坪の八つの坪は正方形を示すが，それ以外の坪では坪を囲む東西方向と南北方向の道路幅員が異なるため長方形の区画となる。これら規模・形状の異なる坪内の計画は何を基準とするか，すなわち条坊計画線（道路心）にのっとって行うか，坪の区画の中で行うかによって坪心の位置が違ってくることとなる。平城京の発掘調査では一坪を四周の道路を含めて全域を完掘した例がないため，調査地の近くで検出した道路側溝などの条坊遺構と1,800尺と450尺を基準とする条坊計画により坪心を求め，それを基準に坪を区画すると考えられる築地・塀・溝や建物配置を考察することが多いわけである。従来の成果では坪心の計画は道路心から考えられる条坊計画より，むしろ各坪内[1]での計画によるとみられる例が多いようであるが[2]，条坊計画にのる例や時期[3]により変わる例もある。特に2町・4町の大規模占地の場合には坪内より，条坊計画にあわせた道路心で計画される可能性が高いのである。

三条二坊六坪心の座標は，南北方向（X座標）は北側で検出した[4]二条条間路心を基準とし，二条条間路から三条条間路間1,800尺の条坊[5]計画に，条坊基準寸法を0.295として乗じた値を加えて三条条間路心を求めて基準としたものである。東西方向（Y座標）では，北側の七坪の調査で[6]東二坊坊間路西側溝と二坪[7]との境の小路心を検出しており，両者の間の距離 127.85 m を測り平城京条坊方位の振れ N0°15′41″W で換算して127.990の値を得，京条坊基準尺 0.295 で除して430尺となり，これと条坊計画450尺との差20尺が東二坊坊間路 1/2 幅に当るので，三条条間路も坊間路同様4丈と推定した。小路幅を2丈とする例は前述の七坪と二坪の境でも確認され平

1）左京三条二坊九坪，左京四条四坊九坪，左京三条二坊三坪，左京八条三坊九坪
2）左京四条二坊一坪，左京三条二坊十二坪，左京九条三坊七坪
3）左京二条二坊十三坪，左京四条二坊十五坪
4）平城宮第39次調査　二条条間大路心　X—145,751.977，Y—18,027.326
5）平城京の発掘調査の成果では条坊基準尺　0.294～0.296m の値がでている。
6）平城京第118—23次調査　X—146,254.563，Y—17,791.583
7）平城京第112—3次調査　X—146,223.422，Y—17,919.433

城京の他の例にもみられる。すなわち六坪の敷地は450尺から坊間路・条間路各1/2幅(=20尺)と小路1/2幅（=10尺）を減じた420尺を一辺とする正方形の区画となる。六坪内の心を各辺から210尺の位置とすると座標は X—146,350.833, Y—17,853.703 の値を示す。坪心を条坊計画すなわち道路心からもとめると北と東が4丈の幅の広い小路より条間路・坊間路で区画されるため，坪内で求めた心より北と東にそれぞれ5尺ずつ移動した位置になる。

六坪における奈良時代B期～E期の4期における遺構の変遷をまとめると次のようになる。

A B期の遺構

B期の遺構としては旧河川SD1560がほぼ埋まった状況となり，このSD1560の堆積を切って旧河川の中央に作られた流路SD1525がある。園池SG1504北側の第121次調査区では旧河川が完全に廃絶した状況はなく，深さ50cmほどの旧河川が幅狭く残存した状況で流路が造成されていることが判明したことと，SD1525は北側の七坪でも旧河川を利用して作られていることが確認されていることから，京造宮当初，浅い河川としてまだ生きていたSD1560を利用して水処理用の流路SD1525が造成されたものと考えられる。流路に東・西から流れこむ東西溝を数状検出している。やや斜行するものもあるがほぼ京の方位にのっている。また調査区西北部で方位にのる南北溝SD1580を検出している。浅くて明確ではないが六坪内の排水溝と考え

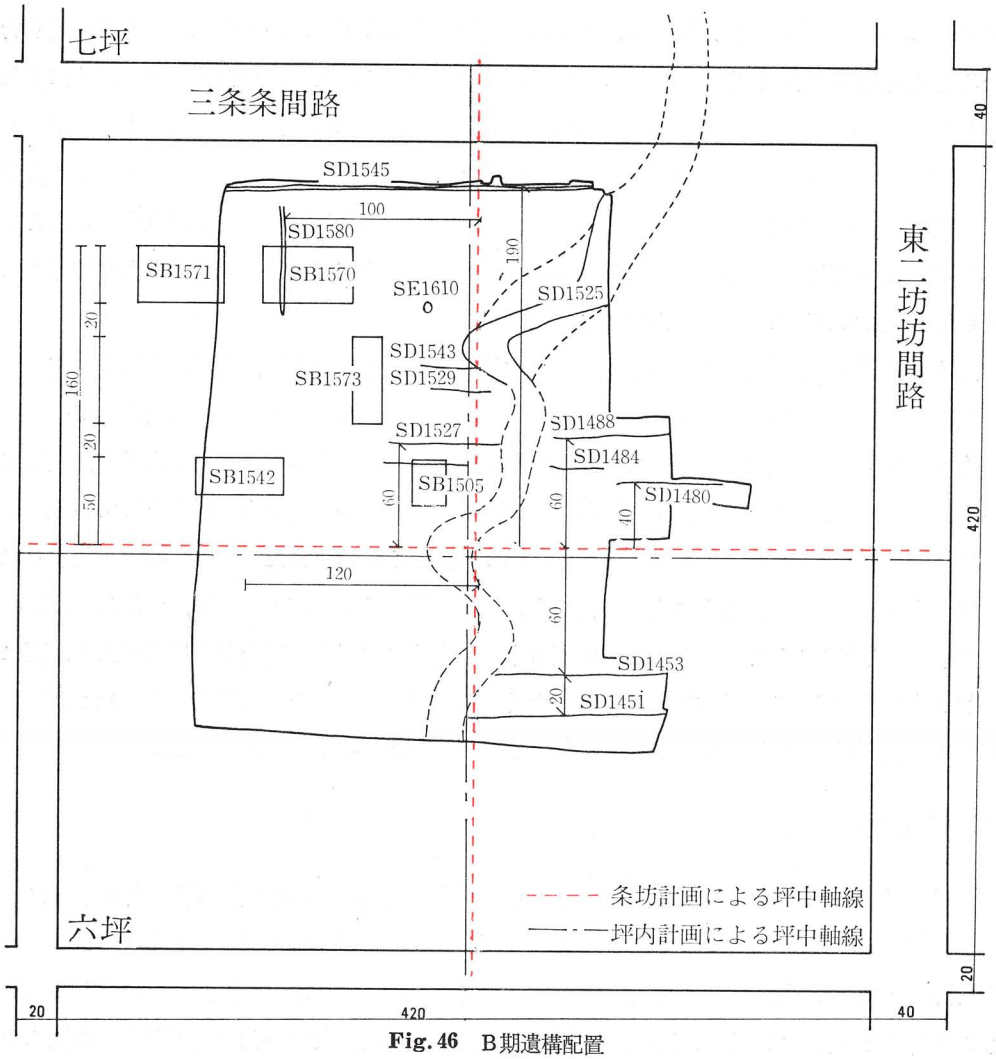


Fig. 46 B期遺構配置

られ，坪内を1/3・1/2に分ける区画溝であった可能性もある。流路SD1525はかつての菰川または菰川の支流と考えられるが旧河川SD1560を利用して作られたために蛇行した形状であり，幅・深さからも堀河のような機能は考え難く，また園池SG1504の前身の観賞的な流れとしては景石の存在もみられず，周辺から流れこむ溝の存在などから坪内の水処理用の水路と考えられる。この時期の建物は坪内の中心部を流路SD1525が流れるために坪の西北部に寄っている。正殿 SB1570・SB1571，前殿SB1542，脇殿SB1573・SB1505などが整然とした官衙的な配置をもつ。またSD1545は坪の北を画する築地塀の内側の雨落溝に想定される位置で検出されている。（但しこの溝は七坪との一体の利用を考える時には区画溝の一つとなる。）

この時期は流路SD1525が六坪の東北部から中心部に向けて流れているために，坪内利用はかなり制約されていたものと思われる。また建物や溝の配置は条坊計画の道路心から定めた坪心の方が完数値を示すことが多いことと，流路SD1525が七坪から流れ込んでくることにより，七坪を含めた二坪またはそれ以上の広い宅地の利用も考えられる。坪の西北部の官衙的な配置を持つ建物は，2棟並列する主屋SB1570とSB1571の間の中軸線が坪心から120尺に位置し，この軸線はSB1542を桁行5間の建物とするとその中心をとおることとなる。また，2棟の主屋の北側柱は坪心から160尺の位置に，SB1542とSB1505は北側柱通りをそろえて坪心から50尺の位置となる。2棟の主屋の間隔は20尺，SB1570の東妻柱通りに西側柱通りをそろえる脇殿SB1573は20尺南に離れた位置に，SB1573の南20尺にはSB1542・SB1505の北側柱通りをそろえるなど，六坪の西北1/4の区画内で計画的な配置がみられる。また流路SD1525に流れ込むSD1527・SD1488が坪心から北へ60尺，SD1480が北へ40尺，平行して流れるSD1453とSD1451が南へ60尺・80尺の完数値でつくられている。また建物SB1570に先行する南北溝SD1580は坪心から100尺西に位置し，建物SB1505に先行する南北溝SD1506が坪心より50尺の完数尺に位置している。すなわちこの時期の遺構はすべて条坊計画線にもとずく坪心により計画されていることが明らかである。

流路SD1525の下層では和銅の年紀を持つ木簡と平城宮Ⅰ期の土器，上層からは平城宮Ⅱ期の土器が出土し，同じ流路から出土した曲物の年輪年代学では703年以降の結果を得ている。建物SB1550の抜取穴よりⅡ期の軒平瓦6667，SB1505の抜取穴からはⅢ期の土器を出土している。SD1451からはⅠ～Ⅲ期の土器が，SD1545からはⅡ～Ⅲ期の土器が出土している。池SG1504の底石は流路SD1525堆積層上層の上に張られており，またSB1505の廃絶後すぐにC期の池の石張りが行われたことを考えると，B期の遺構は平城宮Ⅰ～Ⅲ期，すなわち，遷都～天平年間と考えられる。但し，この時期の中でも建物に先行する溝などの遺構があり，更に時期細分が可能である。特に当初は建物もなく旧河川跡の多かった六坪内の整地のため流路SD1525に流れ込む水処理用の排水溝を中心とする時期であったものと想定される。

B C期の遺構

C期に至って流路SD1525の凹みを埋め立て整地すると同時に，その凹み堆積土（灰色粘土）上にSG1504の底石が張られ，池の造成が行われる。池北側のSD1525の整地は厚さ50 cmの茶褐色粘質土で行われ，池外側の礫敷下の整地も同様の土で，導水木樋SX1523の設置もこの整地と併行して行われている。すなわち七坪・六坪を流れていた流路SD1525の凹みの

埋め立てと合わせて，園池 SG1504 の造成と池の導水・排水施設の設置が一時に行われている。また坪の西北 1/4 にある前期の官衙的な配置を持つ建物は踏襲されるため，北塀 SA1500 と西塀 SA1536 が繋がって閉塞されることもなく，西塀 SA1536 は建物 SB1542 の目隠しとして作られる。他に園池と併存して，東塀 SA1455 の造作，池西側では池と対面する南北棟 SB1510，池の北側では東西棟 SB1550 と池給水用の井戸と考えられる SE1547・SE1611 などの掘削が行われる。

流路 SD1525 の凹みの埋め立てに際して，六坪の中心部の延長 50 m ほどの凹みを利用して池と導水・排水施設を造ることが計画され，この池 SG1504 を中心に，六坪心からそれぞれ70尺離れた位置に北塀 SA1500，東塀 SA1455，西塀 SA1536 と東側柱通りを合わせた南北棟 SB1510 が配置される。SB1510 は北側柱を坪の東西中軸線上に，SB1550 は東側柱を坪の南北中軸線に配し，北側柱は170尺の位置とする。流路の凹みのいずれの場所にも園池の造成は可能であったが，そのうち坪の中心部に園池を配したのは，六坪を一坪の敷地として利用する意図があったものと考えられる。また池をとりまく塀，建物の坪心からの距離70尺は六坪内の区画，東西420尺，南北420尺の各方向を三等分する位置，すなわち池を含んで六坪内を九区画に等分した中心部分の区画に当り，六坪を一体とした地割の計画であることが明確である。またB期と異なり，坪の東西・南北420尺を各六等分し，70尺方眼に区画した坪内の地割り計画は六坪を一坪として利用した計画を裏付けるものであろう。

平城Ⅲ期の土器が出土する SD1525 の堆積土（灰色粘土層）上に SG1504 の池底石が据えられていること，池の造成に当り流路 SD1525 の凹みを埋め立てる整地層（茶褐色粘質土）から平城Ⅲ期の土器や軒瓦の出土すること，井戸 SE1611 の埋土からⅡ～Ⅲ期の土器が出土することなどから，平城Ⅲ期以降Ⅳ期にかけての時期，すなわち天平末年から天平勝宝年間ごろの造成になるものと考えられる。

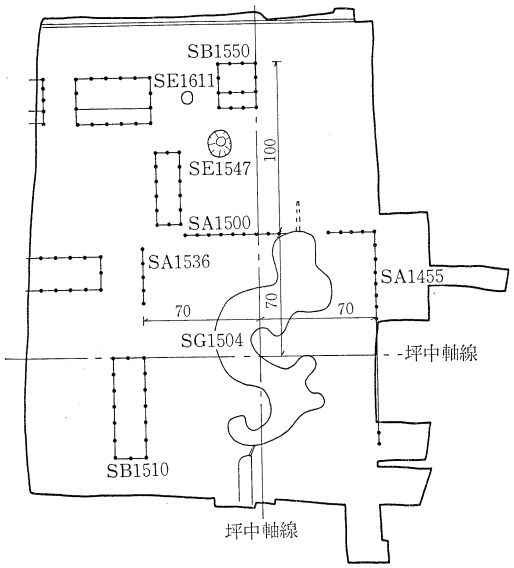


Fig. 47　C期遺構配置

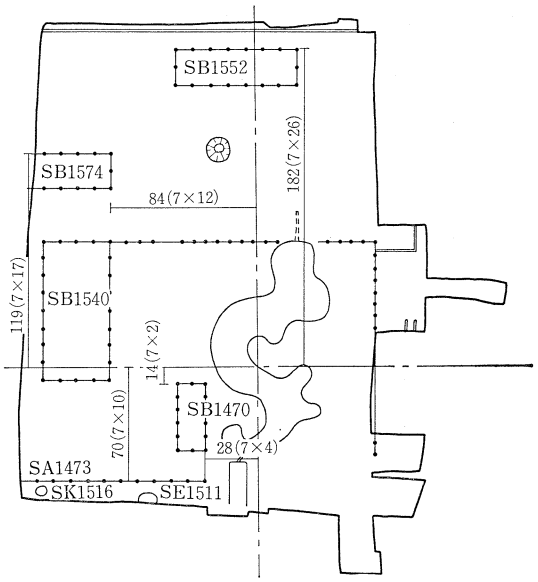


Fig. 48　D期遺構配置

C D期の遺構

D期にはC期にまで存続していた六坪西北部の官衙的な建物群がなくなり，建物が大幅に改築された時期で，池の西側にこの時期の主屋に当る大規模な礎石立ての南北棟 SB1540 と，池に近接した位置に南北棟掘立柱建物 SB1470 が建てられる。SB1540 の東北隅柱に北塀 SA1500 が西に延長されて繋がり，南塀 SA1473 も坪心から70尺の位置に造成され，池は坪心を中心に東・北・南にそれぞれ70尺の位置にある塀で囲まれ，西側に園池鑑賞用の南北棟の建物が配置される。北塀の北側については2棟の東西棟 SB1574 と SB1552 が建設される。

この時期の配置計画は前期の北塀・東塀がいずれも坪心から70尺（7尺×10間）の位置にあり，7尺の柱間で計画されているため，それに準じて，7尺を基準とする完数尺で計画されている。すなわち南塀SA1453は坪心から南70尺（7尺×10間）の位置にあり，東端は SB1470 の東側柱通りに合わせて坪心から東28尺（7尺×2間）に位置する。建物 SB1470 の北側柱も同様坪心から南14尺（7尺×2間）にある。SB1540 は北塀 SA1500 と北側柱通りを合わせ，坪心から北へ70尺（7尺×10間）の位置に，東側柱通りも SB1574 の東側柱通りと合わせて坪心から西へ84尺（7尺×12間）の位置にある。また北塀から北側の建物 SB1574 の北側柱通りは坪心から北へ119尺（7尺×17間），SB1552 の北柱通りは北へ182尺（7尺×26間）で，いずれも7尺を基準にその倍数で計画されている。また，この時期の遺構は池に近接する SB1470 を除きすべて柱間10尺で計画されている。

SB1570 の根石下からⅢ期の軒瓦，SB1574・SB1552 の抜取穴からⅣ期の軒丸瓦，SB1552 の柱穴よりⅣ期以降の土器が出土したことなどからこの時期の遺構は平城Ⅳ期以降，天平宝字年間またはそれ以降の造作と考えられる。

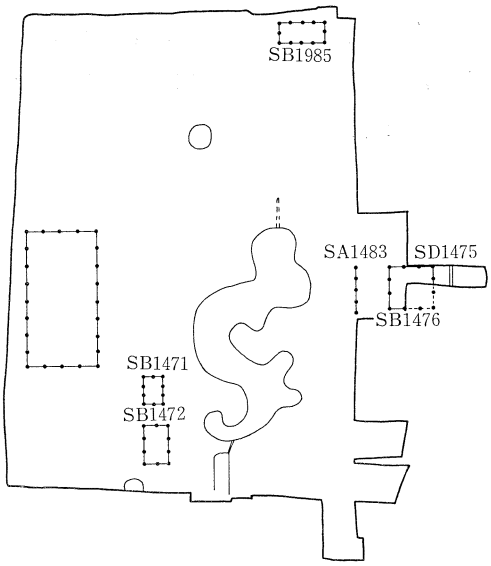


Fig. 49 E期遺構配置

D E期の遺構

この時期は園池が廃絶するまでの時期で，四周の塀はすでになくなり，池の西側に小規模な南北棟 SB1471 と SB1472 が西側柱通りをそろえて建設されるほか，東側に南庇付きの東西棟 SB1476 が建設され，その西に目隠塀として SA1483 が東塀 SA1455 の位置に造られる。また北方では SB1552 廃絶後，小規模な東西棟 SB1985 が建設される。小規模ながら池に近接した位置での南北棟の2棟や，東方の建物を隠す塀などは園池と関連した遺構と考えられるが，前期のような計画的な配置はみられない。園池 SG1504 の底石の上と排水溝 SD1465・SD1466 の下層の堆積から平城Ⅴ～Ⅵ期の土器，SB1476 の柱痕跡からⅢ～Ⅴ期の土器，SB1472 の柱穴から平安時代の土器が出土したことなどから，この時期は奈良末から平安時代初頭に入る時期の造作と考えられる。

2　出土木簡についての検討

木簡はすべて流路 SD1525 から出土しているが，そのなかには「北宮」と記したものが２点ある（木簡11・12）。ともに北宮へ貢進された俵の荷札で，国名不詳の鴨郡および阿須波里から北宮へ用物として納められた荷（俵に入れられた穀類か）につけられていたものであり，荷とともに北宮へ運ばれて，そこで廃棄されたと考えられる。SD1525 は遺構の章で述べられているごとく，園池 SG1504 造営以前に当地区を蛇行，南流していた水路である。

SD1525 出土の木簡で年紀のあるものは，習書も含めて，和銅３年，５年，７年と和銅年間に限られる（13・15・21・27）。またともに出土している各地からの貢進物付札の地名表記をみると，「鴨郡」(11)，「阿須波里」(12)，「小丹生郡野里」，(13)，「長郡」(16) などとあり，その地名の記載表記からみて，木簡はおおむね和銅年間，すなわち和銅６年（713）の諸国の郡・郷名を好字二字に改定する以前のものと考えられる。流路 SD1525 は奈良時代後半に園池 SG1525 が造成される以前においては，当地区に何らかの形で存続していたようであるが，SD1504 出土の木簡はいずれも堆積土下層からの出土で，一部は底辺近くの灰黒色粘土出土のものもみられ，層位としても木簡を奈良時代初めのものとみなして矛盾はなかろう。出土地点については水路の蛇行部に多量の加工木片や自然木片とともに存在したものが多い。なお，これらの木簡は当地区近辺から水路に投棄されたとすると，その場合には，調査区北西部の官衙的配置をもつ建物群と出土木簡との関連が考えられ，水路という性格上，水路上流の周辺から水路に投棄されたものが，当地区内の蛇行のくびれ部分に堆積した可能性もあり，そうすると当遺跡と「北宮」を直接的に結びつけがたいことになる。奈良時代後半の遺構である園池と「北宮」を結びつけることは時代的にも無理であろう。

北宮については，遺物の木簡の項で述べたごとく，長屋王願経（和銅経）の跋語の末尾にみえるが，この北宮は長屋王室である吉備内親王邸であり，その所在について藤原京および平城京のいずれとも時期的には可能である。ところが，神亀３年（726）の山背国愛宕郡出雲郷雲下里計帳に，戸口で「北宮資人」として出仕したものの存在がしられ，そのことから平城京に北宮が存在したことは明らかであり，木簡にみえる北宮はこの平城京の北宮に該当し，その位置が当遺跡周辺もしくは流路 SD1525 上流近辺にあった可能性が考えられよう。

ところで，木簡には北宮ばかりでなく，「御坏物」などの語句のあるもの（１），王子名の記載のあるもの（２）や，また官職名では断片ではあるが天皇を補弼する役所である「中務省」とみえるもの（24）や，「采女」関係の木簡（６）の存在などとともに，墨書土器にも「侍従」「宮」のごとき同じような性格を示すものも出土しており，これら一連の木簡や墨書土器と天皇家や親王家との密接な関係が考えられ，調査区北西部の官衙的建物配置との関連も含めて，今後本遺跡周辺の調査の進行とともに，それらの究明が期待できよう。

また，木簡のなかには「封」字の木簡（23）があるが，この木簡の用法としては，荷につけるというよりは，何か文書もしくは，同じような木簡の上に載せて，全体を紐がけしたうえに，「封」字をその上から墨書したものと考えたほうがよかろうか。何らか他見を禁ずる内容をもった文書（または木簡）の上に重ねて使用したもので，奈良市教育委員会の調査によって，

二条大路北側溝（左京二条二坊十二坪部分）で出土した「封」字の木簡の形状とあわせ考えると，長方形の材の上端に切り込みがあるか，または上下両端に切り込みがあるかのいずれかである（破損および二次的な整形によって原形を確定しがたいところもあるが）。すなわち木簡の形式分類によって原形を想定するならば，031型式もしくは032型式であろうが，その形態から考えると，物品につけたというより，上記のごとく，文書（もしくは木簡）の封として重ねて使用されたものではなかろうか。このような「封」字の木簡は，その出土がともに平城宮外であるところから，平城宮外への文書発給に際してつけられた可能性も考えられようか。なお延喜内記式には渤海国への勅書函に封のための臘の上に「封字」をかく規定がみられる。

また木屑状木片にかかれた数字等と和銅経との筆跡の関係も，木屑にかかれた数字が大般若経の巻次であるとの究明に寄与しうるものであるが，和銅経そのものも数筆の筆跡が考えられ，「二」のごとく共通するものもみられる反面，「卌」のごとく似ていないものもあり，筆跡からはなかなか確証しきれない。

なお，荷札の地名表記について，若干つけ加えると，当遺跡出土の貢進物の荷札は，若狭・遠江・阿波など国名記載のものも数点みられるが，里名のみのものや，里名および人名のみのものが目に付く。「某里人プラス人名」という記載方式は，藤原宮木簡にみられる方式で，大宝令施行前にあたり，大宝令施行後は，賦役令調皆随近条の規定に従がい，戸主・戸口明記の方式に変化するのであり，戸主・戸口明記の木簡は和銅・養老以後にはじめて出現するものである（『藤原宮木簡一 解説』藤原宮木簡の記載形式について。p.37）。ところで，当遺跡出土の木簡は，その点からみても，和銅年間の平城京造営期まででおさまるといえよう。ところで，「田寸里」(17)，「額田部里」(18)，「田官里」(19)，「□〔烈カ〕里」(20) のように里名のみか，里名および人名，また里名および物品名を認めた木簡があるが，この里を郡里制の里とすると，『和名鈔』の郷名に該当するものもみられるが，数個国に所在したりして決め難い。なお，「田寸里」は田村里の略記と考えられることから，地名表記で里名のみの木簡の一部については，その里名が平城京内の里名の可能性も考えられよう。また習書にみえる「小治□」(29) については小治町もしくは小治田かとみえ，人名の可能性とともに地名の可能性も考えられる。小治町については，平城宮の朱雀門内で宮造営以前の下ツ道の西側溝から出土した過所木簡（平城宮木簡1926号，『平城宮木簡二』）に「左京小治町」とみえ，藤原京所在の町名と考えられている。

奈良時代後期に園池SG1504が造営され，それとともに礎石建物が建てられる。園池SG1504は，その岸辺の整地土である茶褐色粘土から平城宮編年でⅢ期の土器と，Ⅲ期の瓦が出土していることから，その造営は後期すなわち聖武天皇の平城還都後，天平宝字年間と考えられている。平城宮内の園池に匹敵する園池の存在と，平城宮的な瓦の使用から，当遺跡が何か離宮的施設または親王等の邸宅であった可能性が考えられる。平城京内やその郊外に離宮や，親王や上級貴族の邸宅が多く設けられていた。左京三条二坊の近辺でも南接の四条二坊には，藤原仲麻呂の田村第や市原王の邸宅があったことがしられ，梨原宮や長屋王の佐保宮も当遺跡北方に考えられている。万葉集や懐風藻から多くの離宮や邸宅の存在がしられるが[1]，その現地比定にはいろいろ課題があり，当遺跡と直接結びつけるまではいたらない。

1）『平城京右京一条北辺四坊六坪発掘調査報告』p.69，小沢圭次郎「園苑源流考」（『国華』6，7号），大井重二郎『平城古誌』p.30等。

3　年輪年代法による出土曲物容器の年代測定

おもに平城宮跡出土の柱根（ヒノキ材）の年輪計測によって作成した725年分の標準年輪変動パターンは，これまで絶対年代と対応しないままフローティングの状況にあった。しかし，これと木曽ヒノキによる1009年から1984年までの標準年輪変動パターンとを連結する試料を検出
＊ したことより，B. C. 37年からA. D. 1984年までのヒノキの標準年輪変動パターンが完成した。現在，これを基準として柱根，曲物容器，折敷，井戸枠材等の年代測定に応用し多くの成果をあげている。

平城京左京三条二坊六坪の発掘調査では，年輪計測の可能な曲物容器の底板が出土しており，遺存状態の良好な1点を選定し，年代推定を試みることとした。

＊　Ⅰ　試料

試料は，SD1525からの出土品で，円形を呈し，直径14.5cm，厚さ0.6mmの底板である。樹種はヒノキ（*Chamaecyparis obtusa* ENDL.）で，柾目取りである。

Ⅱ　結果と考察

底板の測定年輪数は，288年分である。まず，コンピュータで標準年輪変動パターンと底板
＊ の試料年輪変動パターンとの相関を求めた結果，両者は標準年輪変動パターンのA. D. 421年からA. D. 708年の間で最も高い相関を示した。つぎに，相互の年輪グラフ（片対数グラフ）を重ねあわせて目視でもって比較照合した結果，両者の年輪変動パターンはコンピュータで検出した位置で重複していることを確認した（Fig. 50参照）。図中では，4個所の指標年輪（標準年輪変動パターンを作成する際に，すべての試料に共通してみられる変動変化を示す年輪をいう。これは，目視
＊ でもって比較照合する時に重要な鍵を握る年輪である。）を太線で示した。

以上の結果から，底板の最外年輪測定年代はA. D. 708年と判定できた。この底板は原木から円形に加工されており，外観からは辺材部分が確認できないし，これに続く心材部分がどの程度削り落されているかも推定しにくい。したがって，底板の伐採年代は削り取られたこれら周辺部の年輪数を708年に加算しなければならない。削り取られた周辺部分の年輪数は，推定
＊ しがたいが，底板の伐採年代は，少なくとも奈良時代前期をさかのぼらないことになる。

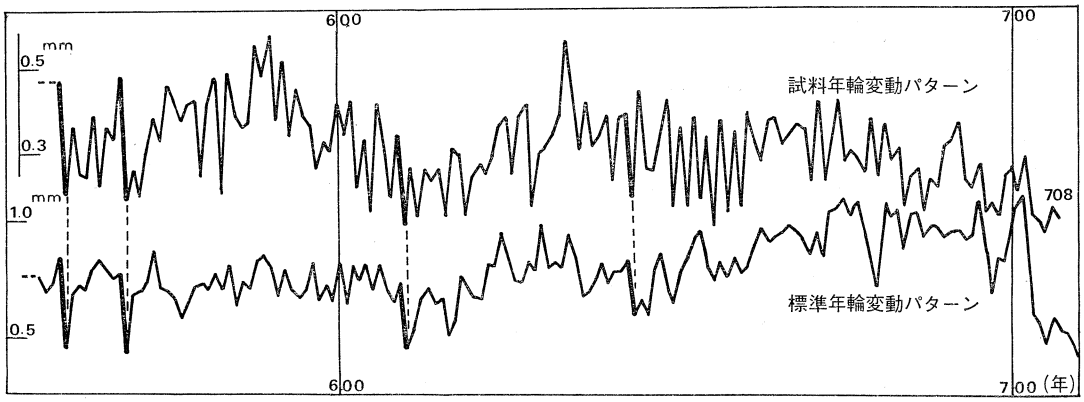


Fig. 50　標準年輪変動パターンと試料年輪パターンとの重複位置

4　平城京の庭園遺跡

文献・史料による平城京の庭園

平城京の庭園は従来実際の庭園がないため，「日本書紀」「続日本紀」など六国史の庭園の記事や，「懐風藻」「万葉集」などに詠まれた庭園を，または正倉院御物の仮山・蓮池・麻布山水絵図などを参考に往時の庭園の姿を想定していた訳である。その結果庭園の形態としては平城宮にみられる南苑・松林苑・西池宮などのほか，吉野離宮・高円離宮の皇室関係の禁苑や離宮と長屋王の佐保殿，藤原宇合の南池，藤原麻呂の園池などの高位高官の邸宅に限られることがわかる。また庭園の機能としては政治儀式などを行う機能的な場や，魚鳥の飼養や曲水宴などの慰楽，日常生活を中心とする自然観賞の場として，さらには蔬菜などを栽培する実用的な用途も持っていたものと推測されるが，実際の庭が現存しないため具体的な立地・意匠については想定の域を脱しないものである。

平城京の庭園遺跡

近年発掘調査の進展に伴ない平城京・宮では12個所の庭園遺跡を検出し，立地・意匠が明確となりつつある。その他未調査であるが平城宮の北に接する水上池は，11の佐紀池同様，谷筋の地形にあり，宮北面大垣を堤とした園池の可能性が高いし，法華寺の南，阿弥陀浄土院でも立石の頭が地表に一部露出し，庭園遺跡の可能性の高いものである。庭園の一部しか検出されてないものもあり，12個所の例では平城京全体の立地を考察するのは早急であろうが，Fig.51をみてみると，3，4の例すなわち離宮・別業的な性格を持つものを除いて宮内，宮周辺に立地することがわかる。これは皇族・高位高官の邸宅が宮周辺に立地することを裏付けるものである。

庭園遺跡の立地

また地形的な立地では山麓部に位置するのは3，4，6，8，9で谷筋に位置するのは11で他は標高 60〜70 m の平地部に位置することがわかる。更に微地形をみてみると山麓部に位置する園池でも3，4は浅い谷筋に形成され，6，8，9はいずれも前代の古墳の濠や堤の葺石を利用して作られている。平地に立地する園池の中でも7は浅い谷筋に位置し，10は小丘陵の麓に立地し，2と5と12は旧流路を利用する形で，平地を新たに穿って池を造成するのは1の例だけである。これは園池の水源・給排水の便などの条件に沿った立地の選択が必要なためであろう。

庭園遺跡の形態・意匠

園池の規模では占地の大きさより，立地状況に左右されることが多く，自然の谷筋を堰きとめている3，4，7，の例や，旧流路の窪地を利用する11や小林丘の麓で，湧水の水源も期待できる10の例などでは水面も広く，水深も深い園池が造成されているが，平地に新たに穿って作られる池1の例は小規模なものにならざるをえない。池の形状も2，5，12の旧流路を踏襲した形状のものや，楕円状・不整円形状のものが多く，いずれも立地に沿って決まる場合が多い。また共通する意匠では，古墳の葺石を州浜に利用する例の他，岸辺にゆるやかな曲線を描く，緩勾配（6°前後）に石を敷き並べた州浜石敷を持つ例が多い。園池の配置では坪の中心や坪の隅に位置する場合もあり，占地の大きさや建物配置より，むしろ旧流路・谷筋・古墳周濠などの位置により限定される場合が多いようである。また7の法華寺と1，6の高位・高官の私邸を除き全て皇室の別業・離宮・禁苑などの公的宴遊施設であり，1町以上の大規模な敷地を持つものである。庭園の規模・形状・意匠・配置などいずれもその立地が他の要素に強く影響している。

六坪の庭園遺跡

六坪の庭園遺跡は奈良時代前半の流路の凹みを利用して整地と併行して六坪中心に造成が行われ，形状は流路に準じて作られている。規模は水深が 20 cm 前後と浅いのはもともと流路

の凹みを利用したことや，導水が木樋暗渠からの給水によるためであろう。木樋暗渠の入口両側の角形の径 12 cm の柱根から想定されると，両側角柱に支えられる給水施設がそれほど高くもなく，また規模も大きなものは考え難く，北側の井戸より懸樋または人力などで導いてきた水をカメ状の施設で受け，管により木樋暗渠上部に導いていたものと思われる。庭園意匠において州浜石敷を持つことや，景石が奈良東部の山地で産出する摺曲した片麻岩・花崗岩を用いるなど他の庭園遺跡と共通点を持つが，池汀際に古墳の葺石の裾にみられるように玉石を立てることや，底全面に玉石を敷くなどの異なった意匠もみられる。池底に玉石を敷きつめるのは清流を流し，美観上の意識もあるが，流れをつくるためには底が削れないようにする機能的な要素もあるものと考えられる。曲水の遺構としては小墾田宮・東院園池南にそれぞれ玉石の幅狭い蛇行した溝を検出しているが，いずれも曲水を行うための上から下へ流速計算で2～3分で水が流れる機能的な造作となっている。今回検出の六坪の園池は幅も広く庭園としての意匠的な要素も強いが，溢流と池底の二段階の排水施設や，池底の石貼りなど流れを作る要素を持っていたことは事実である。この遺跡は曲水宴などを行った公的な宴遊の施設と考えられる。

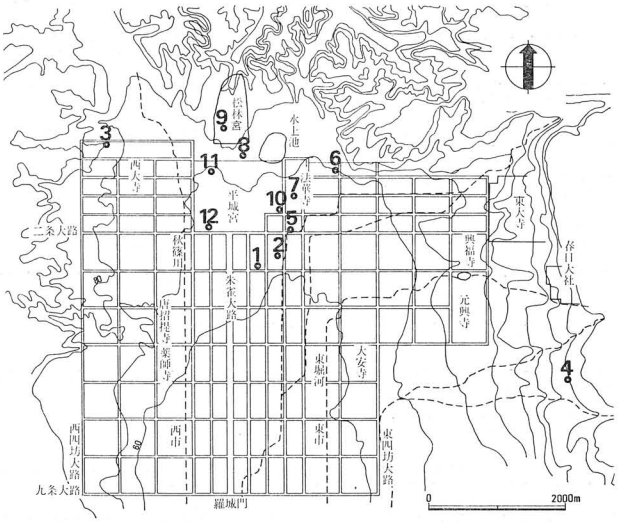


Fig. 51　平城京の庭園遺跡位置図

番号	名　称	立　地	規　模・形　状	意　匠	性　格	報　告　書
1	平城京左京三条一坊十四坪	浅い谷筋(平坦地)、十四坪の南西端	一部(南北5m　東西10m)円形の池、水深25cm	中島または出島と径20cmの玉石が裾部に一部残存　庭石(安山岩)	十三坪とあわせて二町の敷地を持つ	「奈良国立文化財研究所年報」1968
2	平城京左京三条二坊六坪	旧河川を利用した流路跡、六坪の中心	南北延長55m　東西15mの蛇行した曲池、水深25cm、220㎡	全面石敷の池で要所に庭石・岩島木桙・導水・排水木樋	公的な宴遊施設	本報告　1986
3	平城京右京一条北辺四坊六坪	標高百米の林丘の山麓部で浅い谷筋、三坪と六坪にまたがる	南北18m　東西25m楕円状水深40cm、1160㎡	中島、北西隅に湧水、護岸は地山の掘り込み	西大寺嶋院または称徳天皇御山荘跡	「平城京右京一条北辺四坊六坪発掘調査報告」1985
4	白毫寺遺跡	標高百五十米の小丘陵と山麓部浅い谷筋	長径25m、短径20mの長円状水深30～100cm	堰、景石、州浜石敷	高円離宮跡	「奈良県遺跡調査概報」白毫寺遺跡発掘調査概報　1982
5	平城京左京二条二坊十二坪	北と西に菰川が流れる平坦地　十二坪西中央	南北10m　東西8mの不整円形水深30cm	護岸玉石積、景石池尻素掘り排水路	一町占める公的施設	「奈良県観光」第321号現地説明会資料　1984
6	平城京左京一条三坊十五坪	標高百米前後の小丘陵群の山麓　十五坪東南	東西18m　南北10mの曲池水深23cm	前方後円墳、前方部の濠・葺石を利用した州浜石敷・景石	16坪と合せて2町しめる長屋王佐宝楼	「平城宮発掘調査報告Ⅵ」1975
7	法華寺	浅い谷筋　法華寺南西隅	一部(南北10m　東西30m)の不整円形　水深70cm	池の護岸	法華寺	「平城宮跡発掘調査概報」昭和55．57年度
8	平城宮北辺地域	尾根上　平城宮と松林宮の間	一部(南北16m　東西50m)曲池、水深60cm	市庭古墳外堤部葺石を利用した州浜石敷	公的宴遊施設	「平城宮北辺地域発掘調査概報」1981
9	松林苑	尾根上　猫塚古墳北側	一部	猫塚古墳の周濠を利用した州浜敷	松林苑	「奈良県観光」第277号　1979
10	平城宮東院	小林丘の東南麓　宮東南隅	東西・南北各60m鍵の手状水深40cm	前期池護岸石積、後期池は州浜石敷・築山石組・中島・橋・流盃渠	東院　773年楊梅宮	「奈良国立文化財研究所年報」1968.1979.1980
11	佐紀池	谷筋	南北240m　東西150m逆L状水深50cm	幅2mの州浜石敷、堰	西池宮・鳥池塘	「奈良国立文化財研究所年報」1976.1977
12	平城宮西南隅	旧秋篠川流路 宮西南隅 若犬養門内側	一部(東西22m　南北10m)不整形楕円　深さ1.5m	シガラミ、排水路	宮西南園池	「奈良国立文化財研究所年報」1982

Tab. 10　平城京庭園遺跡一覧表

5 結　　語

平城京左京三条二坊六坪の発掘範囲は，坪の三分の一以上に及び，したがって京内の一坪の様相を具体的に把握する上でまたとない機会であった。そして発掘の成果は，坪の中心に屈曲した石組の園池を持つ邸宅跡の発見という予想外の実りを得ることとなった。

遺跡は8世紀のはじめから9世紀の初頭に至る，ほぼ百年に亘り，大きく奈良時代前半と後半の二期に区分される。前半には，菰川旧河道が，蛇行した小流路となって坪中央部に存続しており，そのため坪西北部に，条坊計画に従った官衙的配置を持つ建物群が建てられた。この流路はその上流にあたる七坪においても発見されており，そこから流れ込んだとみられる当初の堆積土からは和銅年間の「北宮」をはじめとする木簡が出土している。流路を中心として出土した軒瓦や土器はいずれも平城京的な特色の強いものであるが，「中務省」の木簡，「侍従」の墨書土器，さらには規格性をもつ建物配置などを考え合わせると当地域は京内の官衙的な性格を持つものと考えられる。

次いで奈良時代の後半にはこの流路を埋め立てると同時に，その一部を利用して，坪のほぼ中央に，この時代空前の規模と意匠をあわせ持つ大園池が造営されたのであった。

平城京の園池遺跡は，自然の谷筋や旧流路，前代の古墳の濠などを利用する例が多く，意匠においても古墳の葺石を利用して園池の州浜石敷を作るなどの例がみられ，旧来の地形を巧みに利用して造成が行なわれていることが知られる。今回発見の園池も，流路跡を踏襲して屈曲した形状の平面とし，景石や州浜石敷を汀に配するばかりでなく，おそらくは曲水宴などの用途のためであろうが池底一面にも大きな玉石を敷きつめるという，雄大かつ精緻な構想のもとに完成されている。かかる園池の発見そのものが，古代庭園史に大きな一頁を書き加える成果であったことはいうまでもない。

一方宅地利用の面からみると，特に後期に至って坪の中央に園池が置かれ，その西側一帯に大規模な建物が配されるという状況には，方位こそ違えいわゆる寝殿造の初期形態を期待するに充分なものがあった。しかし，結果としてこの建物配置のみから，後代の寝殿造との直接的な脈絡を見出し得るとするにはなお困難が多いと言わざるを得ない。とはいえ，園池と建物との，鑑賞や行事を媒介とした密接な関係は充分にうかがうことができるし，古代邸宅建築の具体像を知り得た点で，建築史上の価値も多大なものがある。

奈良時代後半のこの地域は坪の中心に立派な園池を配することや，それに伴なう曲水宴などの公的行事の可能性，また出土瓦が後半には平城宮所用のものが多いことなどから，園池を中心とする離宮施設または親王などの邸宅であった可能性が考えられる。

以上本遺跡の要点を再録し，結語とする。

補論　六坪遺跡の環境整備

1978年に左京三条二坊六坪が特別史跡に指定後，奈良市は国庫補助事業によって指定地全域を公有化した。その後指定地の整備活用を図るため，1979年12月，平城京左京三条二坊宮跡庭園復原整備基本構想委員会を下記メンバーで設立し，この遺跡の保存と活用のための総合的な復原整備のあり方について基本的な構想をまとめた。

基本方針としては古代における作庭，行事，雅宴などについて体験的な理解ができる復原的整備を図ることを基本とし，園池は薬剤などによる補強を行い露出展示を行う。建物1棟と塀は遺構上面に盛土して復原する。展示・管理施設を設置する。修景的な植栽を行うことなどの方針が採択された。

平城京左京三条二坊宮跡庭園復原整備基本構想委員会（アイウエオ順）

委員長　豊崎　稔　京都大学名誉教授
委　員　青山　茂　帝塚山短期大学教授
狩野　久　奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長
木村　博一　奈良教育大学教授
工藤　圭章　奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部長
菅沼　孝之　奈良女子大学助教授
坪井　清足　奈良国立文化財研究所所長
土井　実　奈良文化女子短期大学名誉教授
西山　卯三　京都大学名誉教授
森　蘊　庭園文化研究所所長
吉川　需　日本大学教授

基本構想にのっとり，基本設計，実施設計を奈良市は環境事業計画研究所 K.K. に委託し，下記メンバーによるワーキング・グループに諮りながら事業を実施した。

宮跡庭園復原整備ワーキング・グループ委員

委員長　土井　実　奈良市文化財保護審議会会長
委　員　近藤　公夫　奈良女子大学教授
菅沼　孝之　奈良女子大学教授
中村　一　京都大学教授
村岡　正　庭園文化研究所副所長
八木　清勝　(財)建築研究協会
牛川　喜幸　文化庁文化財保護部記念物課主任文化財調査官
岡田　英男　奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長
安原　啓示　奈良国立文化財埋蔵文化財センター保存工学研究室長
田中　哲雄　奈良国立文化財平城宮跡発掘調査部計測修景調査室長
川内一郎・和田元三・山口凱之・東森正文　奈良県教育委員会文化財保存課長
藤井　宗治　奈良市教育委員会教育長
中井　利夫　奈良市教育委員会教育次長
油谷　順司　奈良市教育委員会社会教育部長
油谷順司(兼)，田辺征夫　奈良市教育委員会文化財室長
田辺征夫，亀井伸雄　奈良市教育委員会文化財課長
太田慎司，窪田　靖　奈良市建設局建設部長
森田　嘉一　奈良市建設局建築課長
北尾義夫・油谷順司　奈良市企画部長
古田育宏・辰野一郎　奈良市企画課長

事業経過としては1979年に遺跡地全体の保存のために，東側を流れる菰川沿いの境界土塁工事と排水工事を行った。1980年には周辺の排水と，池への導水をポンプによる還流式とするためのポンプ室，水門工などを，1981・1982年には復原建物の建設と，史跡文化センターの建設，文化センター・ピロティ内の遺構表示を行っている。1983年には園池修復のための素屋根工，池排水工，アプローチ道路などの施工を，1984年には園池修復，木塀復原，木樋，木組の復原などを，1985年には庭園部の植栽を行っている。

建物復原は遺構 SB1510 で行い，桁行6間，梁間2間，切妻造，檜皮葺で床の高い掘立柱状建物に復原している。塀の復原は遺構 SA1500, SA1455, SA1536 により高さは8尺の横板張

り板塀とした。文化センター・ピロティ内の遺構では井戸 SE1547 の井戸枠を 60 cm 立ち上げて表示する他，建物 SB1572 の縁取りと柱を 60 cm 立ち上げて表示している。また流路 SD 1525 はカラー・アスファルトで表示している。

園池 SG1504 は底石，護岸立石，岸辺の敷石，景石を露出し，外側の礫敷は樹脂で硬化後，礫敷きで覆っている。景石は摩滅が著しいため樹脂処理を行い，明らかに転倒しているものについては元の位置に起し，欠損している個所には補充した。護岸立石，底石についても同様の処置を施し，再利用の石は裏面に○印を，補充の新石には△印を刻印した。

木枠 SX1503・SX1563 は取り上げた後に，規格・材質などを旧来通り復原した摸造品を設置している。排水木樋 SX1464 は整備後，目にふれる個所は材質・寸法を復原し，導水木樋 SX1523 も蓋と導入口の材質・規模を復原し，内部に硬質塩化ビニール管を接続させて給水を行うこととしている。池の東側に，出土した植物遺体に合わせたマツ，ウメの庭園植栽を行った他，敷地内に修景と周辺都市部との緩衝のため植栽を行っている。東側の修景植栽区域内にポンプ室の管理用道路の設置と敷地周辺に管理用フェンスを設ける他，遺構の説明・表示板を4個所に設置している。

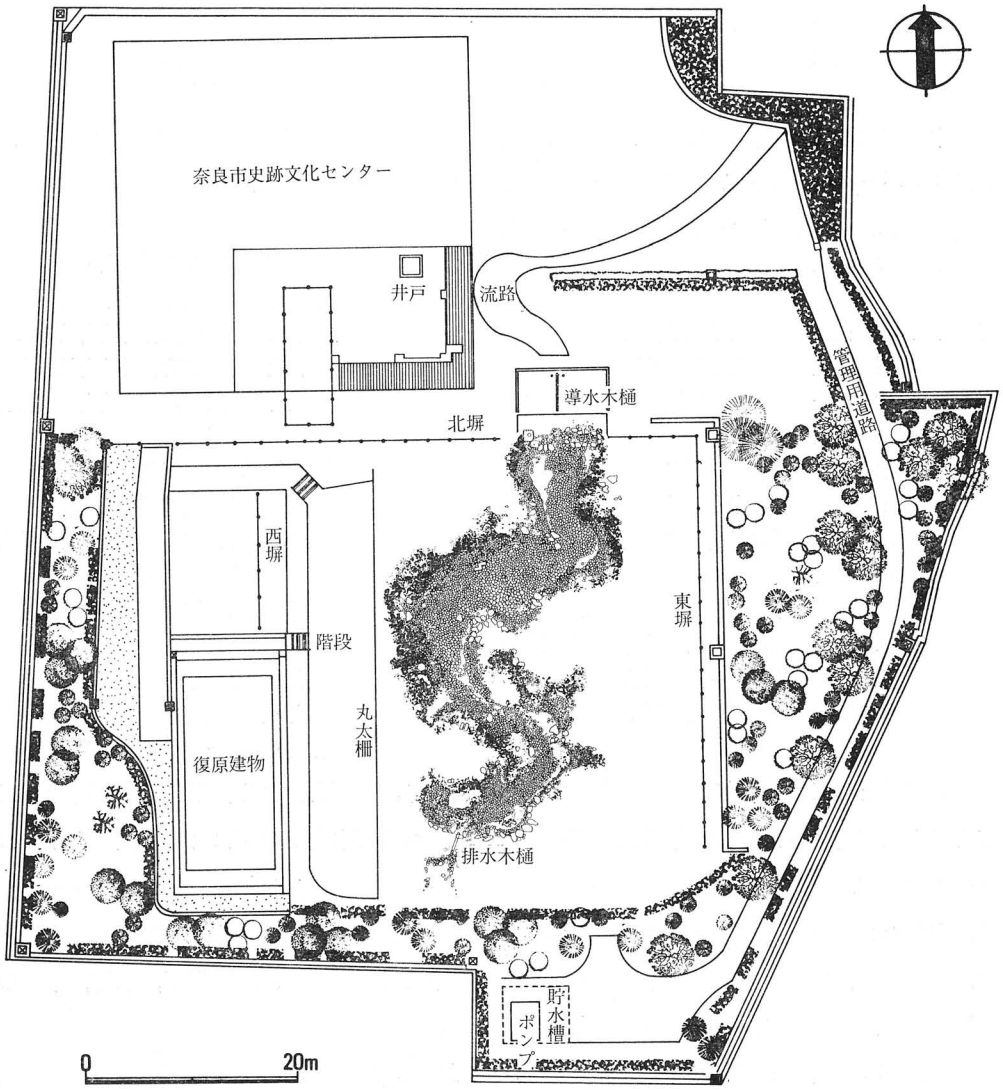


Fig. 52 六坪遺跡の環境整備図

別　　表

1　主要建物一覧表
2　軒丸瓦分類表
3　軒平瓦分類表
4　出土土器一覧表

別表1　主要建物一覧表

時期	建物	規模	棟方向	廂	桁行 m(尺)	梁間 m(尺)	廂 m(尺)	柱穴 m	備考
B 期	SB1505	3×2	NS		6.3(21)	4.9(16)		方 0.9	
	SB1542	4×2 以上	WE		10.6(36) 以上	5.4(18)		方 1.0	
	SB1573	5×2	NS		12.6(42.5)	4.2(14)		方 0.6	
	SB1570	5×2	WE	S	13.3(45)	5.4(18)	2.7(9)	方 1.2	
	SB1571	3×2	WE	S		5.4(18)	2.7(9)	方 1.2	
C 期	SB1510	6×2	NS		17.7(60)	5.9(20)		1.0～1.5× 0.8～1.0	間仕切 柱掘形長方形
	SB1550	3×2	WE	S	6.3(21)	4.8(16)	2.7(9)	0.5	柱掘形不整形
D 期	SB1574	5×2 以上	WE		12.0(40) 以上	6.0(20)		方1～1.2	
	SB1552	7×2	WE		21.0(70)	6.0(20)			床束
	SB1470	5×2	NS		12.0(40)	4.8(16)			
	SB1540	8×2	NS	WE	24.0(80)	6.0(20)	3.0(10)	方0.7～1.0	礎石建物
E 期	SB1471	3×2	NS		4.8(16)	3.6(12)		方0.4	
	SB1472	3×2	NS		6.7(22.5)	2(15)			
	SB1985	4×2	WE		7.8(26)	3.6(12)			
	SB1476	3×2	WE	N	7.3(24)	4.8(16)	2.4(8)	方0.4～0.6	

別表2　軒丸瓦分類表

型式	直径	外区 中房径	外区 蓮子数	外区 弁区径	外区 弁幅	外区 弁数	外区広	外区 内縁 副	外区 内縁 文様	外区 外縁 幅	外区 外縁 高	外区 外縁 文様	全長	玉縁長	6AFI—P	6AFI—Q	計	%
6133C	159	40	1+6	101	17	T13	29	16	S18	13	8	—			1 1 (4)	1 (1)	1 1 (5)	1.4 1.4 (7.8)
6134B	154	37	1+6	98	19	T 9	28	17	S20	11	7	LV			1	1	2	2.9
6138B	157	38	1+5	97	32	T12	30	18	S24	12	10	LV	402	60		1	1	1.4
6225E	165	61	1+8	119	30	F 8	23	11	K	12	6	RV			1		1	1.4
6235B	168	56	1+5	112	29	F 8	28	17	S17	9		—				1	1	1.4
6272A	182	60	1+4+8	116	31	F 8	33	13	S	20	10	MV			1		1	1.4
6274A b	177	61	1+5+9	127	34	F 8	25	12	S40	13	13	LV42	404	68	1		1	1.4
6279A	176	47	1+8	104	26	F 8	36	12	S31	24	13	LV27	431	59	1	3	4	5.8
6282B b	162	45	1+6	86	31	F 8	38	20	S24	15	9	LV24	361	53	1 1 (3)	5 5 (7)	6 6 (10)	8.6 8.6 (14.3)
6284C	155	40	1+6	89	23	F 8	33	20	S24	13	11	LV16	375	48		1	1	1.4
6285A	161	33	1+6	87	24	F 8	37	21	S23	16	16	LV22	370	55	10	12	22	31.4
6314A	140	30	1+6	80	36	F 4	30	15	S16	15	6	LV16	364	52		1	1	1.4
6316K	160	46	1+8	110	30	F 9	25	12	S	13	7					1	1	1.4
6348A a	181	47	1+8	105	37	F.7	38	23	HK	15	7	LV19	380	59		1	1	1.4
												不明型式			6	12	18	25.8
												総数			28	42	70	71.4 (100.6)

別表3　軒平瓦分類表

型式		瓦当面 上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区厚さ	内区文様	上外区厚さ	上外区文様	下外区厚さ	下外区文様	脇巾	脇区文様	文様の深さ	全長	顎の形態 直	曲	段	6AFI-P	6AFI-Q	計	%
6641C		284	56	325	52	24	HK	13	S23	15	LV19	59	LV4	2	397			○		3	3	3.2
6663F					55	30	KK	13	K	13	K		K	3			○		5	2 } 3	7 } 8	7.5 } 8.6
6663J					55	20	KK	21	K	14	K		K	4			○			1	1	1.1
6664C		240	62	252	51	24	KK	14	S21	13	S21	62	S3	4	376			○		1	1	1.1
6664D		240	60	269	60	22	KK	20	S17	18	S19	74	S3	5	358			○	1 } 3		1 } 4	1.1 } 4.3
6664F		245	61	275	58	27	KK	14	S19	17	S21	78	S3	5	375			○	2		2	2.2
6667A		275	58	282	62	27	KK	15	S21	20	S21	58	S3	3			○	○	14	25	39	42.0
6671K					66	23	KK	22	GS	21	LV		GS	7		○				1	1	1.1
6675A		275	59	282	49	26	KK	11	S15	12	LV17	58	LV1	1				○		1	1	1.1
6691A		270	55	293	55	25	KK	14	S21	16	S21	58	S3	4	345		○			1	1	1.1
6721A		260	54	268	45	21	KK	12	S26	12	S27	53	—	3	365		○		3 } 5	4 } 8 (12)	7 } 13 (17)	7.5 } 13.4 (18.2)
6721C		265	49	280	53	25	KK	15	S26	13	S32	60	—	3	359		○		2	4	6	6.5
6732A		285	47	305	69	36	KK	15	S9	18	S9	75	S3	4	382		○		3 3 (7)		3 3 (7)	3.2 3.2 (7.5)
														不明型式					4	8	12	12.9
														総数					38	55	93	87.1 (100.0)

別表4　出土土器一覧表

土器番号	器	種	口径(cm)	器高(cm)	手法・群別ほか
SG1504					
1	土師器	椀A	10.0	3.0	C_3 手法，Ⅱ群土器
2	〃	杯A	14.6	3.2	f 手法，胎土は砂粒多い
3	〃	椀A	—	—	C_3 手法，Ⅱ群土器，刻線あり
4	〃	皿A	21.2	2.2	C_0 手法，Ⅱ群土器，ほぼ完形
5	〃	盤	(底径 13.6)		Ⅰ群土器
101	須恵器	杯B	10.2	3.8	Ⅰ群土器
102	〃	杯B蓋	11.8	—	Ⅰ群土器，重ね焼き痕あり，硯に転用
103	〃	杯B	11.6	3.6	Ⅰ群土器
104	〃	杯B蓋	15.0	—	Ⅰ群土器，重ね焼き痕
105	〃	杯B	(底径 10.6)		Ⅰ群土器
106	〃	皿B蓋	27.4	—	Ⅰ・Ⅱ群土器以外か
107	〃	皿B	23.0	—	底部外面ロクロケズリ
108	〃	水瓶	(底径 9.7)		Ⅰ群土器
SD1465					
9	土師器	甕A	16.8	—	体部内面ヘラケズリ
111	須恵器	杯B蓋	15.0	2.0	頂部外面ロクロケズリ
SD1466					
6	土師器	杯A	19.6	4.0	C_3 手法，Ⅰ群土器，ヨコナデ右あがり
7	〃	高杯	(口径不確実)	—	Ⅱ群土器，杯部外面ヘラケズリ＋ヘラミガキ
8	〃	甕	17.2	—	口縁部内面ハケメ
109	須恵器	杯B蓋	19.0	—	Ⅰ群土器
110	〃	杯B蓋	15.4	2.3	頂部外面ロクロケズリ，内面を硯に転用
112	〃	杯B蓋	13.4	—	
113	〃	杯B蓋	21.4	—	
114	〃	杯B蓋	20.0	—	
115	〃	杯B	19.0	5.8	
SD1545					
10	土師器	杯A	19.6	4.0	Ⅰ群土器，放射暗文あり
11	〃	皿A	18.3	—	b_1 手法，Ⅰ群土器
12	〃	鉢	18.0		Ⅰ群土器
13	〃	高杯	—	—	Ⅰ群土器
14	〃	杯B	16.9	3.0	a_1 手法，Ⅰ群土器
116	須恵器	杯B	19.6	7.4	Ⅰ・Ⅱ群土器以外か
117	〃	杯A	13.4	2.8	火ダスキ痕，Ⅰ群土器
118	〃	壺A	17.8	26.4	
119	〃	甕	42.0		
120	〃	獣脚	(現存高11.5)		
SD1525					
堆積土					
15	土師器	杯A	(口径不確実)	4.5	a_1 手法，Ⅰ群土器
16	〃	椀A	16.8	3.9	c_3 手法，Ⅰ群土器
17	〃	杯X	17.4	4.0	a_0 手法，Ⅰ群土器か，底部外面木ノ葉痕
18	〃	杯X	17.8	3.7	a_0 手法，Ⅰ群土器か
19	〃	杯X	18.8	5.0	b_0 手法，Ⅰ・Ⅱ群土器以外か，外面に黒斑あり
21	〃	杯B蓋	12.6	—	頂部外面密な4方向へのヘラミガキ，頂部内面ラセン暗文
24	〃	椀C	13.8	3.7	a_0 手法，外面に粘土紐の継ぎ目残す。胎土荒い

25	〃	甕B	10.0	7.9	
26	〃	皿A	(口径不確実)	2.4	b_3手法，Ⅰ群土器
27	〃	皿A	22.6	2.8	a_0手法，Ⅰ群土器，底部内面ラセン暗文
28	〃	高杯	24.2	—	杯部外面ヘラケズリ，Ⅰ群土器
29	〃	高杯	(裾部径13.4)		Ⅰ群土器
30	〃	高杯	(裾部径 14.4)		Ⅱ群土器
31	〃	鉢B	15.1	5.6	c_3手法，Ⅰ群土器
32	〃	鍋B	32.4	14.4	底部外面煤付着
33	〃	甕C	20.6	36.7	底部外面煤付着，体部内面粘土紐継ぎ目残す
34	〃	甕A	14.0	13.6	完形，煤等の付着なし
35	〃	甕A	12.8	13.3	体部下半内外面ヘラケズリ，内面黒色物質付着，外面煤付着
36	〃	甕A	13.6	12.0	体部外面黒斑あり
121	須恵器	杯B蓋	15.4	2.6	Ⅰ～Ⅳ群土器以外か
123	〃	杯B	13.8	3.7	
124	〃	杯B	16.6	4.3	Ⅰ群土器，底部外面爪状圧痕，墨書あり
125	〃	杯B	17.5	5.9	Ⅰ群土器
126	〃	皿A	17.5	2.2	Ⅱ群土器，口縁部外面ヘラミガキ
127	〃	杯X	18.8	4.4	Ⅱ群土器，内外面ヘラミガキ
128	〃	杯A	13.5	3.7	Ⅰ群土器
129	〃	杯A	10.0	4.2	
131	〃	杯B蓋	11.7	1.8	Ⅰ群土器，完形
136	〃	杯B	10.4	3.3	Ⅰ群土器
137	〃	杯B	9.6	4.7	口縁部下端ロクロケズリ，口縁部内側に煤付着
138	〃	皿C	16.4	2.4	底部外面ロクロケズリ，Ⅱ群土器
141	〃	皿D	(口径不確実)	2.2	底部外面ロクロケズリ，口縁部内外面ヘラミガキ，Ⅱ群土器
143	〃	高杯	29.0	13.6	Ⅰ群土器
144	〃	壺B	9.9	14.9	体部外面下半ロクロケズリ
146	〃	甕	17.2		
埋土					
20	土師器	杯B蓋	16.0	2.2	頂部4回分けヘラミガキ，Ⅰ群土器
22	〃	皿C	11.8	1.9	a_0手法，Ⅰ群土器
23	〃	椀X	12.9	4.0	b_0手法，Ⅰ群土器，口縁部に煤付着
122	須恵器	杯B蓋	16.0	1.2	
130	〃	杯B蓋	10.4	2.0	
132	〃	杯B蓋	10.3	2.7	Ⅰ群～Ⅳ群土器以外か，頂部外面ヘラキリ
133	〃	杯B蓋	11.8	1.6	
134	〃	杯B蓋	12.2	1.4	Ⅰ群土器
135	〃	杯B蓋	11.4	3.7	Ⅰ群土器
139	〃	皿A	22.2	2.6	底部外面ロクロケズリ，Ⅱ群土器か
140	〃	壺L	(高台径 3.9)		体部外面ロクロケズリ
142	〃	皿B	26.5	4.3	底部外面ロクロケズリ
147	〃	鉢A	21.0	—	体部外面ロクロケズリ，Ⅱ群土器
148	〃	平瓶	(体部径 13.8)		体部上面自然釉かかる，Ⅰ群土器
SD1560					
37	土師器	小型丸底壺C	8.6	8.6	完形，外面煤付着
SE1511					
42	土師器	高杯	(裾部径 16.2)		Ⅰ群土器
SE1547					

38	土師器	杯A	(口径不確実)	—	c_1手法，Ⅰ群土器，ヨコナデ右まわり
39	〃	杯A	15.3	2.8	a_0手法，Ⅰ群土器，灯火器
40	〃	杯A	(口径不確実)	2.6	a_0手法，Ⅰ群土器
41	〃	皿C	12.5	2.0	a_0手法，Ⅰ群土器，ヨコナデ右まわり
43	〃	杯B	16.2	3.8	
156	恵須器	杯B	10.4	3.6	Ⅰ群土器
SE1611					
157	須恵器	杯B蓋	16.6	1.6	重ね焼き痕
158	〃	皿B	28.8	5.0	底部外面ロクロケズリ
160	〃	甕	20.0	—	
SK1516					
154	須恵器	杯B蓋	10.9	1.0	頂部外面ロクロケズリ，完形，重ね焼き痕
159	〃	盤A	34.8	9.2	
SB1510					
44	土師器	杯A	(口径不確実)	3.7	b_1手法，Ⅰ群土器
SB1540					
45	土師器	椀A	11.8	4.0	c_3手法，Ⅱ群土器
SB1552					
162	須恵器	杯B	(底径 4.9)		Ⅰ群土器，墨書あり
163	〃	杯B蓋	19.4		頂部外面部分的にロクロケズリ
164	〃	皿B	28.8	4.9	底部外面ロクロケズリ，爪状圧痕
301	〃	硯	17.4	—	陸部に墨付着
SB1570					
161	須恵器	杯B蓋	12.0	1.6	Ⅰ群土器
包含層					
46	土師器	皿A	16.1	3.1	c_0手法，Ⅱ群土器
47	〃	皿A	(口径不確実)	2.6	a_1手法，内面放射暗文
48	〃	杯A	(口径不確実)	2.6	e手法，胎土は砂粒多し，底部内面ハケメ，外面に粘土紐継ぎ目
165	須恵器	皿E	10.8	2.6	Ⅰ群土器，漆付着
166	〃	杯B蓋	13.4	2.6	Ⅰ～Ⅳ群土器以外か
167	〃	杯B蓋	21.3	2.2	Ⅰ群土器
168	〃	杯B	15.2	4.5	Ⅰ群土器，硯に転用（朱墨用），墨書あり
169	〃	杯F	17.8	—	口縁部内外面ロクロナデ
170	〃	杯B	20.2	7.5	Ⅰ群土器
171	〃	甕	21.8	—	
172	〃	注口	(現存長8.0)		
二彩陶器					
201		火舎			軟陶，包含層出土
202		小壺か			軟陶，包含層出土
緑釉陶器					
203		椀	(底径4.0)		軟陶，包含層出土
205		椀	(底径8.0)		軟陶，蛇ノ目高台，包含層出土
灰釉陶器					
204		椀か瓶	(底径7.5)		包含層出土
206		壺	(底径3.4)		床土出土
陶硯					
301			(外堤径 17.4)		SB1552 柱抜取り穴出土

墨書土器・墨描土器			
16	土師器	椀A	SD1525堆積土出土
124	須恵器	杯B	SD1525堆積土出土
135	〃	杯B	SD1525堆積土出土
149	〃		SD1525埋土出土
150	〃	杯B	SD1525埋土出土
151	〃	杯B	SD1525埋土出土
152	〃	杯	SD1560埋土出土
155	〃	杯B蓋	SK1983出土
168	〃	杯B	包含層出土
刻線文土器			
3	土師器	椀A	SG1504出土
土馬			
302		高さ 14.4	SD1545出土
303		高さ 12.7	SD1545出土

RESEARCH REPORT OF NARA NATIONAL CULTURAL
PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE NO. 44

EXCAVATION REPORT ON THE SIXTH BLOCK IN EAST SECOND WARD ON THIRD STREET, ANCIENT NARA CAPITAL

ENGLISH SUMMARY

NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES
RESEARCH INSTITUTE 1986

CONTENTS

Page

Chapter I Introduction

1. The survey of Ancient Nara Capital 1
2. Publication of the report 3

Chapter II Outline of Excavation 4

1. Progress of research work 4
2. Excavation areas 5
3. General discription of research work 7
4. Excavation diary 9
   - A. Preliminary excavation of NO. 96 9
   - B. Excavation NO. 96 10
   - C. Excavation NO. 109 12
   - D. Excavation NO. 121 12
   - E. Excavation with the conservation works 13
5. Remarks on photogrammetry 14

Chapter III The Site 16

1. Overview 16
2. Features 18
   - A. Features of Phase A (prior to the Nara period) 18
   - B. Features of Phase B (early Nara period) 19
   - C. Features of Phase C (middle Nara period) 23
   - D. Features of Phase D (late Nara period) 31
   - E. Features of phase E (early Heian period) 33
   - F. Features after the abandonement of the Palace and other indefinable ones 34

Chapter IV Artifacts 36

1. Wooden tablets 36
2. Roof tiles and bricks 43
   - A. Rounded eaves-tiles 43
   - B. Flat eaves-tiles 49
   - C. Rounded and flat rooftiles 54
   - D. Rounded and flat rooftiles with written character 60
   - E. Special rooftiles and bricks 62
   - F. Some arguments 64
3. Pottery 69
   - A. from garden SG1504 69
   - B. from ditches SD1465 · SD1466 70
   - C. from ditch SD1545 71
   - D. from ditch SD1525 72

E. from ditch SD1560 74
F. from ditch SD1451 74
G. from ditch SD1475 74
H. from wells SE1511 · SE1547 · SE1611 75
I. from disposal pits SK1516 · SK1983 · SK1993..... 75
J. from buldings SB1510 · SB1540 · SB1552 · SB1570.. 76
K. from cultural layers 76
L. Special earthenwares 76
M. Some arguments 78
4. Wooden objects 80
A. Wooden objects..... 80
B. Fibers and textiles 83
C. Observation of lacquer membrane by microscope ... 83
5. Stone and metal objects..... 83
A. Stone objects..... 83
B. Metal objects and casting remains 83
6. Plant remains..... 84
A. Plant remains 84
B. Pollen Analysis..... 85

Chapter V Articles 86
1. Changing configurations at the 6th block site..... 86
A. Phase B features 87
B. Phase C features..... 88
C. Phase D features 90
D. Phase E features 90
2. A study on the wooden tablets as historic materials..... 91
3. Dendrochronological study on the round wooden container from SD1525..... 93
4. Garden sites in the Ancient Nara Capital..... 94
5. Conclusion..... 96
SUPPLEMENT Conservation works of the site after excavation 97
SUPPLEMENTARY TABLES 99
ENGLISH SUMMARY..... 107

ILLUSTRATIONS IN TEXT

Fig. Page
1. List of excavations held in the Ancient Nara Capital..... 2
2. The map showing the excavation areas in Ancient Nara..... 2
3. Topographical map and excavated areas on the site of east. second ward on third street, Ancient Nara Capital 6
4. Survey map of area 6AFI..... 7
5. Area divisions of preliminary excavation of NO. 96 and major

features 9
6. Area divisions of excavation NO. 96 and major features..... 10
7. Area divisions of excavation NO. 109 and major features..... 12
8. Area divisions of excavation NO. 121 and major features..... 12
9. Area divisions of excavation with the conservation works..... 13
10. Photogrammetry with a camera hung by crane 14
11. Photogrammetry by helicopter..... 14
12. Camera settings for the photogrammetry 15
13. Natural soil and topography in survey area..... 16
14. Cross section showing chronological stratification of SD1560 and SD1525..... 17
15. Plan of stream SD1525 21
16. Stratigraphic profile of well SE1547..... 24
17. Cross section showing chronological stratification of SG1504 25
18. Scale drawing of the stone construction around SG1504..... 26
19. Scale drawing of planting curb SX1463 27
20. Scale drawing of planting curb SX1503 27
21. An opened up view of the wooden conduit SX1523 for water supply.. 28
22. An opened up view of the wooden conduit SX1464 for water drainage..... 28
23. Scale drawing of SX1524..... 29
24. Scale drawing of ditches SD1465・SD1466 30
25. Scale drawing of SX1468..... 30
26. Scale drawing of SX1461..... 31
27. Stratigraphic profile of well SE1511..... 33
28. Standard examples of rounded eaves-tile (scale: one fifth) 45
29. Clay seam at the joint part of rounded eaves-tile (6285A)..... 47
30. Mold edge mark on rounded eaves-tile (6285A) 47
31. A technique to joint parts of a rounded eaves-tile (6285A) 47
32. Clay seam at the joint part of rounded eaves-tile (6284C) 47
33. Standard examples of flat eaves-tile (scale: one fifth)..... 51
34. The convex and the concave sides of a flat eaves-tile (6721C)..... 52
35. A typical rounded roof-tile 55
36. Some secondary ways to adjust and reform a flat roof-tile 57
37. Roof-tiles with letters incised by a spatula 61
38. A fragment of roof-tile with traces of forming..... 63
39. Traces of human fingers stamped on a brick..... 63
40. Percentage of eaves-tiles found from the site 64
41. Small differences of pattern on outskirt and edge among rounded eaves-tiles (6285A)..... 67
42. Small differences of pattern on inner part (ditto)..... 67
43. Small differences of pattern on edge (6667A)..... 67
44. Variety of the jaw shape-types among flat eaves-tiles (6667A)..... 67

45. Distribution map of plant remains..... 84
46. Layout of structural features (phase B)..... 87
47. ditto (phase C)..... 89
48. ditto (phase D)..... 89
49. ditto (phase E)..... 90
50. Crossdating between mean curve and samples..... 93
51. Map of garden sites in Ancient Nara Capital..... 95
52. Conservation map of the sixth block site..... 98

TABLES IN TEXT

Tab. Page

1. List of excavations on the sites of east second ward on third street, Ancient Nara Capital..... 5
2. Duration of excavations and excavated area quantifications..... 7
3. Data for photogrammetry of area 6AFI-P. Q..... 14
4. Distribution map of ground targets for photogrammetry..... 15
5. Composition of eaves-tile types by each site..... 53
6. Quantities of the flat roof-tiles..... 59
7. Measurements of bricks..... 63
8. General classification of pottery from the Nara Palace site..... 69
9. List of plant remains discovered from the pond SG1504..... 85
10. List of garden sites in the Ancient Nara Capital..... 95

SUPPLEMENTARY TABLES

1. Tabulation of the principal buildings..... 100
2. Classification of rounded eaves-tiles..... 101
3. Classification of flat eaves-tiles..... 102
4. List of pottery..... 103

PLANS

PLAN

1. Entire Area
2. Areas 6AFI-P・Q (north-western portion)
3. Areas 6AFI-P・Q (south-western portion)
4. Areas 6AFI-P・Q (north-eastern portion)
5. Areas 6AFI-P・Q (south-eastern portion)
6. The pond in particular

COLOR PLATES

Frontispiece : Pond SG1504 (from north-east)
Color PL 1. Pond SG1504 (from north)
2. The stone structure on the eastern shore of the pond (from north-west)

PLATES

PL
1. Airscope including area 6AFI in 1962
2. Airscope including area 6AFI in 1984
3. Areas 6AFI-P・Q
    1. Overview of excavation area NO. 109 (from south)
    2. Overview of excavation area NO. 121 north (from south)
    3. Overview of excavation area NO. 96 (from south)
    4. Overview of excavation area NO. 121 south (from south)
4. Structural remains
    1. Building SB1505 (from west)
    2. Building SB1542 (from east)
    3. Building SB1573 (from south)
5. Structural remains
    1. Building SB1570 (from south)
    2. Building SB1510 (from north)
    3. Fence SA1473 (from east)
    4. Fence SA1500 (from east)
6. Structural remains
    1. Building SB1550 (from south)
    2. Building SB1574 (from east)
    3. Building SB1540 (from south)
7. Structural remains
    1. Building SB1552 (from south)
    2. Building SB1470 (from north)
    3. Buildings SB1471・1472 (from north)
8. Streams, Well
    1. Former river SD1560 and stream SD1525 (from west)
    2. Ditto (from east)
    3. Well SE1547 (from south)
9. Postholes
    1. A posthole with foundation stones and boards building, SB1540 (from south)
    2. Foundation stones for the basis of the buildings SB1540 and a posthole with foundation boards for the building SB1542

3. Pillar base of the building SB1570 (from south)

10. Wooden conduit
    1. Wooden conduit for water supply (from south)
    2. Ditto (from north)
    3. Wooden conduit for drainage (from north)
    4. Ditto (from west)
11. Planting curbs
    1. Planting curb SX1463 (from east)
    2. Planting curb SX1503 (from south)
12. Garden pond in details
    1. Pool SX1524 (from east)
    2. Rock island (from northwest)
    3. Rock island (from southwest)
13. Garden pond in details
    1. East shore paved with small stones (from west)
    2. Rocks on the east shore (from east)
    3. Stone construction SX1468 (from east)
14. Garden pond in details
    1. Stone construction SX1461 (from southwest)
    2. West shore of southern-end (from west)
    3. South shore of southern-end (from east)
15. Pond filled with water
    1. West shore near the center of the pond (from southwest)
    2. Rock construction on the east shore (from northeast)
    3. Southeast shore (from southeast)
16. Wooden tablets (1)
17. Wooden tablets (2)
18. Wooden tablets (3)
19. Wooden tablets (4)
20. Rounded eaves-tiles
21. Flat eaves-tiles
22. Pottery (1)
23. Pottery (2)
24. Pottery (3)
25. Pottery (4)
26. Wooden objects (1)
27. Wooden objects (2)
28. Wooden objects (3)
29. Metal objects, stone objects, fibers and textiles
30. Plant remains (1)
31. Plant remains (2)
32. Conservation works

ENGLISH SUMMARY

The Study of Nara-no-miyako (Heijō-kyō) or ancient Nara city, which had been the capital of Japan during Nara period (710–794 A. D.), was established by Sadamasa Kitaura in the middle of the 19th century. He published a report on the basic plan of the central part of the ancint city ("*Heijō-kyū Daidairi Tsubowari no Zu*", 1852.) which was the fruit of his precise field investigations and examinations of existing manuscripts. The study on the city was then succeeded and developed by such scholars as Tadashi Sekino in the following Mejii period. And the actual state of the site was firstly revealed by excavation work in 1954. Since then, on account of recent urbanization nearby, the oppotunities of excavation survey preceding the constructions of new structures have been increasing, which declared urban planning of the ancient capital from the viewpoints of road pattern, use of the estates, etc. On the other hand, circumstances such as temples, markets, and government offices in the city have been ascertained.

This report presents the results of four excavations, numbers 96, 109, 121, and the one with consevation work in order to open this site to the public, carried out between 1975 and 1984. The site located in the 6th block of 2nd ward on 3rd street, the eastern sector of the city (Sa-kyō San-jō Ni-bō Roku-no tsubo). It means that the site situates southeast neighborhood to the Nara Palace. The amount of excavation area was 6, 600 square meters.

The result of main excavation (96th) uncovered that there was a magnificent garden pond with stone pavement at the center of the block. Preserved quite well, the pond not only has a marvelous value but is a good historic material in order to restore the way of gardening and constructing a pond at that time.

After Agency for Cultural Affairs had designated this area as a special historic site in 1978, it was owned by Nara municipal authorities with a state subsidy to preserve this precious cultural heritage. Then the site was prepared for the opening to the public, reconstructing a replica above the original pond. It was completed in 1984.

Topografically, the site is on an alluvial apron. At the center of the block there flowed a stream (SD1525) from north to south until the beginning of the Nara period (phase A). Once it had been a river and was changed its function to a drainage canal of the block at the time of city construction. The buildings to the west of this canal (SB1570, SB1571, SB1571, SB1573, SB1542) then possibly seemed to form an office complex. The direction of them equally based with the planning of the block. (phase B)

Then at the middle of the Nara period, the stream was filled up and the garden pond (SG1504) was constructed on the trace of it. The pond was enclosed by three sides with wooden fences and buildings. Some new buildings and a well were added. This state shows that the block was fully used as a large residensial estate with a garden. (phase C)

The next stage was represented by the construction of a large building (SB 1540) with base stones. It was accompanied by a small hut (SB1470) and was facing to the pond. The southern side of them and the pond were closed newly with a wooden fence. It was possibly built as a place for official ceremony with the pond in the latter half of the Nara period. (phase D)

In the end of the Nara period the pond was deserted with the abandonment of the city, but some little houses (SB1471, 1472, 1476, 1975) were still built around it.

Some of the artifacts found from the site shows the character of the area. For example, a wooden tablet found from SD1525 has letters including 'North Palace' (北宮) which possibly show the name of the place north to the site. And that might relate to the office-like arrangement of the buildings at the early stage of the site. Meanwhile, statistic analysis of the roof-tiles show that here they used the same types of tiles as those used in the Nara Palace in the middle of the Nara period (phase C). That might also add official character to the site at the time.

For the plant remains, some seeds of such fruits as peach and plum, corns of a sort of pine tree, and leaves of Japanese bead tree etc. were unearthed from the accumulated soil in the pond, which are useful to restore the garden planting around it.

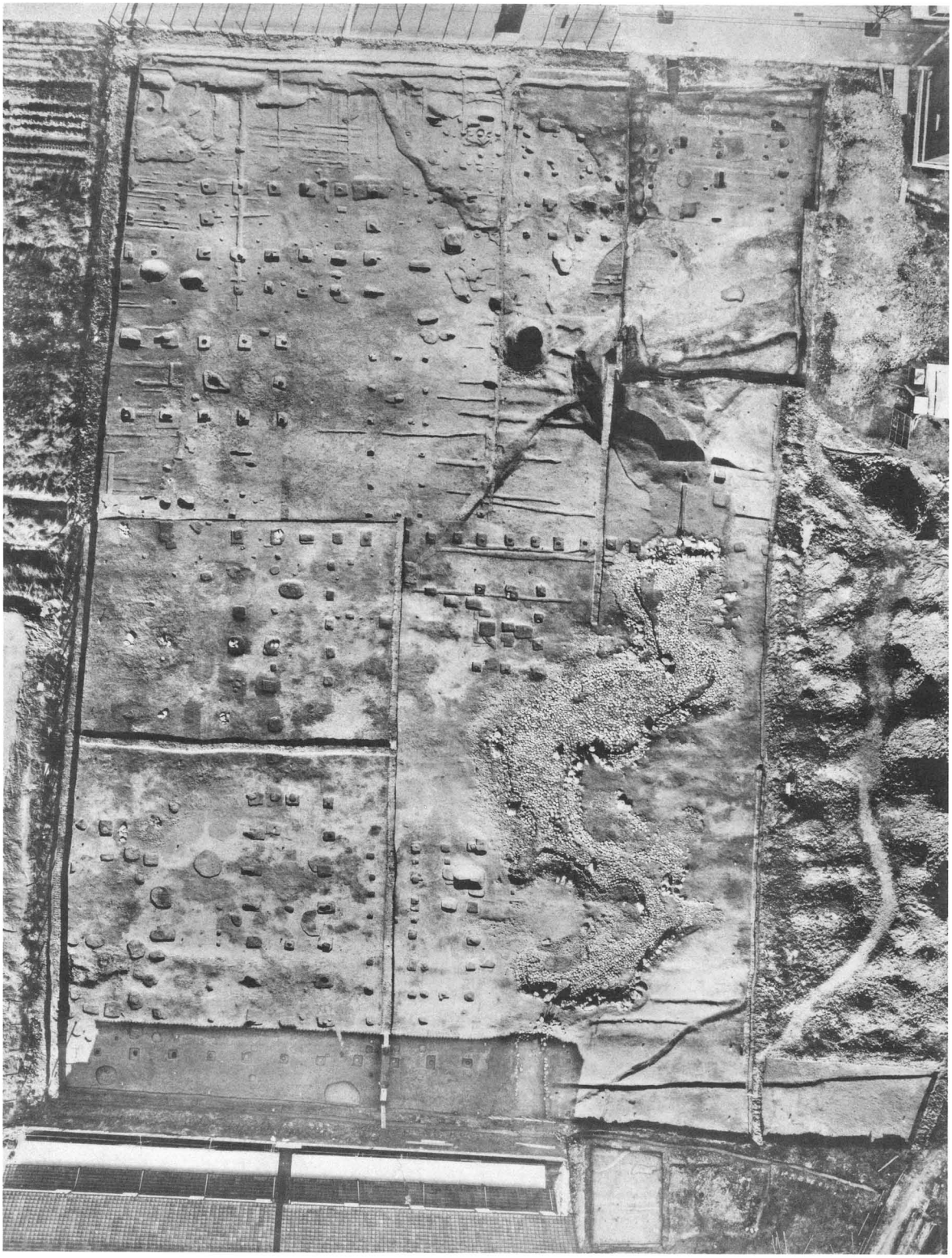
As the result, it became clear that this block was continuously inhabited whole through Nara period, but the character of it seemed to change fairly concerning the construction and use of the pond. The discovery of the pond which has such a greatness in its scale and design has ever been one and only example at that time in garden history of Japan.

図面・図版

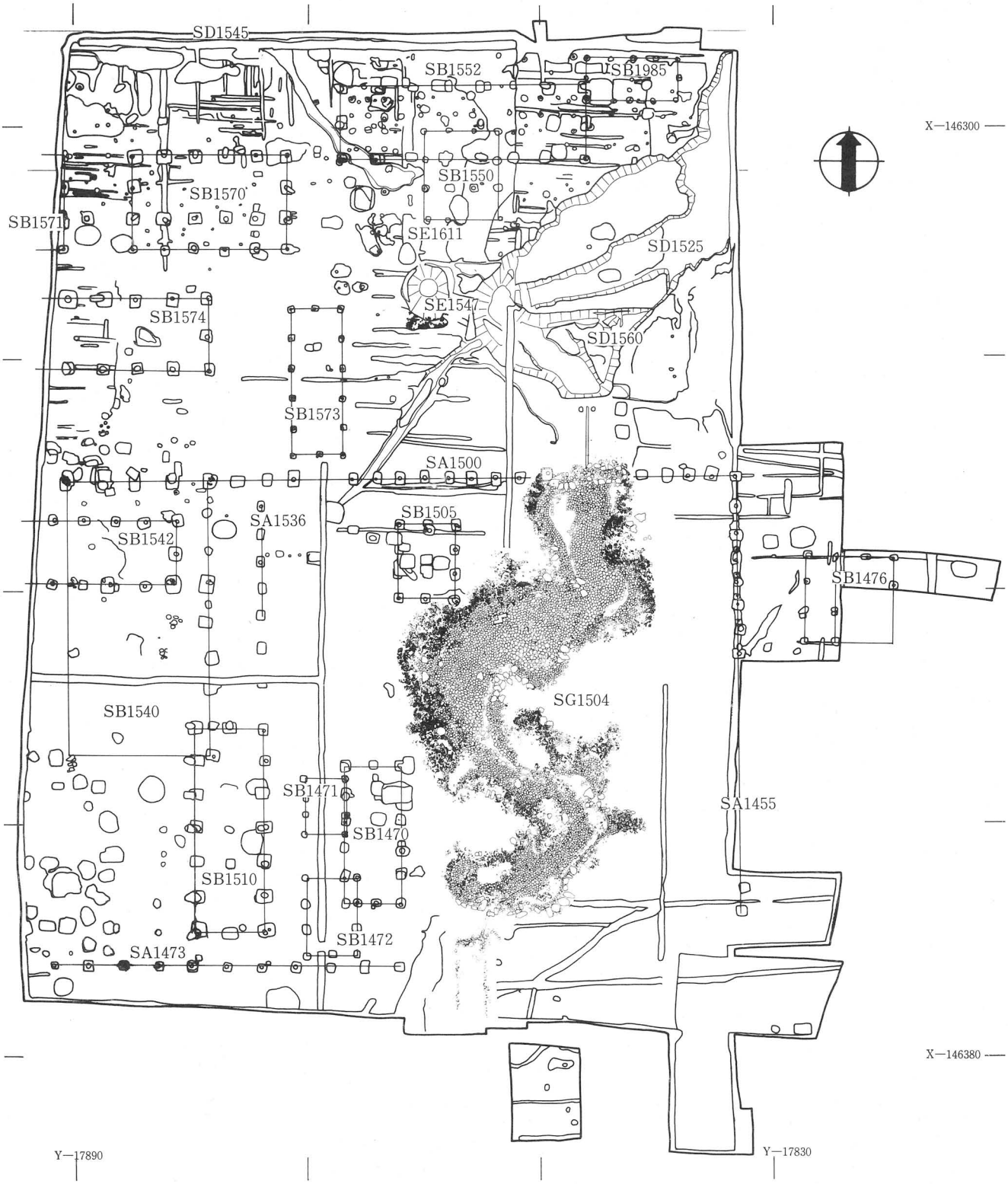
園池SG1504全景（北から）

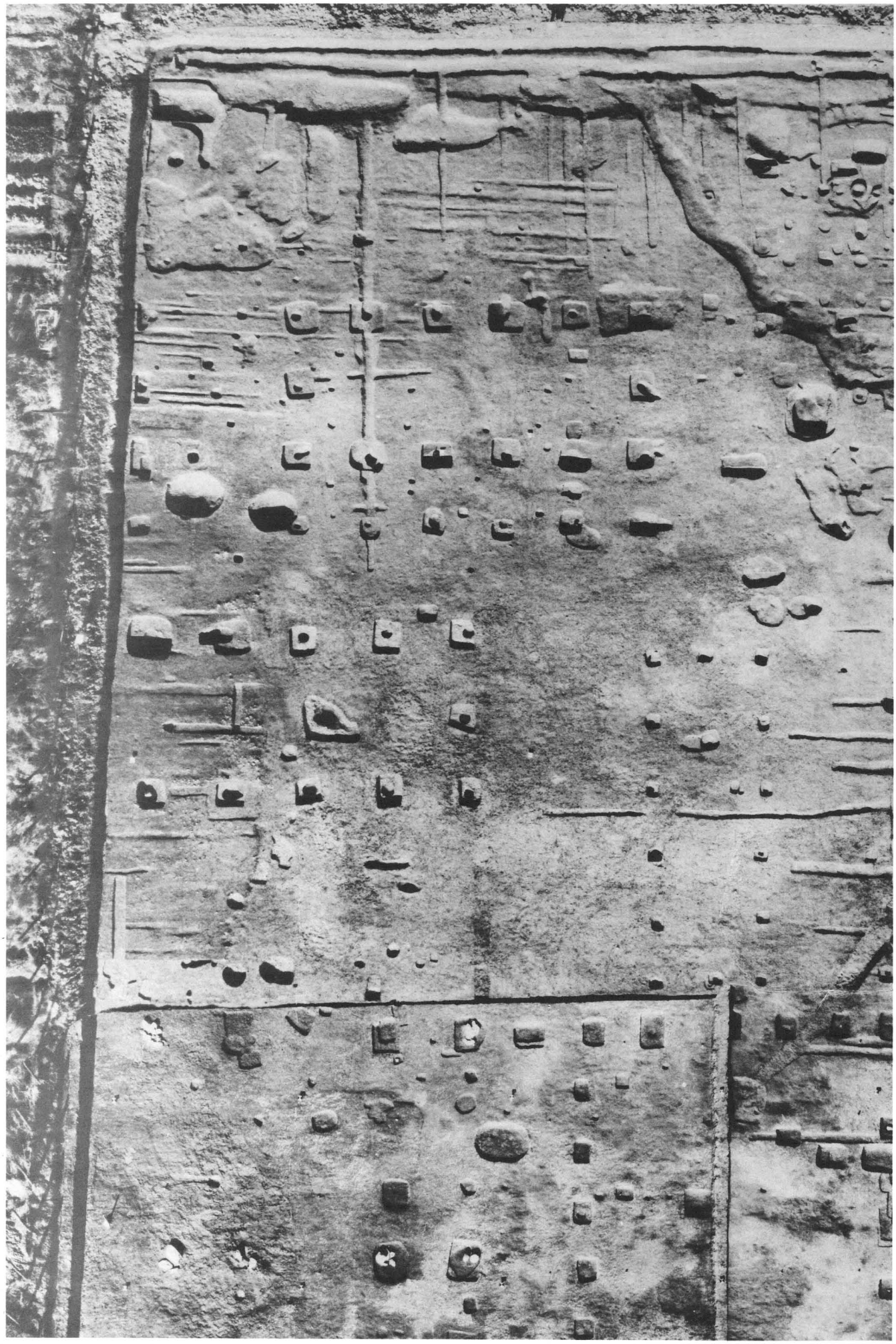
園池SG1504東岸石組（北西から）

1. 遺構には一連番号をつけ，その前にSA：築地・塀，SB：建物，SE：井戸，SD：溝，SK：土壙，SG：庭園，SF：道路，SX：その他などの分類記号を付記する。
2. 遺構の実測は国土方眼第Ⅵ座標を基準とし，高さの基準は標高である。
3. 遺構の寸法数字はm単位である。
4. PLAN1の実測図の縮尺は 1/500でその他は 1/200である。
5. 遺物写真のPlate 番号は，対向ページの実測図にもおよぶことにする。ただし，写真をかかげず実測図のみをしめすもの，また写真に対応する実測図が，他のページに入っていることもある。



調査区全景垂直写真　1／500

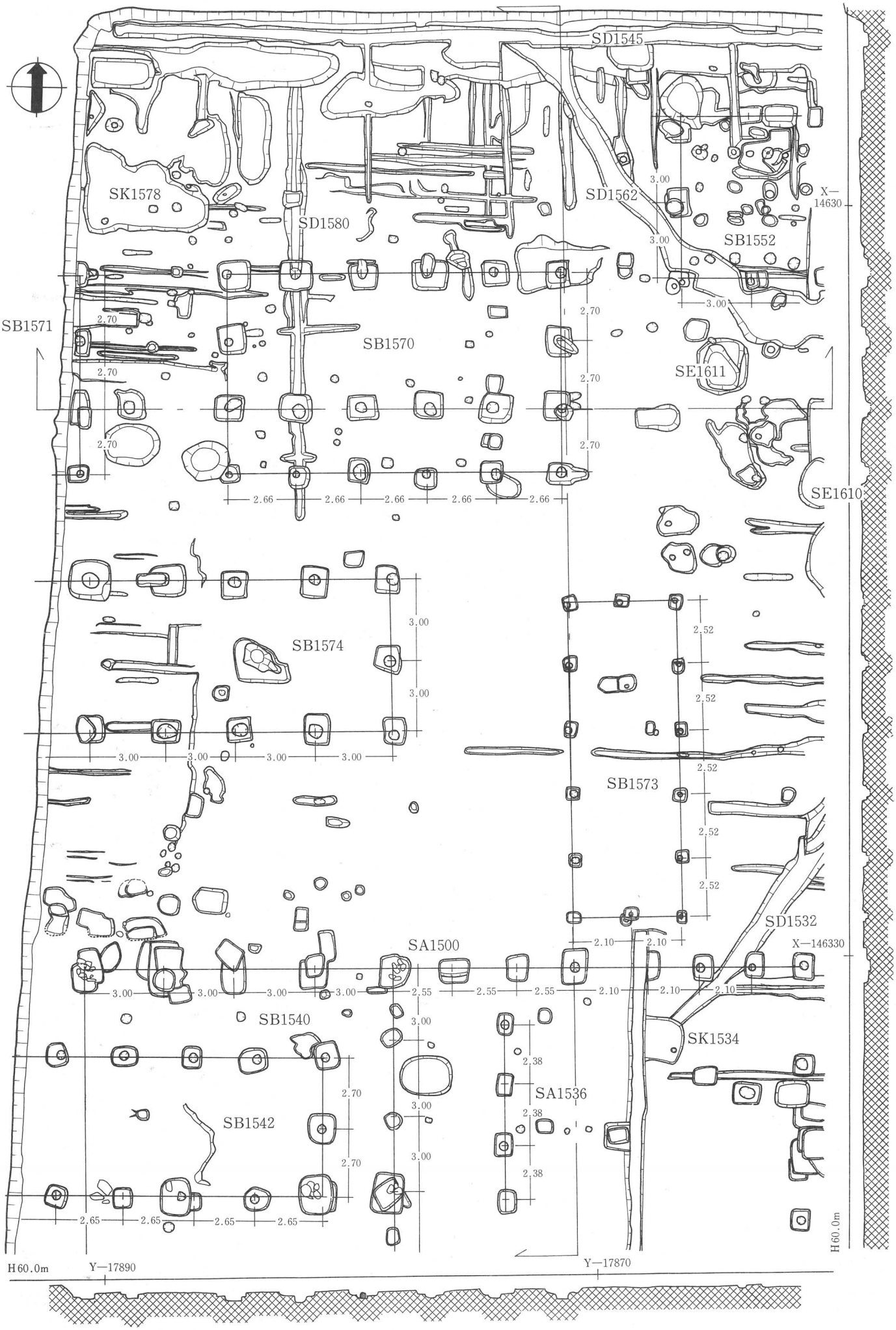

SD1545
SB1552
SB1985
X—146300
SB1550
SB1570
SB1571
SE1611
SD1525
SE1547
SB1574
SD1560
SB1573
SA1500
SA1536
SB1505
SB1542
SB1476
SG1504
SB1540
SB1471
SB1470
SA1455
SB1510
SB1472
SA1473
X—146380
Y—17890
Y—17830

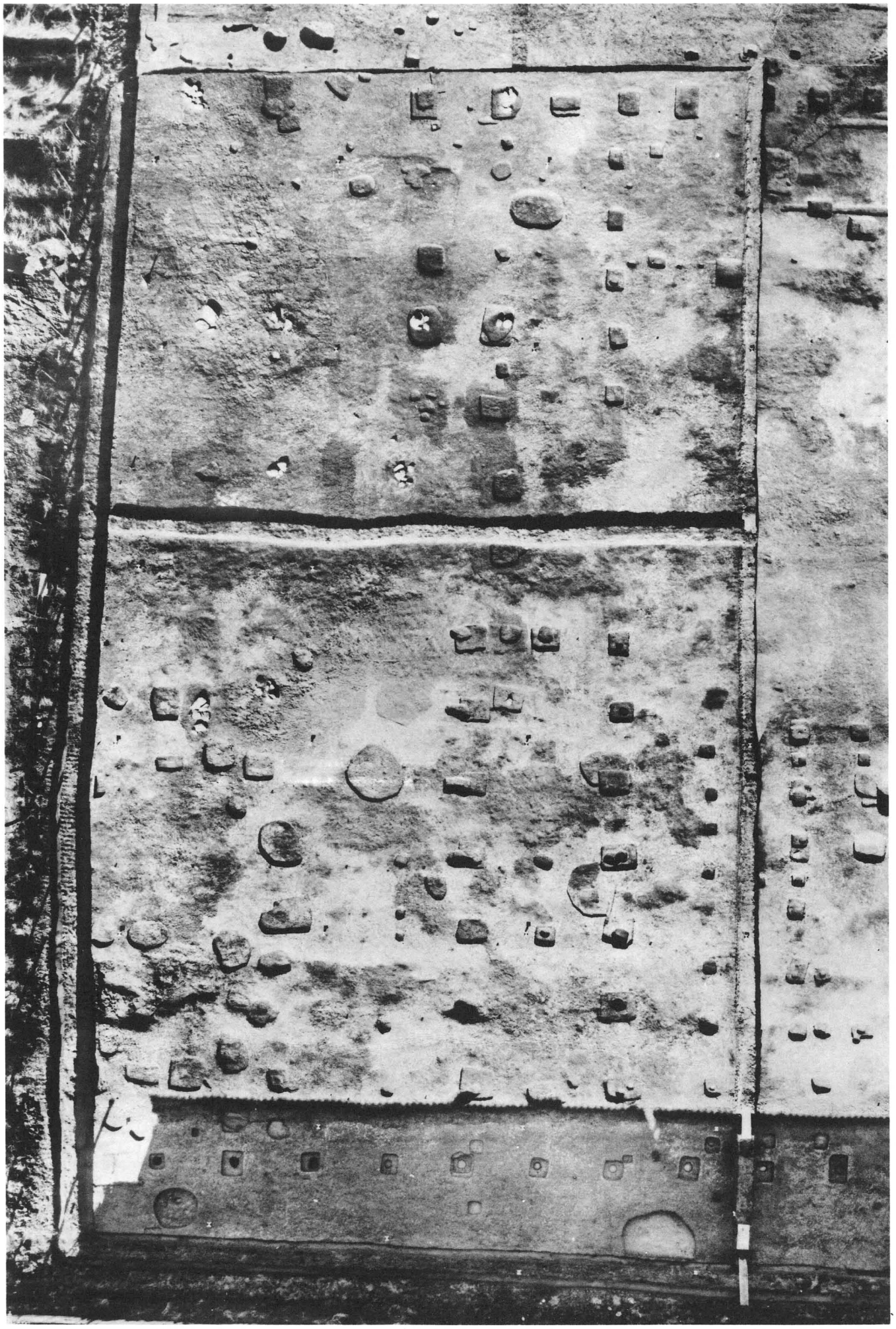


調査区西北部垂直写真　1／200

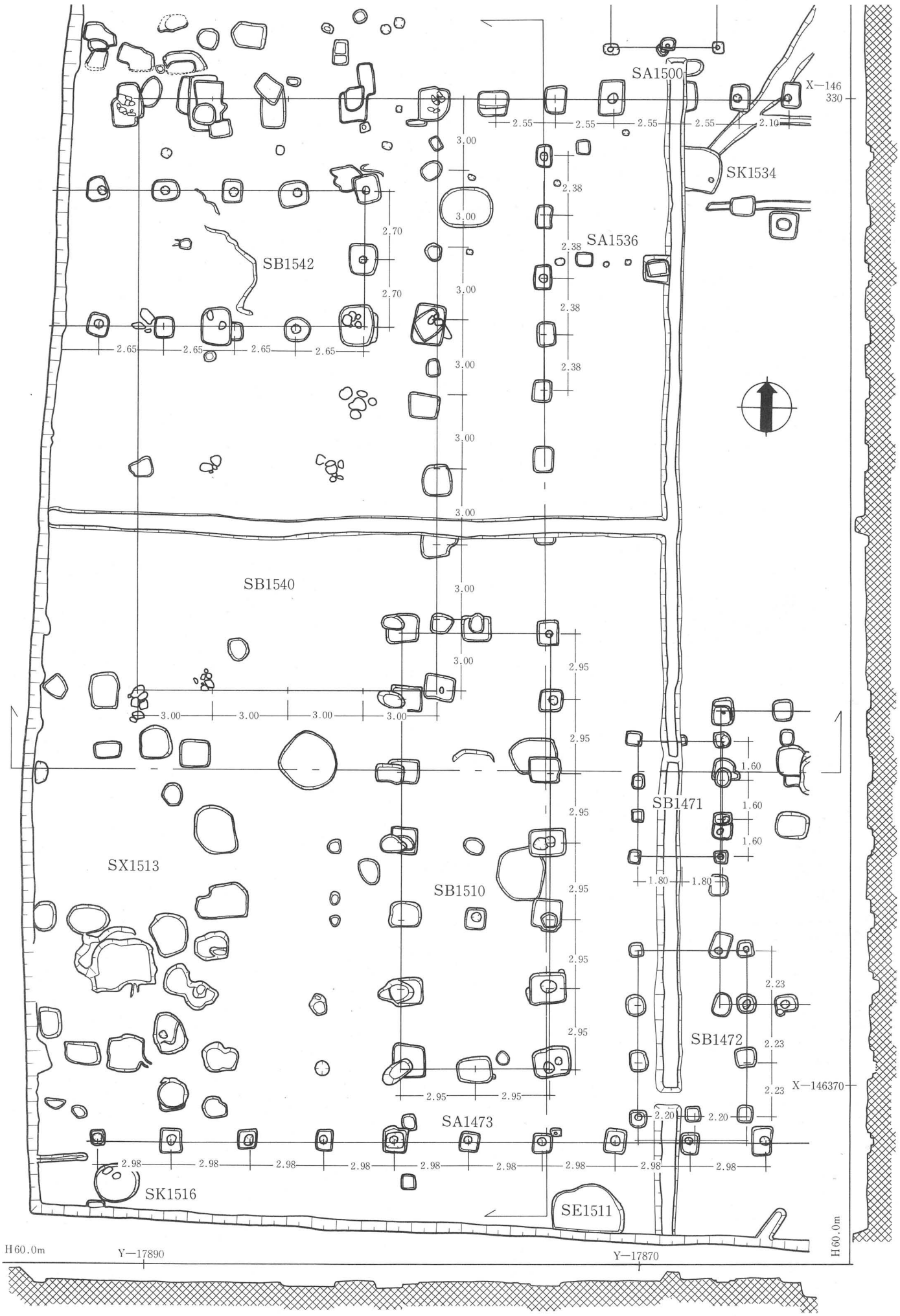
調査区西北部実測図

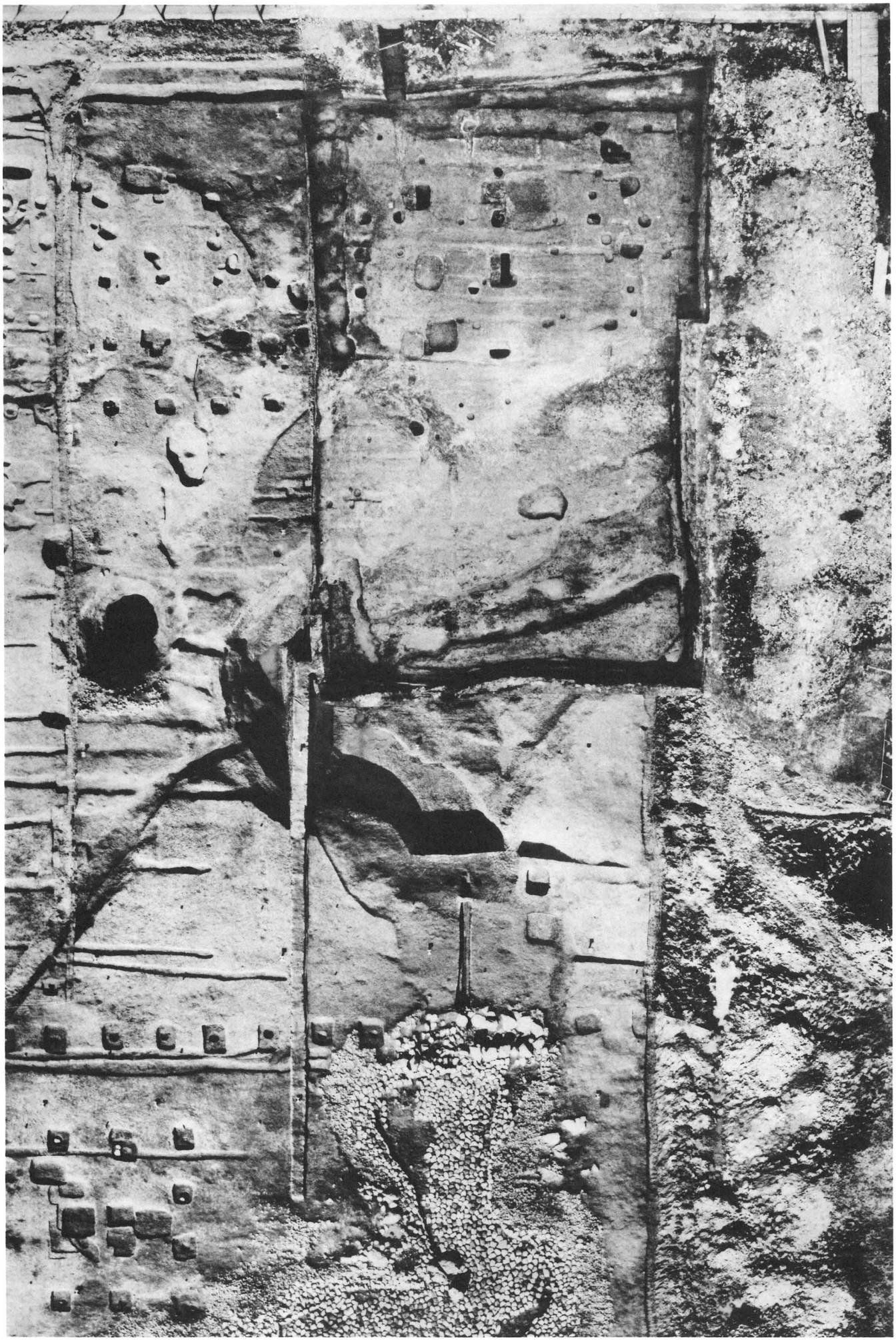
PLAN 2





調査区西南部垂直写真　1／200

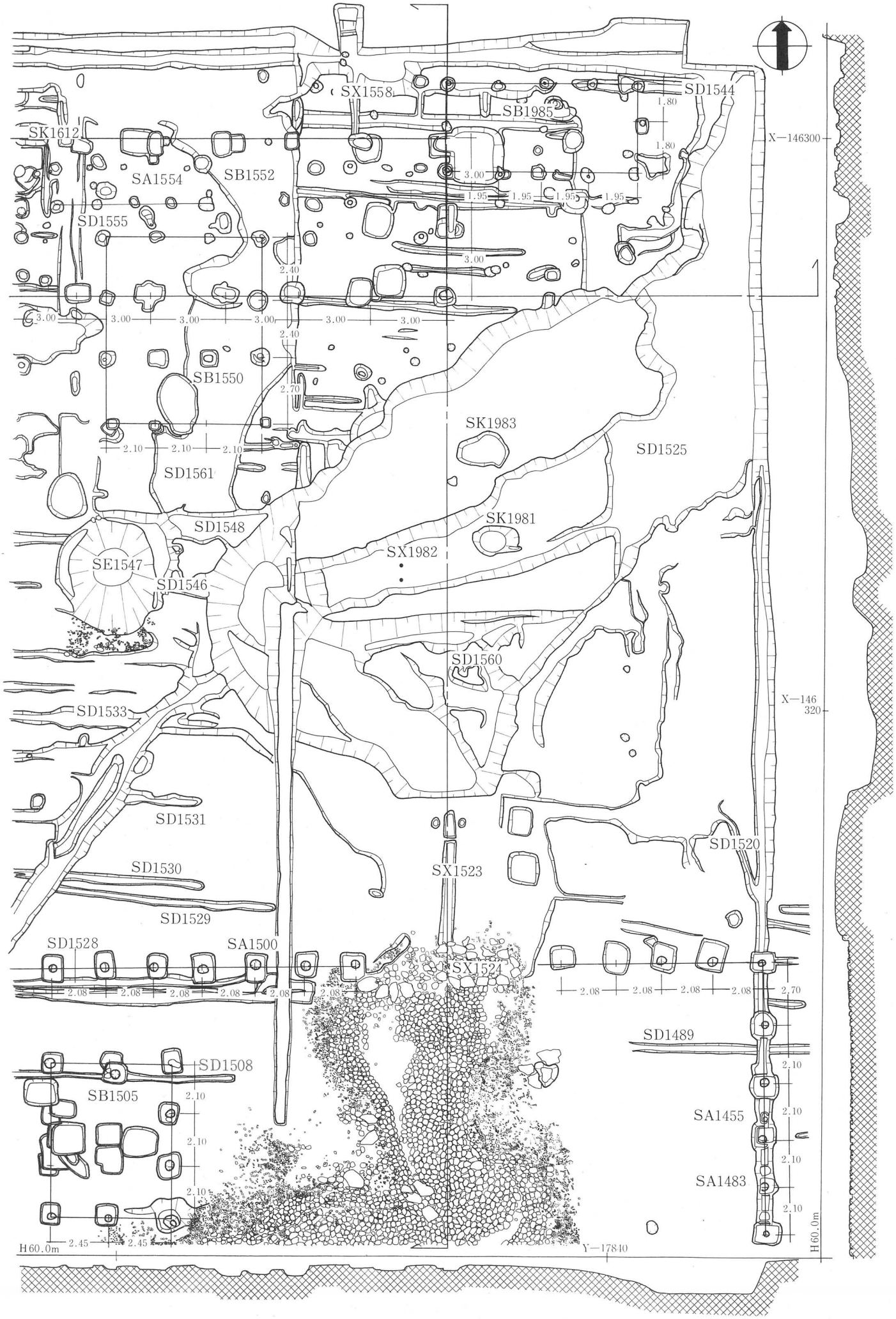

SA1500
X—146330
SK1534
SA1536
SB1542
SB1540
SB1471
SX1513
SB1510
SB1472
X—146370
SA1473
SK1516
SE1511
H60.0m
Y—17890
Y—17870
H60.0m



調査区東北部垂直写真　1／200

調査区東北部実測図

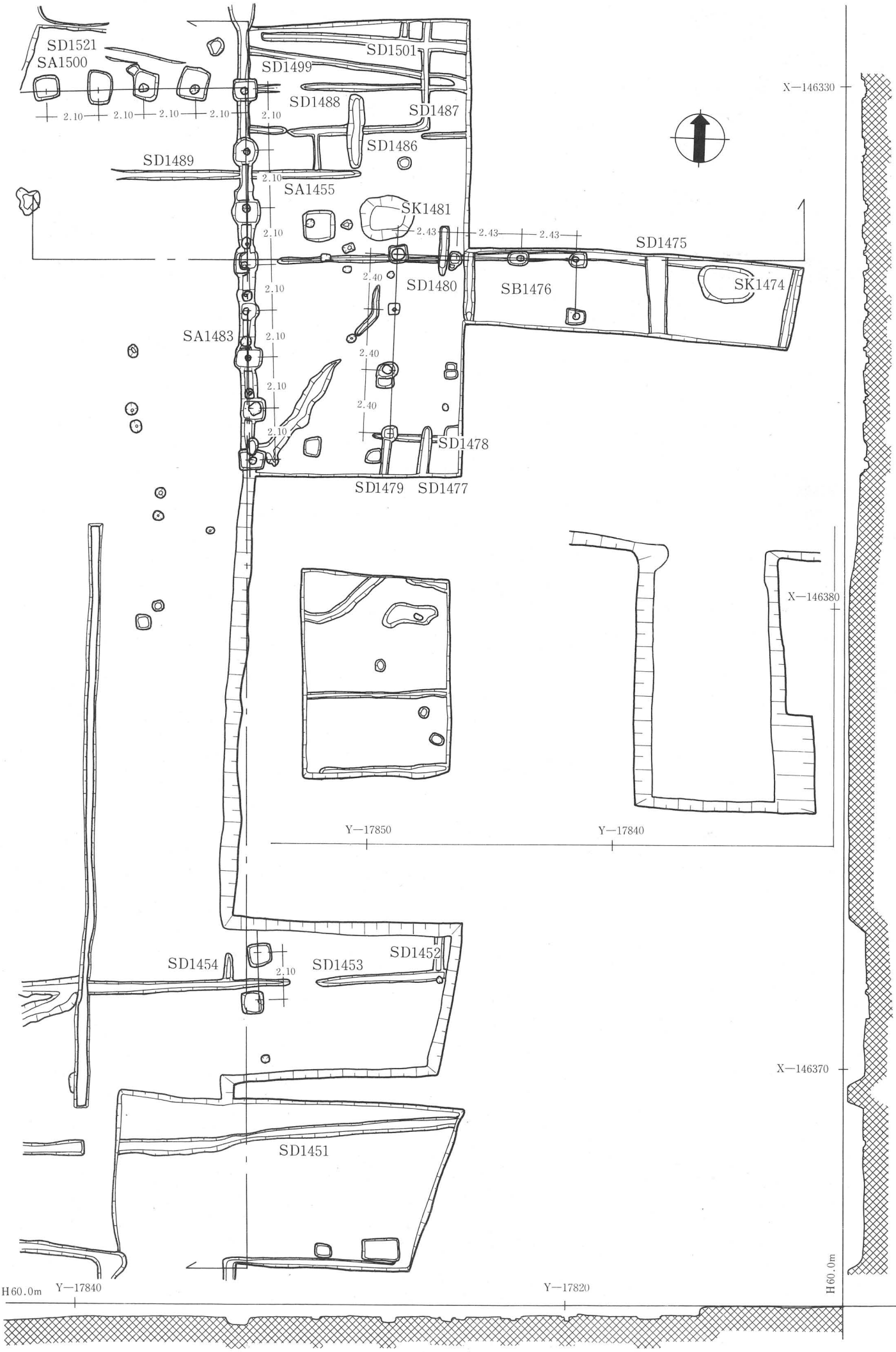
PLAN 4

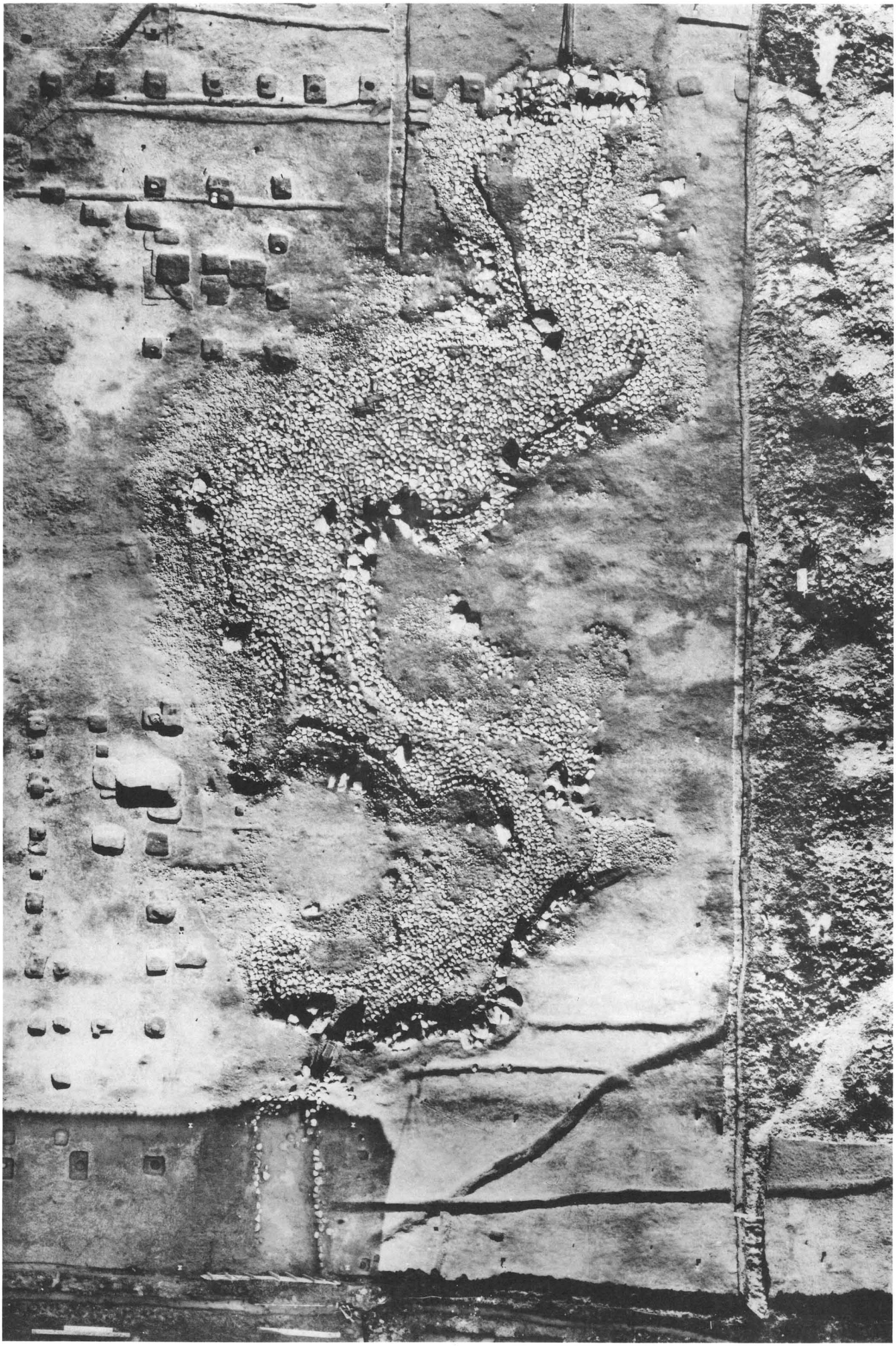


調査区東南部垂直写真　1／200

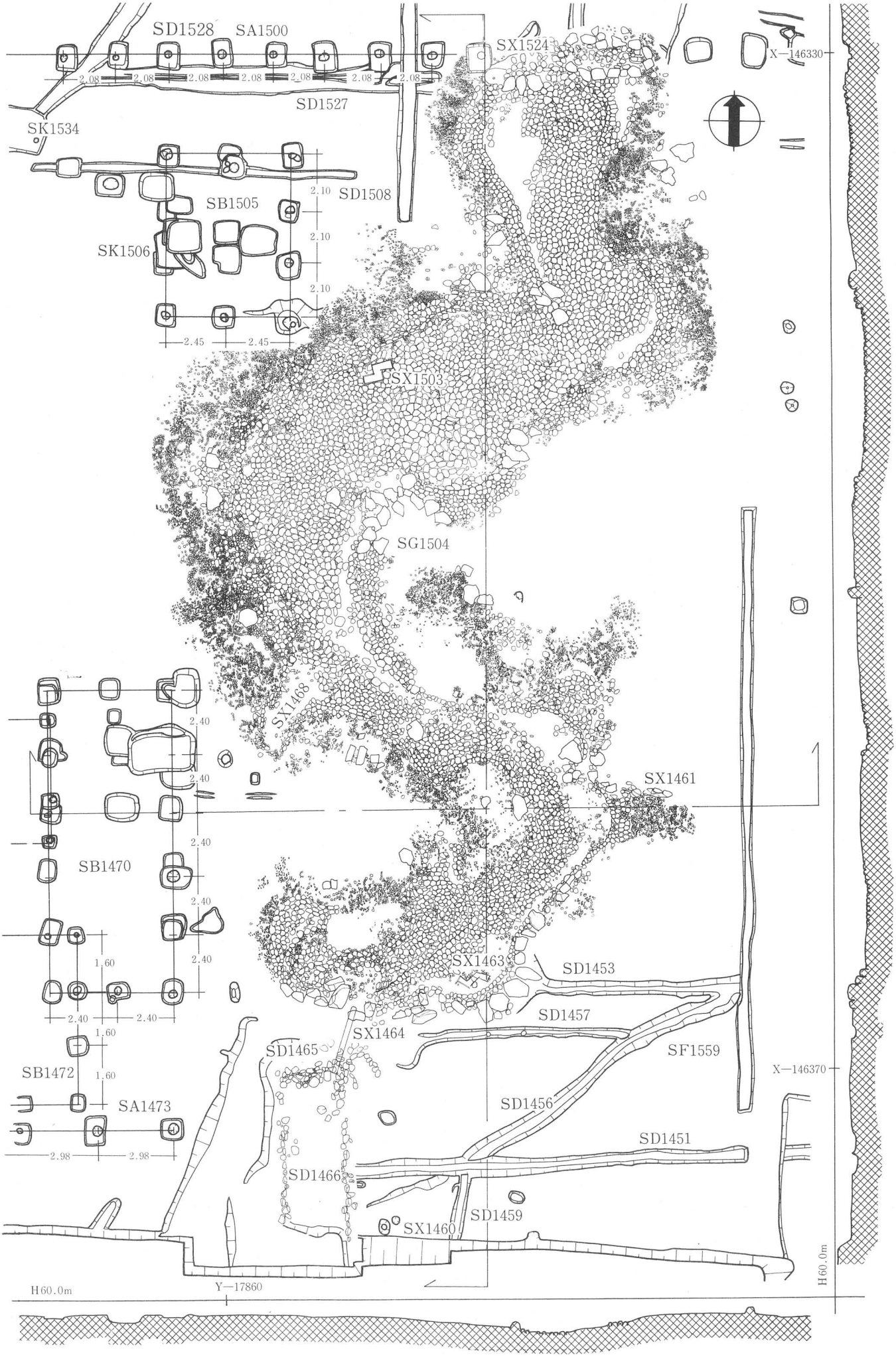
調査区東南部実測図

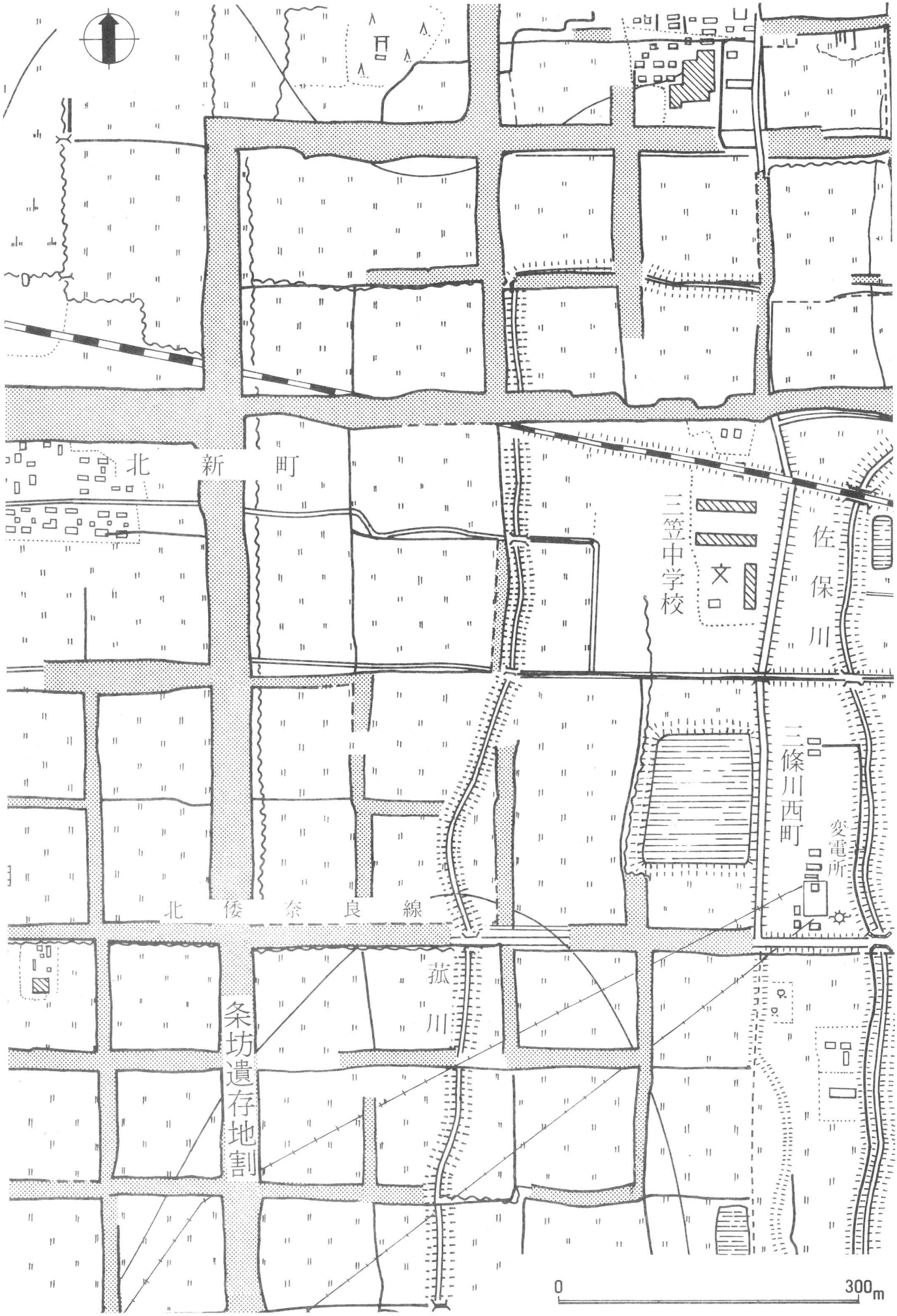
PLAN 5





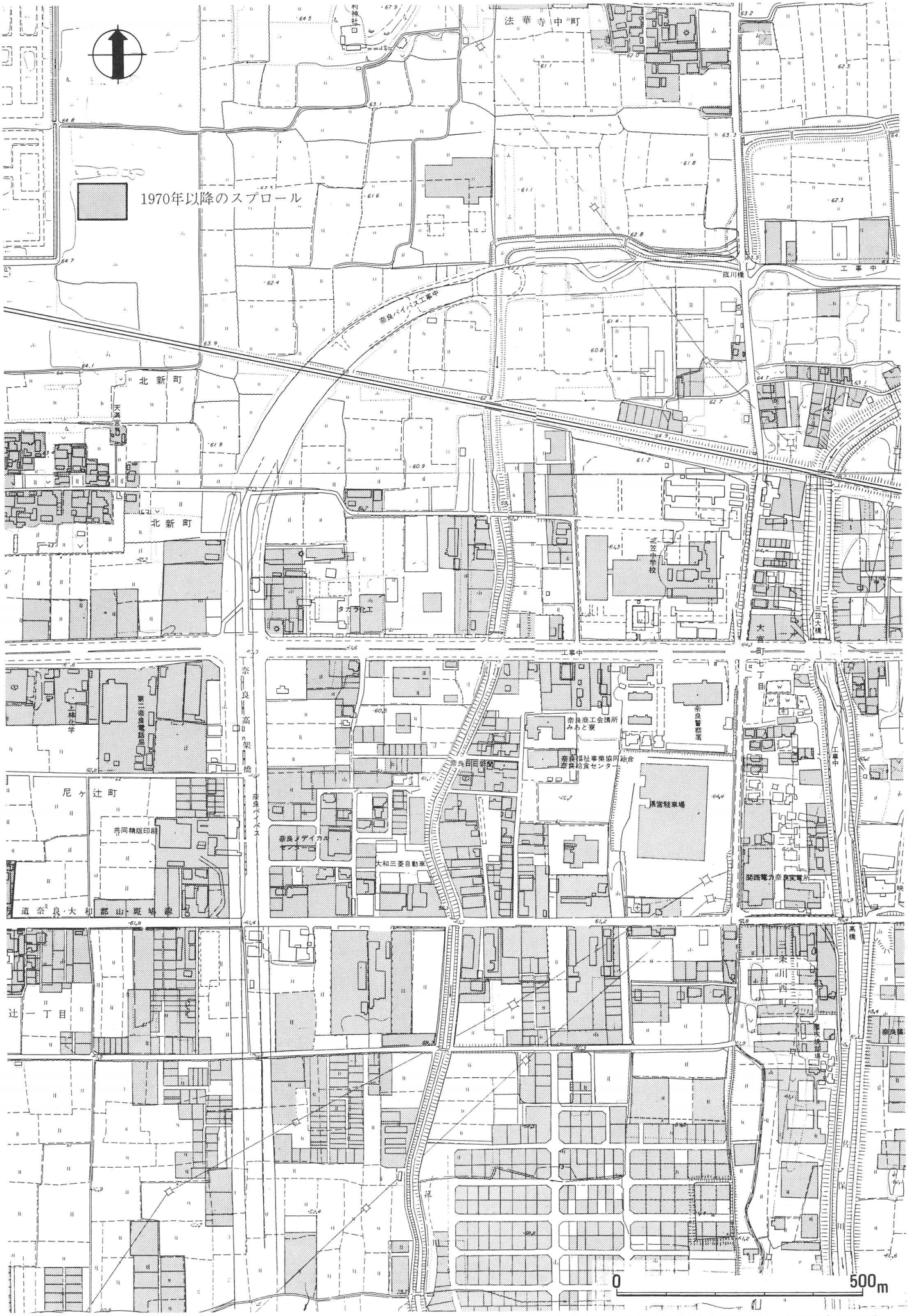
園池SG1504垂直写真　1／200


SD1528
SA1500
SX1524
X—146330
2.08
SD1527
SK1534
SB1505
SD1508
2.10
SK1506
2.45
SX1503
SG1504
SX1468
2.40
SX1461
SB1470
1.60
SX1463
SD1453
SD1457
SX1464
SD1465
SF1559
SB1472
SA1473
2.98
X—146370
SD1456
SD1451
SD1466
SD1459
SX1460
H60.0m
Y—17860

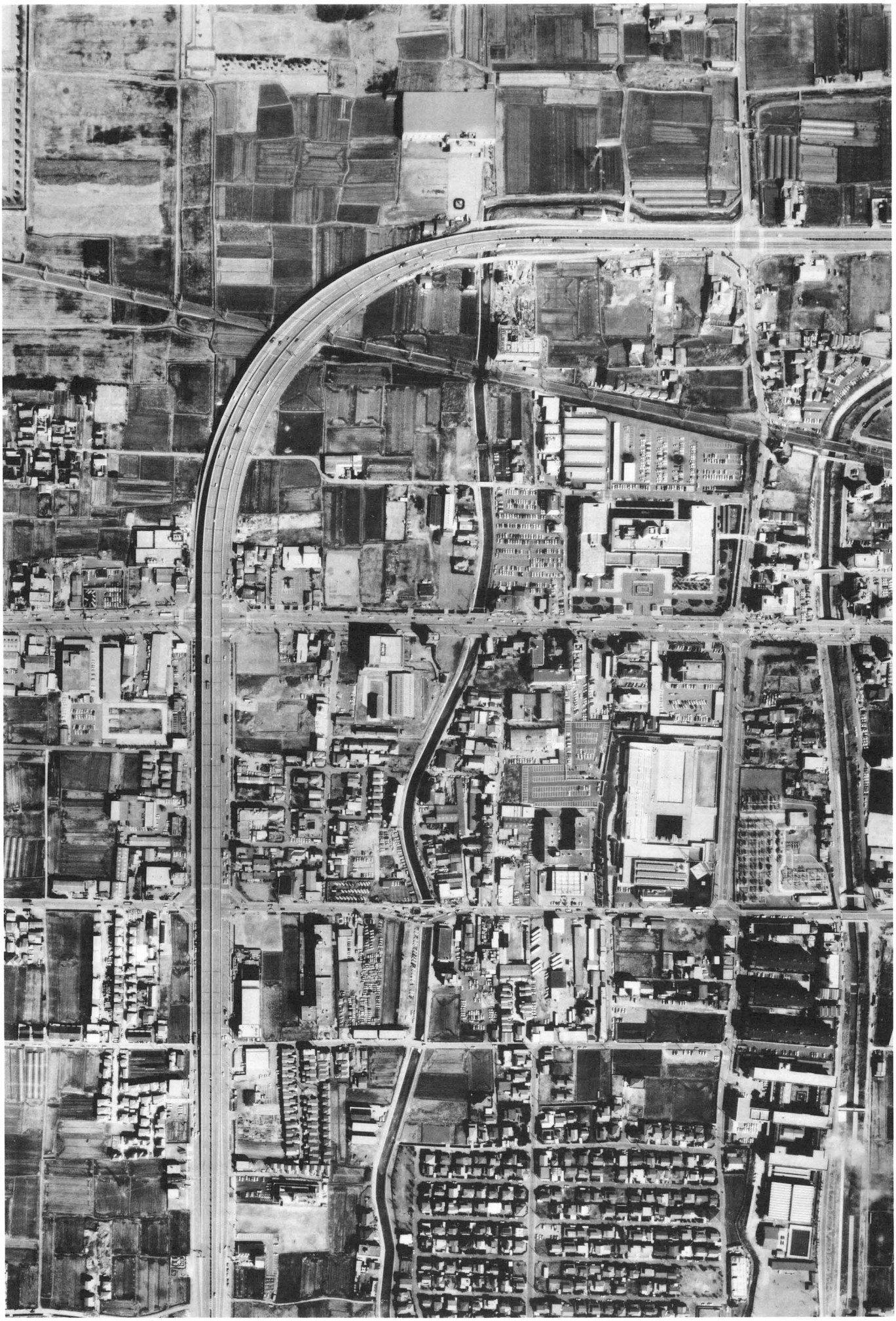


奈良市西部都市計画図（1951年測図）

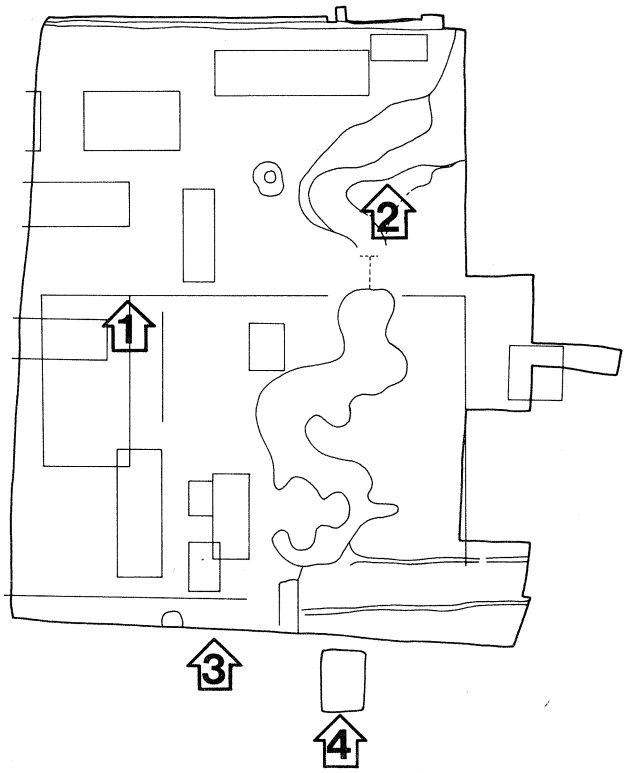
調査地周辺航空写真　　1962年撮影　1／5000

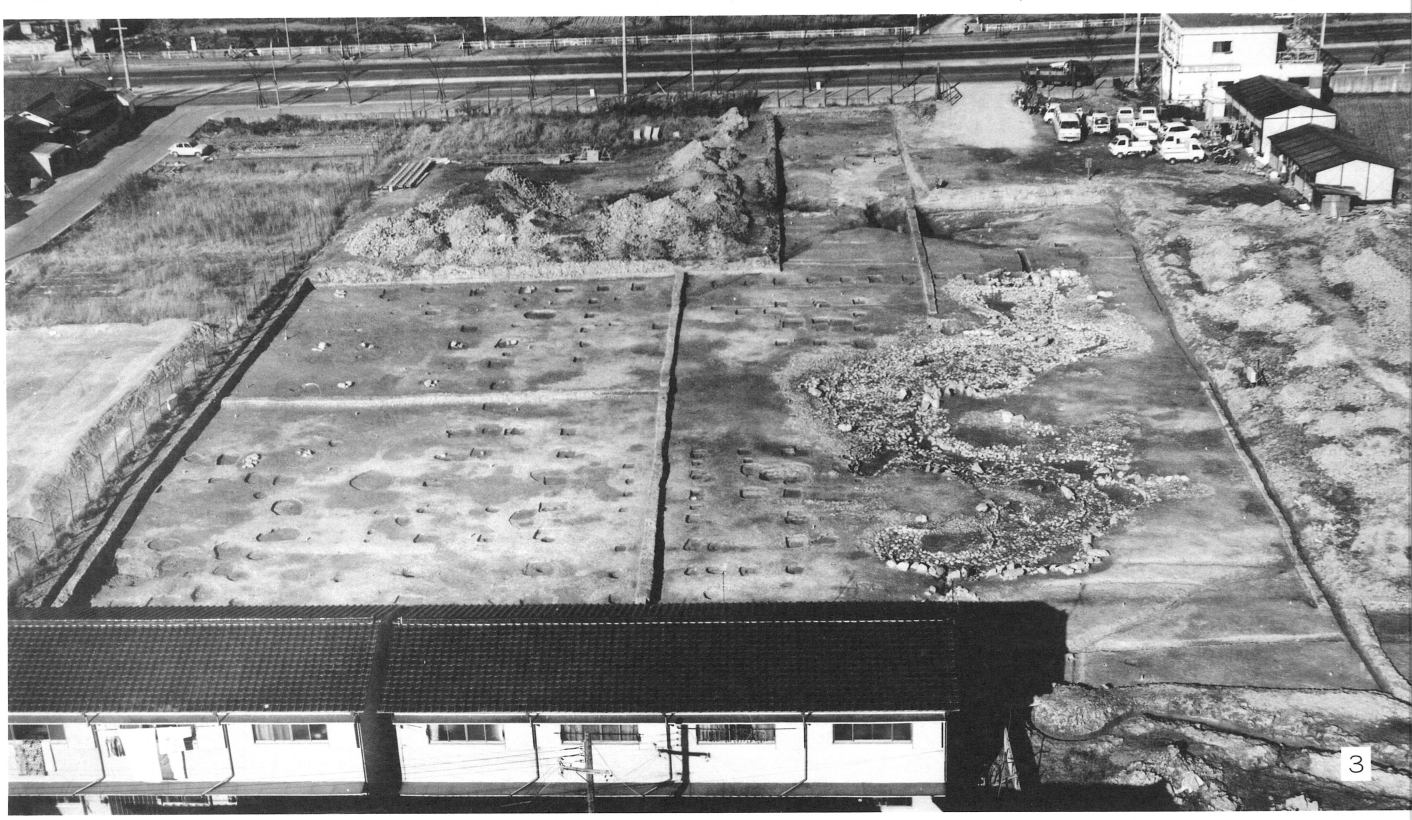


奈良国際文化観光都市計画図（1970年測図）



調査地周辺航空写真　　1984年撮影


1
2
3
4

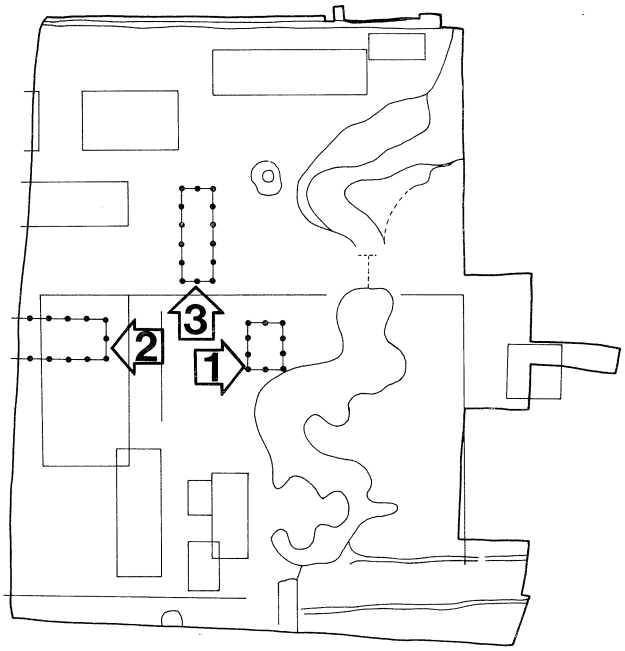


1．109次調査区全景　南から

2．121次北調査区全景　南から

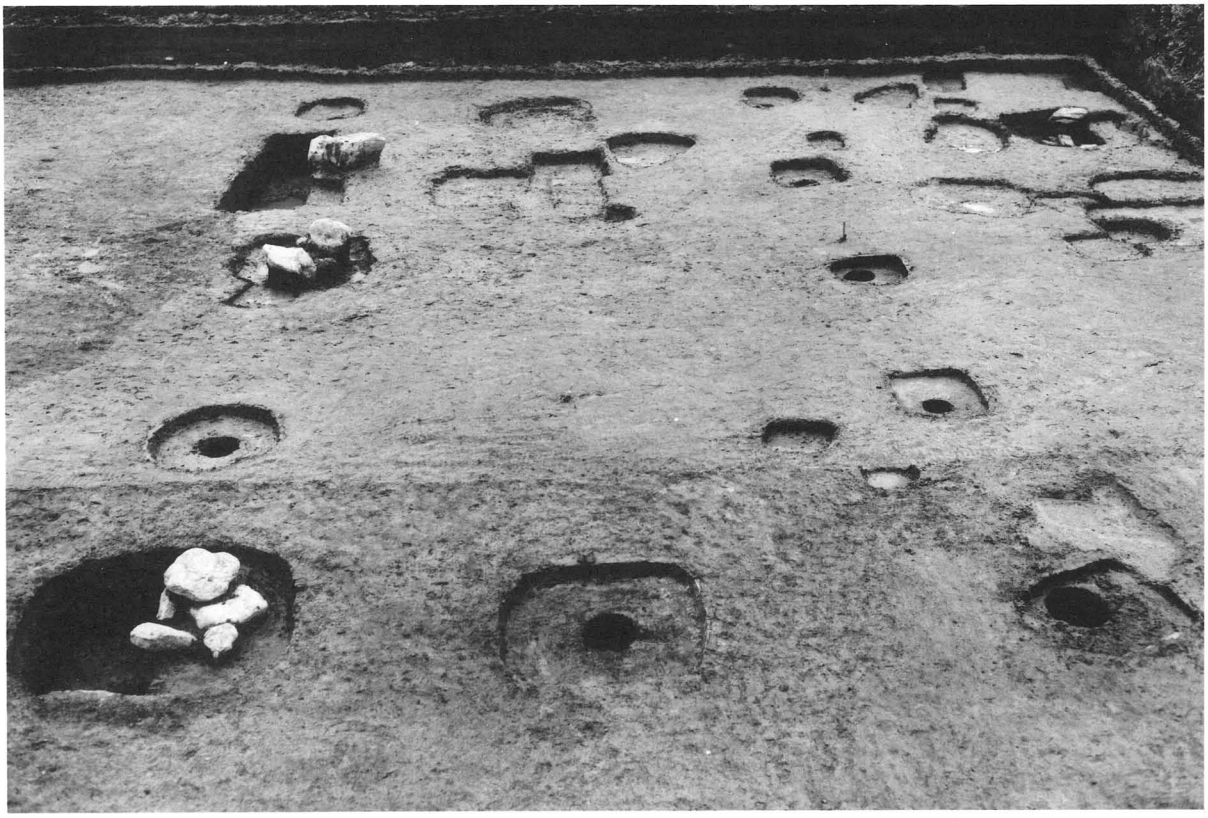
3．96次本調査区全景　南から

4．121次南調査区全景　南から


3
2
1

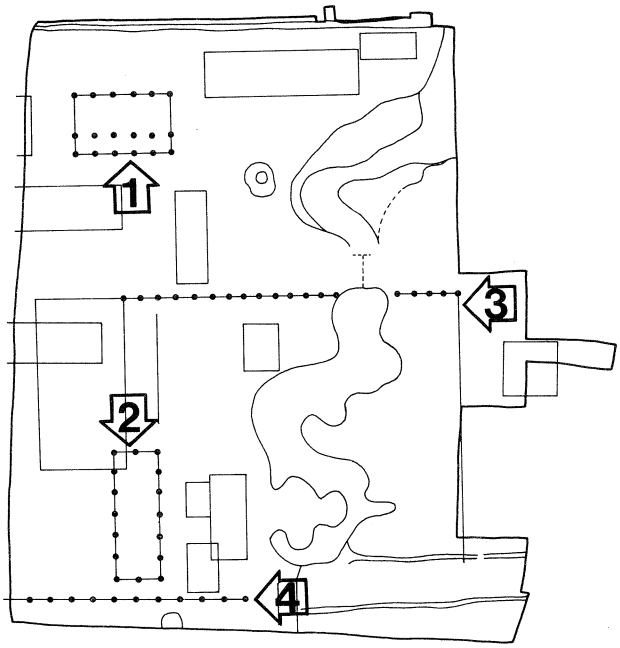
建　物

1．建物SB1505
西から



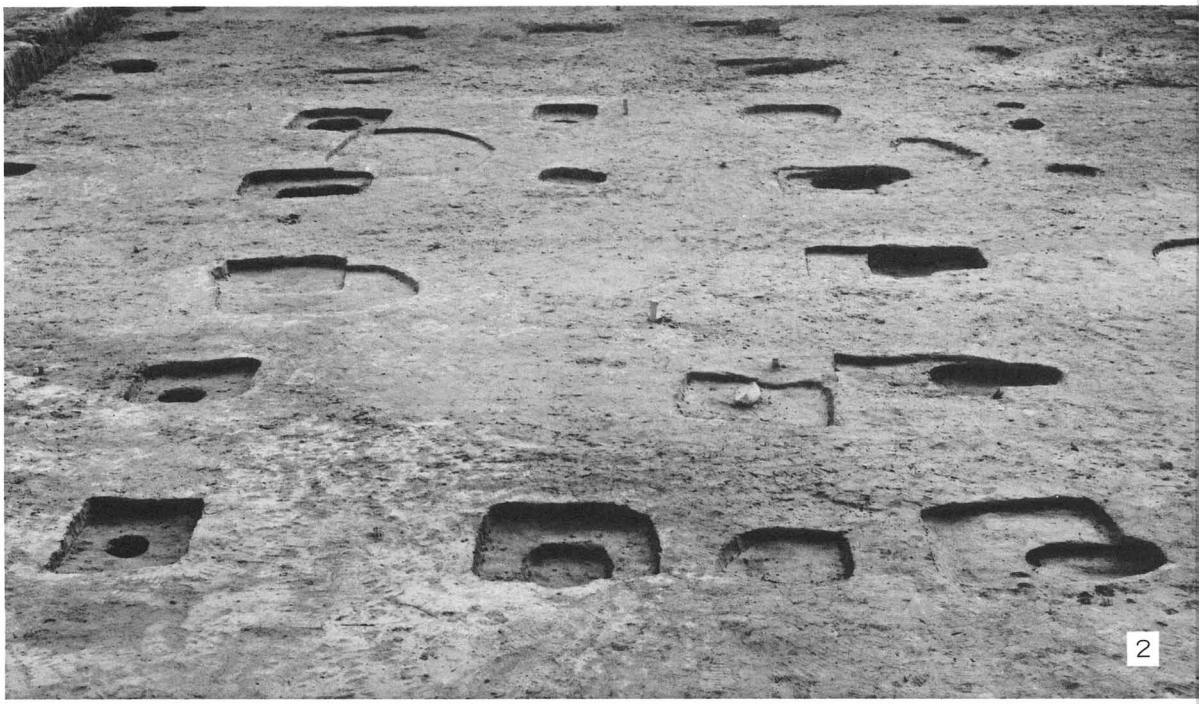
2．建物SB1542
東から

3．建物SB1573
南から

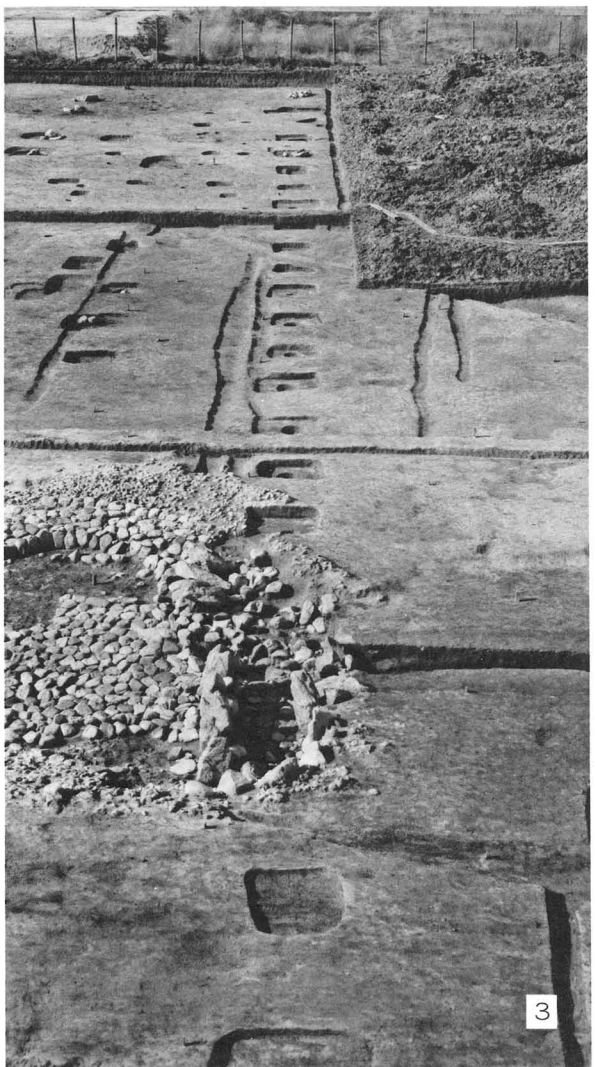

1
2
3
4

建物・塀

1．建物SB1570
南から

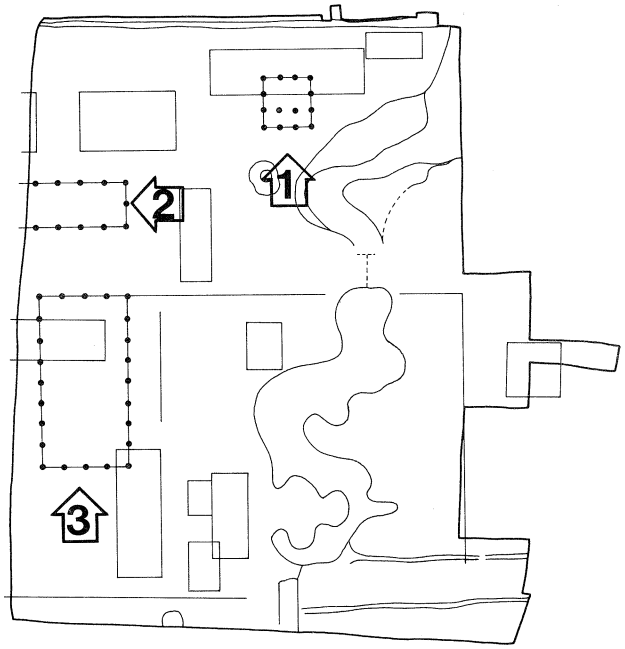


2．建物SB1510
北から



3．東西塀SA1473
東から

4．東西塀SA1500
東から

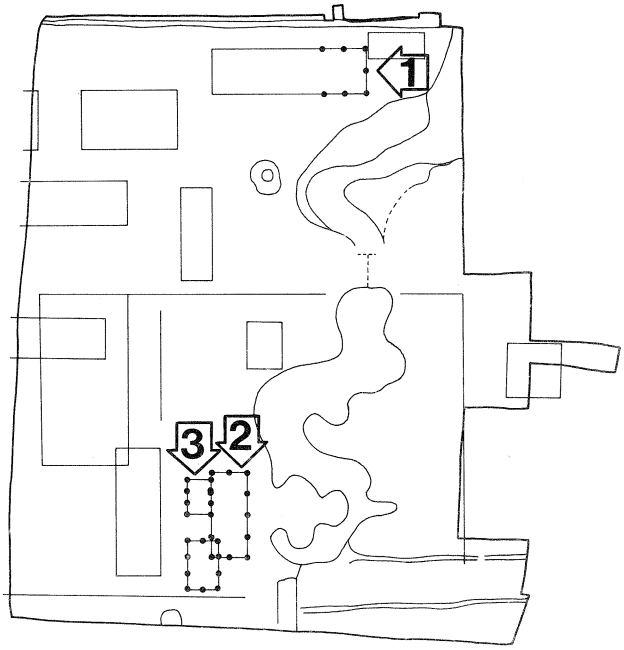

3
2
1

建　物

1．建物SB1550
南から

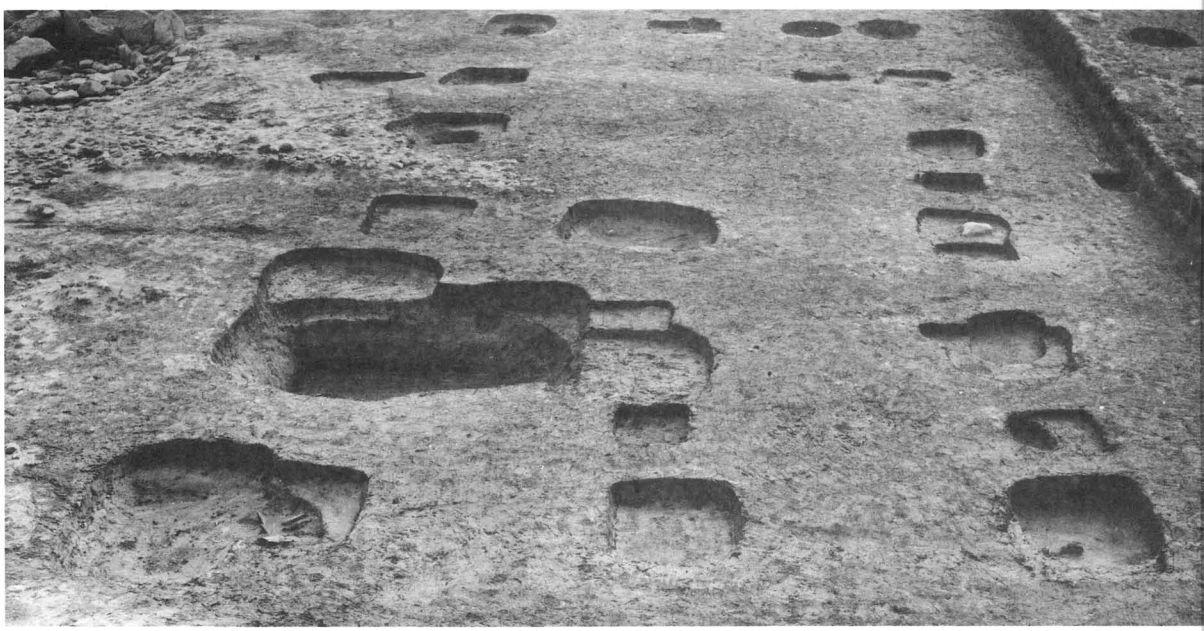
2．建物SB1574
東から

3．建物SB1540
南から


3
2
1

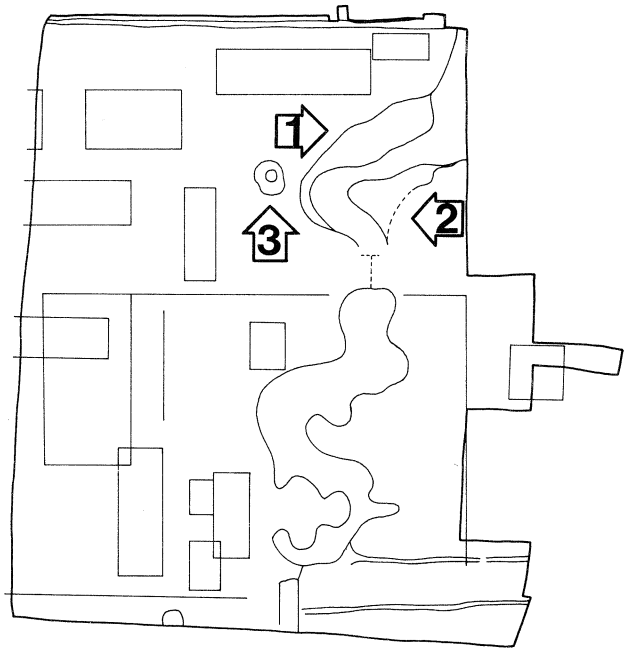
建　物

1．建物SB1552
南から



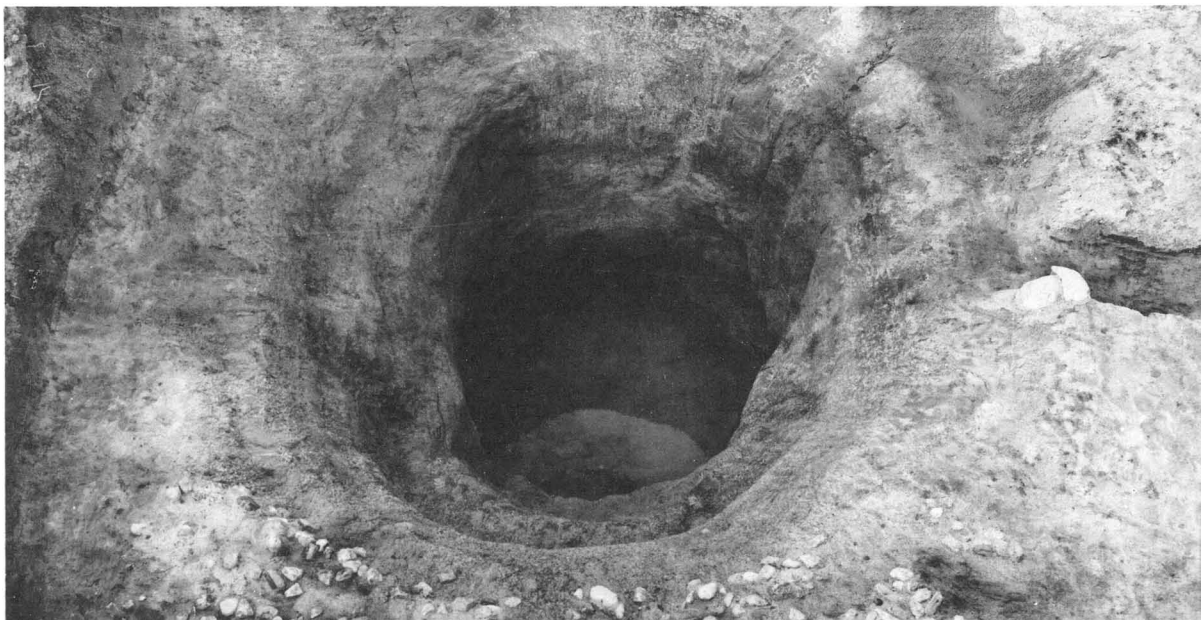
2．建物SB1470
北から

3．建物SB1471・1472
北から

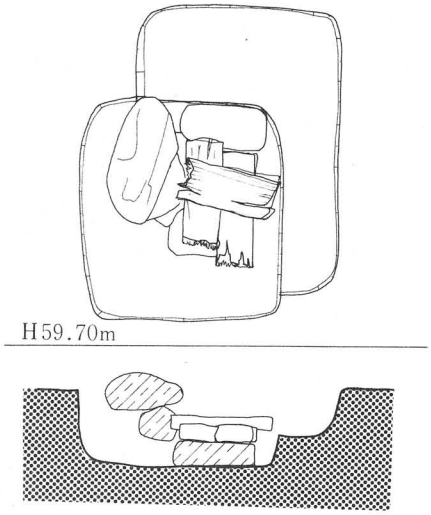

1
2
3

1．旧河川SD1560・
旧流路SD1525
西から

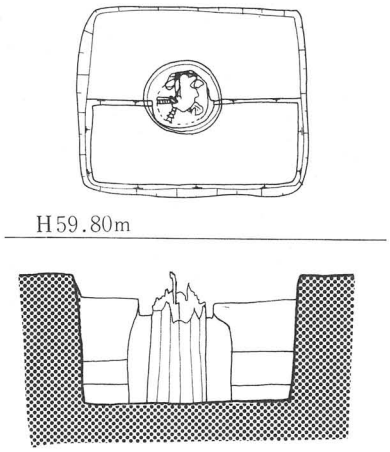
2．同　上
東から



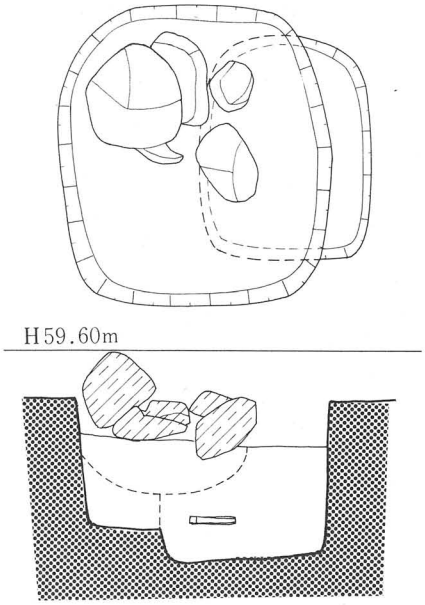
3．井戸SE1547
南から



建物SB1540西北隅柱穴平面・断面図

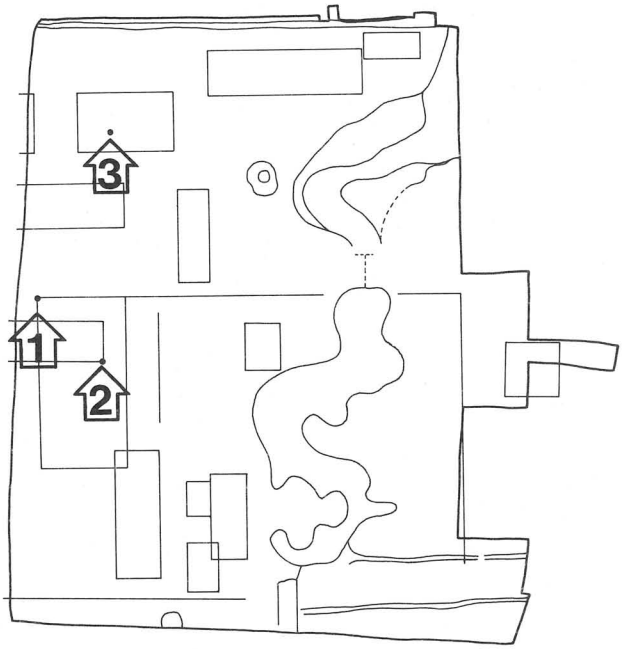


建物SB1570柱掘方柱根平面・断面図

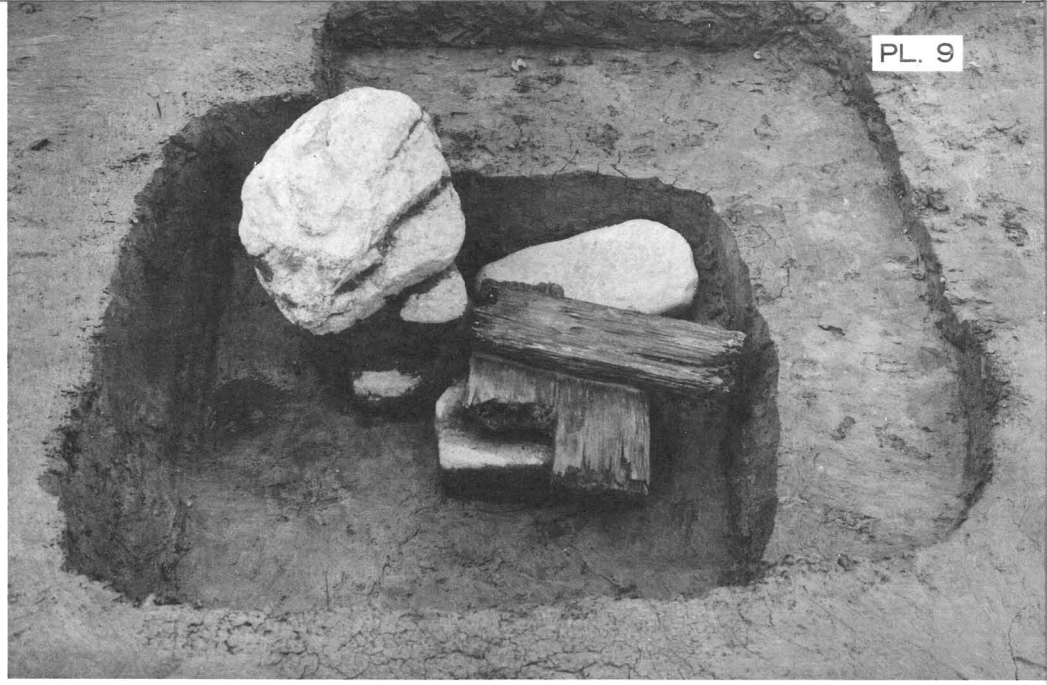


建物SB1540・1542柱穴重複平面・断面図

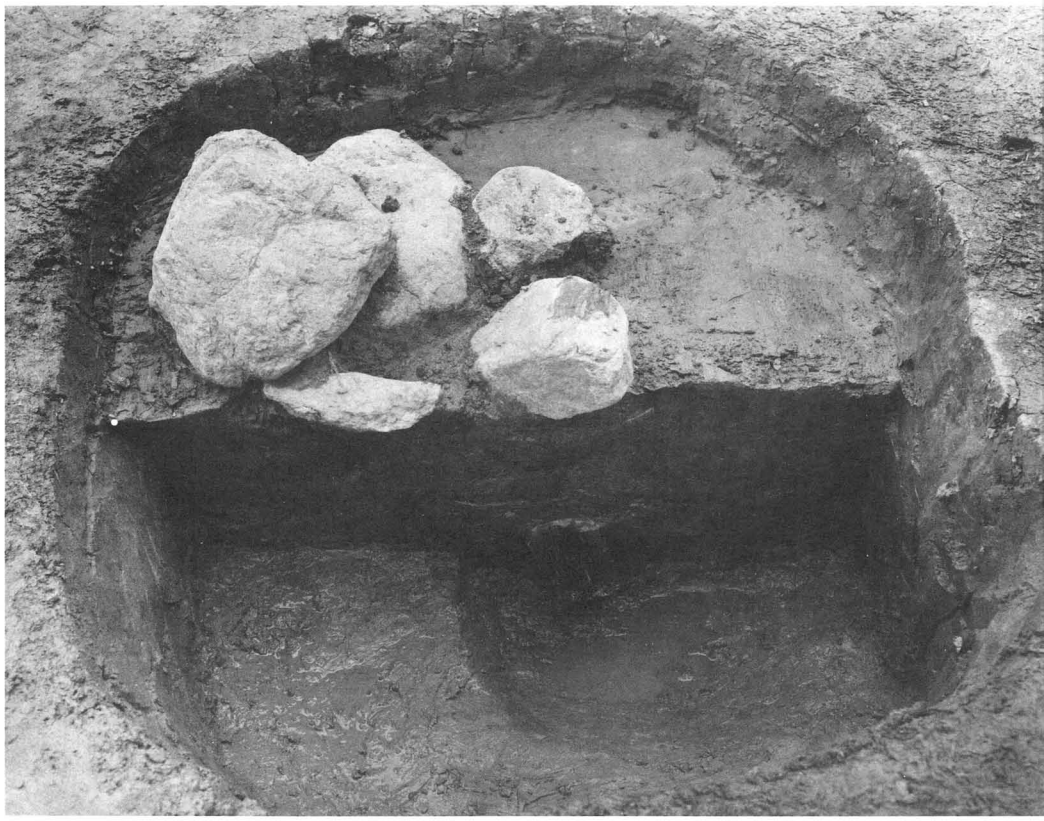
0　2m



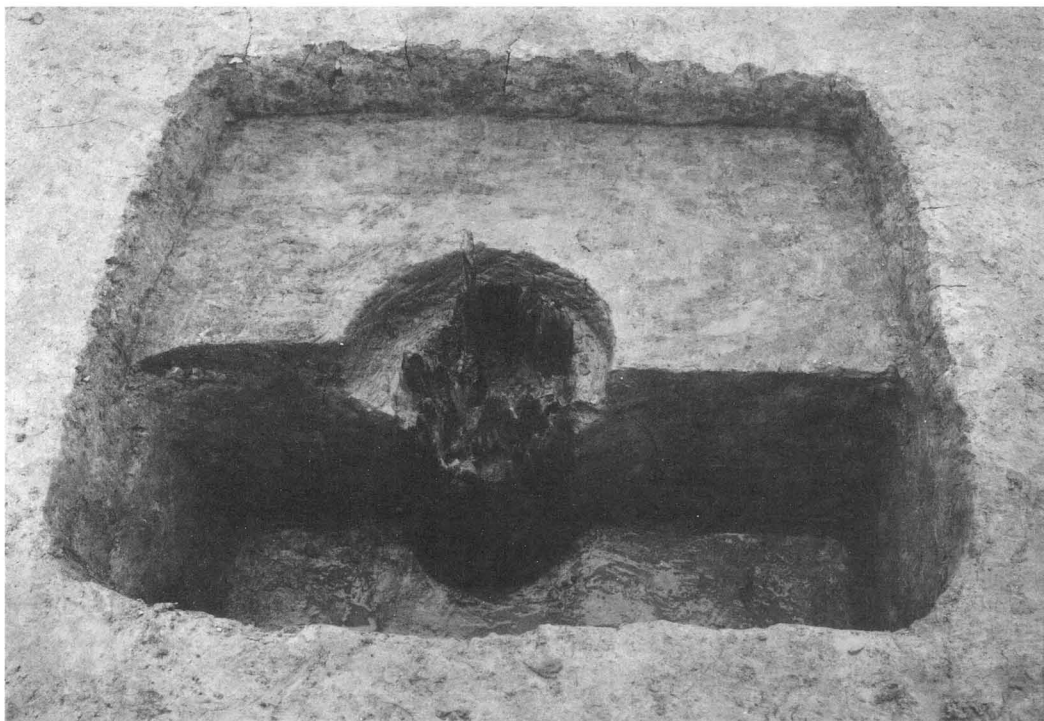
柱　穴



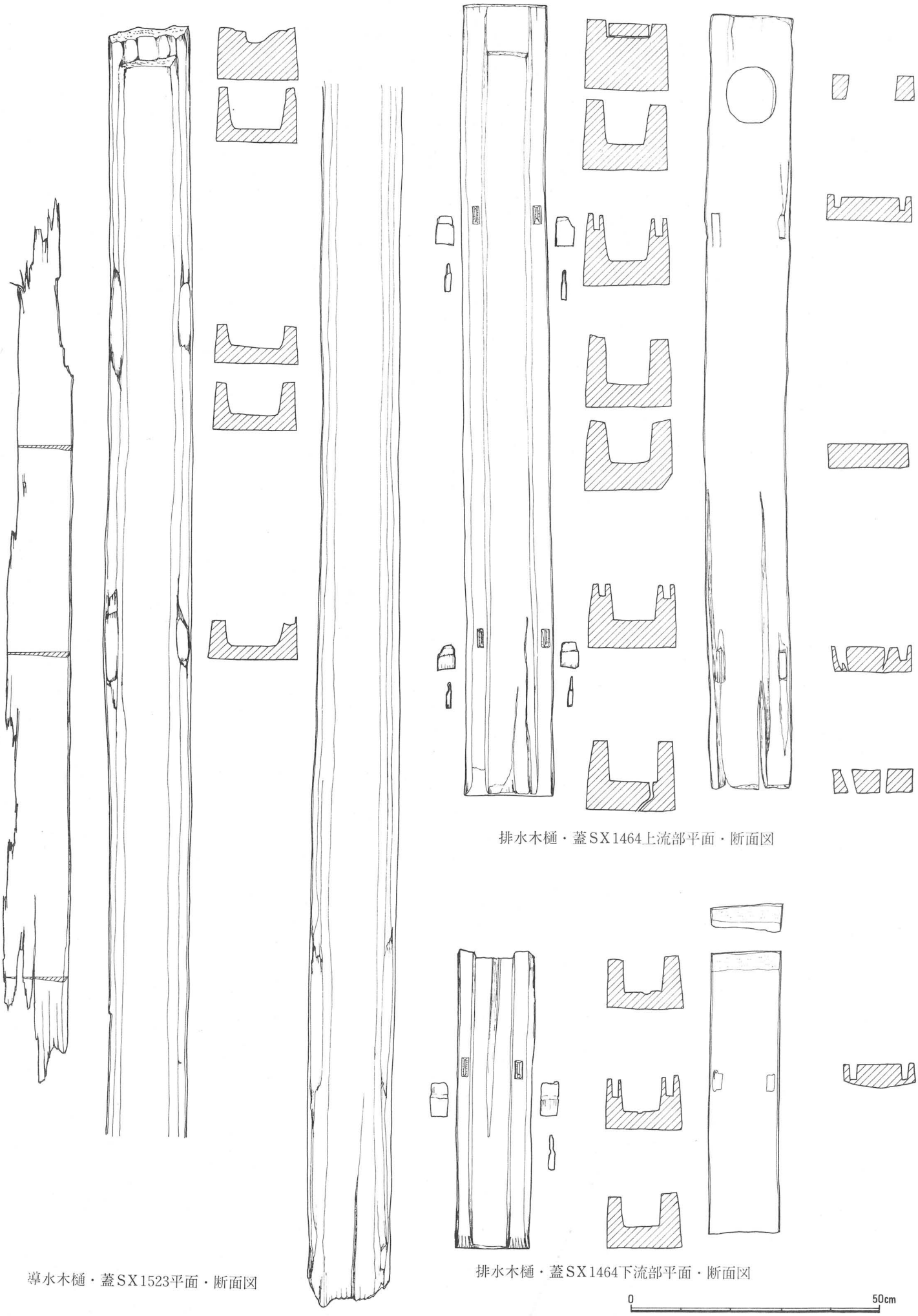
1．建物SB1540西北隅柱根石・礎板
南から



2．建物SB1540根石・SB1542柱掘形・礎板
南から



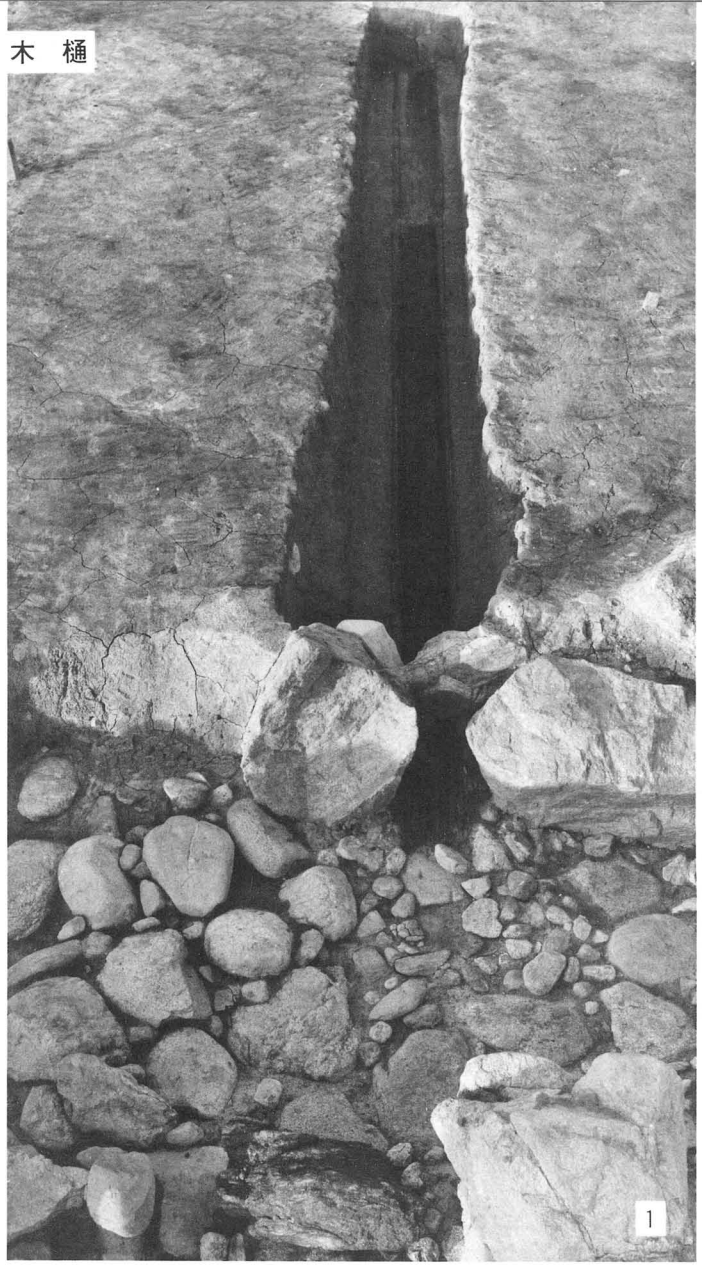
3．建物SB1570柱根
南から

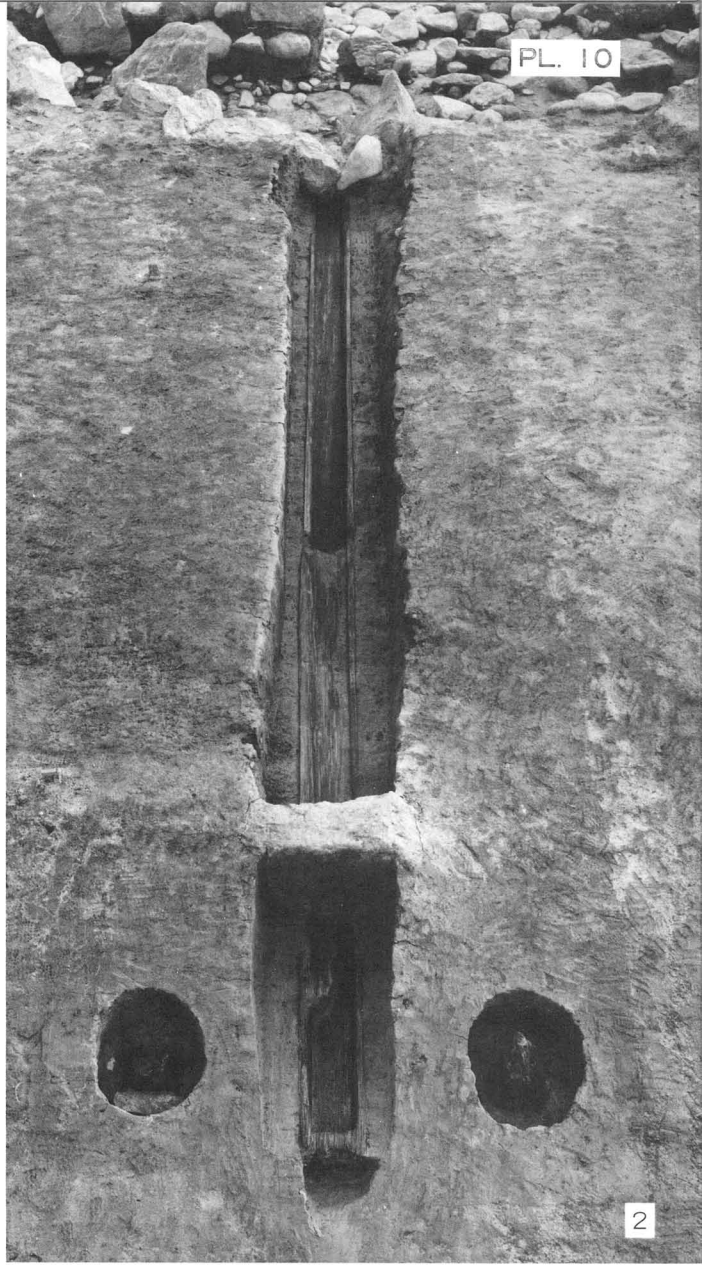


導水木樋・蓋SX1523平面・断面図

排水木樋・蓋SX1464上流部平面・断面図

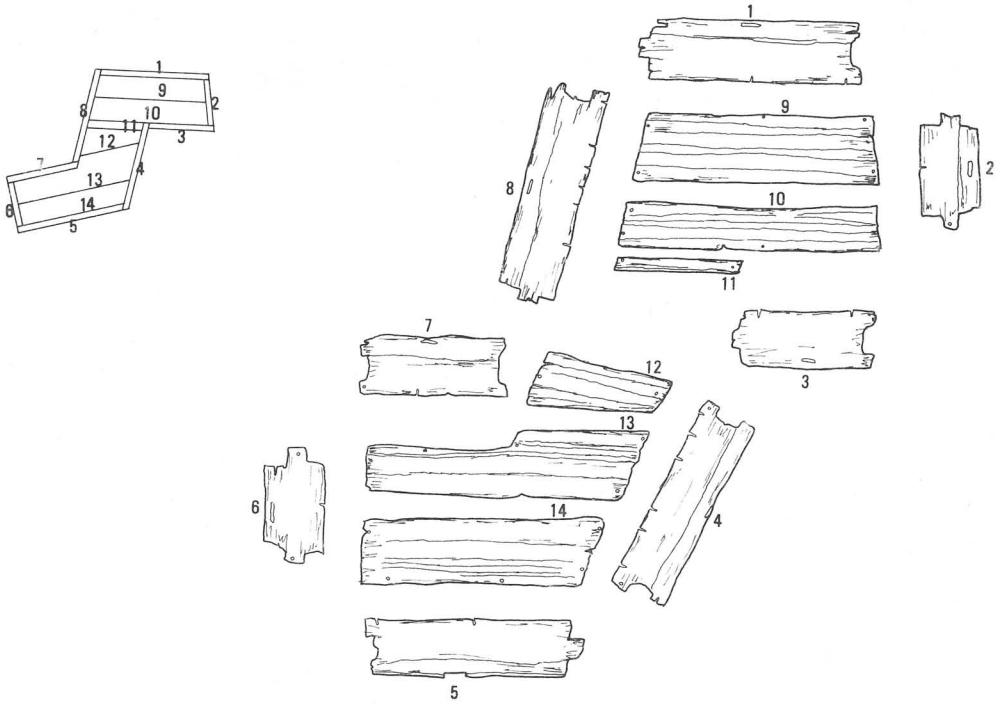
排水木樋・蓋SX1464下流部平面・断面図



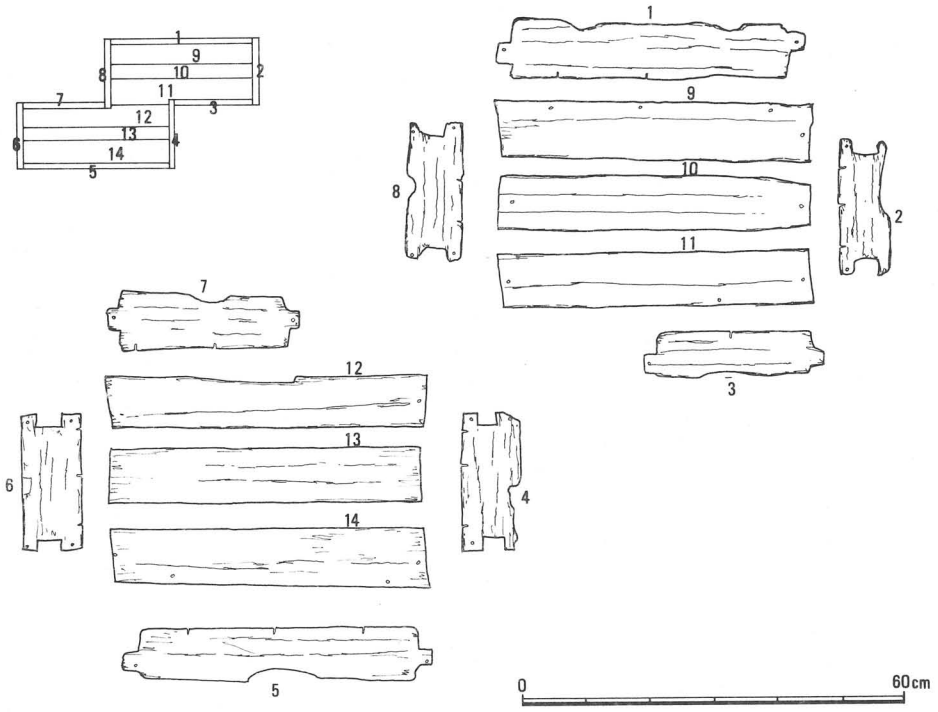


1．導水木樋SX1523　南から　　2．導水木樋SX1523　北から

3．排水木樋SX1464　北から　　4．排水木樋SX1464　西から



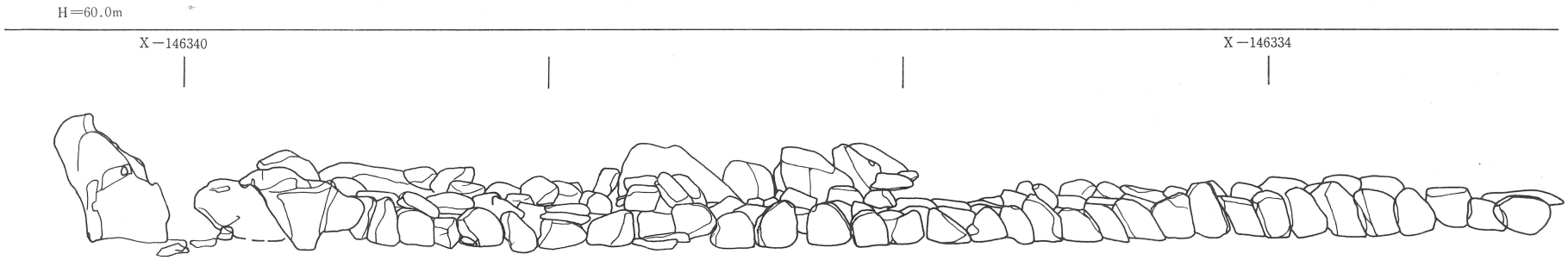
木枠ＳＸ1463底板・側板、展開図



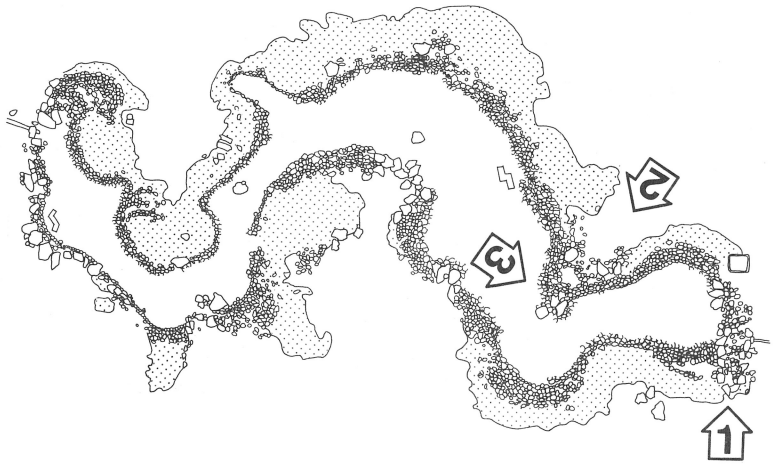
木枠ＳＸ1503底板・側板、展開図

1．木組SX1463
東から

2．木組SX1503
南から



東岸石組立面図



池細部

1．石組塀SX1524
東から

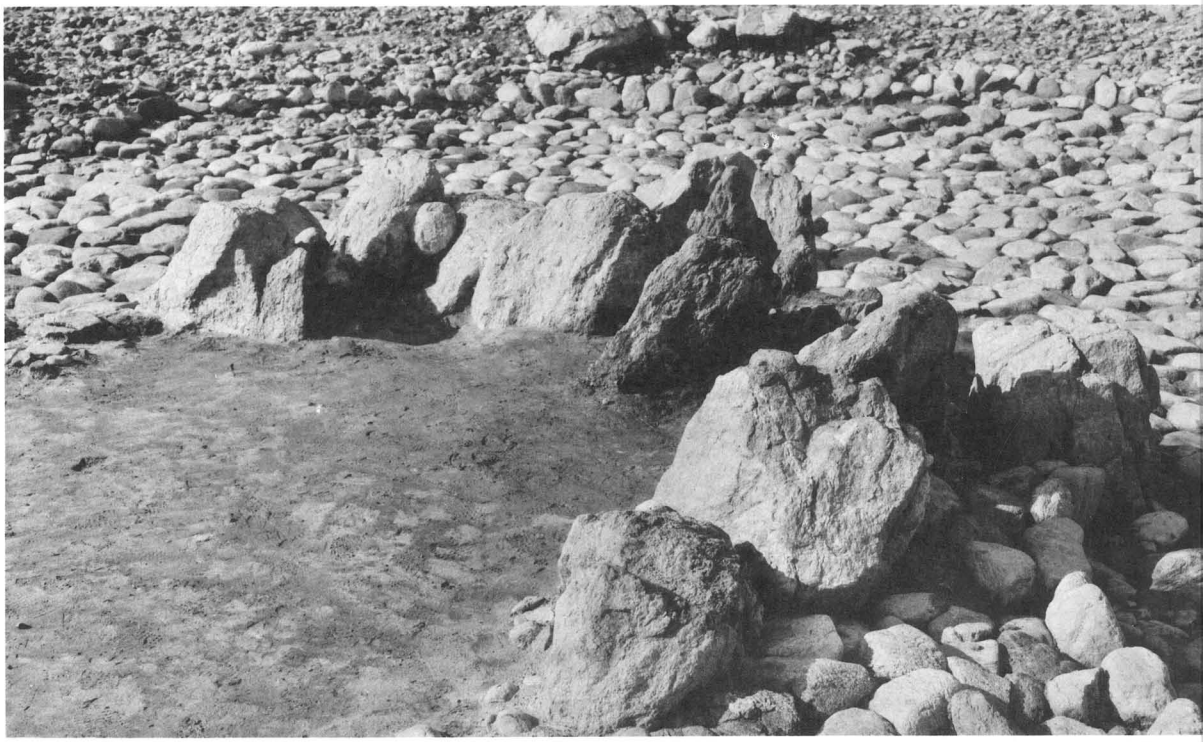
2．岩島　西北から

3．岩島　西南から

1
2
3

池細部

1．東岸洲浜　西から



2．東岸石組　東から

3．SX1468　東から

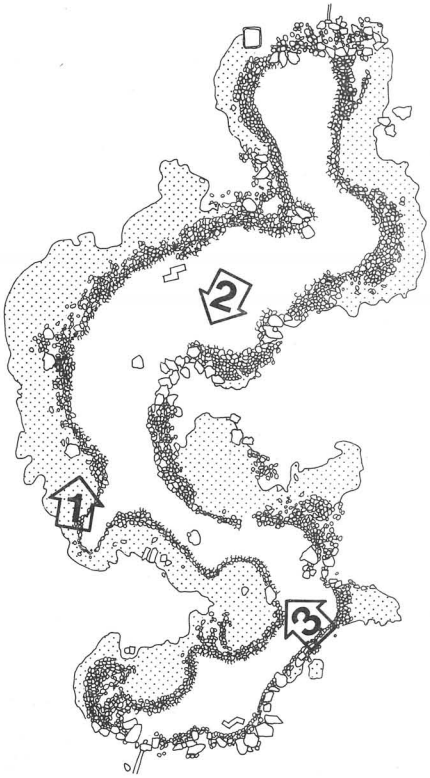
1
2
3

池細部

1．SX1461　南西から

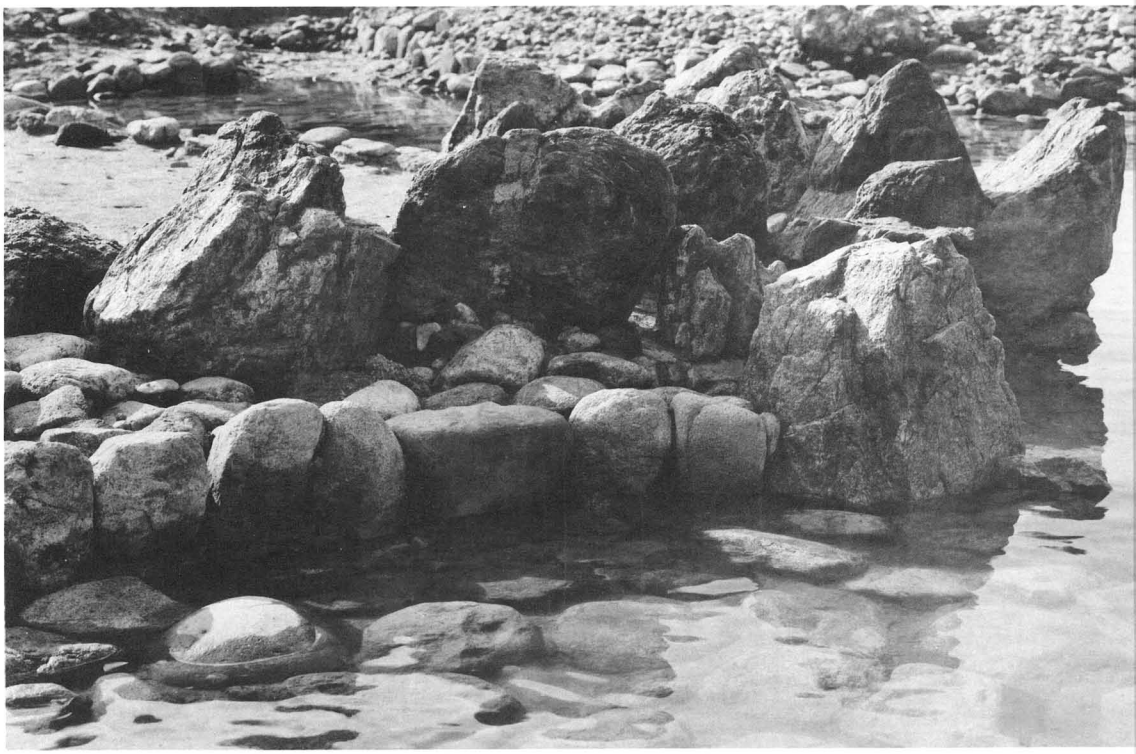
2．池尻西岸　西から

3．池尻南岸　東から


1
2
3

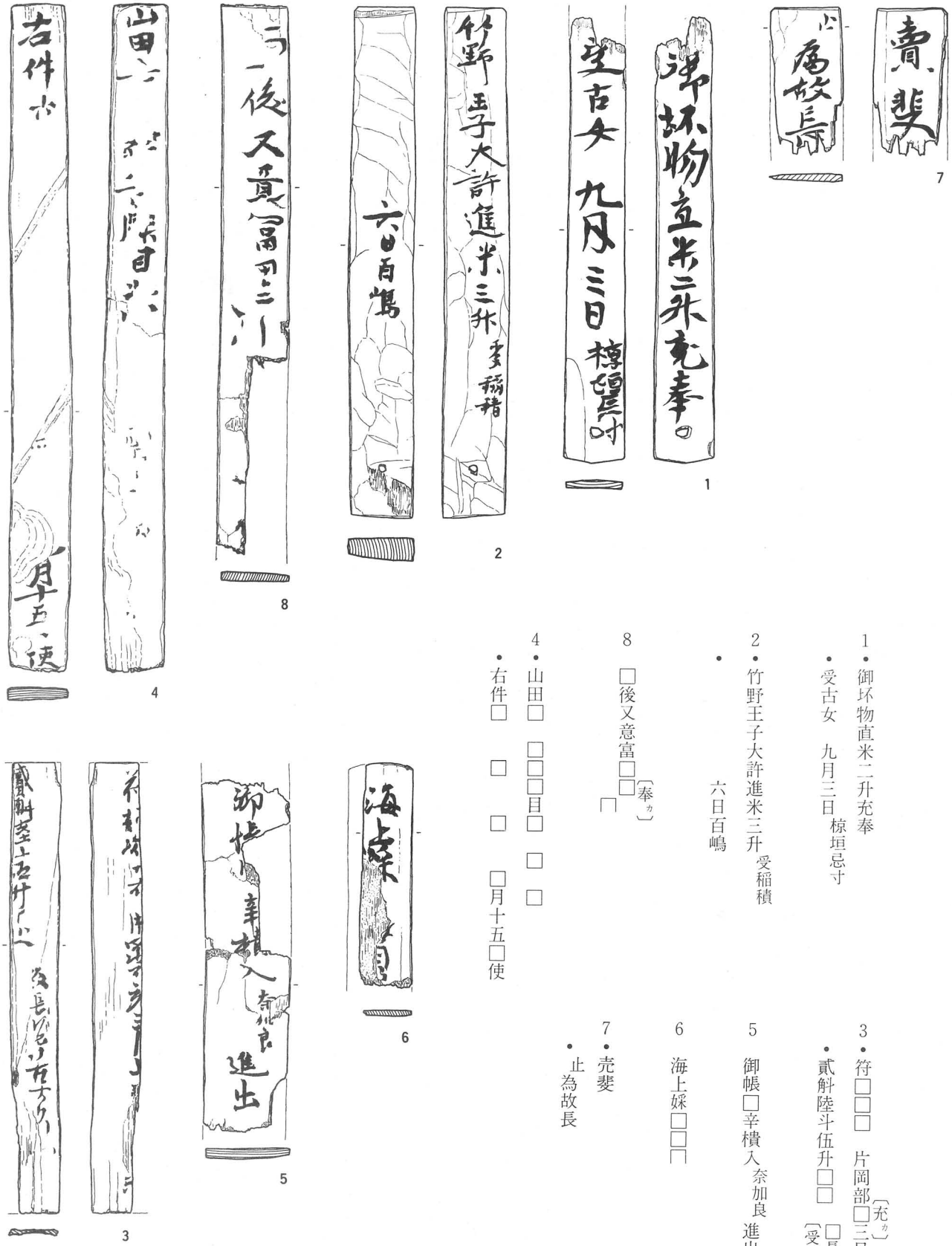
池湛水状況

1．池中央西岸　南西から



2．東岸石組　北東から

3．池南東岸　東南から



1・御坏物直米二升充奉
・受古女　九月三日　椋垣忌寸

2・竹野王子大許進米三升　受稲積
・　六日百嶋

3・符□□□　片岡部□三月□□□□　□□
・貳斛陸斗伍升□□　□長□□□古万呂

4・山田□　□□□目□　□　□
・右件□　□　□　□月十五□使

5　御帳□辛櫃入　奈加良　進出

6　海上媛□□

7・売斐
・止為故長

8　□後又意富□□〔奉カ〕
　　□

0　10　15cm

1

2

3

4

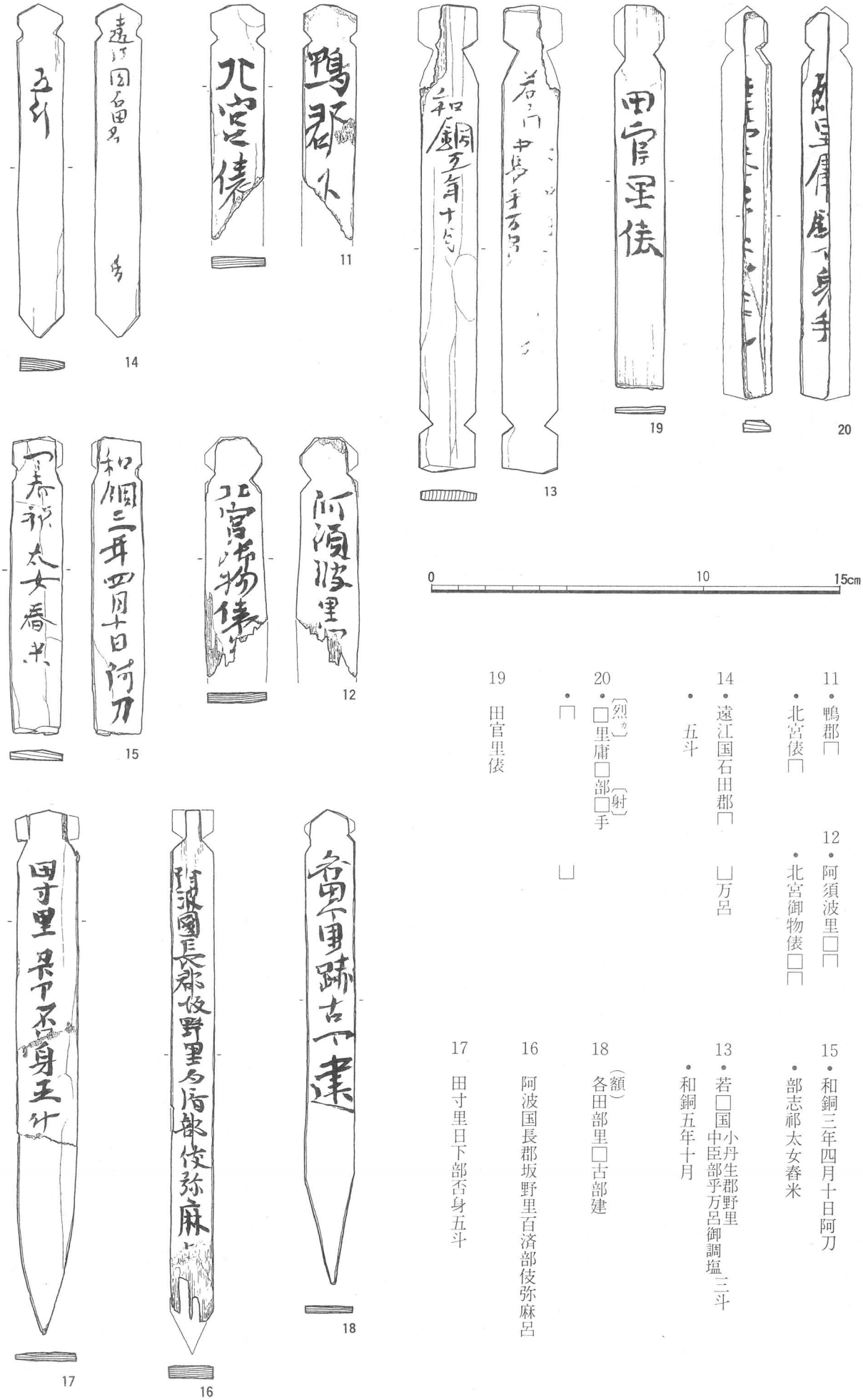
5

6

7

8

3:4



11・鴨郡□
・北宮俵□

12・阿須波里□□
・北宮御物俵□□

13・若□国小丹生郡野里
中臣部乎万呂御調塩三斗
・和銅五年十月

14・遠江国石田郡□　□万呂
・五斗

15・和銅三年四月十日阿刀
・部志祁太女春米

16　阿波国長郡坂野里百済部伎弥麻呂

17　田寸里日下部否身五斗

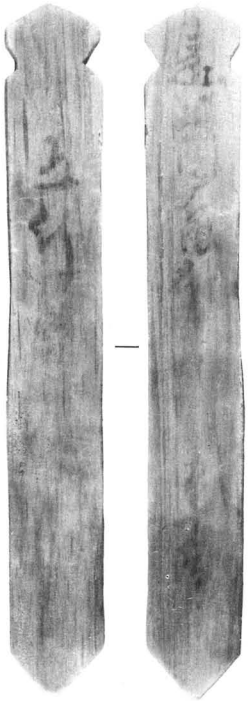
18　（額）各田部里□古部建

19　田官里俵

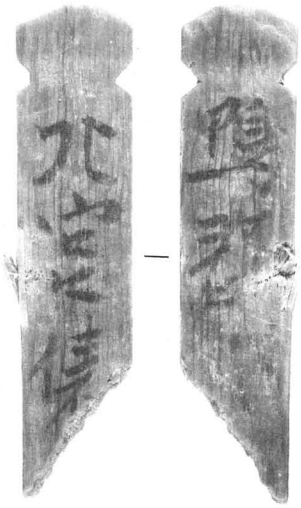
20・□（烈カ）里庸□部□（射）手
・□　□

19

20



14



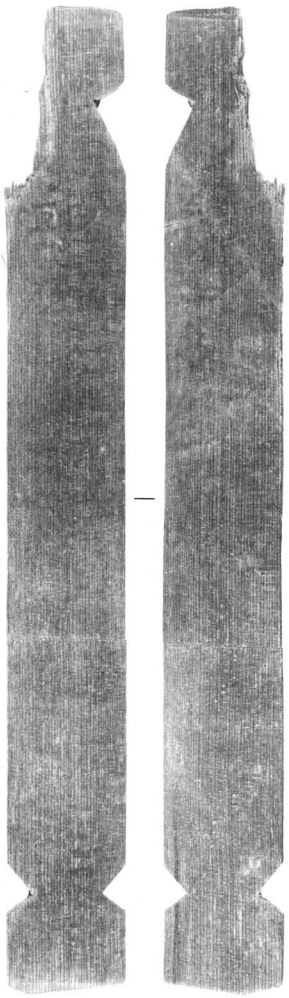
11

12

17

16

18



13

15

3：4

10 ・四月十四日紀□□〔若カ〕進米二升

・□

24 中務省少録□□□

30 □□　□□□　□四升

21 ・□□□□□□□

・□銅七年十月

35 ・□□□□□

・□濱

28 ・「□〔別筆〕□　日□七□七□　□」

首徳万呂

・□　□□□　□

33 □□〔伊カ〕香足

37 麻呂

29 小治□

□□□〔小治〕

□□□〔万呂〕

小治□

小治□

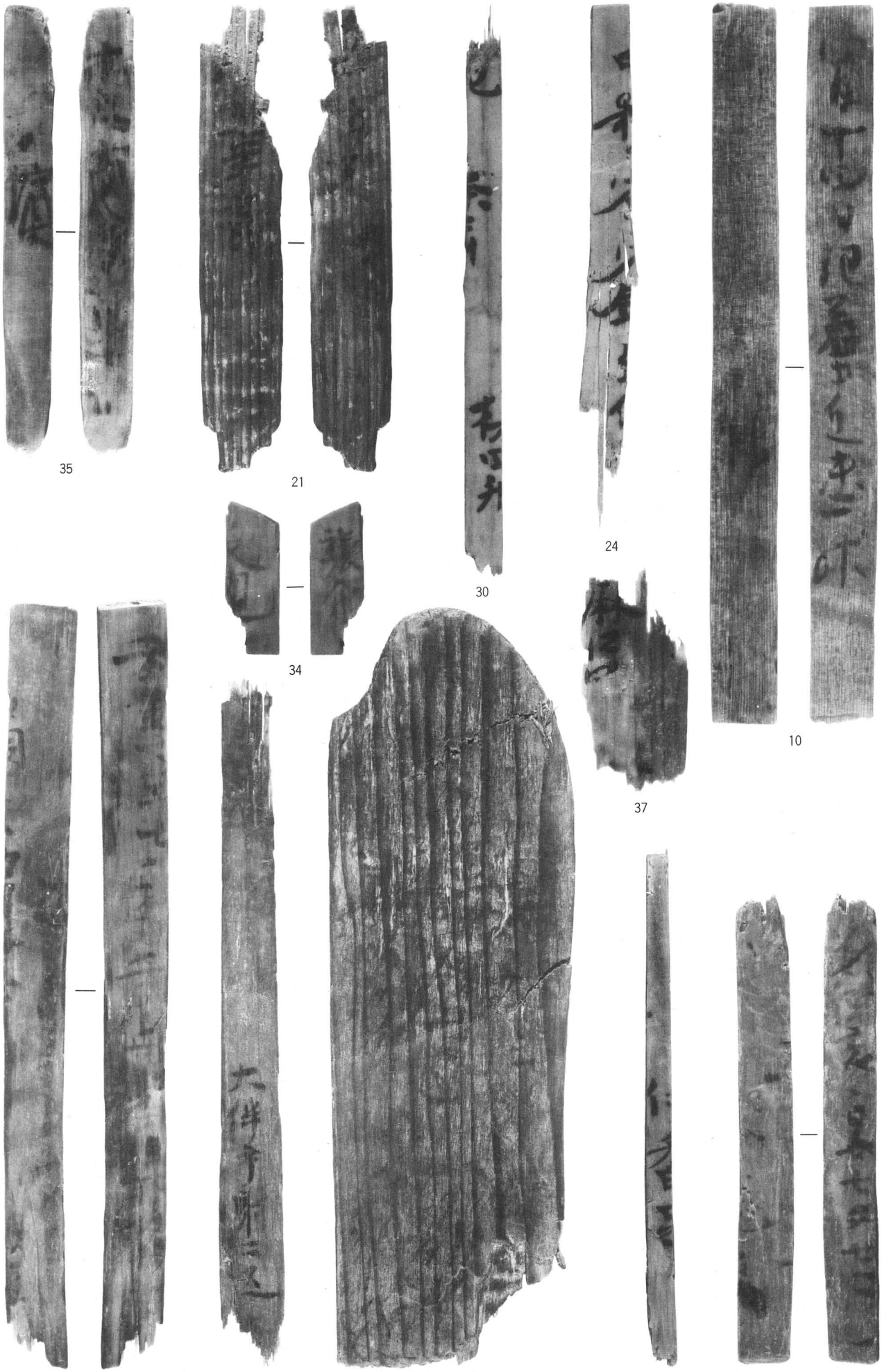
34 ・張尒

・□□

22 大伴牟射二匹

27 ・和銅七年七□□□和□銅七□〔和カ〕〔和カ〕

・和銅□□□月□□□　□□〔四カ〕〔廿カ〕



35 21 30 24 10 34 37 27 22 29 33 28

3：4

32・𢦏識我我我我
・也也□□而而而
〔也而〕

36・□生□圍常□　□□子□
・
□

25・五百卌二
一校授
・　二百七十　卌
豆

9・従二升□□□升□□□三升□□四升半
・右一斗五升　四月廿三日　□末呂

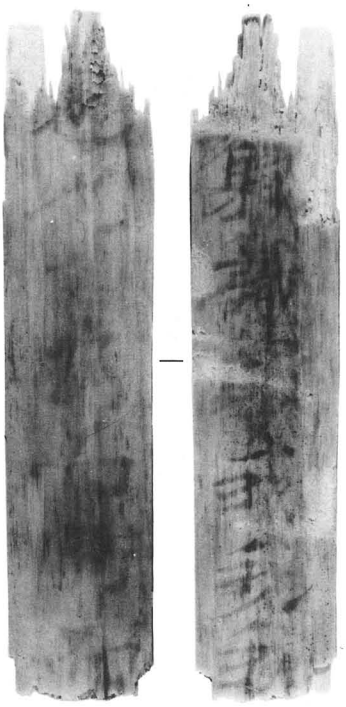
23　封　封

26・椋部智麻呂　高椅善麻呂　越　越
・身身身　□□　人人人人人人□

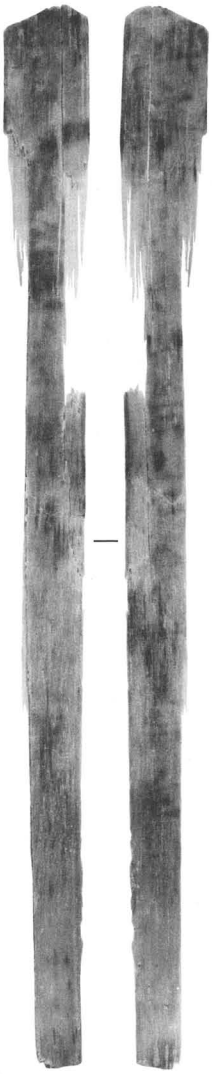
31・此之□此此此白白□□自白
・□□□□□

25

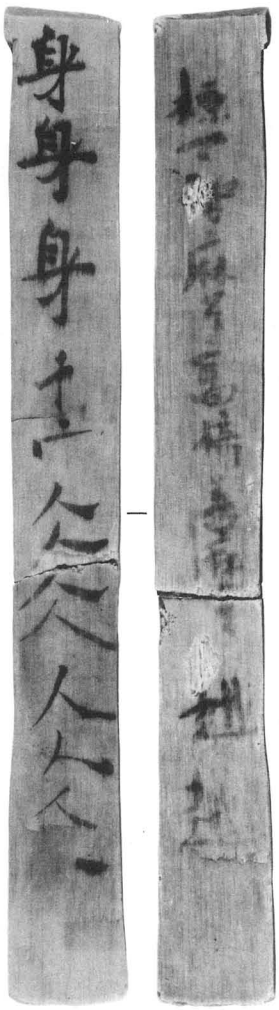
36



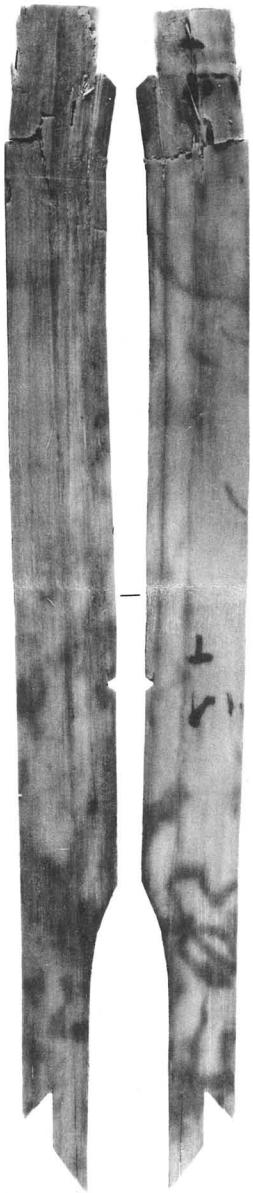
32



31



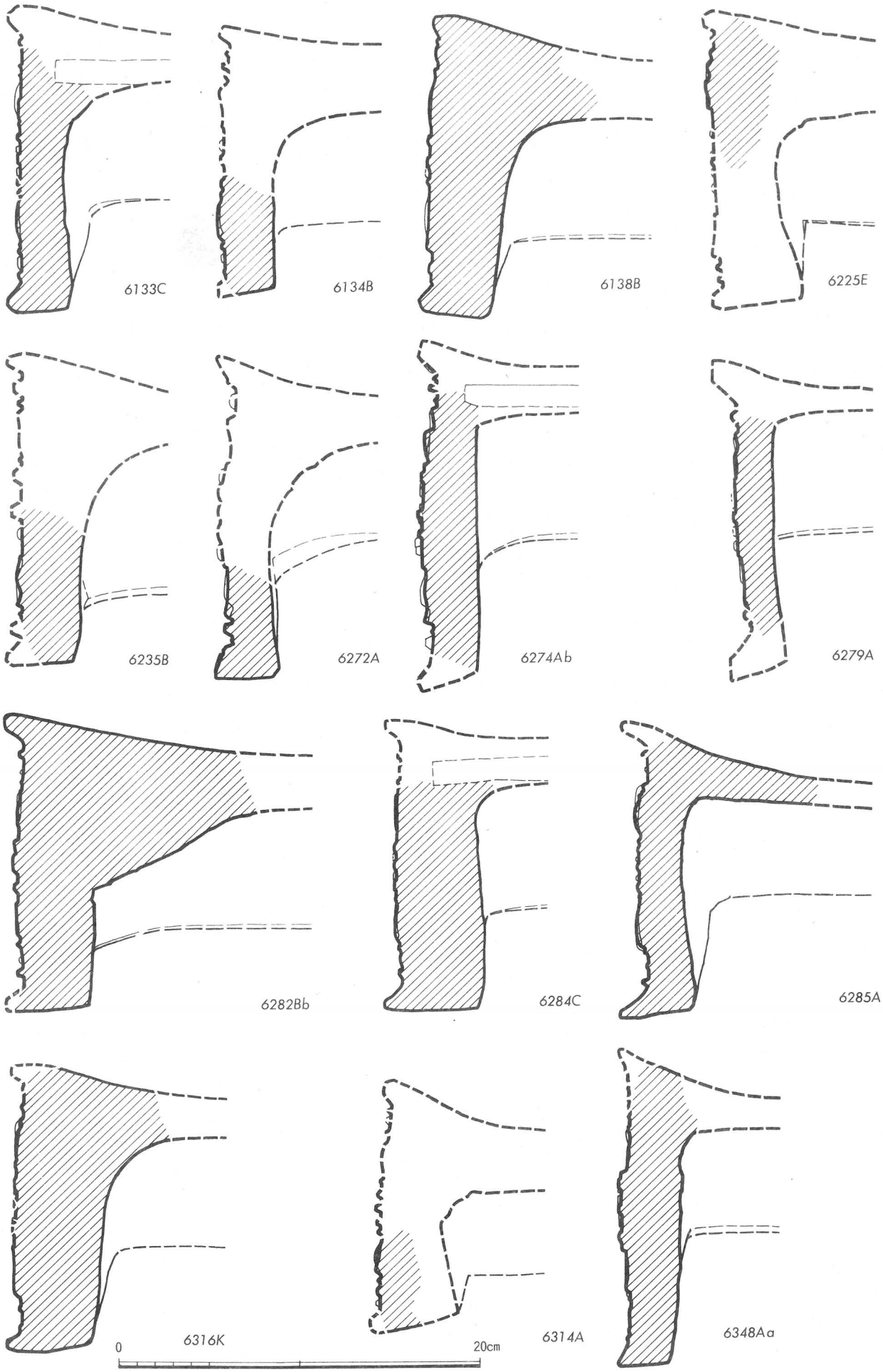
26



23

9

3:5


6133C
6134B
6138B
6225E
6235B
6272A
6274Ab
6279A
6282Bb
6284C
6285A
6316K
6314A
6348Aa
0
20cm

6133C

6134B

6138B

6225E

6274Ab

6279A

6235B

6272A

6282Bb

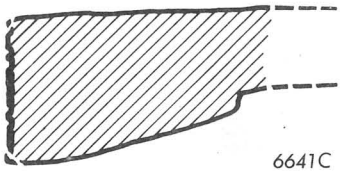
6285A

6314A

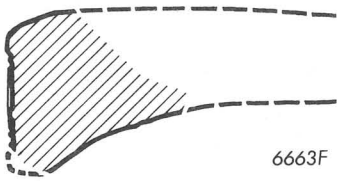
6284C

6316K

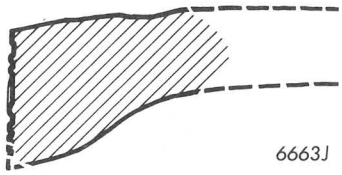
6348Aa



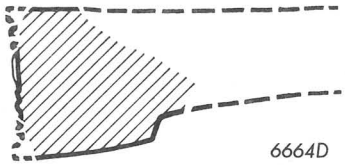
6641C



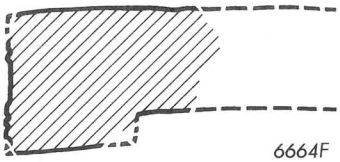
6663F



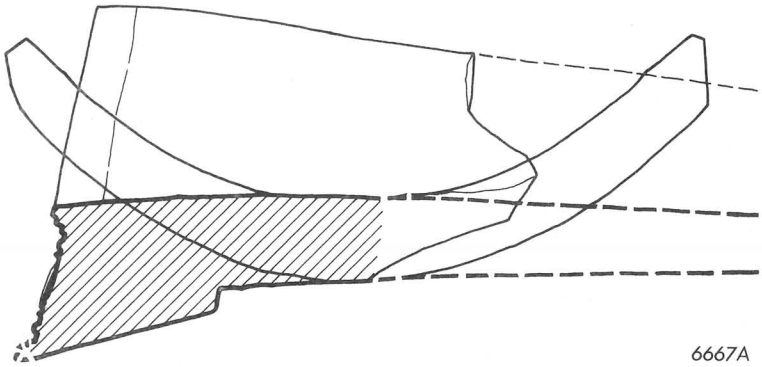
6663J



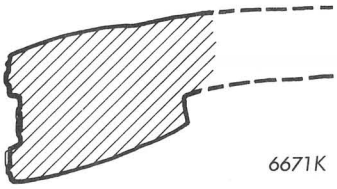
6664D



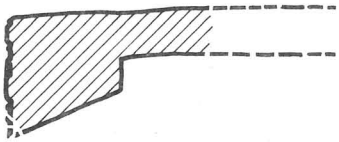
6664F



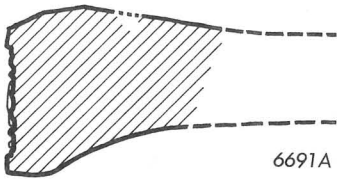
6667A



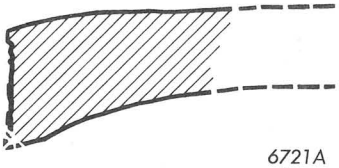
6671K



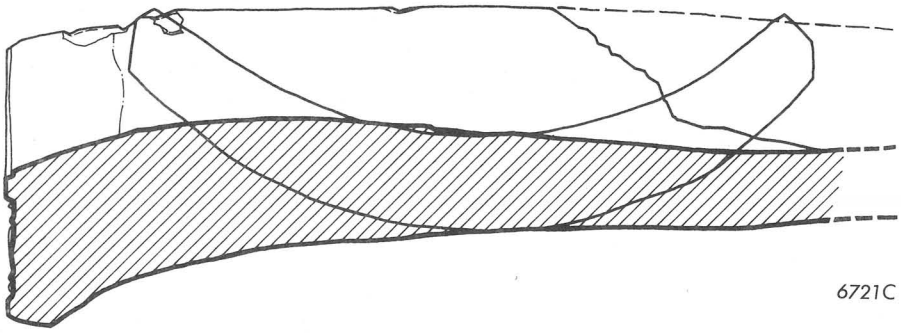
6675A



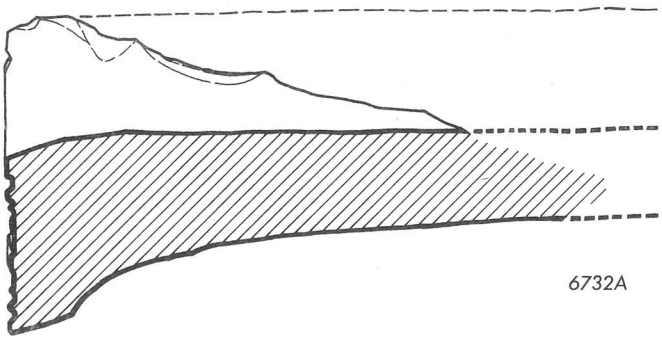
6691A



6721A



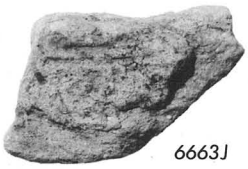
6721C



6732A

6641C

6663F


6663J

6664D

6664F

6671K

6667A

6675A

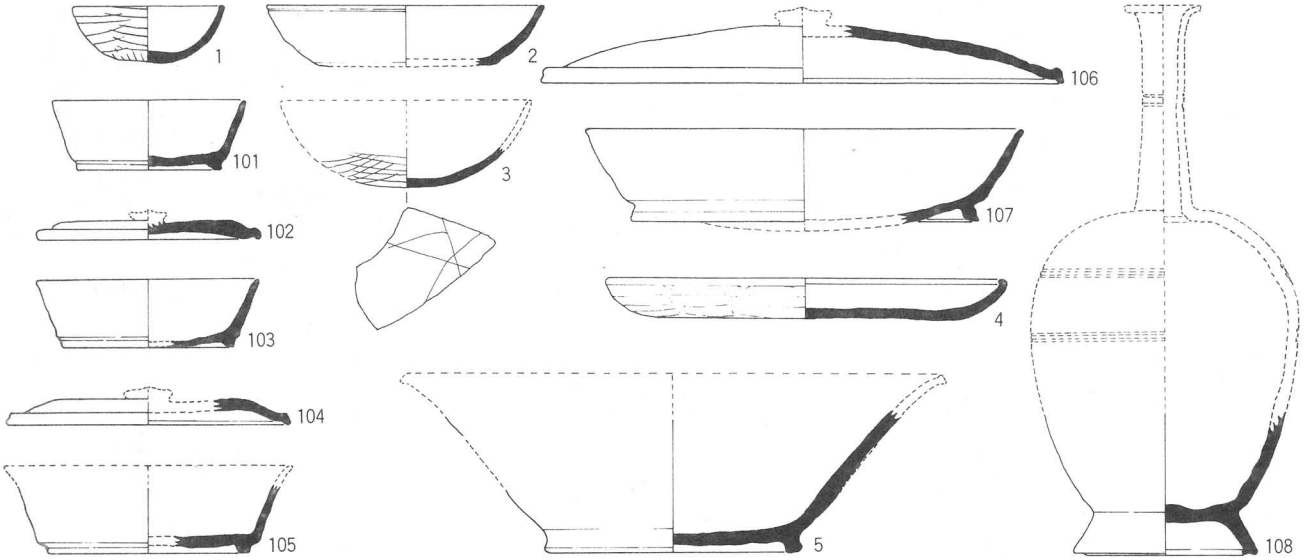
6721C

6691A

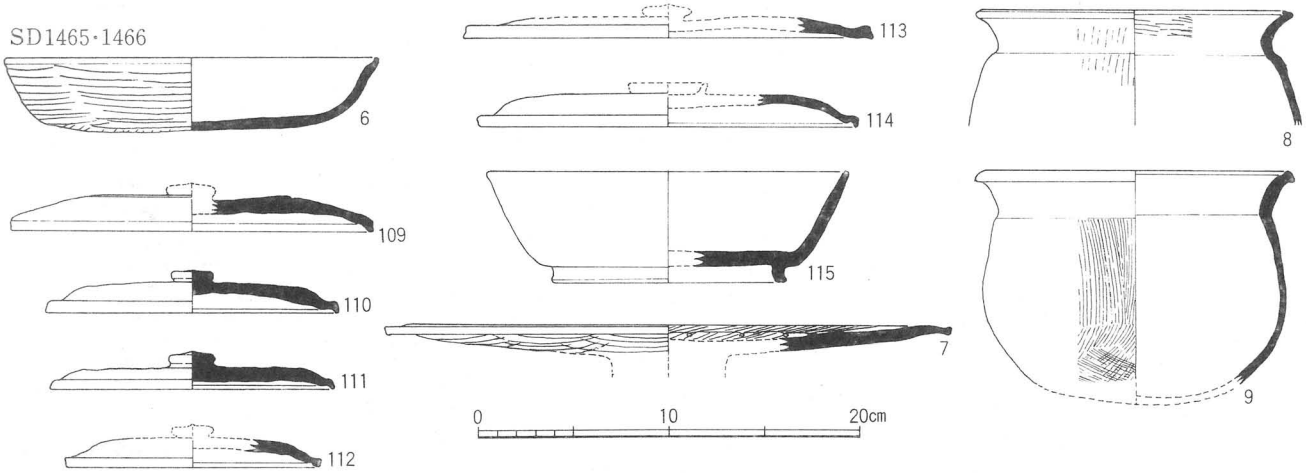
6721A

6732A

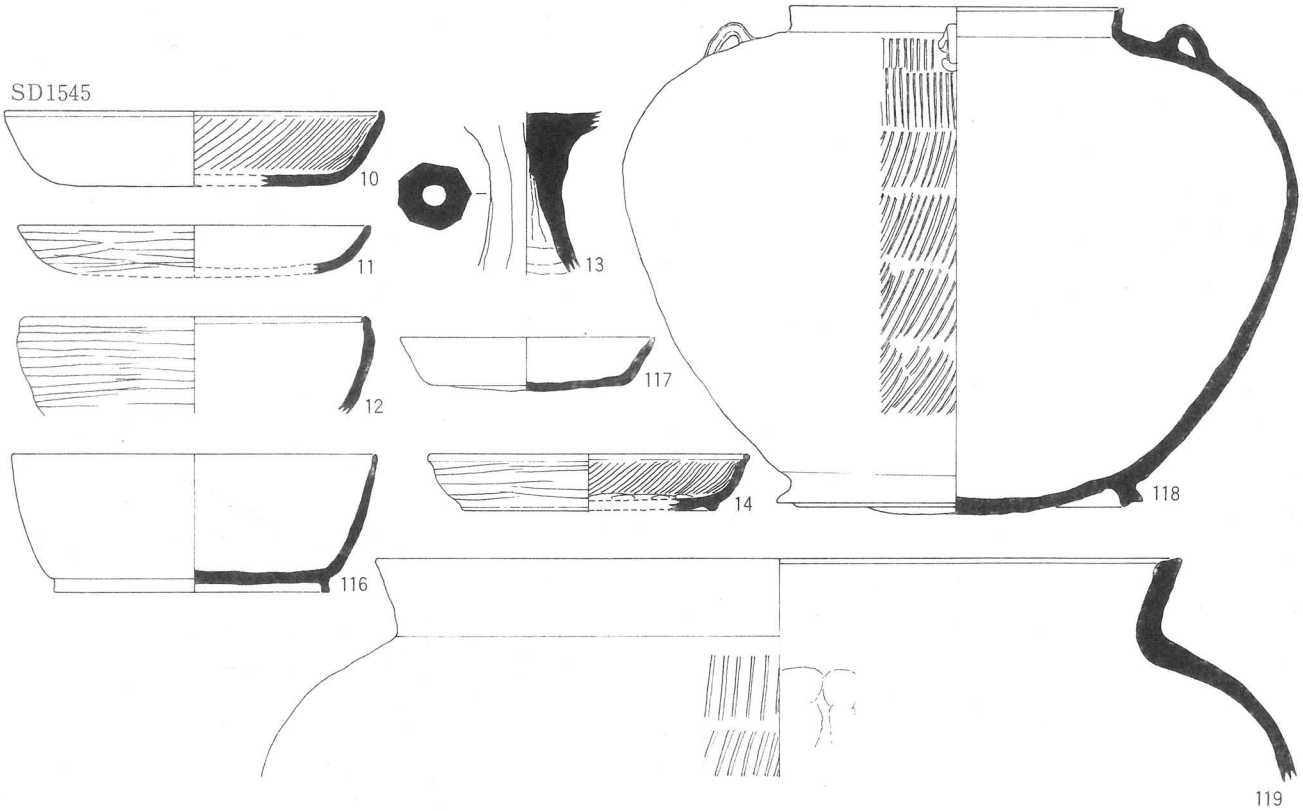
SG1504



SD1465・1466



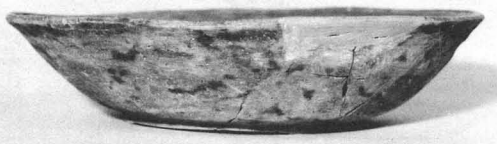
SD1545



1

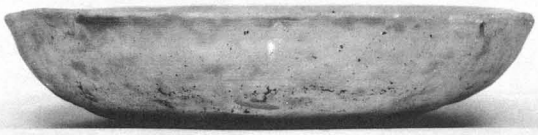
39

22



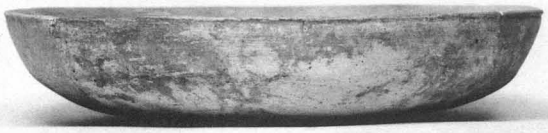
43

41



17

23



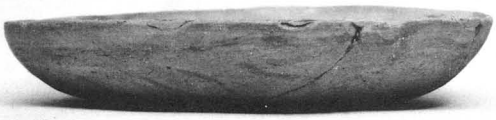
18

24

6

31

3



46

26

1 : 2.5

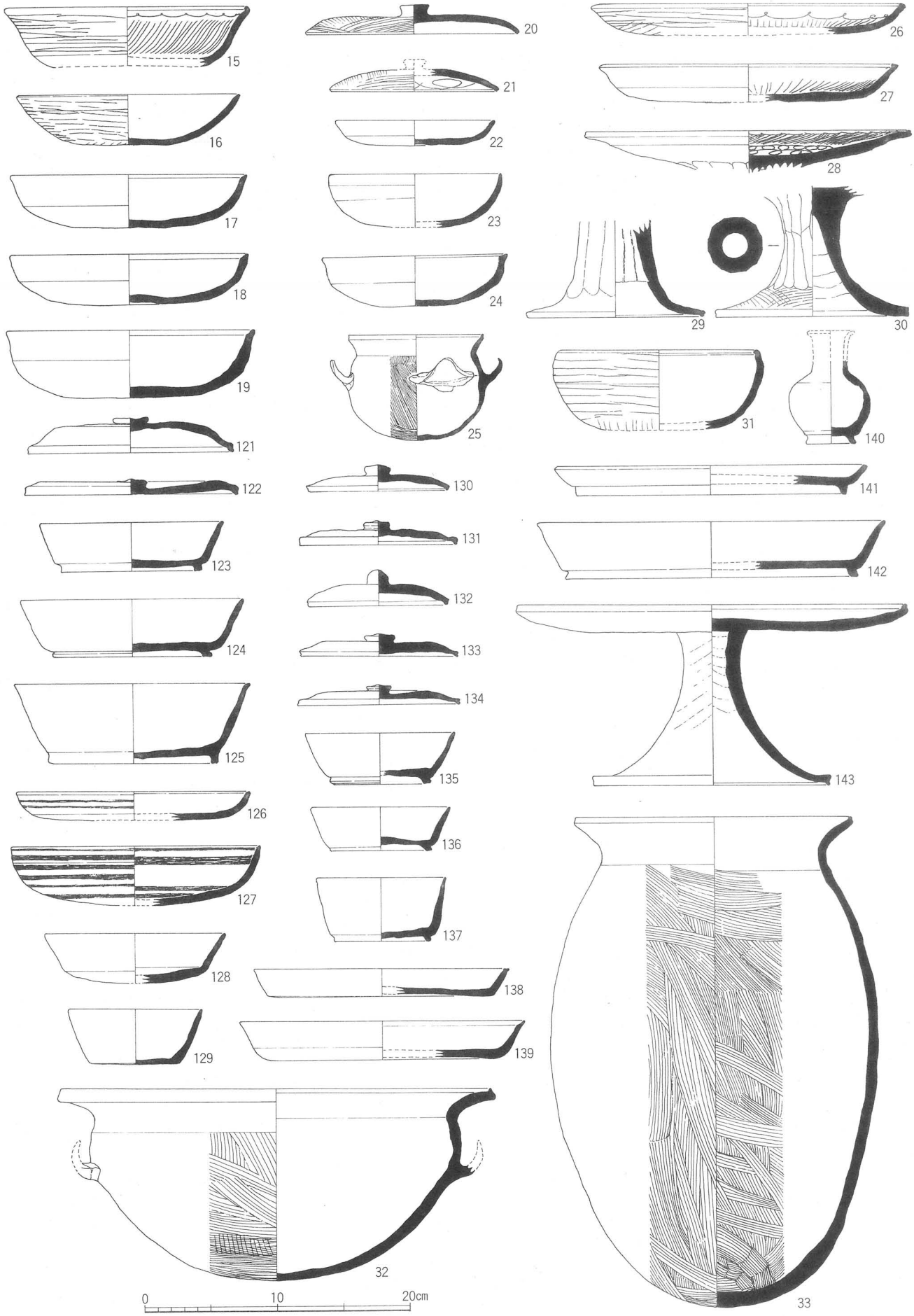
25

34

1 : 3

32

SD1525


15
16
17
18
19
121
122
123
124
125
126
127
128
129
20
21
22
23
24
25
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
26
27
28
29
30
31
140
141
142
143
32
33
0
10
20cm

130

155

1

132

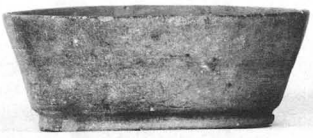
161

134

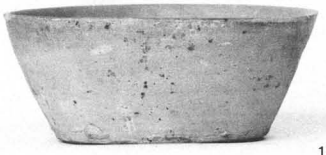
133

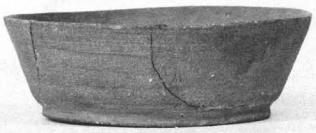
166

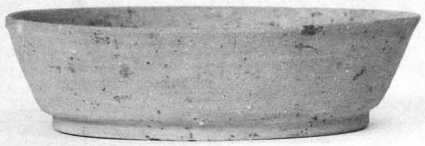
137


8

110


129

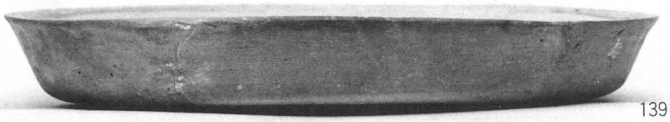

136


123

1：2.5 148

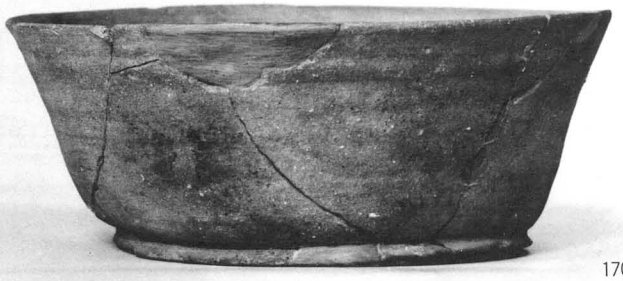
138

127


139

1：3 146

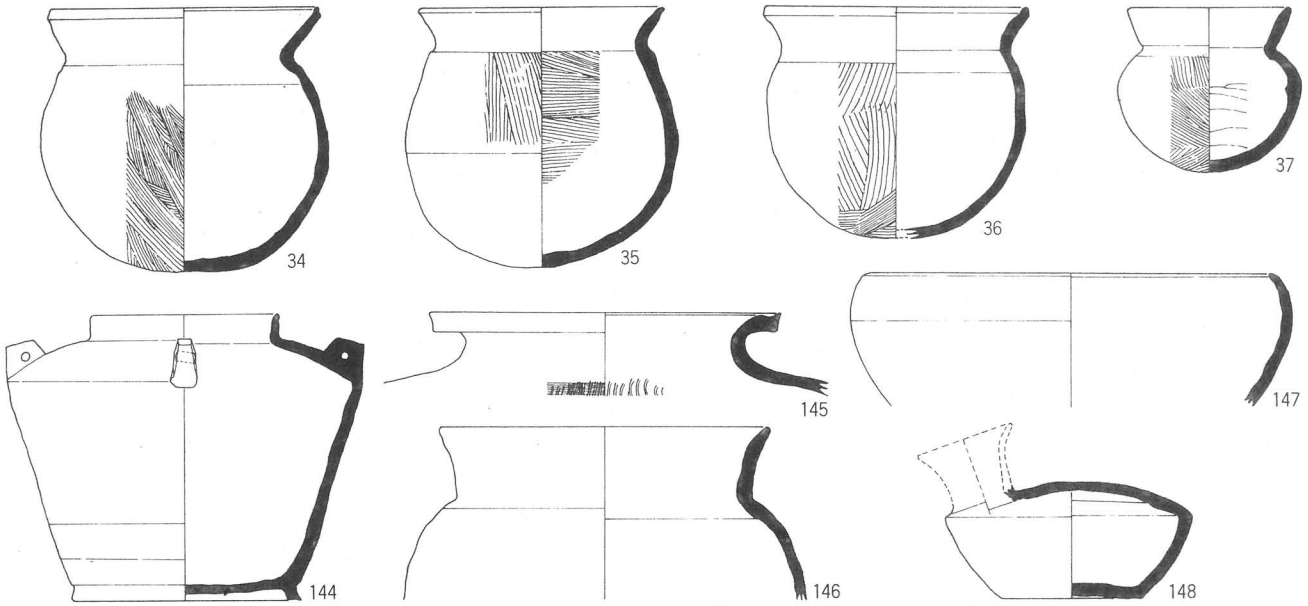
167


170

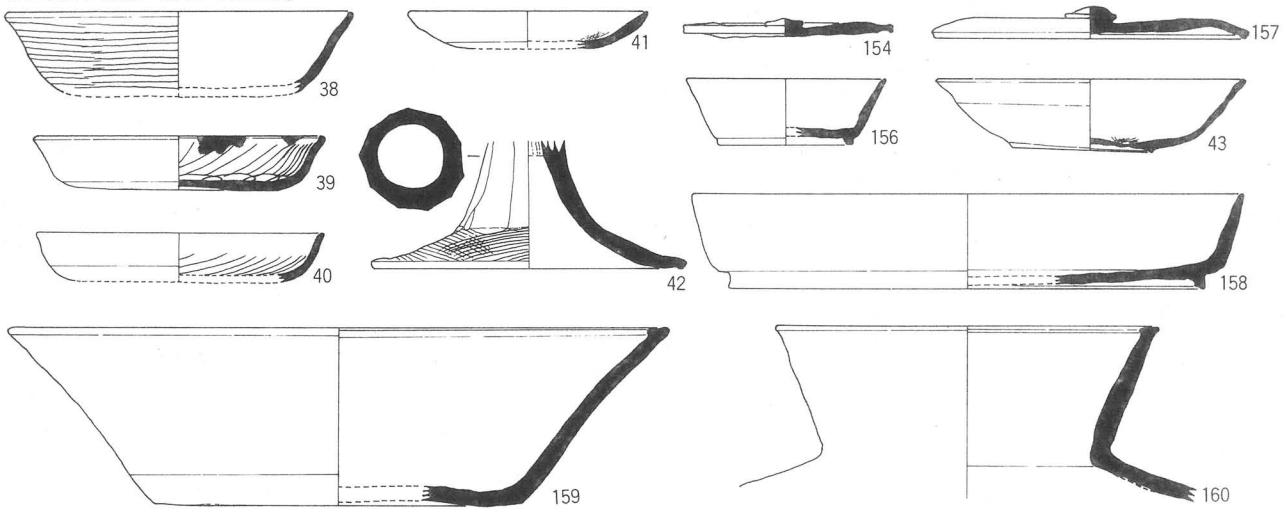
1：3 144

107

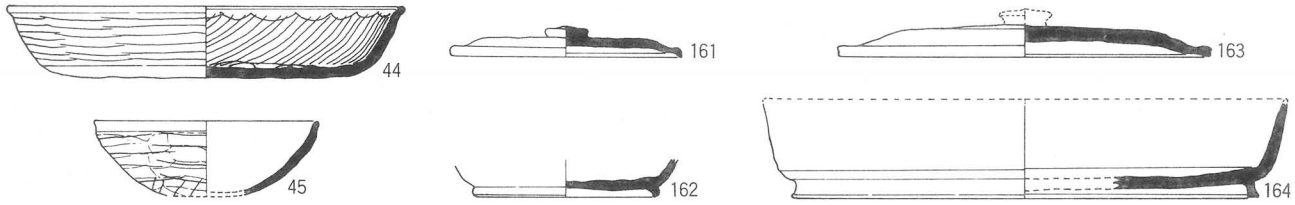
SD1525・1560



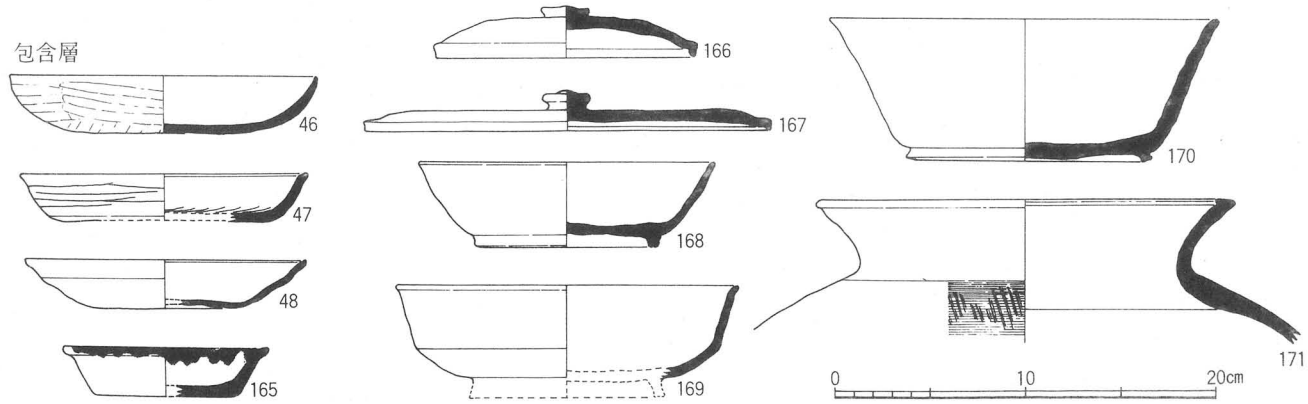
SE1511・1547・1611 SK1516



SB1510・1540・1552・1570



包含層



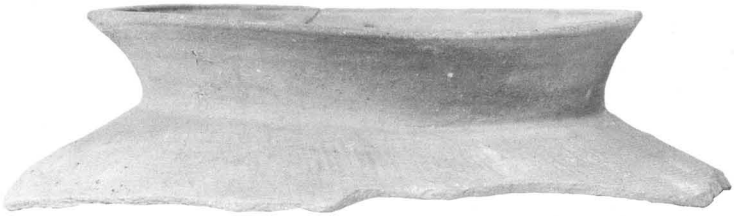
140

33

108

1 : 2.5

30



171

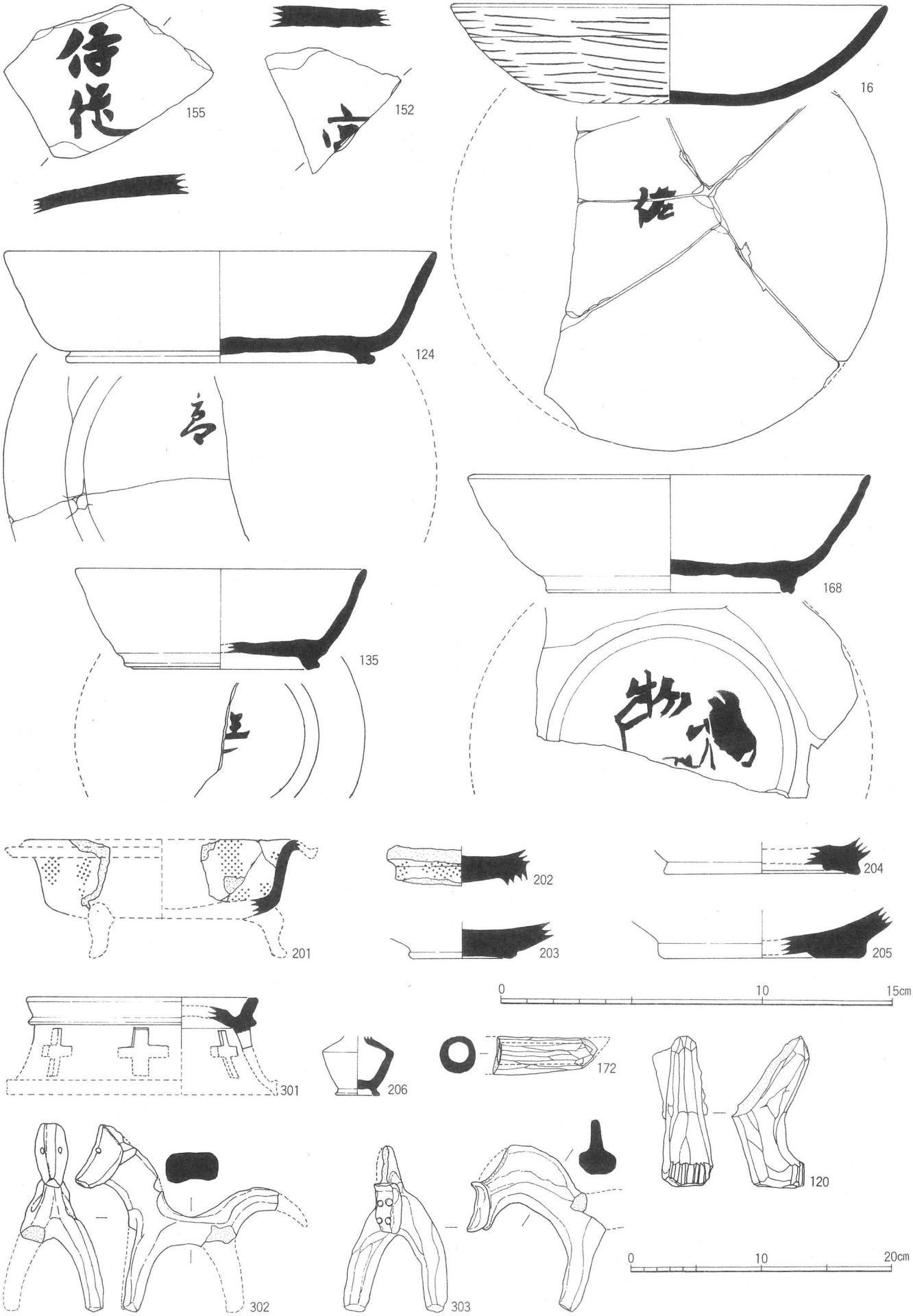
37

118

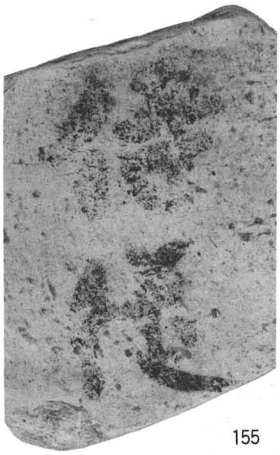
1 : 3

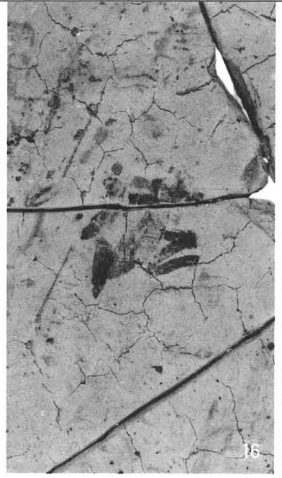
35

墨書土器・施釉陶器・土製品



168


155

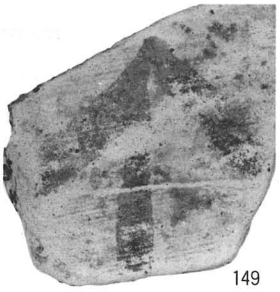

96

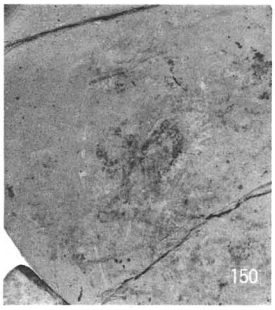
124

1 : 1

152

135


149


150

151

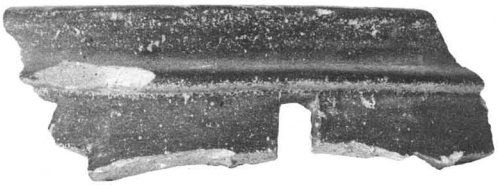
201

202

203

205

204

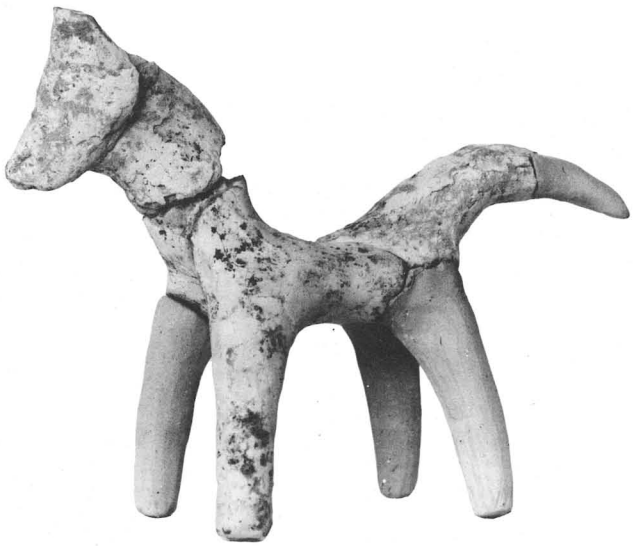

301

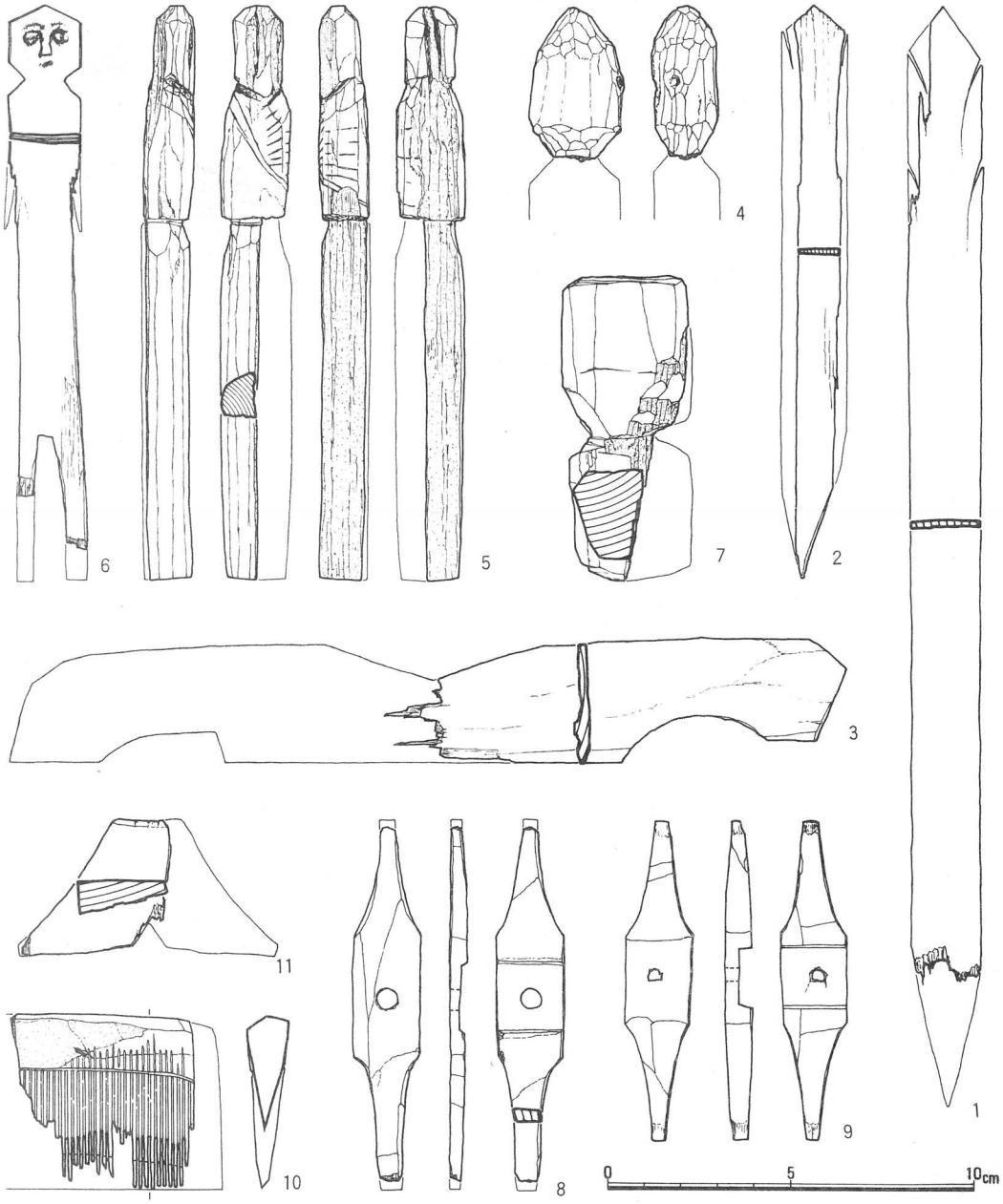
172

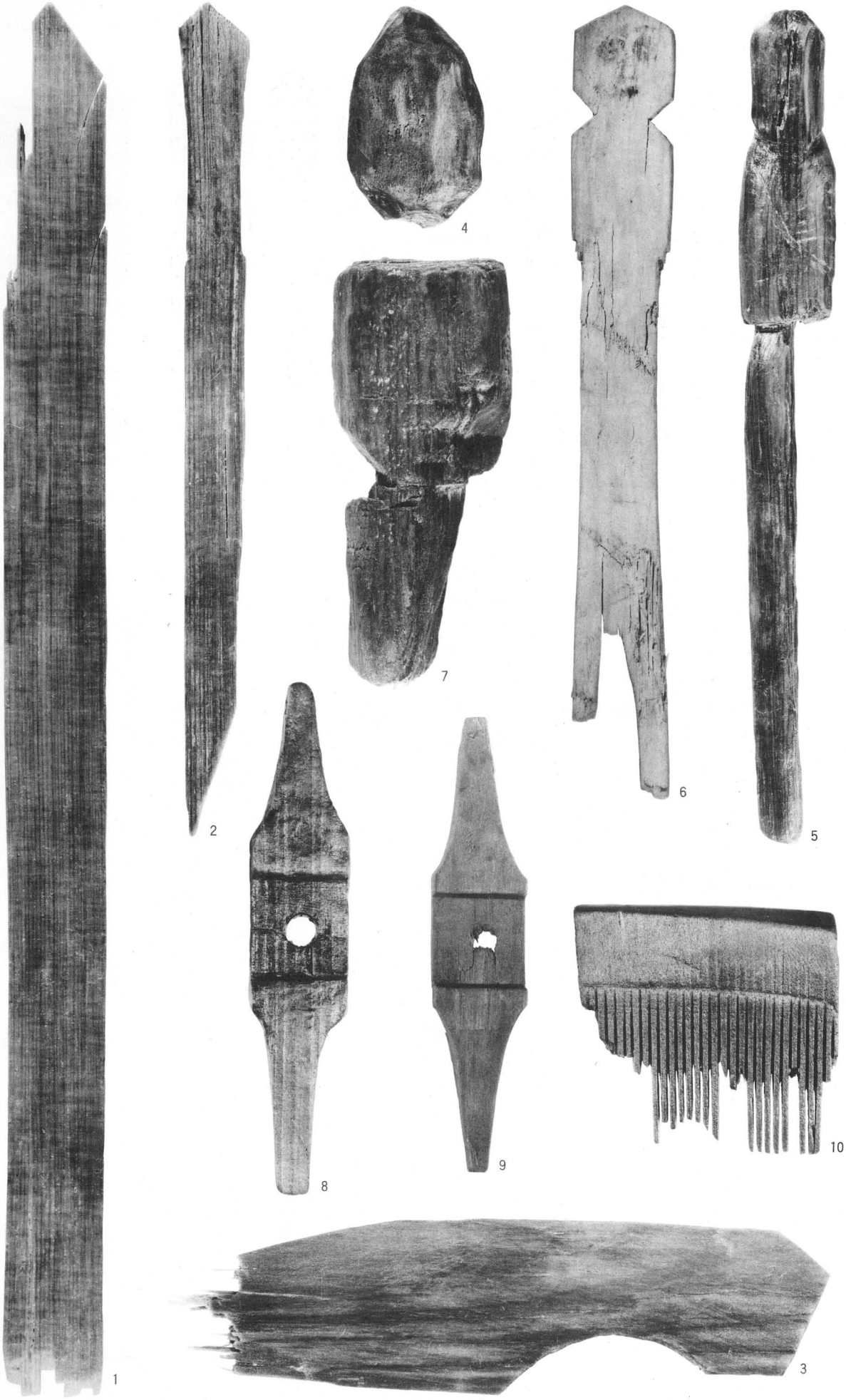
206

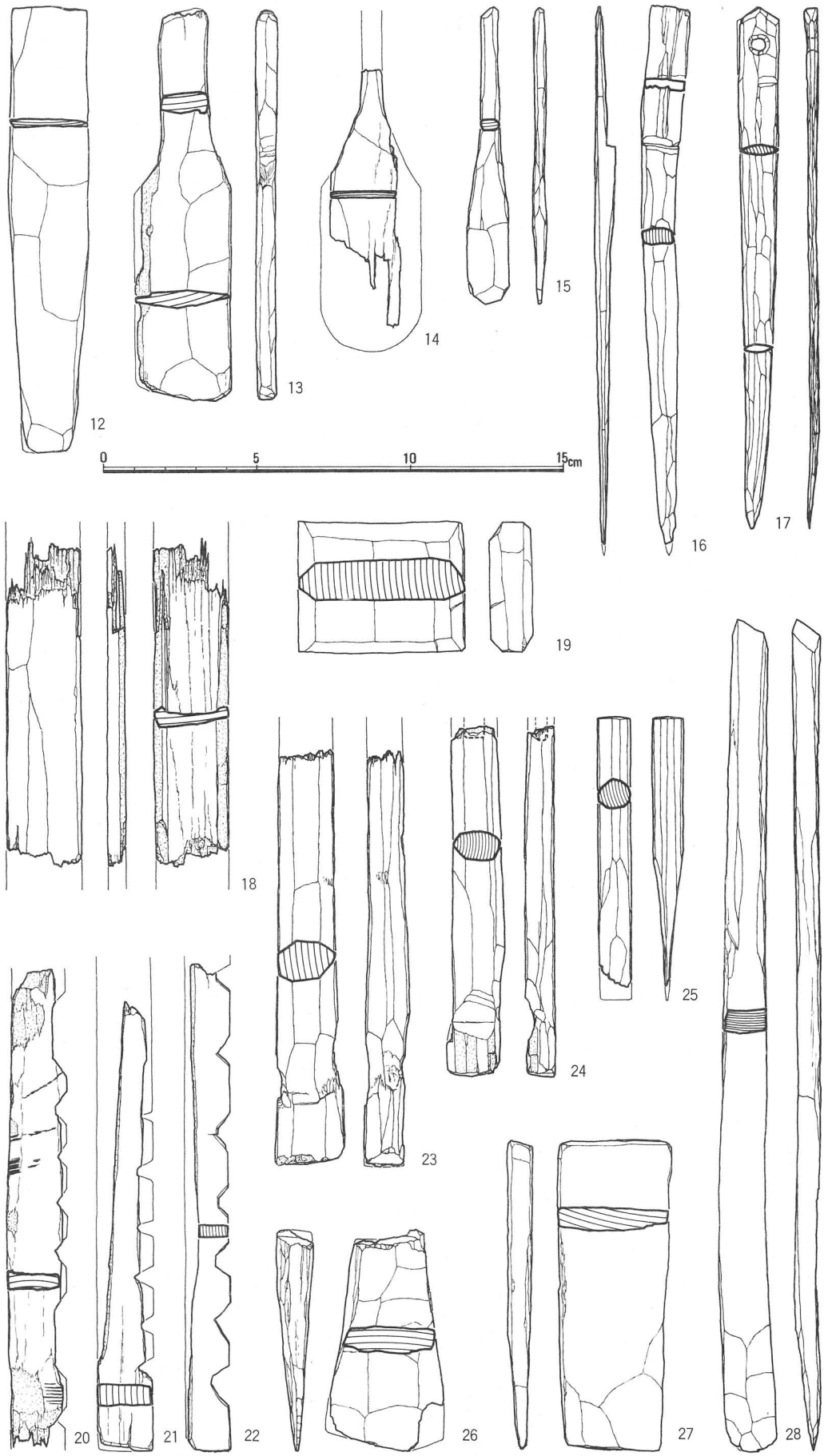
120

1 : 2

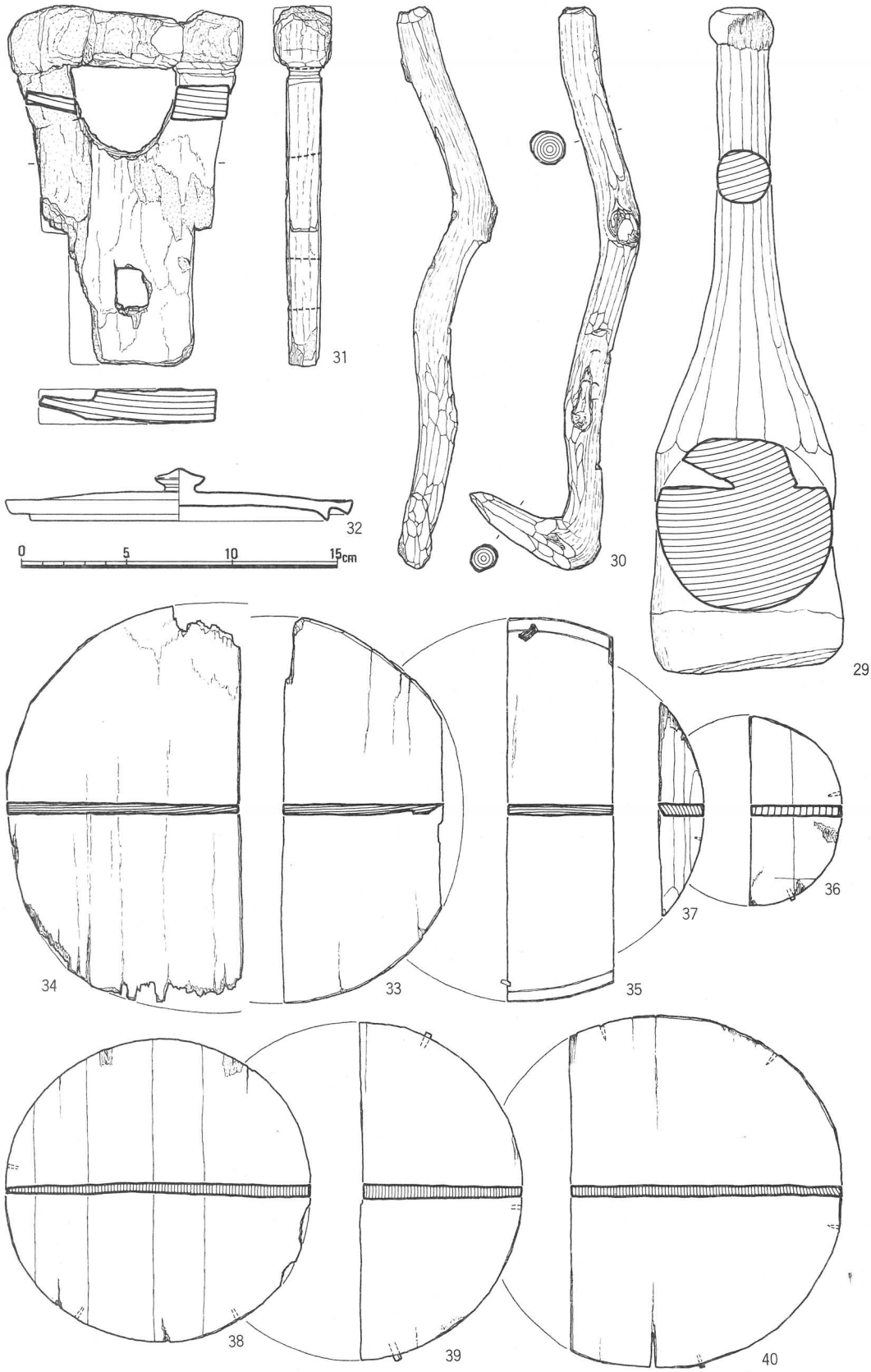

302

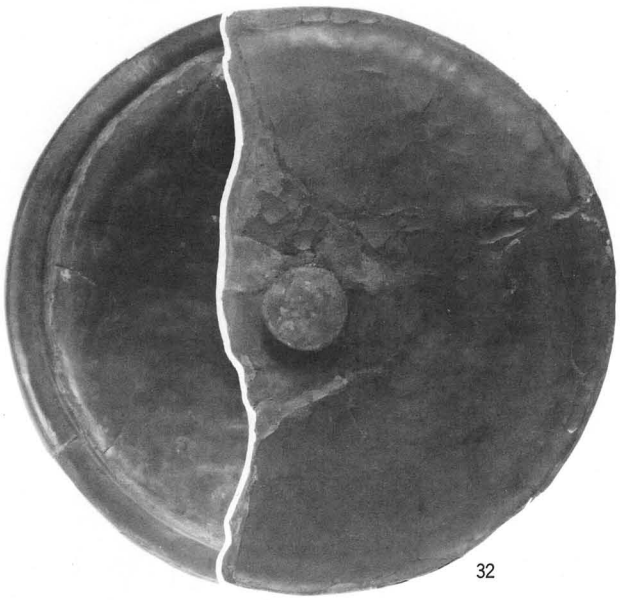

6
5
4
7
2
3
1
11
10
8
9
0
5
10cm


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10


12
13
14
15
16
17
0
5
10
15cm
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28

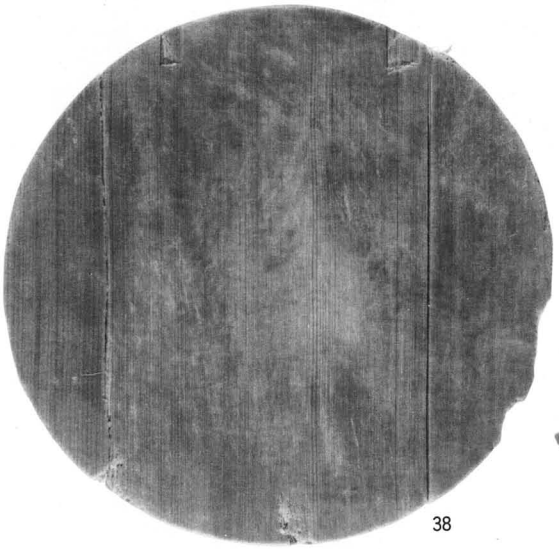
14
15
13
12
16
17
23
24
18
28
27
25
26
20
22


31
32
0
5
10
15cm
30
29
34
33
35
37
36
38
39
40


32

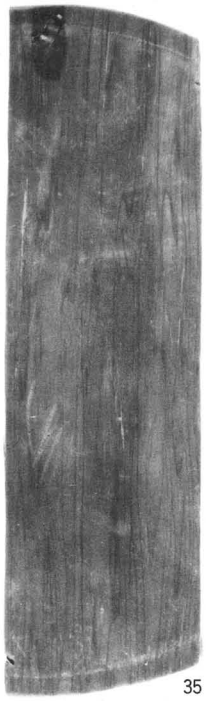
31

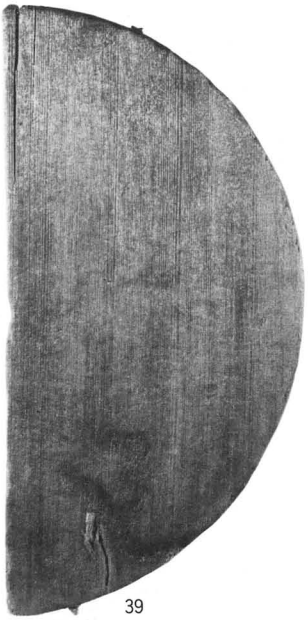
30

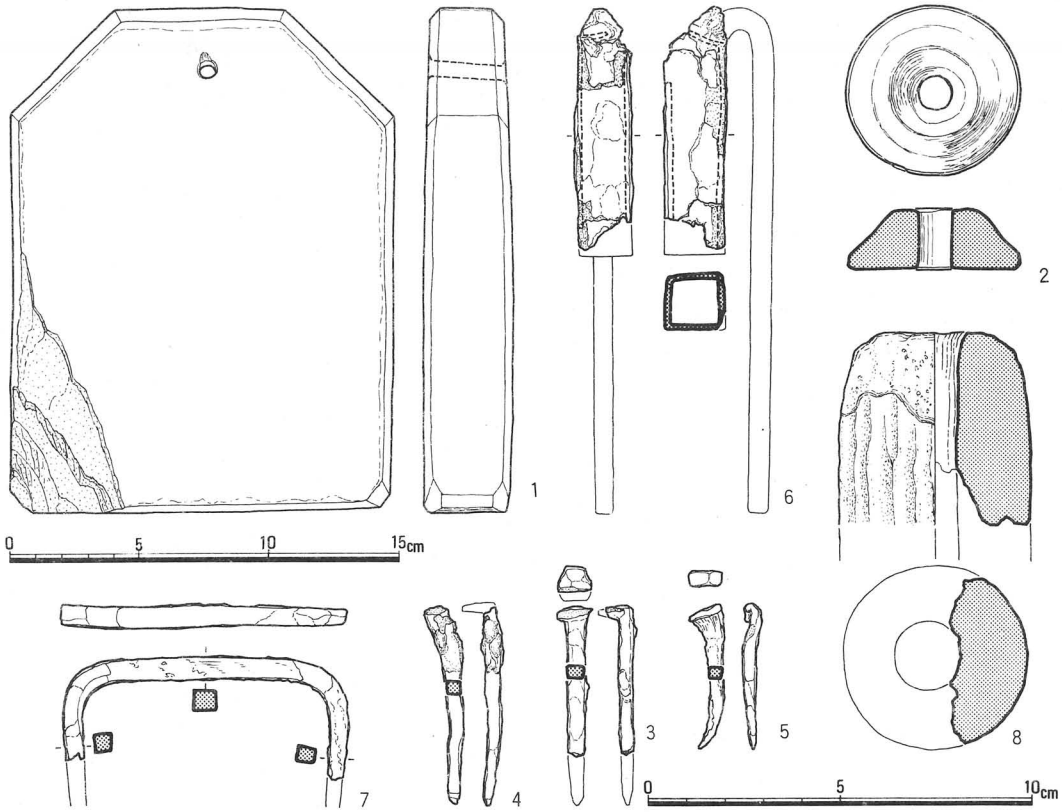

38

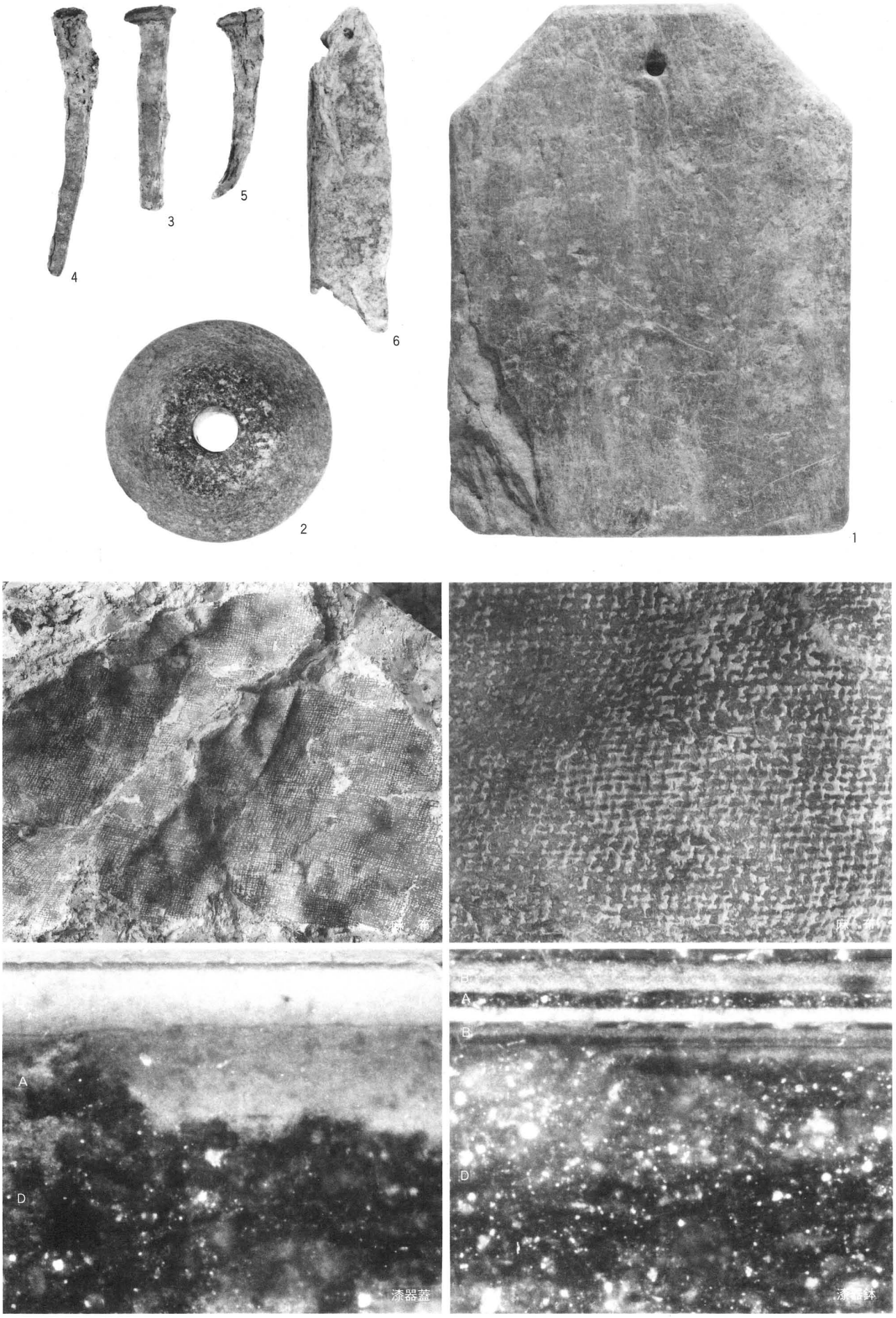
29

33

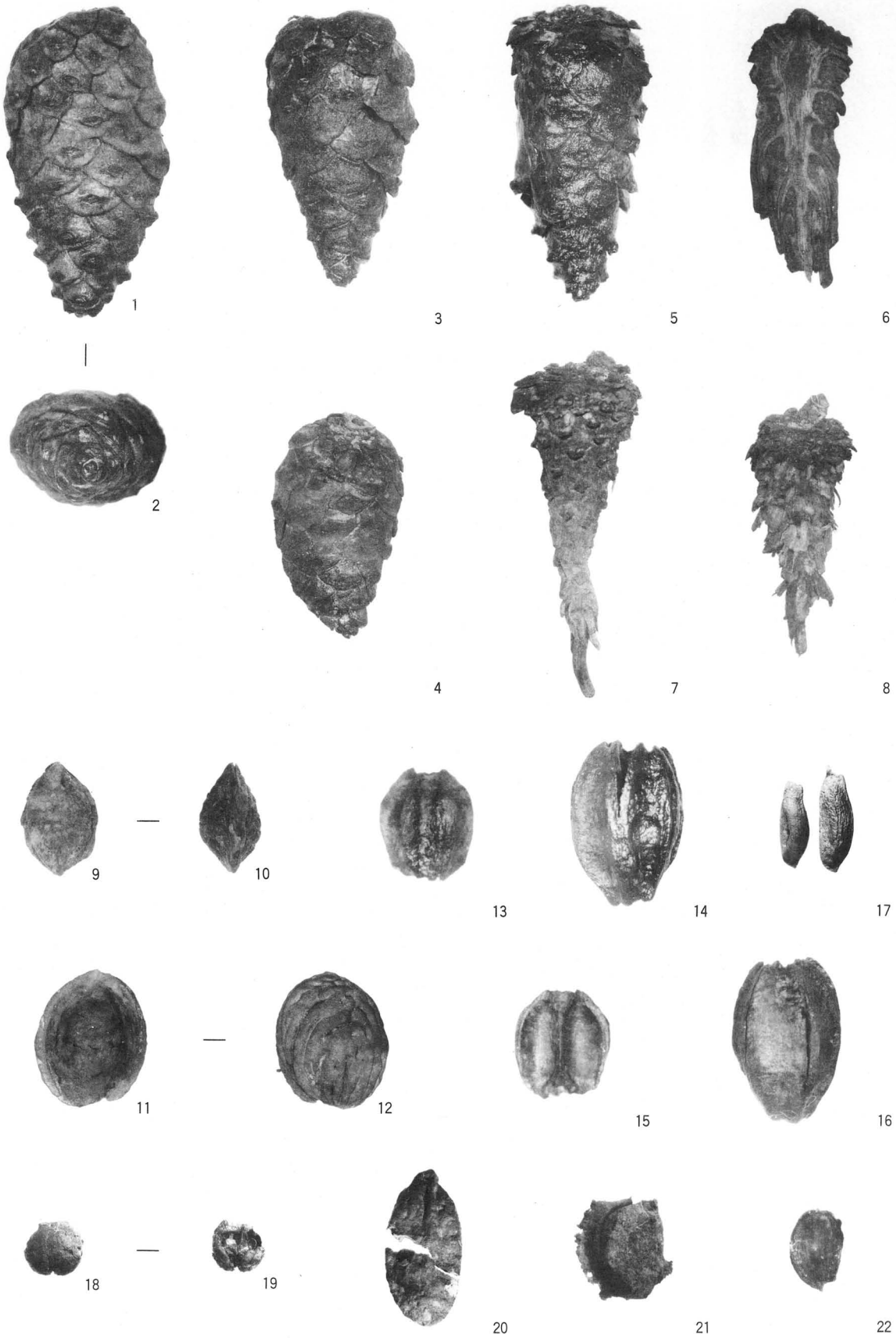

35


39

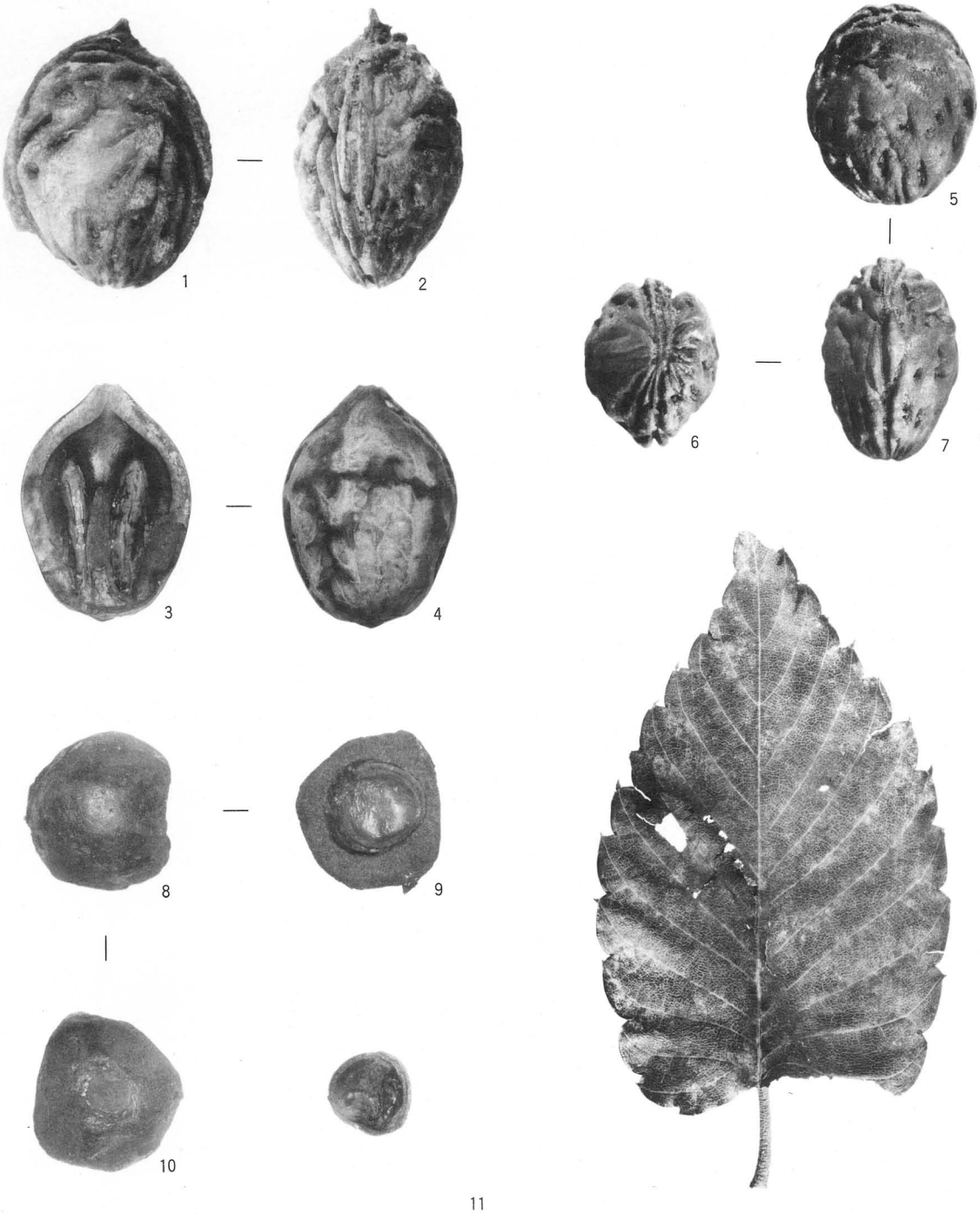

1
2
3
4
5
6
7
8
0
5
10
15cm
0
5
10cm



1～6：½ 漆器：400倍（Aこげ茶色漆，B淡こげ茶色漆，C淡茶色漆，D下地漆）

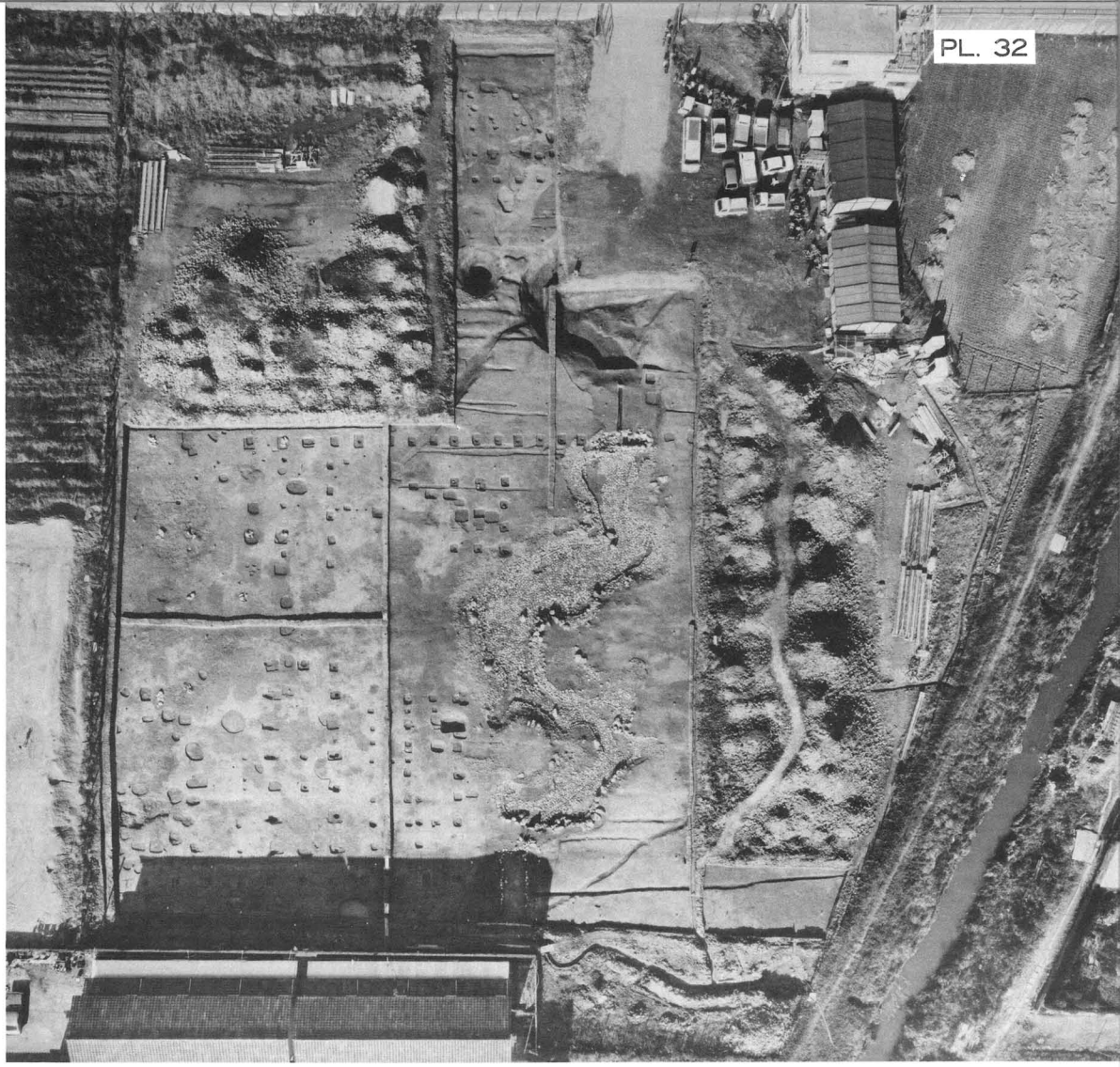


1. クロマツ球果, 2. 1.を上よりみた状, 3.4.5. クロマツ球果, 6. クロマツ球果断面
7.8. リス、ムササビにかじられたとみられるクロマツ球果, 9.10. ウメの核, 11.12. モモの核（古式）
13.14.15.16. センダンの核×2, 17. センダンの種子×2, 18.19. ウノハナの朔果×6.5
20. ゴキヅルの種子×6.5, 21. ヒルムシロの種子×6.6, 22. ヘラオモダカの種子×6.6

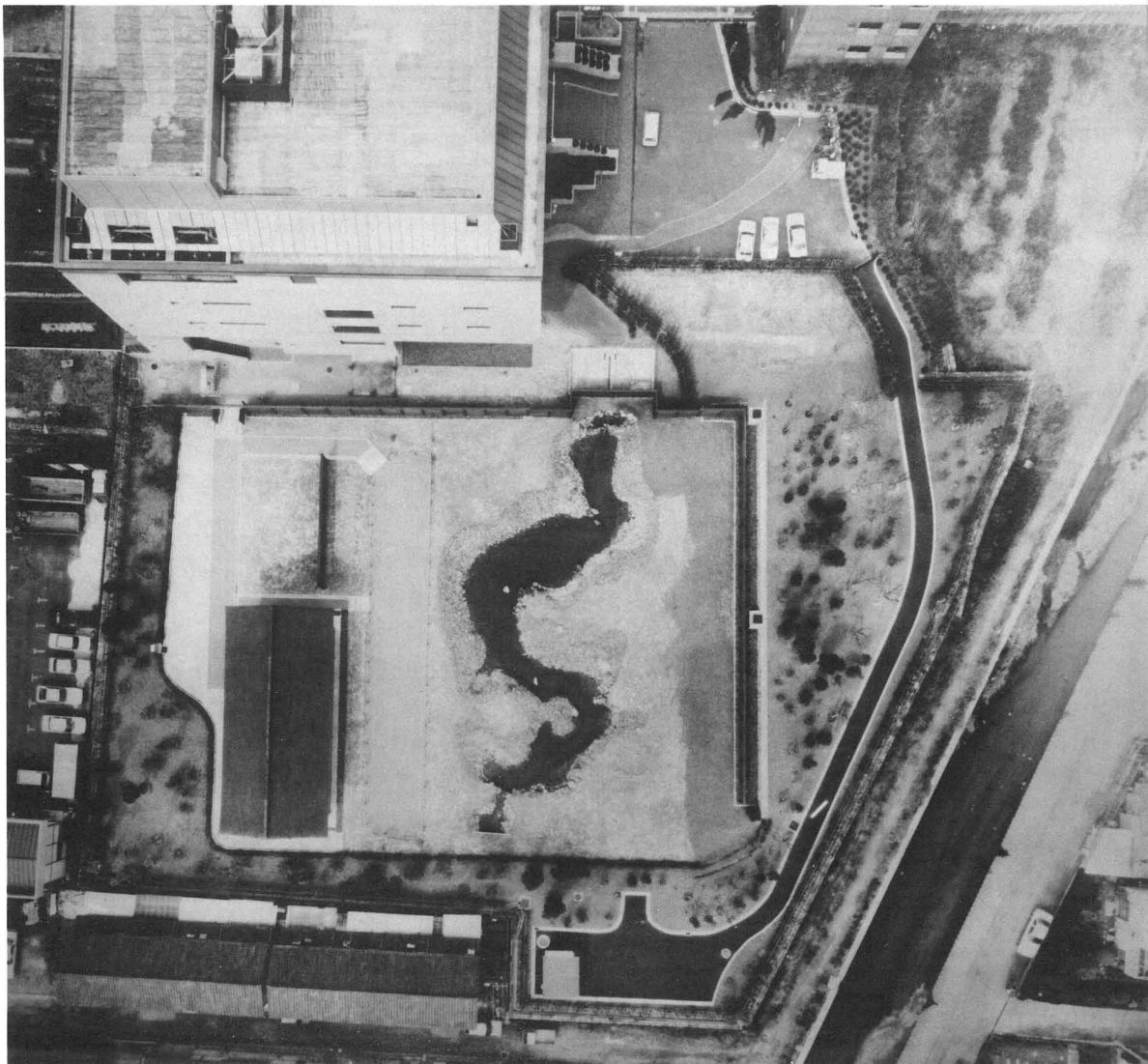


1.2. モモの核,　3.4. クルミの核(先端截形につぶれる),　5.6.7. 古式のモモの核　3方向より
8.9.10. ヤブツバキの果実,　11. ヤブツバキの種子,　12. ケヤキの葉

整　備



発掘全景（1976年）



整備全景（1985年）

1986年 3 月15日　印刷
1986年 3 月30日　発行

平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告書
奈良国立文化財研究所学報　第44冊

著作権所有
発 行 者　奈良市二条町二丁目九番一号
奈良国立文化財研究所

印 刷 者　京都市下京区油小路通仏光寺上ル
有限会社　真　陽　社